
アドリーム ー境界に佇む者達ー

深本操

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アドリーム ―境界に佇む者達―

【Nコード】

N07480

【作者名】

深本操

【あらすじ】

村を一人出た幼馴染を追いかけ、ネイリン・パークエムは、勝手に付いてきた友人二人とともに、生まれ育った村を旅立った。しかし強行軍がたたり、同行の者が熱を出しダウン。しかたなく、一行は助けを求めるため、近くにあった大きな屋敷の扉を叩いた。

その屋敷には、先祖から託された大事な「なにか」があるようで、多少もめることにはなったが、その「なにか」に干渉しないという約束で、滞在が許可された。

その「なにか」に興味を持った面白がりのネイリンは、さっそく、

その屋敷の中で話を聞きだしやすそうだった令嬢ロッテに話を聞く。彼女がいうには、その「なにか」は、死んだものを生き返らせる力があるといわれている「石」とのことだった。そしてそれは、鏡の中に封印されていて、その鏡がある部屋もまた、封印されているとのことだった。

これはなんとしても、その部屋に入りたい。そして、生き返りの力を含んだ石を入れたという鏡を、この目で見てみたい。そうネイリンは思った。

しかし、その部屋に入れるのは、その部屋の鍵が入ったケースの鍵を持った、その家の主だけ。家人であるロッテたちでさえ入れないということになっている現状では、ただ立ち寄っただけのネイリンなどには、見る機会は得られそうにないと思われた。

しかし、ネイリンが予想もしていなかったかたちで、彼女の期待は叶うことになった。

プロローグ 1

アドリーム ―境界に佇む者達―

鍵は智の血を継ぐ者に託すべし。
鏡中の宝は時満ちしころ現わる、
扉を開けし真の智者に託すべし。
邪な心が欲するとその命はない。

プロローグ 1

「一人かい？」開いて見せた通行許可証に判を押しながら男がいった。役人である。

「ええ、まあ……」

部屋の中、窓から入る太陽の光とテーブルを挟んで向かい合っていた。といっても、役人のほうは座っている。

「そうか。最近物騒だからねえ、せいぜい気いつけなよ」

仏頂面で、最初に見たときには怖そうな人なのかな、と恐るおそる出市の意を伝えたのだが、顔に似合わず優しい人らしい。

「はい。ありがとうございます」そこで思いついていつてみた。「ところで、鏡の中の魔女さんて知ってますか？」

そういうと、彼は奇妙な顔をして見せた。

「鏡の中の魔女？ いったいなんの話だ？」

「ああ、いえ、知らなければいいんです」そういつて、通行許可証を懐にしまった。「それじゃあ」

立ち去ろうと背を向けると、背後から声がかかった。

「あんた、ずいぶん長い剣を持ってるんだなあ」

「ああ、これ？」振り返ると、その反動で剣が大きくゆれた。背丈ほどもある極端な長剣である。「ええ、長すぎてとっさに抜けないんですよ」

彼は呆れたように息を吐いた。

「あきれたな。とっさに抜けないじゃ、突然モンスターに襲われたときおっつかないだろうに」

「大丈夫です。街の外ではずっと抜き身で持ち歩きますから」

「抜き身？ それじゃ、モンスターに襲われるころには腕が使い物にならなくなってるだろうな」男が笑う。

それには直接答えず、笑顔で手を上げると、入出市管理室からでた。

廊下は談笑、あるいは商談をしている商人たちで賑わっていた。彼らの間をぬって歩き、建物からも出た。ふうつと息を吐く。振り返り見ると大きな建物だ。なにせ、輸入、輸出する物資を一時保管管理する場所でもあるから、そのスペースを抱える建物は、自然大きくなる。こんな大きな建物は、生まれ故郷のテリルにはもちろんなかったから、ただその中に入っただけでも気疲れしてしまった。

——ここは、なんでもかんでも大きいなあ。

実際この街は、すべてにおいてスケールが大きかった。メインストリートの幅から、街の中心にある広場、宿屋も酒場も市長宅も大きかった。

大きさだけではない。この街に住む住人の数にも驚かされた。いったい何人いるのか見当もつかない。なにせ、故郷の村では祭りるときでさえ見たことがないような人ごみが、朝や夕方といった移動時間のたびに、メインストリートを中心としたいたる場所で見られるのだ。この街についたばかりのころは、身の施し方が分からず、人通りが落ち着くまでじゃまにならないところに避難していたものである。

だが、そんな圧倒されっぱなしだったこの街とも、しばらくのお

別れだった。

これから彼女――鏡の中の魔女に会いに行かなくてはいけない。

――でも、本当にいるのかなあ。

半信半疑ではあったが、しかしここまできたら、とにもかくにも行ってみるしかない。どうせ、ほかにすることもないのだ。

肩を揺らし、背中に担いだ長剣を一度揺らすと、市外への門に向き合った。この門も、実に巨大であった。

――ボク一人のためにわざわざ門を開けてもらうのはわるいなあ。そう恐縮したが、実際には門自体についている小さなドアが開けられただけだった。小さすぎて門番に会うまで気づかなかった。

「あ、えっと、トイー・ウォルマーです」

名前を告げ身分証明書をだしたが、門番は興味なさそうに一瞥すると小門を開けた。

「あれ、いいんですか。見なくて。さっき、ちゃんと判も押してもらったんだけど……」

門番はめんどくさそうに、いいから早く行けとあごをしゃくった。追い立てられるようにトイーが門を通ると、すぐ門が閉められた。

ドアが閉まったとたん、それまで聞こえていた威勢のいい業者や商人たちの話し声、歌声、怒鳴り声などがすっと消えて、とたんに静かになった。

こんなにさびしい出発は初めてだった。ため息を一つ吐き、トイーは門に背を向けた。

街を囲む巨大な石壁や門の向こう側はにぎやかな都会だが、こちら側には何もなかった。門を背にして眼前に広がるのは、見渡す限りの平野と、生まれ故郷から続いていたものとは比較にならないほどの広い道。

久しぶりの孤独感が襲ってきた。すぐに道連れができた旅だったから、考えてみれば、一人になるのは村を出て以来のことだった。

一瞬、頭にアークスやジャンクといった仲間たちの顔が浮かんだが、すぐに頭を振り、それらを打ち消した。

——もう彼らは一緒じゃないんだから、気を引き締め直さないと。
——行こう、まずは鏡の中の魔女だ。

トーイは門を背にすると、歩きはじめた。
剣を鞘から抜いておくことは忘れていた。

きっかけは、ウテラと名乗る女性と出会ったことだった。

そのとき、トーイは街中央にある大きな広場の噴水端に腰掛けていた。ともに旅をしていた仲間、アーカスやジャンクと別れたばかりで、途方にくれていたのだ。これからどうしようと思っていた。といっても、目的がないのは、村を出たときからのことだったのではあるが。

トーイが、村を出ようとはじめて思ったのは、ずいぶん前のことである。

幼少のころ、生まれ故郷のテリル村に、伝説の勇者とともに戦った魔法使いの末裔、と名乗る男がやってきたことがあった。彼のような人物が村にくるのは初めてのことでないらしく、彼は当たり前のように村長の家に滞在し、そして村の子供たちを毎夜のように村長宅に招くと、勇者がドラゴンと戦ったときのことを歌うように語って聞かせたのだが……。

端的に言えば、トーイは彼の話に影響を受けたのである。

今から約二〇〇〇年前。人間とモンスターの間で大きな戦争が起こった。それまでも、出会うたびに個々で戦っていた人間とモンスターではあったが、そのときの戦いは、お互いの存亡をかけるほどの、それは激しいものであったらしい。

戦争とは、現象としては各場所、各地域で同時多発的に起こる戦闘のことである。戦闘の目的は相手の殲滅にあることも多々あるが、しかし戦争の場合、多くは違う。その戦争においてもそうで、その目的は、今後この大地を支配するのはどちらなのか、それを決定させ、互いがその結果を認識することにあった。

さまざまな場所で戦闘があった。力は均衡していて、どの場所

も、どの部隊にも、勝ちがあり、負けがあり、制圧があり、死があり、喜びがあり、悲しみがあり、負傷があり、病があり、飢餓があり、倦怠があり、不安があった。

空前の規模の戦争である。決着はなかなかつかず、そんな状態が何年も続いた。

やがて生き物たちは毛先まで疲弊し、いつしか当初の目論見を忘れ、この泥沼のように続く戦争を、心の底からただただ忌み嫌うようになっていった。

誰もが、何よりも決着をほしがっていた。

機は十分に熟していた。

厳密には勝敗に関係しない、しかしながらその争いを象徴する一つの戦いが、その戦争の勝敗を決定する。そういった空気が、各所、各地域に染みるように蔓延したころ、魔法使いを伴って、長剣を持った一人の男が、衆人環視の「無」から突然現れ出でた。

彼は、瞬く間に人間たちの信頼を得、リーダーとしてドラゴンと戦い、そして勝利した。

太古の昔から覇権を競った異種間に、支配被支配にも似た絶対的な関係が出来上がった。

その後ももちろん、出会えば人間とモンスターの間に戦闘は起こった。だが、それはどれも小さいものであり、基本的には、モンスターは人間を避け隠れるように生き、人間は、我が物顔に大地の恵みを支配できることになった。

人知を超えた電撃的な登場、そして勝利に、彼はいつしか神の使いと信じられるようになった。

ドラゴンを打ち破った彼は、以後、信仰の対象になった。

今では、誰もが「勇者の教え」の信者である。もちろん生まれ故郷の村人たちもそうだったから、あるときは教会での説教で、またあるときは枕元での夜伽にと、その話はことあるごとに聞かされており、もちろんその話はトイも知っていたが、勇者とともに戦ったという魔法使いの末裔を自称する男の話しぶりがあまりにも真に

迫っていたため、トリーはまるで自分がそこにいたかのような錯覚を覚え、そしてふと我に戻ったときには、よし自分も大人になったら人のため、世界のために働こう、そのために村を出ようと幼心に決意したのである。

だが、長ずるにつれ、その心境に変化が生じた。

自分は勇者とは違う、同じことはできない、との思いから当初の目的は半ば形骸化したのかもしれない。しかし不思議と、その手段であった村を出る、という選択肢は確固としたものとして心の内に残った。

トリーの育った村は僻地で、伝統的に村を出る者の極端に少ない土地だった。トリーも外の世界を知らずに育ち、それまでは丸太で囲まれた村が世界のすべてであり、またそれを疑問にも思っていなかったのだが、魔法使いの末裔を名乗る男の真に迫った話で、外への興味が一気に育ったらしかった。

ならば、トリーが村を出た理由のほとんどは、外の世界への興味ともいえ、だからいざ出てしまうと、当座の目的をなんとなく探しながら当てもなくふらつく、ということになってしまう。

それは、アーカスと名乗る男と出会ったことでも変わらなかった。アーカスは不思議な男だった。彼とは村を出てすぐに出会ったのだが、初対面るときから彼は調子よく、気がついたときにはもう、トリーの子分、というポジションに納まっていた。

子分だから基本的にはついてくるだけである。だから目的のない風来坊が二人になっただけのことだった。

その後トリーは、ジャンクという男と出会い、そして一緒に彼の生まれ育った村を出た。彼の現状に心を痛めたトリーは、行動を共にするつもりだったのである。だが、まずアーカスが抜け、それをきっかけにするようにジャンクとも別れることになった。

寂しくもあり、悲しくもあったが、ジャンクの目的は、つまり彼の物語に属するものであり、自分もまた独自の物語を生きなくてはならない、きっとそういうことなのだろう、彼との別れを、そうト

ーイは理解することで消化した。

だが自分の物語とは――。

肝心のそれが見えず、分からなかった。自分が何をすべきなのか。

一人になったのを機に改めて考え、悩み、そして途方にくれていた。

ウテラと出会ったのは、そんなときだった。

彼女は、当座の目的を携えていたのだから、彼らと別れすぐに出会ったというのは、運命的ともいえる幸運と捉えることもできるのかもしれないが――。

今になってそう思う。だが、そのときのトーイは、そんなふうには考えられなかった。

ウテラとの出会いは、トーイに混乱をもたらすものだった。

彼女は一言目に、こういったのである。

「お探ししました。あなたが、勇者の使いの方ですね」

二〇〇〇年前に、後に勇者と呼ばれることになる男が、一人の魔法使いを伴いこの大地に姿を現した。彼はドラゴンを倒し、戦争を終結させた。これは伝説でもあり、また史実としても扱われている。このときの男は、神の使いとして認識されていて、信仰の対象になっている。

彼が救った後の世界でも、人間は幾度もの危機に直面した。そんなとき、姿を現し事態を収束させた者たちがいた。この者たちが、トーイたちが信仰する「勇者の教え」でいう、勇者の使いである。

神の使い、と呼ばれないのは、「無」から生まれた勇者とは違い、人間として生まれてくることにあるのだろう。特別な存在であることに違いはないが、神の使いである勇者とは一線において存在を認知されている。

ところがこの勇者の使い、人として生まれてくると、世界が危機に面したタイミングで生まれる、ということぐらいしか知られ

ていない。過去に勇者の使いと呼ばれる人間は四人も生まれたとされており、その存在が一般にも知られていて、また誰もが勇者の後に生まれているにもかかわらず、その実態はベールに包まれており、なかなか市井に伝わってこないのである。

しかし、勇者の使いが、ある特徴を持っているらしい、ということだけは、実しやかに噂されていた。勇者の教えで公式にそう教えているわけではないが、そのことは半ば周知の事実として認識されていた。

彼は人として生まれ、人として育つ。彼が勇者の使いとして認識されるまで、多くの人間と触れるのだから、彼の実態の一端でも人の口を介し伝わってもおかしくはないだろう、そう考え人々は、噂に過ぎないともいわれるその非公式情報を本当のことだろうと信じているのだが、しかしその一方で、ではその特徴とは具体的にどんなもののかと聞かれると、答えられるものはいないのだった。

なぜ実態が見えないのか。一説では、勇者の使いが良からぬ企みを持つ者の手に落ちないように、勇者の教えの総本山であるアキラが、全力でかん口令を敷いているせいともいわれていた。

勇者が世界を救った後の危機は、国対国、思想対思想、主義対主義といった、モンスターを介しない、そのため複雑で、絶対的な善悪の判別が難しいものであった。

勇者の使いをその手におさめた陣営がその戦いに勝ち、体制を獲得し、歴史を我が物にするのであれば、さまざまな団体がその存在を血眼になり探すだろう。

だが、先に探し出したほうが覇権を取る、ということになってはいけないので、勇者の使いの証拠となるある特徴だけはアキラが全力で隠している、というのが実情らしかった。

勇者の使いが持つ特徴――。

神の使いである勇者は、非常に長い剣を持っていた、といわれていた。アーカスと出会った日、彼はそこに目をつけ、勇者の使いもまた長い剣を持っているのではないか、その長い剣を持っているト

トイは——そんな理由ともつかない理由で、トイこそが勇者の使いではないか、といったことがある。

今はどうやら時代の変革期らしい。それは片田舎に育ったトイにも感じられたことだった。穏やかに変わっていくのか、それとも劇的に変わるのか。もし後者であるなら、既得権を得ている者と持たない者の間で軋轢、争いが起こることも考えられる。ならば勇者の使いが今生まれていてもあながちありえないことではない、とは思うのだが——。

しかし、トイはアーカスの考えを、笑って否定したのである。自分はそんな器ではない。それに、勇者の使いと呼ばれるほどの人間の特徴は、先天的なものではないか、ともトイには思えたのだ。噂ではあるが、一般的にもそう思われている。

ただ、気になることがないでもなかった。それはほかならぬトイの持つ長剣だった。これは旅立ちの朝、家に伝わるものだ、もって行けば何かの役に立つだろう、と父が持たせてくれたものなのだが、これがなかなか特殊なものだったのだ。

ウォルマー家は鍛冶屋で、トイもそのせがれとして分かることなのだが、この剣、その圧倒的な長さを支えるだけの厚みがないのである。この薄さでは、ふつう強度は期待できない。だが使ってみると、強度も切れ味も問題なく、いや、それどころか信じられないくらいによく切れもしたのだ。

少なくともトイの知識からすると、ありえない、あつてはいけないほどの規格外の名剣であった。

なぜ、そんなものが家に伝わっていたんだろう——と大いに不思議に感じもするが、だからといって、自分が勇者の使いではないか、などとはとても思えなかった。それとこれとは話がべつだ。

だが——出会いがしらにいわれたのである。

——お探しました。あなたが、勇者の使いの方ですね。

いきなりそういうぐらいだから、彼女なりにそう思う理由があり、彼女なりの確信があったはずだ。しかし、トイがうろたえながら

も、おそらく違いますよ、と告げると彼女はそれをすぐに信じ、果然とした顔を見せると、そのままゆっくりと気を失った。

あわてて受け止めたトイーは、その腕の中で眠ったように気絶している彼女を見て、戸惑うとともに、とにかく自分はこの人の力になってあげなきゃ、と理由もなく思ったのだった。

といって、当面、どうしてよいのか分からなかったから、とにかく気を失った彼女を噴水縁に寝かせると、顔辺りを手で仰いだり、持っていた布を水で湿らせ、それをおでこに乗せたりした。

そんなことをしながら、トイーは見るともなしに彼女を観察した。市井の人間とは違う、どこか高貴な感じのする、うすく上品な顔立ちであった。だがよほど長い時間旅をしているのだろう、お世辞にも綺麗な格好とはいえず、全身にうっすらホコリをかぶっている印象だった。

そんな彼女を見ていたら、なんだか切なくなった。

だが、同情ではない気がした。では、この感情はなんだろう。

その感情の正体を見破るために、顔を見続けていたら、突然彼女が、がばっと起き上がった。

事態を把握するため彼女は周りを見回し、そしてトイーに気がつくのと、顔を真正面から見た。トイーはぼんやりとした表情で見返した。その愚鈍全開の風情に、彼女はなんら取り乱すことなく、寝起きのような風情で伸びをした。

「おはようございます」トイーはいった。

彼女はちらとトイーを見、はあとため息をついた。

「やっぱり違うなあ」肩をすくめ、微笑んだ。「さっきはそうだと確信したんだが」

「……すいません」なんとなくトイーは謝った。

「いや、いいんだ。べつにあなたが悪いわけじゃない」と彼女はここで、腿の上にある布に気がついた。「ああ、手を煩わせてしまったようだな。申し訳ない」

「ああ、いえ」

「迷惑をかけた。名乗っておこう。私はウテラ、という。苗字はない」

「ぼくはトーイ・ウォルマーです」苗字がないとはどういうことだろう、と一瞬疑問に思ったが、すぐに疑問自体を忘れた。「もう大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。たぶん疲れがたまっていたのだろう。最近、ろくに休息をとっていなかったからな」

「そうですか。あ、そういえば、勇者の使いがどうかおっしゃってましたが……」

さすがにそれは覚えていた。なぜそんなことを思ったのか、ずっと訊きたいと思っていた。だがウテラは、それに対しては口をにぎした。

「いや……深い意味はないんだ。というより、疲れが白昼夢でも見せたのだろう。うわごとだ」

「そんな感じには見えなかったですけど……」

トーイの言葉の途中でウテラは立ち上がった。

「私には少し休息が必要のようだ。これから宿にでも行って、しばらく休むとするよ。それでは」いつて彼女は歩き出した。

「あ、待ってください」トーイは追いつがった。「あの、ボク、実は勇者の使いじゃないかっていわれたの二回目なんです」

なぜそんなことを二回もいわれるのか、アーカスのときはともかくも、ウテラにいわれたのは釈然としない。うわごとというのにも領けない。その理由をしっかり聞きたかった。

ウテラは立ち止まり振り返った。

「二回目？」

「はい。前にいったのはアーカスという人なんですが……」

そこでトーイは、アーカスにいわれ、そしてその意見に自分は笑って否定したことを告げた。ウテラは黙って聞き、アーカスとの話の発端になった長剣を見た。

「確かに、めずしい剣だ。名剣だとも思う。だが、私はそれを見て、

あなたを勇者の使いだと思ったわけではない」

「あ、やっぱり思ったんだ」トーイはすぐいった。

「い、いや、だから、無意識のうちに思ったことが白昼夢に反映されて……」

モゴモゴいうウテラの言葉をさえぎって、トーイはいった。

「ボクね、自分が勇者の使いじゃないってのは感覚的に分かるんだけど、ただ、怪しいかなっていう人は一人知っていて」

「え、」

といってウテラの顔色が変わった。期待、焦り、そういった感情が表情から見て取れた。彼女のそんな様子で、やはりウテラは勇者の使いを探しているんだということをトーイは確信した。

「プライっていう人なんだけど……」

「プライ？ 男性か？」

「はい。まだ十二才で子供だけど、村では宝のようにいわれてて……」

「宝……」噛みしめるようにウテラが繰り返す。

「はい。ボクの生まれ故郷のテリルという村にいますけど……」
実際プライは特別な存在であった。はじめにその才能に気づいたのは、ふらりと村に立ち寄った教会関係者だった。プライがまだ言葉も満足に話せないころ、親や村長が、この子には大きな才能がある、どうか私に預からせてはもらえないだろうか、そのようなことをいわれたらしい。

最初は誰も信じていなかったそうだが、その言葉を裏付けするように、彼はほかの子供とは比べものにならない速度で知的成長をし、今では、若くして村をしょってたつ存在になるだろうと、村の誰もが確信していた。

そんなプライなら、もしかして――。

アーカスに、勇者の使いではないかといわれたとき、思ったのである。

だが、彼がどれほどぬきんでた存在か、それを説明しても、ウテ

ラの反応はぱつとせず、それどころか説明すればするほど興味をなくしていくようだった。

「個人的に会ってみたいと思わせる人物だな、そのプライという方は」ウテラは首を振った。「だが、勇者の使いではないようだ」

彼女の様子は、もう勇者の使いを探していることを隠すつもりがないようだった。いまさら隠しても遅いと思った、というよりは、トーイの警戒感を抱かせない雰囲気吞まれ、隠す気がなくなったというのが本当らしかった。

しかしトーイとしては、そこまでは気づいていない。ただ単に、話に夢中になっていた。

「どうして、そう思うんですか？ 会ってもいないのに分かるものですか？」ウテラが答える前に、トーイは思いつきいった。「あ、もしかして年齢が違うとか？」口を開きかけたウテラを制するようにトーイはつづけた。「その前に、勇者の使いって、今生まれているんですか？」

「そんなにいっぺんにいわないでくれ」ウテラは苦笑した。「まず、会ってもいないのに分かるのかという質問には、わかるはずだ、としか答えられない。あと年齢は、そうだな。たしかに十二才ぐらいだ。それから、勇者の使いが生まれているのか、という質問に対しては、それも、そのはずだ、としか答えられない」

「でも、どうしてそんなことが分かるんですか？」トーイは首をかしげた。

「そう感じるからだよ」ウテラは笑っていった。「わたしはアキラルの人間だ」

なぜ笑ったのか、アキラルの人間だったら分かるものなのか、そして、アキラルの人間が勇者の使いを探していることが本当だとして、それは、ふつうこうも簡単に明かすものなのか、そういつたいくつもの疑問に同時に襲われ、トーイは困惑した。

「えっと……」言葉が出てこない。

「そんなことをいわれても困るよな。こんなことをいうなんて、や

はり疲れているのかもしれない」ウテラはわずかに下を向き、苦笑しながら首を振る。

たしかに疲れは、彼女の全身からにじみ出ていた。本来なら、彼女の疲れに気を使わなくてはいけないところだろうが、どうにも彼女の境遇や事情が気になり、とにかく話を聞きたい、という気持ちがトイーを支配していた。

「勇者の使いつて、本当に生まれているんですか？」とりあえずトイーはそう訊いた。

「おそらくはな。少なくともわたしはそう感じ、そしてそれを信じている」

「アキラルの方は、そういったことを感じる能力があるのですか？」

「いや、わたしだけだった。だから、一人で行動しているんだ」

「それって、ボクにいつちゃってもいいものなんですか？」

「今までこういったことを話したことはなかったが、まあ、今は個人で行動している身だ。特にこれといって問題はないのだろうが、まあ、進んでいいふうさようなことでもないな」

「あ、だれにもいいませんよ」トイーはあわてていった。

「そうしてくれるとありがたいな」ウテラはまた苦笑した。「まあ、いったところで、そう信じてもらえるような話でもないが」

その様子には、身体的だけではなく、精神的な疲れが色濃く見て取れた。そんな彼女を見て、トイーは最初に感じたことを唐突に思い出した。

「力になります」トイーは付け足した。「といっても、たいして頼りにはならないでしょうし。何ができるってわけでもないですが、でも、」

——力になります。

と、そうトイーはいった。

ウテラは、そんなトイーの様子を、不思議そうな目で見ていたが、やがて納得したような顔でいった。

「やはり、わたしは何かを感じることが出来る人間なのかもしれない

いな」

初めてウテラが素直な表情で笑った。もしかしたら、自分が思っているより彼女は若いのもかもしれない、とトーイは思った。

「あなたに、ほかの人間とは違うものを感じたことも、正しい感覚だったのかもしれない」

突然ウテラが、周りを見回してから、顔を近づけてきた。すうっと街の喧騒が遠ざかる。

ウテラがいった。

「勇者の使いは、おそらく、世界から一人隔絶している」「え？」

「たぶん、それが勇者の使いが持つという特徴のはずだ」

鏡の中の魔女の住む家――。

目印は大きな石だった。天然のものらしいが、何かを書くために作ったように、その石はこちら側が平になっているらしい。その真後ろ側にまっすぐに進むとその家はある、とのことだった。

トーイは来た道を振り返り見た。考え事、というかウテラのことを思い出しながら歩いていたので、見逃した可能性もあるかと思っただ。

道はなだらかに曲がっているが、ずっと先まで見渡せた。

そのような石はなかった。

やはり考え事をしていたとはいえ、見逃してはいなかったようだが、だがそろそろ、その石があってもいいころだ。この辺からは、考え事をしないように、ウテラのこととは一時忘れて歩こう、そう思わなければいつい思い出してしまう。何しろ、彼女との会話は興味深かった。中でも興味を引かれたのは、ウテラが感じる、勇者の使いのイメージかもしれない、などと考えながら、無意識のうちにトーイはまたもウテラの話进行を思い出していた。

ウテラがいうには、勇者の使いが生まれた瞬間、そのことを感覚的に知ったださうだ。それから常に勇者の使いの存在を感じ、

調子のいいときなどは、勇者の使いを夢の中ではあるが、視覚的イメージで捉えられるのだそうだ。

彼女のイメージでは、勇者の使いは真っ暗闇の中で一人浮かんでいるそうだ。夢の中で彼は、目と耳と口がなかった、ともいつていた。

――勇者の使いは、おそらく、世界から一人隔絶している。

その抽象的な言葉は、そんなイメージからくるものなのだろう。そしてウテラはこうもいった。

――あなたに、同じイメージを見たんだ。

トーイは確かに今一人である。でも故郷に帰れば、家族もいるし友達もいる。そんなに孤独ではないし、そもそも自分が、勇者の使いなんかであるはずがない。

トーイは、失礼かとも思いつつ、こう訊いた。

――その感覚というのは、絶対なんでしょうか？

勇者の使いが生まれている、そして彼は孤独の淵にいる、そういった情報は、すべて彼女の感覚がよりどころらしいのだ。信じていものなのだろうか。

――わたしは、そう信じているし、勇者の近くに行けば、肌でその人だと判断できると信じて行動している。

トーイは考えた。というより、ウテラの顔を見て判断した。

――信じます。ぼくも一緒に探します。

どうして信じようと思ったのか、それは自分でもよく分からなかった。だが、感覚的に、この人は疑ってはいけない、と感じたのだ。……この人に関する、こういった感覚は、いったいなんなのだろう。

考えるトーイにウテラはいった。

――ありがとう。気持ちはうれしいが、一緒に行動しても、それほど効率が上がると思えない。気持ちだけありがたくいただくことにするよ。

確かにそうだった。しかしそれではトーイの気がおさまらなかつ

た。

——でも、お力になりたいんです。一緒に探すことに意味がないなら、別行動をとりましょう。それで、効率も……。

——どうしてそこまで？

いわれてトーイは首をかしげた。どうして自分は、ここまで彼女を助けようと思うのだろう。どうして彼女のいうことを信じるのだろう。どうして彼女のことを……。

それは、トーイ自身知りたいことでもあったのだ。

人のための行動は小さなころに夢想したことでもある。その夢を思い出したのかとも思ったが、どうも違うようにも感じた。

分かっていることは、ウテラのために行動したいということだけ。その情熱が通じたのか、それとも、彼女のほうでもトーイに理屈ではない、信じたくなるなにかを感じたのか、結局トーイの提案を受け入れた。

その後細かい取り決め（連絡方法など）をしてから、ウテラと別れたが、勇者の存在を肌で感じる事ができないトーイにできることは、少なかった。

道行く人に、勇者の使いがどこにいるか知りませんか、と聞いたところで、いい答えが返ってくるなど考えられない。どうしたものかと考えた結果、人探しの上手な人をまずは探すことにした。

道行く人の顔を見比べながらしばらく歩いたが、だれが人探しが上手なのが分からない。まずは、人探しが上手な人を知っている人を探るのが得策なのか。

だが、人探しが上手な人を知っているような人を探して、道行く人の顔が続けざまに見えているうちに、だんだんと意識が朦朧としてきた。トーイは往來の端により、座り込んだ。

しばらくうつむいて休んでいると、

——兄ちゃん、誰かをお探しか？

声がしたほうを見ると、となりで男が寝ていた。長いこと旅を続けていたらしいアカスやウテラよりも、肌も服も薄汚れていた。

つばの広い帽子を、顔の上にかけており、顔も表情も分からなかった。

——えっと、

——そんな顔をしてたぜ。

——人探しが得意なんですか？

トーイは、そう訊いてみた。彼の口ぶりに、妙な自信が垣間見られたからだ。

——おれは探さねえ。だが、いい人間は紹介できるかも知れねえぜ。名前は？

——あ、えっと、トーイ・ウォルマーといいます。

——てめエのじゃねえよ。ウォンテッドのお人だよ。

——ああ、分かりません。

——分からねえ？　じゃ、属性は？

——それは、

こんな、正体の分からない人間に、勇者の使いを探していることをいっていいものだろうか？　いいよどんでいると、男が先回りしていった。

——いえねエのならいわなくていいよ。まずいお人なんだな。

まずい、のだろうか？　よく分からず、口ごもっていると男がいった。

——面白い女を紹介してやる。鏡の中に住んでいる魔女だ。あいっのお眼鏡にかなったら、力になってくれるだろうよ。

鏡の中に住む？　魔女？　いろいろ疑問に思ったが、この男の話しぶりから察するに、きっと比喩の類なのだろう、そう思い、トーイはあえて聞かなかった。

——ほんとですか？　ありがとうございます。で、その人はどこにいるんですか？

男は、その魔女が住むという家の在り処を教えてくれた。

——入れなきゃ相手にはしてもらえんがな。

——あ、がんばります。じゃ、ありがとうございました。

——待ちなよ、兄ちゃん。情報もらっておいて、あばよはねエだろうよ。

——ああ、そうですよねえ。でもあいにく持ち合わせが……。

そういったところで思い出した。家を出るとき、次兄からターク石をもらっていたんだった。これを売れば、1ヶ月ぐらいの食事代にはなるだろう。

——これ、どうしたい？

——ボクの故郷はテリルっていうんですけど、その裏で結構取れるらしいんです。

——ほう……。

——じゃ、ありがとうございます。

そういつて立ち上がり、二、三歩歩き、ふと振り返ると、もうその男はいなかった。

ふと振り返ると、モンスターがいた。

手を使わず両の足で立っている。一見姿勢の悪い人間のような立ち姿だが、大きさが人間のふた周りほども大きく、全身が毛に覆われていた。

故郷のテリル村では、ドイルゴーストと呼ばれているものだった。意味が分からなかった。

トーイが状況を認識するのを待たず、ドイルゴーストは襲いかかってきた。

「うわ！」トーイは反射的に一撃目をかわすと、即座に右手を振った。空回りする。空手だった。

——しまった！ 剣を抜き忘れていた！

トーイは思わず背中の手を回し、背負った剣を抜こうと柄に手をかけたが、この剣は長すぎて、背負ったままでは抜けないことを思い出し、頭が白くなった。

——やばい。どうしようもない……。

しょうがないので、トーイは勢いよく振り向くと、全速力で走り

出した。モンスターが追ってくる。背負った剣が長すぎて、走るたびに左右に揺れ、大いに邪魔だった。

結局、そのまま持久戦になった。

トーイは足が遅い方ではない。だが、足の速さというものは、相対的なものだ。いくら人間として足が速かったとしても、人間が想像もつかないほどの速さで移動できるモンスターに追われたら、ひとたまりもない。

このモンスターはどうだろう。トーイは走りながら後ろを振り向いた。先ほどの距離とかわらずついてくる。猫背で姿勢がわるいので、ゆっくりとした動きだったが、足がトーイよりも長いので、結果的には同じぐらいの早さだった。

だが、というか、それとは関係ないかもしれないが、懸命に走るその表情が気持ちわるく、鼻息もすごく荒かった。

トーイの全身に鳥肌が立った。

生理的に、この相手はだめだ。

トーイは前を向きなおし、必死に足を動かした。

初めての景色が後ろに飛んでいく。視界が小さくなっていく。

トーイは走りつづけた。

どれぐらい走っただろう。苦しい。走りつづけるうち、頭がぼんやりとしてきて、だんだんと回らなくなってきた。酸素不足から、四肢の感覚も鈍くなってきた、身体と頭が、なによりも休息を望むようになった。

——もういいや、走るのやめよう。

トーイの中で、唐突になにかが切れてしまった。徐々にスピードを落としていって、そのまま地面に手を突き、仰向けにひっくり返った。

暴れまわる心臓と、小刻みに震える肺に身をゆだねた。

煮るなり焼くなり好きにしてくれ。そんな心境だったが、腹を見せているトーイを襲うものはいなかった。澄み渡る空だけが、眼前遠くに広がっている。

寝ころがったまま首だけを起こし、自分の足元を見る。足の向こうの来し方には、モンスターの姿は見えなかった。どうやら、むこうが先にへばっていらしい。

——やった、勝った……。

剣技館で、毎日体力の限界まで剣の稽古をしていたことが役に立った。

トーイは、そう思った。

——それにしても、

とトーイは思う。いったい、目印となるあの大石はどこにあるのだろう。立ち上がり、寄りかかりながら周りを見回すも、それらしきものはない。先を見てもない。

はあ、とため息をついて、トーイは手をついていた石にもたれかかり、そのままずると腰を下ろした。その石は、こちら側が平らで、背もたれのようになるのではないかと本能的に思ったからなのだが、なにしろその石の表面が平らすぎ、寄りかかって少しも楽ではなかった。

——たく、役に立たないなあ。

と振り返ったところで、その石が件のものであることに気がついた。

——ああ、これだ。てことは、魔女の住む家というの……。

トーイの身体から疲れが消えた。立ち上がりその石の裏側に回り込み、そのままの方向に歩いた。剣を抜くのはまたも忘れていたが、幸運にもモンスターに会うことはなかった。ただ、目指す建物もなかなか見つけられなかった。

その存在を教えてくれた男は、石の真後ろ方面にまっすぐに進むとあるといていたが、石の向こう側は、ほとんど森といていいほどの場所で、木を避けながら歩くうち、どの方向がまっすぐ方面なのか分からなくなってしまったのだ。

なかなか見つけられないので、やけになったトーイは、感覚だけを頼りにめちゃくちゃに歩いた。いわゆる道に迷った状態だったが、

やはりついているのだろうか、トーイは偶然というか、たまたまといった感じで、魔女が住むという家らしき建物を見つけた。

変わった家だった。ここに住んだら、さぞかし寿命が縮むだろうとも思った。

その家は、絶壁の岩場に寄り添うように建てられていた。崖崩れがあつたら、一発で死んでしまうだろう。そんな場所だった。

トーイは、おっかなびっくり家に近づいた。扉があつた。かわつた扉だった。横幅があり、ほとんど正方形だった。そこに、鏡がはめられていた。

鏡の大きさは両手を広げたくらいか。形は丸い。

鏡を取り囲む枠は木製だが、それはただ単に丸いわけではなく、その中に、鏡を挟み込むようにXの字に木がはめられていた。

飾り、なのだろうか。不思議だった。デザインのことでない。デザインも、またそれを扉に取り付ける感覚も独特ではあるが、不思議だったのはそれらのことではない。

場所である。

その飾りは、トーイの腹部付近の高さにあつたのだ。そして、ノブもその左下、トーイの身体でいうと、太腿辺りにあるのである。

魔女は、よほど背が低いのだろうか。

——それにしあって……。

トーイは、ノックを試みた。返事はなかった。ノブを握って回してみても、うんともすんともいわない。いないのだろうか。側面に回ってみた。崖を正面に見たときに対する面である。

なにもない。せめて窓があれば、中が見えるし、人がいるならこちらの存在をアピールすることもできたのだが——。

いや、そもそも不在なのだろうか。ノックはしているのだし、いたら何かしらの反応はあると思う。

トーイは扉の前に戻り、中腰になって鏡をのぞいた。

鏡の中の魔女、と呼ばれる彼女。

——まさか、本当にこの中にいるわけじゃないだろうな。

いたとしても、トリーには入れない。

そのとき、その鏡の中に人影を見た気がした。反射的にトリーは振り返った。背後には誰もいなかった。

——鏡の中に入ろうなんて考えたこともないけど、やってみたら意外と入れるのかな？

トリーは向き直り、鏡に向かって手を伸ばした。

指先は、鏡に当たって、こつん、と音を立てた。

ブログ1(後書き)

毎日、夜の7時に更新していきます。

プロローグ 2

プロローグ 2

判然としない。

なにもかもがはっきりしない。

寝ぼけている？　そうかもしれないが、少し違和感。あたしは頭を振って、目をこすった。そして辺りを見回す。視界はぼやけているが、外であることは分かった。

——どうして外なんかに？

と思ったところでくしゃみが出た。肌寒い。しっとりとつめたい地面から、朝らしいことが分かった。そのためなのか、人っ子一人いない。見たところ、建物や、その密集具合で、繁華街、というほどではないが、街中であることは分かる。だが今風ではない。クラシカル。それも飛びっきりの。なんなら中世のたたずまいを残す欧州って雰囲気。

——欧州？

混乱した。こんなの近所にはって——そもそも、あたしはどこに住んでるんだろう。欧州な雰囲気違和感を感じるってことは、そこ以外のどこかに住んでたってこと？

アメリカ？　アジア？　それとも中東？　っていうか、なんでもんなことが分からないわけ、あたしは。……あたし？

——あたしってだれ？

ここはどこ？　あたしはだれ？

いわゆる、よく聞く、噂の記憶喪失、ということなのだろう、あたしは。

などと冷静に自己分析ができるあたしは、冷静だ。どうしてだろう、もって生まれた気質、性格だろうか。大人だね、あたしは。え、

大人なの？ それすら分からない。手を見て、それから着ている服を見た。あまり大人っぽくは思えない。そういうことは分かる。

顔は？ これはけっこう重要だ。あたしはこの身体で、あたしとして生きていかなくてはならないのだ。

鏡でも持っていないだろうかって、バッグを探すがなく、振り返ってみて、地面を探し、やっぱりないよなあ、と気落ちしたところでおあつらえ向きに鏡があるのに気がついた。というか、背後全面が鏡だったのである。

——あ、あたし結構いけてんじゃない、ていうかアジア人だ。ちょっとがっかり。

それにしても——とあたしは首をかしげた。

背後にあったのは二階建ての建物で、大きめな鏡がそこにあった。そこに映るあたしの見てくれが いいものだから、まるでマネキンを飾ったショウケースのように見える。

でも、ショウケースではないのである。ガラスではなく、鏡。

……なんで？ なにに使う鏡？ なんか不自然だ。それに、鏡が見たいときに、都合よく、運よく、こんなものあるかな？

あたしは鏡に手を当てた。鏡の中のあたしと手を合わせる。

——あなたはどうか？ 記憶はある？

彼女も不思議そうな顔で見返すばかり。

鏡の前で、記憶をなくしていたあたし。

あたしは振り返り、鏡に寄りかかった。

——鏡から出てきたんじゃないの？

なんて考えつつ前にダイブする。

手を突き四つん這いになった。

もしかすると、あたしは鏡の中から生まれたのかもしれない。そうだとするなら、名前が分からないのも当たり前だ。ここがどこかが分からないのも当然だ。

だってゼロなんだもん。

もし、あたしが赤ん坊なら——これはもう、することは一つであ

る。

あたしは大声を上げて泣いた。

ひとしきり泣いた。疲れるまで泣いた。泣くだけならすすきりして、違う、ということに気がついた。こんな状況で、涙一つ流さないのは不自然ではないか、との思いが頭のすみであり、その思いに身を任すように泣いてみたが、どうもあたしは違うらしい。あたしは本来、危機に直面したときに泣くような人間でなく、論理的に解決法を探るような、徹底的に理の勝った人格のようだ。そのことに泣いてみて気がついた。

頼れるのは自分だけである。あたしは頬を叩いて、気合を入れた。泣くのではなく、考えよう。それがあたしのやり方だし、あたしを取り戻す最善の方法でもある。

あたしは座りなおし、状況の整理にとりかかった。

まず、分かっていることは、あたしには記憶がないということ。記憶がないながらも、この場所の雰囲気違和感を覚えたということから、ここではない場所にいたらしいこと。そして、顔からしてそれはアジアのどこかということ。

ということは――異国の地で記憶をなくした、ということか。

そういうことなら、とあたしはあらためて身の回りを観察した。だがやはり、バッグどころか小石すらなく、服中のポケットを探るが何もない。海外にいて、パスポートや財布を持っていないというのは不自然ではないだろうか。強盗にあった？ そのときに殴られでもして、そのショックで記憶が……。

しかし頭どころか、体のどこにも痛みはなかった。海外にいるなら財布とはべつに、お金を体のどこかに隠しそうなものだが、それもなかったし。

ここ、どうも海外ではない気がする。だが、記憶喪失とはいえ、これだけはつきりとこの場所に違和感を覚えているのだから、旅行中であった可能性は高い。ということは――旅行で海外を模した場

所、リトルなんとかみたいなどころにいるとき、なんらかのアクシデント、例えば突発的な脳の病気とかで気を失い、起きてみたらその後遺症で記憶を失っていた——そういうことだろうか。

そう——なのだろう。少なくとも、鏡の中から生まれたわけではないことだけは確かだ。

そういうことならどうするか。

——歩くしかないか。

財布も身分証明証も記憶もないのだ。自力ではどうにもできない。人に会わなければ始まらない。

会って、現状を伝え、助けを求める。

とにかく、今はそれしかない。

そう思い歩いていると、陽は昇り始め、眠そうな人々の姿をちらほらと見かけるようになった。一人目を見たときは笑った。二人目を見たときは不審に思った。三人目を見て怖くなった。頭を抱えたくなった。

——いったいどういうこと？

街中を歩く人々は、白人だった。あたしだけが黄色人種。

さらに彼らは、昔風の、中世風の服を着ていたのである。

アミューズメントパークのようなものだろうか。いや、違う。彼らの表情で、そうじゃないことが分かった。驚き、彼らの顔、姿に見入ったあたしだったが、彼らもまたあたしを驚きの目で見返してくるのだ。その表情から、彼らはここでふつうに暮らしていて、どうやらイレギュラーな存在はあたしのほうなのだということが分かった。

やはり、街並みから感じられたように、ここは外国ということなのだろうか。しかし、そこまでは百歩譲って認めるとしても、あの格好は……。

あたしはタイムスリップにでも失敗したのだろうか。それとも、アリスみたいに、鏡を通り抜け、不思議な世界に来てしまった——

—とか。

……ばかっている。いくらなんでもそんなわけはない。

あたしは頬をつねった。痛かった。つまりこれは夢じゃない、現実だ。

これが現実ならここは、現実にならざる場所ではない。

ならば、彼らは一見時代錯誤な格好をしているが、訊けばなんでもことない理由があるはずだ。そんな場所にあたしがいたということにも、思い出せば納得のいく理由があるはずだ。

だから不安に思う必要もない。少なくとも、この場所や彼らの格好については、訊けばそれで分かることなのだから。

そう思いながら歩き、そして歩き続けた。

話しかけず歩き続けたのは、道行く西洋人とは言葉が通じないだろう、まずは言葉が通じそうな人、あるいは場所を探さなければ。そう思っただけのことだった。だが——。

結果からいうと、その心配については杞憂だった。

彼らの話す言葉が完全に理解できたのだ。

最初、すれ違った二人連れの会話が理解できたときは偶然だと思った。たまたま彼らだけがあたしの母国語を話せるのだと思った。しかし、はなしかけようかなと後を追っているときにすれ違った三人連れの会話も理解できた。驚き、ために意識を聴覚に集中させてみると、それまではどうせ理解ができないのだからと聞き流していた、店先で大声ではなしている店主と客との会話や、忘れ物をした亭主を呼び止める奥さんの声などが、意味のある、理解のできる言葉として耳に届いたのである。

——なんで？

感覚的に、自分は言語を一種類しか操れない、ということは分かる。それでいながら彼らの言葉が分かるということは——、彼らは（あたしは？）異国人ではない、ということ？

——それってどういうこと？

あたしはここで生まれた、ということだろうか。

いや、もしそうだとしても、あたしだけが違う服を着ている説明にはならないだろう。それに第一、あたしはここに、最初から違和感を感じていたのだ。ここが生まれ育った場所のはずはない。

でも、だったらここは――？

思考は堂々巡りだった。やはり一人で考えていても埒が明かない。幸い言葉は通じるのだ。訊こう、はなしかけよう、変なふうには思われるだろうけど……。

ダメージを最小限に抑えるため、優しそうな人を求めて歩いていたら、いつの間にか最初にいた場所に戻ってきた。どうやらぐるっと回ってきたらしい。しかし、べつに行きたいわけじゃないが、例の鏡の前にはいけなかった。あの鏡を囲むように人垣ができていたのである。

――なんだろう？

何か落し物でもしたのだろうか、しかしそもそも物なんて持ってなかったし……。

あたしは人垣の後ろから背伸びをして、中を覗き込んだ。

「さあさあ、見てってよう。ここじゃなければ見れないよう♪」鏡の前には、タキシードにシルクハットをかぶった男がいた。口ひげをはやしているのは分かったが、帽子のつばで顔は見えない。妙な節をつけながら、歌うようにしゃべっている。何かの見世物のようだった。「今見逃しても一生見られない奇跡をこれからご覧に入るよう♪」

彼が一呼吸入れた瞬間、取り囲む観衆から失笑にも似た声が漏れた。意味が分からなかった。男は、そんな彼らの反応にはお構いなしにしゃべりつづける。

「ここにある鏡。これは一見なんの変哲もない鏡だが、ところがどっこい、ここではないべつの世界に通じている鏡なのでございますよう♪」

その言葉を聞いたとたん、背筋がひやっとした。

――べつの世界に通じている？

あたしが先ほど考えたばかりの妄想を、このシルクハットの男は、真顔で観衆に向かってしゃべっていた。

いったいこれは――。

「べつの世界になど通じているわけがない、そう思いの皆さんに、これから面白いものをご覧に入れますよう♪」そういつて彼は、懷から新聞紙大の紙を取り出した。「私のこの右手にて、直接向こうの世界からりんごを取り出してみせますよう♪」

そういうと彼は、左手に持った紙を鏡の左端に当てた。そして右手を上げ、ゆっくりと観客を見回した。かと思うと、突然その右手を紙に向かって勢いよく突き出した。あたしは思わず目をつぶった。そんなことをしては骨折、よくて突き指はするだろうと思い、その痛そうな場面を見たくなかったからなのだが、いくら待っても、そういう衝突音は聞こえなかった。

ただ、紙の破ける音はした。

――まさかほんとに？

恐るおそる目を開けると、彼の右手は鏡に当てた紙に肘まで埋まっていた。

――あたしは、

シルクハットの男は、ゆっくりとその右腕を鏡から引き抜いた。腕が触れている紙の破れ目が、かさかさと小さな音を立てる。

そして完全に引き抜いた右手は、りんごを手に使っていた。

ブラボーと、やや芝居がかった声上がる。

彼は左手で手にしていた紙で鏡をこすった。

そして、紙を鏡からはなした。

鏡には穴が開いていなかった。

歓声上がる中――混乱した。

――あたしは、やっぱり鏡の中から生まれたのかもしれない。

プロローグ 3

プロローグ 3

——まさかね……。

ネイリンは、胸に渦巻く疑念を心の内で笑い飛ばそうとしたが、なかなかうまくいかなかった。やっぱりそうじゃないのか、そうとしか考えられないだろう、という思いが、どうしてもわきあがるのだ。

——でもな、そうだったら……すごい失礼。だって、あれは、どう見ても、ただの浮浪者だった。顔は、まあ気品があるというか、上品な顔立ちではあったが、服は胸から足先まで垢や泥でどろどろだった。

彼を追い越しざまに、なんとなく顔を見た。そのときはなんとも思わなかった。トイーとは、似ても似つかなかったからだ。しかし、それからもうずいぶんと歩き、気がつけば街中からはなれ、農業地帯に足を踏み入れ、たまに人とすれ違えば、そのたびにトイーの面相を伝え、こういった人を見なかったか、いやあ見ないな、などというやり取りをつづけるうち、先ほど見た浮浪者のことが気になりだしたのだ。

ネイリンたちは、トイーの特徴を伝えるとき、一人前な体格に似合わない童顔で、終始表情がなく、しかし無表情というのではなく、対する人間を安心させるような、茫洋とした表情を常にしている、といった人相風体のほかに、とても長い剣を背負っている、ということも特徴として伝えていたのだが、先ほどすれ違った浮浪者（まあ旅人なんだろうけど）もまた、やけに長いものを背負っていたのである。だがそれは、長剣などではなく、いったいなにに使うのか、ただの木の棒だった。

ネイリンは、酒場のカウンターで突っ伏していた男の口ぶりを思

い出した。

——うん？ 見たなあ、見た見た。ん！ あれは……えっと、そう！ ついさっきの話だ。ここにくる途中の、道、ん！ ですれ違ったんだ。ひっく！ そいつかい？ そいつは、えと、ん！ あっちだ！ あっち、ん！ に行った。

——信じたあたしたちがわるかったのかも。

ネイリンはため息をつき、ふと隣を歩いているプライを見た。

プライは、ゆっくりと倒れるところだった。

——え！

「おい、あぶねえ！」叫びながら、ラパルクがプライの身体を支えた。「おい、しっかりしろよ。おい！」

プライは真っ青な顔をしていて息も荒かった。

おでこを触ると、びっくりするほど熱かった。

昨日は朝から小雨が降っていた。

気にならないほどのものだったが、気がつけば服はしっとりと濡れ、肌にとわりついたそれが、ゆっくりと体温を奪っていた。

夜、宿についたころには、いいかげん嫌気が差していた。

もういやだ、これだけ歩いて、これだけ寒い思いをして、何人もの人に聞き、何回もの不快な思いをして、トーイの姿は、影も形も捉えられない。

もう帰ってしまいたい、そうネイリンは思ったが、しかし、彼らは勝手についてきたとはいえ、発端は自分なのである。そうはいえない。逆にネイリンは、気を使って明るく振舞い、ついてきてくれたともいえる彼らを元気づけようとしたのだが、ラパルクは半ばこの旅に飽きているのか、しゃべりまくったネイリンをうるさそうにし、どんなに疲れていても笑顔を絶やさなかったプライも、疲れた顔を返すだけだった。

今から考えると、プライは疲れていただけではなく、体調を崩していたのだ。本来なら、翌日は終日身体を休めるべきだった。いや、

実際そうしようとも思っていたのだ。だが、夕食をとるために行った隣の酒場で、トーイに関する有力情報を耳にしたのである。

有力でもなんでもなかったのだが。初めての目撃情報らしきものに、冷静さを欠いていたといえる。このチームの頭脳ともいえるプライが、風邪っぽいといって、夕食をとらず一人部屋に残ったため、その話を直接聞けなかったのもわるかった。

——いや、わるいのは馬鹿で間抜けなあたしだ。あたしがわるかったのだ。プライはなにもわるくない。なのに、プライだけが風邪を引いちゃって。

木陰に寝かせたプライの顔を見つめながら、ネイリンは反省し落ち込んだ。

ラパルクが、おおい、大丈夫かあ、といいながらプライの鼻をつまんだ。プライが顔をしかめる。

「ちよっとなにしてんのよ。プライが苦しがつてるじゃない」

「だって、動かないからよう」

こいつも馬鹿で間抜けだ。

「ゆっくり寝かせてあげなさいよ」

「しかしなあ。このまま寝てたってよくなるか？」

「分かってるけど……じゃ、どうするのよ。この近くに宿屋なんてないんだよ」

戻るにはきすぎている。しかし、進んだところで、なにがあるわけでもないだろう。どんどん人里から離れるだけだ。見渡す限りの農業地帯。ぽつりぽつりと小作人のものだろうか、この辺にも家はあるのだが、どちらかというと、助けたくなるほどその外見はみすばらしく、行ったところでどうなるものか。いや、それでも、こんなところにいるよりはましなのか。

——どうしたらいいんだろう。

ネイリンは、またため息をついた。

——たくもう、簡単に見つからないあいつがわるいのよ。

ネイリンは、トーイの顔を思い出し、ほほを膨らませた。

トイーが、村を出るといったのは三年前のことだ。ちょっと外の世界を見てみたくてね、というのがその言い分だったが、ネイリンには分かっていた。トイーは、子供のころに村長さんの家で聞いた伝説の勇者の話に影響を受けている。一度もそういったことはないが、赤ちゃんのころから一緒に幼馴染みなのだ。そういったことは分かる。

だが、分かったからといって、できることはなかった。とめる筋合いにもないし、だいたい、そんな癪に障ることはしなくなかった。だから、余裕の体で、いつてらっしゃい、と見送ったのだが、その後いろいろあって、結局は後を追って、村を出ることを決意するに至った。

あんなボーっとしていて頼りない男を一人旅に送り出すというのは自殺を止めないことにも等しい。そんな風に思って、胸の奥底から湧き上がる人類愛、隣人愛に押されて、

かどうかは分からないが、とにかくネイリンは村を出る決意をしたのだ。でも周囲の人たちに、人類愛がどうかいっても絶対信じてもらえないと思ったので、夜中に一人で人知れず出発しようと思った。

だが、まずはプライがついていくといいだした。ネイリンは、とんでもないといって断った。プライは、村の明日を背負って立つ人材だ。そんな人間を連れて行ったら、村人たちからなにをいわれるか。しかしプライにも思うところがあるらしく、いえ、トイーさんと約束しましたから、などといって、頑として譲らなかった。

——いったいなにを約束したんだろう。

トイーはちよつと特殊な人間だった。子供のころは泣き虫で、弱虫で、どうしようもない子供だったが、長じてくるにつれ、不思議な雰囲気をもとうようになり、決してリーダーになるようなタイプではなかったが、気づくと人の輪の中心にいるようなところがあった。プライもまた吸い寄せられるようにトイーの後を小さいころか

ら追っていて、今では六才という年齢差を超え（それはトイが幼くプライが大人びているせいもあるのだが）、二人の間には、余人には入り込めない信頼関係があった。

それが少し悔しい、そうネイリンは思っていた。だから、ということもある。やはりネイリンは、なおも断ったのだ。だが、結局は押し切られ、ついてこられることになってしまった。まあ、一人旅が多少心細くもあったから、迷惑そうな顔をしながらも、内心ネイリンは喜んでもいたのだが。

でも、だからといって、道連れは二人も要らなかった。それも、あんな脳みそまで筋肉でできているような男は、頭を下げてでもきってもらいたくなかった。

だが、その筋肉男、ラパルクにも、いやもう約束したから、と強引に押し切られついてこられることになってしまった。

——いったい誰と、なんの約束をしたんだろう。

ラパルクのほうは、だいたい想像はついていた。

ふと頭に浮かぶ姉、セナの顔。そして、劣等感。

ネイリンは自分にむけて気づかない振りをした。

最初は、じゃまくさい、目障りだ、うっとうしい、などと感じていたラパルクだったが、移動中モンスターに襲われたときなどは重宝した。

プライは頭だけではなく、その身体能力にも年齢ばなれしたところがあり、戦力として十分計算できたが、剣技館副名代の一人にして、名代候補だったラパルクの、そういったときの頼もしさは格別だった。旅をはじめた当初こそ、モンスターに襲われたときはプライとともに剣を抜いた（正確には槍だが）ネイリンだったが、二回、三回とモンスターと戦ううち、これはあいつ一人に任せておいて大丈夫だな、と穂先を地面に突き刺して、その柄に寄りかかりながらプライと気候の話などをするようになった。

だから、まあ、いいチームなのかもしれない、とは思うようになった。

——頭脳のプライ。体力のラパルク。美貌のあたし。

旅は順調だった。これなら、トーイもすぐに見つかることだろう。あたしを見たら驚くだろうな。会ったらなにをいおう。ネイリンの頭の中は、旅をはじめてすぐにそうだったことで占められたが——。しかし、なかなか見つからないのである。

イライラがたまり、疲れがたまり、そしてプライがダウンした。プライの苦しそうな顔を見て、ネイリンは小さくため息をついた。ため息をつくたびに幸せが逃げる、といったのは誰だっけ。そんなことを考えながら、ネイリンは立てた膝に肘をのせ頬杖した。

「おい、ネイリン、あれ見てみろよ。あそこに屋根が見える」ラパルクがいった。立っている。「あれ、この辺の地主かなんかの家じゃねえか？」

ネイリンも立ち上がり、爪先立ちでいわれたほうを見ると、かなり先ではあるが、丘の上に赤い屋根がかすかに見えた。見えるのはわずかだったが、屋根から推察して立派そうな家だった。

「あ、ほんとだ。あそこなら休ませてくれるかも。いや、きつと葉だってあるよ」ネイリンは、ほっとしていった。「行ってみよう。はい、担いで」

「ここまでおれが担いだんだから、今度はおまえが担げよ。ずるいぞ」

「プライ、もう少しの辛抱だからね。ちょっと臭いだろうけど、我慢してね」

「おまえなあ」

ふとプライを見ると、そういったやり取りにも、なんの関心も見せず、ただ荒い呼吸を繰り返していた。ラパルクとネイリンは顔を見合わせた。

「もしかしたら、思ったよりわるいんじゃないか？」

今までは、ただの疲れと風邪によるダウンだと思っていた。違うのかもしれない、そう思ったら急に不安になってきた。

「早く担いで。急ごう」

いい終わると同時に、ぽつり。雨がプライの頬を濡らした。

その建物は、家と呼べるようなものではなく、屋敷、あるいは館と呼ぶにふさわしいほどのものだった。

「すげえな」

感心したようにつぶやくラパルクを無視して、ネイリンは扉をノックした。

応答を待つ間、ネイリンは違う感想を胸のうちに転がしていた。確かに立派な建物だ。だが、周囲の家々との落差を比較し、その相関関係を類推するなら、この家のものは、周りのおそらく小作人たちから、不当に搾取している可能性がある。

仮にこの家のものが地主で、もし自分がこの家の主人であったなら、こんな立派な家などを建てずに、利益を還元するの^に。

そんなことを考えていたネイリンは、ふと、トリーの目撃情報^{ガセ}を聞いた酒場で耳にした酔っ払い同士の噂話を思い出した。

「丘の上の地主、あいつア、なんでもとんでもねェお宝ア持つてるって話だぜ。」「なんだよ、おまえ。まさか盗みに行こうってんじゃないだろうな。」「そうしたいのはやまやまだけどな、あれだけは、どんな盗賊にだって盗めやしないサ。なにしろ、

——そいつは、鏡の中に隠されてるって話だぜ。

第一章 『鍵の背後に鏡、あるいは鏡の中にカギ』 1

「お待たせいたしました」扉を開けてくれたのは、エプロン姿の、優しそうな中年の女性だった。彼女はネイリンとラパルクの顔を見て、少し不審そうな顔をした。「えっと、どちらさまでしょうか？」

そういった後で彼女は、ラパルクの背負ったプライに気がついた。「あら、そちら様は顔色が悪いようですが……」彼女はふとネイリンたちの背後に目をやった。「まあ、雨も降ってきましたね。こんなところではお寒いでしょう。そちらの方の身体にも障ります。とにかく中へどうぞ」

よく口の動く女性だった。ネイリンも無口なほうではなかったが、ついている隙がない。ネイリンは、はあとだけいつて中に入った。

大広間だった。正面に、二階へつづく階段。右手側の壁には奥と手前に一つずつ扉。その間にガラスの入ったケース。その前にビリヤードの台があった。左手奥には、通路に通じるものだろう、扉のない穴が壁にある。毛足の長いカーペットが敷かれてあり、ソファで囲まれたようになっていいる左手側の壁には、火の入った暖炉もあった。暖かかった。プライのことで不安になりかけていたネイリンは、それだけで少し安心した。

「わたしはこの家の使用人で、カーテといいます。ガードナー様への御用でしたら、まずはわたしが承りますが……」

今は初対面ということもあり、格式ばったはなし方をしていいるが、そんな口調とは裏腹に、いかにもはなしやすい雰囲気全身から醸しだされていた。ネイリンが安心した理由は、そんな彼女のたたずまいも影響していたのかもしれない。

「どうも、そういった感じではないようですね」主にプライの顔を、心配そうに見つめながらいった。「いったいどうしたの？」

うすうす、ネイリンたちが置かれている状況を察したのだろう。

カーテは、正規の客に対するときのようなしゃべり方をやめ、いかにも優しいおばさん、といった感じでいった。

「あの、人を探しているのですが、ともに旅をしている者が倒れてしまつて」やつとネイリンははなすことができた。「おそらくは疲れからくる風邪だと思います。少しの間、休ませてはもらえないでしょうか」

「そうなの。えっとそれじゃあ、とりあえず暖炉の前に行つて暖まつていなさい。わたしはなにも権限がないから、まずは旦那様に訊いてこなければいけないけど」

カーテがそこまでいったときだった。通路から低い声が聞こえた。「何事だ」威厳ある声だったが、同時にどこか不安定さを感じさせる声だった。

大広間に現れたのは老人だった。杖をついていて、億劫そうな歩き方だった。

「あ、旦那様」

カーテが走りより、老人を支えようとする。だが旦那様、と呼ばれたその老人は片手を上げ、彼女の助けを断った。

「客ではないようだな。何者だ？」

——偉そうで、なんかやな感じ。

ネイリンは、老人の口調にそう感じたが、しかし今のネイリンたちは助けを求める立場だ。顔に出しちゃいけない。機嫌を損ねちゃいけない。ネイリンは、精一杯の殊勝な顔で、先ほどカーテにしたのと同じ説明をした。

「だめだ」

断られると思っていなかったネイリンは、お札をいおうと頭を下げかけて、そのまま固まつてしまった。

——え、だめなの？　なんで？　病人いるんだぜ。

とはいえないので、悲しそうな顔でカーテを見た。

「旦那様。こちらの方は、大変に体調を崩されているようです。せめて、体力が回復するまででも、こちらで……」

「カーテ。決めるのはお前じゃない。当主である儂だ」

——やなやつう。

どうせだめなんだったら、殴ってそのまま逃げてやろうか。ふとラパルクの顔を見ると、ネイリンよりも腹立たしそうな顔をしていた。プライを背負っていなかったら、飛びかかっていたかもしれない。ネイリンはあわてて、冷静になろうとつとめた。プライがあてにならない今、どっちかが賢くならないと。馬鹿な二人が馬鹿なままだったから、酔っ払いの言葉なんかを信じて、こんなところまでくる羽目になったんだし。

ネイリンは、もう一度お願いした。

「突然きて、休ませてくれなんて、迷惑なことだと承知しています。でも、プライは……連れのものは、著しく体調を崩しているのです。できるだけ迷惑をかけないようにします。お手伝いします。ですから、少しの間だけでも……」

「ほう。これはこれは、かわいらしいお嬢さんだ」

声のしたほうを見ると、やはり先ほど老人が現れたところから、四〇がらみの男が現れた。なかなかの器量だった。着ているものも立派なら、それが包む身もしなやかであるため、本来なら容姿端麗といわれるような男だろう。だが、せっかくの男前も、洋服がだらしなく着崩れているし、髪が少し汗ばんでいるのか湿っており、眼がとろんとしていることで台無しだった。

どうやら、彼は酔っているらしい。そしてそれは、彼の身体にとつて、イレギュラーな状態ではなさそうだった。

「お父さん」彼は芝居がかった口調で老人をそう呼んだ。「いいじゃないですか。なにも問題はない」口を開きかけた老人を制するようにつづける。「分かっています。お父さんは、あれを気にしているんでしょ。でも大丈夫でしょう。あれは盗めやしない。それに、盗もうとしたものは、」

——死んじゃうんですね？

彼はそういって、一際気持ちわるいゆがみを唇の端に浮かべた。

好ましい人物ではないが、彼の登場は追い風かもしれない。そう思うと同時に、ネイリンは、酒場での酔っ払い同士の会話を思い出していた。

――鏡の中の宝。

「気安く、あれのことを口にするな」老人が小さな、しかし強い口調で男にいった。

「なんだよ、あれって」ラパルクがはじめて口を開いた。腹が立っていたのだろう。敬語なし。

ネイリンは唇をかんだ。せっかく、休ませてもらえる可能性も出てきたのに。馬鹿ラパルクめ。剣技館は、礼儀にうるさいと聞いていたのに。いったいなにを学んできたんだ。

「なんのことだか分からないけどな、おれたちは盗みが目的で来たんじゃない。単純に、困ったから助けを求めにきたんだ。だが、盗人呼ばわりされてまで頭を下げる気はない。じゃましたな」帰るぞ、ネイリン。そういつて、ネイリンをうながし彼らに背を向けた。

「旦那様！」カーテがきつい口調でいう。

しかし、見るとカーテは、老人ではなく男のほうを険しい表情で見ている。男は、茶化すように首をすくめている。

「よかろう」老人は、しばらく考えるそぶりを見せた後、不思議な表情でうなづいた。「たしかに、冷静に考えれば、ジーナスのいうように心配することはない。ならば、断る理由はないことになるな」老人が、ネイリンたちを見ていった。「ゆっくり休んでいきなさい。ただし、間違ってもおかしい気は起こさないことだ。儂らにとっても、そしてそなたらにとっても、それが一番だ」

酔っ払いたちがいつていた『宝』のことを念頭において、はなししているのだろう。だが、そのことを断片的にしか知らないネイリンには、十分に理解できなかった。

――盗もうとしたものは死んじゃう？

どういうことだろう。宝を守る、気の短いマッチョの番人でもいるのだろうか。

分からないが、事細かに質問するような空気ではない。ここで休む許しが出たのだ。

「ありがとうございます」ネイリンは、ただ頭を下げた。

よかったわね、そんな表情のカーテと眼があった。ネイリンは微笑を返すが、

——これで、プライが直るまではここにいられる。その間に、宝の秘密を探っちゃお。

そんなことを考えているネイリンだった。

第一章 2

2

その後、老人はすぐに通路の向こうに姿を消した。自室に戻ったのだろう。

ただ、老人にジーナスと呼ばれていた男は、その場に残った。暇なのだろうか、興味深そうにネイリンたちを見回しては、アルコールで弛緩した顔の中に、いたずらっぽい表情を垣間見せる。そのたずまいは、遊んでほしそうに、じっとこちらをうかがう猫のものにも似ていた。

ネイリンは、そんな彼の視線には気づかないふりをした。

「ではみなさん、とりあえず暖炉の前にどうぞ。少し服も濡れていますね。タオルを持ってきましょう」そう言って、カーテは大広間右手前の扉を開け、消えた。

ちらとジーナスの様子をうかがうと、彼は恭しいしぐさで、両の手を暖炉に向けた。ネイリンたちは、武器を扉の前に置くと、暖炉の前に移動した。ジーナスもついてくる。暖炉の前で三人固まった。じんわりと暖かく、ぱちぱちと薪の爆ぜる音が心地よかった。ネイリンは、ラパルクからプライを受け取ると、上半身を軽く抱きかかえるようにして寝かせた。その姿勢になって、ほっと肩を落とした。ジーナスが口を開いた。

「さ、やっと落ち着いたね。では、ここで自己紹介をさせてもらおうかな。おれの名前はジーナス。ここ、ガードナー家の次男だ。一つ、お見知りおきを」といって、しゃっくりをした。一人ソファの上座っている。

「あたしは、ネイリン・パークエムです。彼はプライ・リーベルト」といって、プライを見下ろした。先ほどよりは多少よさそうだが、依然息は荒かった。「で、こっちの男が……」

ネイリンの言葉をさえぎって、ラパルクが口を開いた。

「ラパルク・バナといいます。先ほどは失礼な言い方をしました。謝ります」座ったままで頭を下げた。「だが、あなたの言い方も初対面の人間に対するものとしてはどうかと思うが……」腹に据えかねていたのか、ラパルクはそんなことをいった。

「ちよっとラパルク。これからお世話になるのよ」あわててネイリンはいった。

「いや、まったくその通りだな。非礼はわびるよ。これこの通りだ」いってジーナスは、そのままの姿勢で首だけかくつと下ろした。それのなにがおかしかったのか、彼は一人でわらった。「おっと、怒らないでくれ。こっちにだって事情はあるんだ」

「事情って？」おそらく宝のことだ、とネイリンは思った。ジーナスからいいだしたことなのだ。このタイミングなら訊いても不自然じゃないだろう。「さっきいつてた『あれ』ってやつのことですか？」

「まあ、そうだ」ジーナスは首をすくめた。彼のボディ・ランゲージは、首辺りのみでなされるようだ。「べつに大した事でもないが、知らないといっている部外者に、わざわざ言い触らすことでもない。ノー・コメントで通させてもらうよ。それより、君らは人を探してるんだったよな。さっき聞かせてもらったよ。誰を、なぜ探してるんだい？」

「それは――」それも、べつに大したことじゃないが、進んでいいいことでもない。

いいよどんでいると、カーテがお盆を持ってやってきた。ネイリンは、そちらに気をとられたふりをした。

「温かいスープを持ってきたわよ。これを飲んで薬を飲めば、きつとすぐによくなるわ」カーテはお盆を三人の前にさしだした。スープが入った皿一枚とカップが二つ、水の入ったコップが一つ、それから紙包みが載っていた。ネイリンは、お札をいってそれらを盆から取り、脇に置いた。ラパルクも札をいってカップを取る。

「プライ。スープをいただいたわよ」かるく身体をゆすると、眠りが浅かったのか、すぐにプライは薄目を開けた。「プライ、大丈夫？ 苦しい？」

訊くとプライは、わずかに首を横に振ると、それから苦しそうな顔をした。

「あ、しゃべらなくていいからね。これ飲んで、それからお薬もいただいたから、それも飲んで。そしたら、あとは寝てていいから」プライはうなづく、ネイリンがスプーンにすくったスープを飲んだ。六口めで口を固く結んで頑として開けなくなったので、ネイリンはスープをあきらめ薬を飲ませた。

「おっきな赤ちゃんだ」ジーナスが笑う。「カーテ。おれもスープが飲みたいな。琥珀色のやつ、持ってきてくれないか」

「ジーナス様、おひかえください。呑みすぎです」

「いいじゃない、カーテ。お父様が呑みたいっていつてるんだから、好きなだけ吞ませてあげればいいのよ」上のほうから、透き通ったかわいらしい声が聞こえた。階段の上からのものらしい。

プライに薬を飲ませ終えたネイリンは、声のしたほうを向き、目をむいた。

——ぜんぜん似てないじゃない。

階段を一人の少女が下りてくる。年はたぶんプライと同じくらいか。過剰にフリルのついたワンピースのドレスを着ていて、髪の毛がトルネードのようにカールしている。人形を連想させるような、人工的な美しさを持っていて、絵本から飛び出てきたような印象を抱かせる少女だった。

ネイリンは、なんとなくむっとした。

「お父様がお酒を吞まれている姿を見るのが大好きですの。なんでしたら、私が樽ごとお持ちしましょうか？」ジーナスに天使のような表情を向けるが、言葉の内容は刺々しい。

そのギャップが意外だった。どういう娘なのだろう、とネイリンは、さりげなく彼女を観察した。

「そういう口の利き方はやめてくれ」ジーナスは苦々しい顔をした。
「ロツテ。お客様だ。ご挨拶なさい」

「はい」彼女はネイリンたちの前に姿勢よく立った。その様子も、父親とは似ていない。「はじめまして。ロツテ・ガードナーといいます。あなたたちは？」

そういつて、小首をかしげながら微笑んだ。曇りのない、まさに子供のような笑顔だったが、目の奥に、冷静に物事を捉える理知的な輝きがあった。

——プライほどじゃないにせよ、頭のいい娘かもしれない。

なんとなく、ライバル心のようなものが芽生えた。同じ年下でも、プライには諸手を挙げて降参するが、この娘には負けたくない、となぜかそう思った。

ネイリンは目一杯大人っぽく微笑みを返すと自己紹介し、ラパルクが名乗るのを待ってから、三度目になる『ここにきた事情』をばなした。

「そうでしたの。では、ご病気が治るまで、ゆっくりなさってね」
ジーナスの隣に座りながら、カーテにいう。「カーテ。ネイリンさんたちにお泊りいただく部屋は、もうご用意してあるの？」

「いえ。只今」カーテはその場にいた全員に対するようなお辞儀をし、そのまま階段が上がっていった。

ロツテの態度は、大きな館のご息女として堂に入ったものだった。自分にはできないな、と思うと同時に、したくもないな、ないよね？ とネイリンは自分に確認した。

「ところで、お探しの人ってどういう方ですか？」ロツテが無邪気な顔をしてきいた。

「あたしの幼馴染みよ」ネイリンは笑顔ですぐに答えた。拒むのは癪だ、と反射的に思ったのだ。カウンターに、笑顔のまま訊いた。

「あたしも気になることがあるんだけど。盗もうとすると死んじやう『あれ』ってなに？」

「ああ、『再命の石』のことね」ロツテはこともなげにいう。ネイ

リンとの会話を、楽しんでるように見えた。精神年齢は高そうだった。「あれはね、」

「おい、ロッテ。あれのことは口にするんじゃない」あわてた様子でジーナスがいう。

先ほど自分の父親に対しては「あれ」のことを自分から言い出したジーナスだったが、事細かくしゃべることには抵抗があるようだった。もしかしたら、あのときの言葉は父親に対するちょっとした反発だったのかもしれないな、とネイリンは思った。

ならばロッテが『石』のことをあつさり口にしたのも、ネイリンに対する意地などではなく、ジーナスを困らせたいからではないか、とも思える。

ならば二人は、似ていないようで似ているのかもしれない。

「あら、どうして、お父様。べつにいいじゃありませんか。だってあんなもの、どうせあるわけがないんですもの」ロッテは目を細め、裾でほとんど隠れた両の手を口元に当てた。「そうおっしゃったのは、お父様でしょ」

「そうだが……」ジーナスは、どうやら彼女が苦手らしい。ロッテがきてからというものの、先ほどもまでまとっていた傲岸不遜な態度が霧散していた。常に腰が引けている。彼は、しどろもどろになりながらつづけた。「しかしあの石は、いや、あの石にまつわる話は、この家に代々伝わるものだ。たとえ嘘でも、伝えてきたことは本当なんだから、部外者にペラペラとはなすことでもないだろう」

「石ではなく、逸話を内密に伝えること自体に価値がある。そういうことですよ？」

「……そういうことだ」しばらく考えてから、ジーナスはうなづいた。

「そうですわね。先祖の方々が大事に伝えてきたことですものね」ネイリンに向けて、すまなそうな顔をしてみせる。「そういうわけですのでネイリンさん。石のことについては、聞かなかったことにして下さいますか？」

「ええ、もちろん」そうとしかいえない。「立ち入ったことを訊いてしまつて、すいませんでした」

「いいんですのよ、そんなこと」

ジーナスにいったつもりだったのだが、ロツテが応えた。これでは、ネイリンがロツテに敬語で謝ったかたちになってしまう。いや、

——きつとわざとだ。

ネイリンはロツテを見て、微笑んだ。

第一章 3

しばらくして、ネイリンたちがスープを飲み終えるころになって、カーテが二階から下りてきた。

「お部屋のご用意が済みました。もしよろしければ、ご案内しようかと思いますが」カーテの口ぶりは、ジーナスたちがいるからだろう、他人行儀なものに戻っていた。

「えっと、じゃあ……」ネイリンは、プライの顔を見た。「お願いしてもいいですか？ プライを寝かせてあげたいし」

「ええ、そうですね。ベッドに寝かせてあげたほうが、気持ちいいでしょう。では」

ラパルクがプライの膝と首の下に手を入れ、抱きかかえる。ネイリンも立ち上がる。ロッテも立ち上がった。

「わたくしも一緒に行くわ」ジーナスを顧みる。「お父様も一緒にまいりましょう」

「おれはいいよ」手を顔の横で一度振った。「子供たちだけのほうが面白いだろう」

ということで、ジーナスをのぞいた五人で階段を上った。

「二階はね、お客様専用のスペースなんですの。今は誰もお客様がないから、きつと落ち着きますわよ」上りながらロッテがいう。

「じゃあ、」とラパルクが口を開いて、しばらく口ごもってからつぶけた。「……お嬢さんは二階でなにをしていたのかな？」

ラパルクがロッテのことをお嬢さんと呼んだのを聞いて、ネイリンは吹き出しそうになった。

「中庭を眺めていました。お祖父様が手入れをしているのですが、とても素敵で。暇があればわたくし、いつも二階から眺めるんですの」

階段を上りきり、大広間をなんとなく見下ろしながら通路を渡る。行き止まりが、壁にやはり穴が開いていて、その先は右に折れてい

るが、曲がる直前の左手の壁に、立派な扉があった。表面がでこぼこしていて、一見して手が入っているのが分かった。先導するカーテはその扉は無視して角を曲がった。後について曲がってみると、廊下がまっすぐにつづいていた。ドアが右手側のみにあり、数えてみると七つあった。

「手前から物置。そして洗面所。ここには浴室もついています。その先がすべて客間となっております。手前から三部屋、ご用意しました……」

カーテは曲がり角にあった部屋には触れなかった。ネイリンも特に気にならなかったので、わざわざ訊くようなことはしなかった。「ありがとうございます。ではプライを手前の部屋に……」

右側に並ぶ扉は、どれもシンプルなものだった。手前から三番目の部屋に、四人でぞろぞろと入った。ベッド、クローゼット、ナイトテーブル、書き物机、ソファにテーブルがあった。広い。ネイリンの家の居間ぐらいの広さがあった。

まずプライをベッドに寝かせた。彼はそうされる間、たぶん一度も起きなかった。葉が効いているのか、そう苦しそうな様子もなくぐっすりと寝ている。

ベッドの横のナイトテーブルの上には、水差しが置いてあった。カーテの用意は行き届いていた。

「お荷物の整理に、よければクローゼットもお使いください」

「でもカーテ。見たところ、そんなにお荷物はお持ちじゃないようだから、クローゼットを使うと、かえって面倒くさいことになってしまいますわ」

「でも、お客様がまいったときはいつも、そうされますように、と進めるようにと申し付けられて……」

カーテのもってまわったいいまわしを、ロッテはじゃまくさそうにさえぎった。

「ここでおはなししていたら、プライさんがゆっくり眠れないかもしれませんか、隣の部屋に移動しましょ。隣の部屋は、ネイリン

さんがよろしいですわね」

そういつて、ロツテは率先して部屋を出た。ネイリンたちもぞろぞろと部屋を出る。隣の部屋の前でロツテがいう。

「カーテはもういいわ。そろそろお食事の用意をしなくてはならない時間でしょ。あとはわたくしが説明するから、カーテはリールを手伝ってあげて」

「はい。では、お食事の用意が整いましたら、お知らせにまいります」

そうカーテは、ネイリンに向けていった。しかしネイリンは、とりあえず荷を解いたら、下の雑用を手伝いに行こうと思っていたので、とっさに首を振った。

「いえ。着替えたら、下にお手伝いしにいきます」

「だめよ。そんなの」ロツテが断固とした口調でいう。「お客様がお手伝いなんて、きいたこともないわ。ネイリンさんたちは、お疲れになっているお客様なんですから、ゆっくりなさらずにちや」

ロツテがネイリンの手を取って、部屋に入ろうとする。意外と子供っぽいしぐさをするな、とネイリンは意外に思った。

ロツテには見えないように、カーテがネイリンに向けて肩をすくめて見せる。子供でしょ？　といっているように見えたが、ネイリンは素直にうなづけなかった。ラパルクは、じゃあ、おれは隣の部屋に行くよ、と一緒に部屋に入ってこなかった。

部屋に引つ張り込まれ、ネイリンはロツテと二人きりになった。

ネイリンは、なんとなく身構えた。二人つきりになったとたん、ロツテの人格が大きく変わるのではないか、との予感が芽生えたのだ。

ロツテには、人に見せない底があるのではないか。そしてその底を、ネイリンだけには見せるのではないか、という気がした。

だが、ロツテの人格も言葉遣いも一切変わらなかった。彼女は小走りで窓辺に寄った。爪先立ちで下を覗き込む。

「ネイリンさん、窓から中庭が見えるんですの。わたくし、この部

屋から見える景色が一番好き。だからこの部屋を、ネイリンさんにおすすめしたんですのよ。——だって、」といって、いたずらっぽい笑みで振り返る。「あのラパルクさんて方、あまりお庭のよさとか、お分かりになりそうになかったんですもの」

「そうね」ネイリンは笑顔をつくる。「ラパルクには、きっと分からないわ」

ネイリンはそういつて窓辺に寄った。ロッテの横で中庭を覗き込む。真ん中に噴水があつて、両端に花壇があり、石が埋め込まれた通路が左右対称にあり、それらを取り囲むように、木が規則的に植えられていた。

「素敵——」正直、よさが分からなかった。「これ……おじいさんが作ったの？」

「お祖父様もお年ですからですから、力仕事は使用人にやらせますが、でもデザインしたり、仕上げをなさるのはお祖父様なの」そういつてロッテは、笑顔でネイリンを見上げた。「ねえ、ネイリンさん。わたくし、ネイリンさんとお友達になりたいわ」唐突に彼女はいつた。「だって、わたくしが会う人って大人ばかりだから、お友達にはなれませんし」少し悲しそうな顔をする。「子供のお友達もいるけど、みなさん遠くに住まわれて、なかなかお会いすることもないませんし……」

ロッテの可憐なたたずまいに、ネイリンは動揺した。

彼女のさびしそうな様子に胸を打たれた、ということもある。子供といつていいロッテを、頭がいいはずの彼女は底を隠し持っているに違いない、と邪知した自分を恥じたというのもある。だがそれらと同時に、この表情さえも作れるほどの器なのではないか、という気もしたのだ。

もし、そうだったら。もし、この表情を意識的に作ったのだとしたら。

ネイリンは、プライの頭がいいことを知っている。プライをもし敵にまわすことがあったら、絶対に勝てないことを知っている。そ

ういった子供がいることを知っている。

プライは優しい、いい子だ。

ロツテは……。

「あたしもよ」ネイリンは笑顔でいう。緊張は伝わってはいないだろうか、という不安で胸がいっぱいだった。「あたしも、あなたとお友達になりたいわ」

「よかったあ」ロツテは胸の前で手を合わせる。「じゃあ、これからはロツテって呼んでね。わたくしも、ネイリンって呼ばせてもらうわ」

「うん」

とはうなづいたものの、ネイリンは客、それも招かれざる客だ。おじやました家のご息女を、少なくとも第三者がいるところでは、呼び捨てにはできない。しかしロツテは、ネイリンとお友達になったの、という一言で呼び捨てにしつつけられる。

「よろしくね、ネイリン」ロツテは笑顔でいう。

「よろしく。うん」

第一章 4

4

プライが心配だったので、着替えを終えてから、彼の部屋にロッテとともに移動した。

プライはさほど苦しそうな様子もなく、すやすやと寝ていた。最初は静かにはなそうとしていた二人だったが、この分では、大声でもださないかぎり、彼は起きないだろう。プライの布団を直してやってから、先にソファに座っていたロッテの向かいにネイリンは腰を下ろした。

そのとき、控えめなノックがした。

「はい」やれやれ、そう思いながら立ち上がり扉を開けた。

「おう。お色直しか？」

「なんだ、ラパルクか」

彼は着替えていなかった。彼の着ていた服はデザインも簡素なものだったし、面積も小さかったから、もう乾いているようだった。

「入る？」

おう、といって中に入ってきた。書き物机の前にある椅子を引っ張り出し、それに逆向きに座った。斜めに座るロッテはソファに深く腰かけている。そのため足が床についていなかったが、それを楽しむようにぶらぶらさせている。

「お嬢さんはいいのかい？　こんなところにいて」

ラパルクが、なんとなくはなしにくそうにいう。ネイリンも座る。

「ここにいないければ、お勉強をしなくてはいけなくなりますから」

「お勉強、大変なの？」　ネイリンが何気なく訊く。

「ええ。ほとんど一日中していますわ」　ロッテが、ぶらぶらさせている足を見る。

「一日中？」　一日中、ほぼ勉強しなかったネイリンからすると、ま

さか、としか思えない。

「うちは伝統的にそうなんです」ロツテは、一瞬大人な顔をする。

「この土地を統治するものとして最低限覚えなくてはいけないことが山ほどある。それがお祖父様の口癖ですの……」

やはりガードナー家は地主らしい。それも、ロツテの口ぶりから判断するに、今まで持っていた漠然とした印象よりも、土地の規模は大きそうだった。

——そんな家に生まれたら、一日中勉強させられるっていうこともあるのかな。

勉強嫌いのネイリンは、身震いした。小さな雑貨屋の娘に生まれただ自らの境遇に、はじめて感謝した。

「ですから、お父様も、それから伯父様も、小さなころはお勉強ばかりしていたそうなんですの。今のお父様の様子を見ていても、そうは見えませんかでしょうけど」ロツテは屈託のない表情でいう。「でも、子供のころは、勉強漬けだったらしいですわ」

「適当にやればいいんじゃないか？ そんな勉強ばかりやってたら、逆に頭が悪くなるぞ」ラパルクが、絶対違うようなことをいった。

「サボることはできませんの。一階のわたくしたちの部屋は、廊下から中が見えるようになっていきますから」

「中が？」ラパルクが驚いた顔をする。「それは、ちゃんと勉強しているか、監視するための窓があるってことなのかい？」

「ええ」

「何もそこまでしなくても……」それはやりすぎなんじゃないか、という気がする。「学ばなくちゃいけないことって、そんなにあるものなの？」

「いえ。家督を継ぐものとして覚えなくちゃいけないことなど、そうはありませんわ。わたくしたちが学ばされるのは、知識全般ですの」

「おれなんかだと、縁がなさすぎてよく分からなえけど、そういう

のを帝王学っていうのかな？」ラパルクが、誰にともなくいう。

「そういうことではないんですの。この家で学ぶことにはべつの意味があって……」

「べつの……？」

「ええ」ロツテは、不意に窓の外に目をやる。「石を継ぐためには、智がないといけない、ということになっていきますから……」

「石？」ネイリンとラパルクが異口同音にいった。

また石だ。この家では石が物事を中心になっているようだった。先ほどは石のことはいえない、いうべきでない、という話になっていたが、ジーナスのいない今は、石の話が聞けるのだろうか。ロツテの最前からの様子だと、彼女は石のことについて、そう秘密にしたがっている様子ではなかったが……。

といって、あまり興味をむきだしにすると、さすがに警戒されて口を閉ざされる可能性があるから、それとなくネイリンは訊いた。

「石って、さっきいった『再命の石』のこと？」

「ええ。石を継ぐためには、智がないといけないといわれています。ただ、その『智』というものが、具体的になにを指しているのかが分かりませんので、とにかく知識を……と」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。なんだか話がよく分からねえな。」

さっきは、統治者として勉強が必要とかいってなかったか？」

確かに先ほど、それがお祖父様の口癖だ、といっていた。

「それは表向きの理由なんですの。子供に勉強させる本当の理由は、石を継ぐものを育てるためなのです。ただ、石を継ぐものが、結果的に家督も継ぐことになるので、表向きだけでもいえないのですが……」

ロツテの言葉から、石を守るということが、このガードナー家にとって重要な意味を持っていることが分かった。だが——その前に「えっと、そもそも石っていうのはなんなの？」ネイリンは、わざとらしくならないように手を口に当てる。「あ、ごめん。こんなこと訊いちゃっていいのかな？」

「石のこと？」ロッテはころとした表情で笑う。「ええ。何も問題はありせんわ。お父様たちは、外の人たちには隠したいようですけど、そもそも知っているのはわたくしただけではありませんせんしね」

そうだ。ネイリンは酒場でも石の話を聞いている。情報が漏れていることは事実だ。

「気になるのでしょうか？ 最初からおはなしでしょうか？」

ロッテがネイリンの顔を、澄んだ瞳で見る。その瞳は、何でもお見通しだといっているように感じて、ネイリンはそつと息を呑んだ。そしてうなづく。

「再命の石というのは、伝わっている話では、わたくしたちの先祖が、伝説の勇者から直接いただいたものだ、ということになっていきます。そしてその石を持っているものは、一度死んでも生き返る――と」

「え？」 ともラパルクと異口同音にいった。

とても信じられない話だった。伝説の勇者から直接ものをもらっている、ということがまず信じられないが、百歩譲ってそれを認めるとしても、その石を持っているものは生き返る、などという話は到底信じられない。

「その話、本当なの？」 ネイリンは、思わず訊いた。

「わたくしは信じておりません。ただ、お祖父様は、その話のすべてを信じておられるようですわ」

ネイリンは、大広間でのやり取りを思い出した。ジーナスが石の話を持ち出ただけで、ずいぶん興奮していたから、おそらくロッテのいうとおり信じているのだろう。

「お祖父様だけではありません。お祖父様のお父様も、そのお父様も、ご先祖の方々はみんな信じておられたようですわ」

ネイリンは、不思議に思う。そんな話を、ふつう信じるものだろうか。いや、ふつうは信じない。だが、信じていたとするなら――根拠、つまり石そのものが、

——あるってことか。

「ロツテ。その石って、本当にあるの？」

勇者からもらった石など、あるとは思えない。石を持っているだけで生き返るなんてありえない。だが『そういわれている石』なら、あってもおかしくない。

「その石は、鏡の中にある、といわれています。でも、」

——そんなの、ばかれていますでしょ？

そういつてロツテは立ち上がった。そのまま窓辺に向かう。

『そいつは、鏡の中に隠されてるって話だぜ』

酒場で聞いた噂話がよみがえる。

そうだった。その話はきいていたんだった。

でも——そんなこと、あるわけがない。

「鏡の中って、どういう意味だ？　なんかの比喻かい？」ラパルクが訊く。

「いえ、文字通りの意味です」

ラパルクは、ぼかんとした顔をしている。ありえない話を重ねられて、どう考えていいのかわからないのだろう。

「その鏡は、どこにあるの？　あ、いや、べつに盗もうとか考えているわけじゃないのよ」

「ネイリンを疑ってなんかいませんわ。わたくしは、お友達を疑うようなことはいたしません」ロツテは窓枠に腰かけながら微笑んだ。「その鏡は、二階の廊下の手前端的の部屋にあります」

曲がり角にあった、表面がでこぼこしていた扉の部屋だ。その扉だけ手が込んでいると思ったら、やはり特別な部屋だったのだ。

——夜中に忍び込んだじゃおうかな。

「入れませんけどね。鍵がかかっています、その鍵は一階の大広間のケースにしまわれていますの」

——夜中にそれ、盗んじゃ

「そのケースも開けることはできませんの。鍵がかかっています。その鍵を持っているのはお祖父様だけですの」

——あのじいさんしか入ることはできないのか。

「ですから、あの部屋、お祖父様がじきじきにお掃除なさるのよ」
ロッテはおかしそうに笑った。

「てことは、その鏡はあのじいさ、あ、いや、おじいさましか見たことないってわけか」ラパルクが考えながらいう。「で、じい、おじいさまはどういってるんだい？　鏡の中に石はあったっていつてるのかい？」

鏡の中にあるとはどういうことだろう——とネイリンは、あらためて考えた。

鏡の中にあるってことは、鏡の中に見えるが、鏡の外にはないということか？

あらためて考えてみて、やはりそんなことはありえないと思った。「お祖父様はなにもおっしゃってはいません。鏡の中にある、とは鍵の入ったケースに書かれているのですが、その言葉をなぞるだけです」でも——とロッテはおかしそうに笑った。「鏡の中に石なんてございませんでしたわ」

「え、どうしていいきれるの？」ネイリンもそうは思うが、ロッテの口ぶりは、まるで見てきたように聞こえた。

「わたくし、あの部屋に入ったことがございますから。まだ二才ぐらいのときですが、はっきりと覚えています。鏡の中に、石なんてございませんでしたわ」

「あ、部屋に入ったことあるんだ」ちよつと驚いた。

「ええ。本当は、鍵を託されていない人間は入ってはいけないことになっているのですが、まだ言葉もはなせないころでしたので、お祖父様も油断なさったのでしょう。でもわたくし、はっきりと覚えていますの」ロッテは当たり前のようにいった。

二才のころの記憶なんて、覚えていられるものだろうか。ネイリンには無理だ。だがプライなら覚えているだろう。この娘——も、きっと覚えているのだらうな。ネイリンはそう思った。

ロッテはつづけた。

「なにもない部屋でした。文字盤が反転した時計と、その真向かいに大きな鏡が置いてあるだけ。鏡にも、その時計が映っているだけでしたわ」

やはり鏡の中に石などはないのか。そう思うと同時に、引っかかることがあった。

――反転した時計。

それに、なにか意味があるような気がしたのだが、ロッテが話をつづけたので、そちらに意識がいき、疑問が霧消した。

「お祖父様は、それは丁寧に鏡をお磨きになっていましたわ」ロッテは眉根を寄せる。「かわいそうなお祖父様。鏡の中に石があると本気で信じてらっしゃるんだわ。きっと、小さなころから、そう聞かされつづけたせいね」

――洗脳されたということか。

しかし、鏡の中に石が隠されているなんて、そんなこと、いくらいわれつづけたとしても、信じるものだろうか。よしんば信じていたとしても、鍵を継ぎ、あの部屋に入り、石なんて映っていない鏡を見た段階で、やはり石はなかったのか、と思いきや、そうなのだが。

あのおじいさんが鍵を継いだころ、おそらく息子たちは大変な勉強中で、もう今さら石はなかった、なんていえるような状況ではなく、それを隠すために信じている振りをした、ということか。いや、それなら、あの部屋の外だけで、そういった素振りをしていればいいことだ。自分がただの赤ん坊だと思っているロッテの前で、わざわざ鏡を磨くといった、鏡を尊重するような行為をしてみせる必要はない。

鏡に映っている、つまり表面にある必要はない。鏡の中の世界に、石は安置されているのだ――おじいさんは、そう思っているのだろうか。

「まあ、おじいさまは信じてるとして、ほかの人はどういったらいい？」ラパルクがいった。「お嬢さんのおやじさんや、あとはおじさんかい？ その人たちは……」

彼らは、代々継がなくてはいけない石、というものがあるのを前提に、少なくとも子供時代をすごしている。心境として、今さら疑えないものなのか。先ほどのジーナスの反応は疑っているように見えた。だが、穿ってみれば信じているようにも見えるのか……。

「伯父様は信じていると公言されています。でも、どこまで本心なのか……」ロツテは、顔の端に、ほんの少しだけ嫌悪感を見せた。「欲深い方ですから。信じている、といっておいたほうが有利だ、とお考えになっているのかもしれませんが」

そうだった。この家では、石を継ぐものとしてふさわしい、と判定されたものが、家督も継ぐんだった。だから逆にいうなら、家督が欲しい場合、まずは石を継ぐものとしてふさわしい、と判定されなくてはいけない、ということになる。石を信じない、などといった日には、その時点で、同時に家督を継ぐ権利も失うことになるのだろう。

まあ、おじさんのスタンスは、一般的な大人として妥当なことだろう。

「お父さんはどういってるの？」ネイリンは訊いた。

「お父様は、信じていない、と常日頃からいっています。それはつまり、家督への興味もない、ということですが――負け惜しみでしようね」

「負け惜しみって……」

「ガードナー家の所有する土地の管理は、すでに伯父様が任されておりませぬ。お父様の出る幕などございませぬわ」

ロツテの口ぶりは、親のことになっても冷静で客観的だった。

「てことは、おじさんが鍵を受け継ぐことになるのか？」ラパルクがいう。少し、納得のいっていない表情だった。おじさんに会ったことがないのに、なぜそんな表情になるのかが分からない。

「そうなるのでしょうかね」

「でも、お嬢さんのおじさんは欲深いんだろ？」ラパルクがいう。「鍵を託す人間の条件に智を挙げてるってのは、要は石をつかって

しまわないだけの自制心を求めてるってことだと思っただが……」

ああ、そうか。ラパルクが、会ったこともないおじさんが鍵を受け継ぐことに違和感を覚えた理由が分かった。

石がもし本当にあるのなら、鍵を手にしたものはそれをつかってしまっただろう。なにせ、もう一度生まれてくることができる、などという品物なのだ。だからこそ、それを隠した鏡の部屋の鍵を継ぐものの条件として、それをつかわないだけの自制心、つまり智を挙げているわけだ。だが——とネイリンは思った。

だが、つかってはいけないということは、このガードナー家が石を継ぐ目的は、自分たちで、いずれそれをつかおうというのではなく、保存するのが目的ということか。

——なんのために？

「お決めになるのは、お祖父様ですから」 ロッテの口ぶりは、おじさんの知性のことを避けたものののように感じた。

しかし、おじさんが継いでしまったら、石をつかってしまわないだろうか。

——いや、それは石があることを前提にした心配か。そもそも、持っているだけで生き返る石なんてあるわけがないのだし……。だが、この家のシステムは、石があることを前提に組まれている。奇跡的な効果を持つ石も不自然な存在だが、そんな石がなかった場合は、今度はこの家のシステムに不自然さを感じる。

……思考が堂々巡りにはまりそうな気がする。

ここは、考えをシンプルにする必要があるのかもしれない。

石があることを前提に存在しているここガードナー家を理解するためには、持っているだけで生き返る（といわれている）石があることを前提に思考を、話を進めた方がいいのかもしれない。

ネイリンは考えながら、先ほどの疑問を口にした。

「ねえ、ロッテ。そもそも、ガードナー家が石を大事にする理由ってなんなの？ 自分たちでつかう気もないみたいだし……」

伝説の勇者から譲り受けたという石に、金銭的な価値を見出して

いる、ということなのだろうか。いずれ一族が金銭的危機に陥ったときに、それを切り札にしようと――いや、石はあの部屋になかったんだよなあ。……あの部屋は陽動作戦で、べつの場所に隠している、ということもあるのか？

そんなことを、瞬時に考えていたネイリンだったが、ロッテの口から出てきた言葉は、そんな世俗的なものではなかった。

――鍵は智の血を継ぐ者に託すべし。鏡中の宝は時満ちしころ現る扉を開けし真の智者に託すべし。邪な心が欲するとその命はない。

突然の文語体に、すうっと現実が遠のくような感覚に見舞われた。「あの部屋の鍵がしまわれているケースに書かれた文句です」ロッテは一瞬微笑を見せ、首をすくめる。「わたくしたち一族は、この言葉に囚われているのです」

現実から遠のいたネイリンの頭に、ケースに書かれているという言葉が染み入るように入り、なんとなく納得してしまった。

鏡の中の石。そしてそれを受け取りに、真の智者が現れる。

――そんなこともあるのかな。

そう思った。だが、

「へんだぞ、それ」ラパルクの調子の外れた声で、目が覚めたように思考が現実に戻った。「だってよう、もし鏡から石を取り出せる真の智者とやらが現れたとしても、嚴重に扉を閉めてたら、そもそも部屋に入れないじゃないか」

ロッテが呆れた顔を見せる。ラパルクは、なにを聞いていたんだろう。ネイリンも、彼の間違いに思わず笑った。にぎりかけた頭がすっきりとする。

「違うわよ、ラパルク。鏡から取り出せるのが真の智者だ、なんていってないじゃない。その扉を開けられるものが真の智者だといったのよ」いいながら、しかしその内容に違和感を覚えた。

「はい。ネイリンさんのいわれるとおりですわ。ガードナー家は、

あの扉を開けられる真の智者が現れるまで鏡の中の再命の石を守ることが使命と考えているんですの」

「うん？　頭がこんがらがってきた。なんか変な気がするんだけど……」ラパルクが頭をかきむしる。

ラパルクは混乱しているようだ。気持ちは分からないでもない。ネイリンも混乱しかけている。だが不思議なもので、彼が取り乱せば乱すほど、同時に冷静になっていく。

透き通る思考の中、先ほどの言葉が文字になって見え、そして思った。

この文言は――納得できるものではない。新たな疑問を呼び起す。

まだ理屈のない、感覚的な予想だった。その予想を当てにして、話を整理する必要がある。ネイリンは目を閉じ、集中した。

まず、鍵がしまわれているというケースに書かれている言葉は、『扉を開けたものを真の智者とする』とっているが、そもそもあの扉は、完全には封印されてはいない。当主が鍵を持っているのである。扉を開けたものに石を譲るというのなら、鍵を奪えということか？　いや、邪な考えを持つては、その人間は死ぬといっているのだ、それは違うだろう。

当主が、真の智者と判定したものに鍵を渡す、ということか？　扉を開けしものに、という文言から、それも違うと思う。

だいたい、その真の智者が現れたとして、そして石が本当にあるとして、どうやって鏡から取り出すのか。扉を開けることなのかよりも、その方がよっぽど難しく、ならば真の智者と判定する、よりよい判定基準になるのではないか？

そもそも、だれが石を鏡に入れたかという問題もある。勇者なら、石を鏡に入れるなんて芸当も、もしかしたらできるのかもしれない。だが、鏡に入れた常態で渡すだろうか。そんなわけではないと思う。だったら、それを入れたのは、ふつうの人間なのではないか？

しかし、ふつうの人間にはそんなことはできないのだから、つま

り石は（仮にあったとしても）少なくとも鏡の中にはない、ということにはならないか？

最初、疑問は『持っているだけで生き返る石などあるのか』という、いつてみればシンプルなものだった。だが、この家に伝わるという文言を聞いて、より疑問が具体的に、そして数が増えた気がする。

順番にロッテに聞いていかなくては。

ここまでできたら、ロッテが持っている情報ぐらひは、最低でもほしい。べつに本気で盗もうなんて考えていたわけではないし、ならば知ってどうするのか、という気もするが、しかし、このままでは気になって眠れない。そういう性格なのだ。

「ねえ、ロッテ。扉を開けたものを真の智者とするってどういうことかしら？ 扉を開けたものを智者とするより、鏡から石を取り出したものを智者とする、とした方が、まだ納得いくんだけど」

「それは、おれがさっきいったことじゃないか」ラパルクが無然とした表情でいう。

「あんたはただ間違えただけじゃない」とはいいつつも、彼の勘違いも、同じ違和感がもたらしたものだったのかもしれないな、と思った。

「わたくしにいわれても困りますわ。わたくしは、石はないと考えているのですから」

そうだった。これは、彼女に聞いてもしょうがないのか。

「だけど、おじいさんは少なくとも信じているわけだろ？ おじいさんは、その言葉をどう理解してるんだ？」

「さあ？」ロッテはかわいらしく小首をかしげる。「ただ、勇者は無から生まれ出でた、といわれております。ならば、真の智者も、鍵のかけられた扉を越え、密室状態の室内に忽然と現れるはずだとそう考えているのかもしれませんが」

なるほど。誰も入れない空間にするのは、それでも入れる人物を判定するため、という理屈か。

「鍵のかけられた部屋に入ることができるぐらいの人間なら、鏡から石を取り出すこともできるだろうと、そうおじいさんは考えている、ということなのかなあ」

「そう、なのかもしれません。そこまではなしたわけではないですから、正確なことまでは分かりませんが」

「あの部屋とか鏡って、ミスリードするためのもの、っていうことはないのかしら？」

そちらに目を向かわせれば、再命の石かどうかはわからないが、何らかの宝を隠しやすいということはあるのかもしれない。

「でも、この家では、あの部屋が一番嚴重ですよ」ロッテが立ち上がり、こちらに戻ってきた。イスに座る。「もしわたくしが、なにかを守るとしたら、鏡の中には入れられなくても、あの部屋にしまうと思います」

——鍵を託されたものしか、絶対に入ることができない部屋ですから。

なにかがあるとしたら、ロッテのいうようにあの部屋なのか。だが、あの部屋にはなにもなかったとロッテはいつていた。それは、宝などないということを示しているのか、それとも宝——つまり石は、本当に鏡の中に入っているということか。

最初は再命の石なんてどうせないだろう、ましてや鏡の中になんて、と九割方思っていた。しかし石がないなら、ここまで石があるかのような体勢はとらないだろう、という気がだんだんしてきた。

——だいたい、その方が圧倒的に楽しいし。

理屈抜きで、まず信じちゃおうかな。そんな風にネイリンが考え始めたときだった。ラパルクが口を開いた。

「考えたんだけどよう、やっぱりこの家の大目標は、家の規模を小さくしないことなんじゃないか？」ラパルクがいった。さっぱりしているような、うんざりしているような、そんな不思議な表情だった。「それが一番自然だろ、資産家として」

「そうかもしれないけど……」半ば信じかけていた奇跡の石の話か

ら、急に世俗的な話になり、ちょっとついていけなかった。あわてて、ラパルクの顔にピントを合わせる。

「家を小さくしないためには、優秀なものに継がせるのが一番だ。だが、子供はなかなか勉強しない。だからモチベーションをあげるために、『この家には宝がある、優秀じゃなければそれは託せない』と子供が好きそうな話をでっち上げた。単純に、そういうことなんじゃないか？」ラパルクが、話をまとめようとしているような口調でいった。

つまり、今まで長いことはなしてきたが、そもそも石なんてなくあるのは現実的な大人の計算だけ。ラパルクはそう結論づけたらしい。

石の疑問に対する答えがそれなら拍子抜けだ。だが冷静に考えれば、一番納得できる話なのかもしれない。つまらないけど。それが、ラパルクの口から発せられたものであることが、ますますつまらないけど。

「ロツテはどう思う？」

「わたくしも、そうなのだと思います」ロツテが、また足をぶらぶらさせながらいった。「石がないことを前提に考えると、そう考えるのが一番自然なことだと思いますし。ただ、」ふとロツテは空を見た。「お祖父様は、それは大事そうに鏡を磨いていたのですよね。……かわいそうなお祖父様」

そうなのだ、この主は、心から信じているようなのだ。

ロツテは先ほど、それを洗脳のせいだといっていた。

だが今となると、本当にそうなのだろうか、と思う気持ちもある。もし先ほどラパルクがいったような事情なら、先代から鍵を受け継いだ段階で聞いているはずなのだ。聞いていなくとも、なにもない部屋を見てそれでも信じるというのは……。

持っているだけで生き返ることができる石なんてあるはずがない。それはそう思う。しかしそれをいうなら、あたしたちが信じている伝説の勇者だって、無から現れるなんて超自然的なことをやっている

て、それをみんな信じている。石はほかでもない、その超自然的な力がつかえる存在から与えられたといわれているのだ。なのに、なぜ石だけはあるはずがないといえるのか。

石の存在を信じたり疑ったり、振り子のように気分が揺れる。

石は――。

そのとき、扉を叩く音がした。

第一章 5

5

ネイリンが一番入り口近くに座っていたので、彼女が扉を開けた。立っていたのは、見たことのない男だった。白いものが混じりはじめた髪や、顔の皺などから、ロッテの父、ジーナスよりも年は上のようだったが、彼の兄、というわけでもなさそうだった。

今は土地の管理を任され、欲深いがしたたか。ロッテのおじさんを、そんなイメージで捉えていたネイリンだったが、目の前の男は、それとは真逆の印象だ。

——いい人そうだけど、なんか頼りないなあ。

ネイリンは、簡潔にそんな印象を持った。

「ごはん」男はいった。表情は、柔和ではあるが豊かではなかった。「カーテに呼んでこいといわれたんだけど」

「分かったわ。ありがとう、イボー」ロッテがそう答えた。

彼はどうやら、この家の使用人のようだった。だから、言伝を伝えたらすぐに戻るかと思ったが、彼は意に反して部屋の中に当然のような足取りで入ってきた。

「なにはなしてた、ロッテ？」そういつて、先ほどまでネイリンが座っていた席に腰を下ろした。

ネイリンは扉の横でたたずんでいた。

——なんなんだろう、この人。

彼女は、なんとなく落ち着かない気分になった。

ネイリンはこの家の客、それも招かれざる客だ。だから、そういった属性に合った言動を心がけてきた。いや、無意識のうちに演じていた。

それは、それが社会の約束だからだ。そして、はしごを上るように、そういった約束事を一つひとつ覚えていくことが大人になると

いうことだ。

少なくともネイリンは、今までそう信じていた。

だが、使用人にしか見えない彼、イボーは、使用人としての言動をしない。いつてみればそれだけのことではあるのだが、しかしそれは、信じていた世界の薄さを感じさせるには十分のことだった。

今まで上っていたはしごを蹴飛ばされたようにも感じて、ネイリンは落ち着かない。

「もし困っている人がいるなら、いつてくれ。力になる」

ネイリンは、イボーの少し汗ばんだうなじの辺りを見ていた。

「ありがとう、イボー。そうね、それでは、新しい花壇の中にあつた石を取り除いてくれるかしら。お祖父様はべつにこのままでいいとおっしゃってたけど、わたくしはないほうがいいと思うの」

「イボーもそう思う」彼は自分のことを名前で呼んだ。ネイリンは背筋に冷たいものが走つたのを感じた。「今からやる。どこに置いたらいい?」

「できるだけ遠く、見えない場所まで捨てに行つて」

「分かった」そういつて立ち上がり振り向いた彼の目の焦点はどこにも合っていないかったが、表情はうれしそうだった。

彼はネイリンを見ることがなく、横を通り過ぎると部屋を出て行った。彼女は扉を閉めてからソファの、先ほどまで座っていたところの隣に座ると、口を開いた。

「ねえ、あの人だれ?」

「イボーです。わたくしが生まれたところから、この家に仕えているんですの」ロツテは少し悲しそうな顔をした。「お感じになったかもしれませんが、イボーは少し知恵に遅れがあります。もしかしたら、失礼と感ずることをしてしまうかもしれません、そういった事情なので多めにみてあげてください」

「ああ……」といったあと、言葉がつづかなかった。

そういった人に会ったことがないわけではない。だが、このようなお金のある家で会うことは想定になかったようだ。動揺している

自分を認識して、そう知った。

「ちょっと冷たいんじゃないか」ラパルクが不満そうにいう。「なんか、一緒にはなしたかったように見えたぞ」

「でもイボーは使用人です。同じ立場に置くことは、イボーのためにもなりませんわ」

そういう彼女の顔は、いかにもご息女、といったものだった。その顔は好きではなかったが、しかし彼女も『ご息女』という役柄を演じているということでは、ネイリンとなんらかわらないし、換言するならネイリンを安心させるものでもあるのだ。

少しだけ、ネイリンは複雑な気持ちになった。

第一章 6

6

ネイリン、ラパルク、ロッテの三人は、食事をするため部屋を出た。プライは寝かせておくことにした。

通路を歩くと、すぐに曲がり角に着いた。そこにある扉。

「ここか、鏡が封印されてるって部屋は」ラパルクがいった。「なんだか、変な扉だな。でこぼこしてる」

さっきここを通ったときには気がつかなかったようだ。

扉の前で三人は、なんとなく立ち止まった。

でこぼこといってもランダムに凹凸があるわけではなく、規則的に凸がある。いや、正確にいうなら、格子状に彫刻等で彫ったような感じで凹んでいる、といった方が正しい。

「これ、向こう側もこういうふうに凹んでるの？」

「ええ。向こう側も同じですわ」

なら厚みもそれなりだ。通り抜けるのは大変そうだな、とネイリンは一瞬思ったが、薄いからといって通り抜けられるわけではないから同じか、と思い直した。

そこにいすわっていてもしょうがないので、誰からともなく歩き出した。

階段を下り、大広間に着いたところでネイリンはいった。

「ロッテ、厨房はどっち？」

「右側の扉を出て、通路左手の奥側の部屋がそうです。でも、」ロッテはネイリンを見上げていう。「ネイリン、先ほどもいいましたが、本当に手伝おうなんて考えなくていいんですよ」

「ありがと」そうしてもらえるのはありがたいが、しかし、子供の言葉を鵜呑みにして顔を出さないわけにはいかないだろう。もともと、肩身の狭い立場なのだ。隙を見て得点を稼いでおくことに越

したことはない。「あたし、けっこう料理とか好きだし、こんなに大きな家の厨房ってどんなのかなあっていう興味もあるしね……」
いいながら、しかしネイリンの目はあるものに吸い寄せられた。「
ねえ、あれって……」

玄関から見て右手側の壁に扉が二つある。右側が厨房に通じているそうだから、左のものは食堂に通じているのだと思う。

その間にあるケース。

ここに来たときは、なんとも思わなかった。だが今は違う。

——あれが鍵を封印したケースか。

「見てもいいのかな？」

ネイリンがいうと、ロッテは笑顔で答えた。

「かまいませんが、わたくし以外の人がいるところでは、あまり見ないほうがいいですわ。ネイリンさんたちは、鏡や鍵のことについては、何も知らないことになっているのですから」

そうだった。何も知らないということになっているし、そもそも、主には石絡みのことに興味を持たないという約束までしていたのだ。

——まあ見るけどね。

ネイリンは小走りで近づくと、ケースを覗き込んだ。

あの扉とは違って、遠目には一見、ふつうの茶箆笥のように見えた。だが、よくよく見ると、風変わりな特徴がいくつか見て取れた。

まず、前面はガラス張りなのだが、取っ手の付近には頑丈そうな鍵がつけられている。なんら隠す気のないそのデザインに違和感を覚える。ふつう、こういったものは、もう少し控えめに、目立たないように配置すると思う。盗む気を起こさせないための工夫だろうか。

次に目がいくのは、やはり収納されている鍵だろう。ネイリンの背丈ほどもある大きなケースなのだが、中にあるのは、その小さな鍵一つだけだった。それが、真ん中の棚の上にぽんと置かれている。空間の余白の大きさと対比によって、ただでさえ小さな鍵が相対的により小さく見える。

そしてその鍵は、二つ見えた。

鍵が二つあったわけではない。向こう側の面が、一面鏡張りだったのだ。そこに映った鍵にも目がいく。

石は鏡の中にあると言い伝えられている。その鏡が置かれている部屋は閉ざされている。その扉を開ける鍵は……もしかしたら、鏡に映ったほうの鍵ではないのだろうか。

ふと、そんなふうに思った。

「そういえばよう、鍵が入ってるケースにあの言葉が書かれてるんじゃないかったか？」

ラパルクの言葉に、ロッテはうなづいた。

「はい。ケースの横に」といって、ロッテは向かって右側面を指差した。

ネイリンとラパルクは、ケースの横に回りこんだ。側面は板製だった。ガラスはきれいだったが、その板は相当に古びていて、色も相応にくすんでいる。だが、不潔な感じはしなかった。

「ああ、これだな」

ラパルクが顔を近づけた付近にネイリンも注目した。かすれがかった感じで、あの文語体が書かれていた。

内容は、ロッテのいったものと同じだった。

「これよう、嚴重に鍵かけてあるのは分かったが、しかし実物のケースを見るとちょっといいな。ケース自体がもろそうだし、その前にガラスを割れば簡単に鍵が盗めるだろう」いつの間にか正面に戻っていたラパルクがいう。

ネイリンは、古びたケースから、威厳や真実味を感じていたのので、そういった発想がなかった。だが、いわれてみればたしかにそうだった。鍵を盗む気になれば、誰にでもできそうだった。

「盗むことはできないそうです」ロッテがいい切った。「わたくしは、いつからこの鍵やケースがあるのか分かりませんが、でもこれまでにはいろいろあったそうで、何人もの人間が、今ラパルクさんがいわれたようなことを試みたそうです。しかし、誰にも盗めなか

った。それどころか、盗もうとした人間は、ここに書かれているように、お亡くなりになったそうです」

——え、本当に死んじゃうの？

ケースにさわりかけていたネイリンは、あわてて手を引っ込めた。「なんか、呪いがかかってるってことか？」

「というふうにいわれております」 ロッテがうなづく。「だから、だれもケースに触りもしません。呪いについては、わたくしなどは半信半疑、というか、信じていない気持ちの方が多いのですが、それでもやっぱり、気持ちが悪いですからね」

彼女がそういつて眉をしかめたときだった。

馬車か？ と、ふいにラパルクが玄関の方を見ていった。

ネイリンとロッテも振り向く。扉の横にある窓には、雫が這っている。まだ雨は降っているようだった。くるときにみたが、窓の上にはひさしがついていたから、風もでてきている様だった。その雨の中、いわれてみればたしかに馬車の音がした。

「きっとルイーズさんね」 ロッテがいう。

ロッテのいうルイーズさんか分らないが、とにかく馬車の君がつくまでは、なんとなく動けないような雰囲気になった。三人はケースからはなれて、窓から外を見た。

しばらくして、馬車が玄関の前でとまった。

出迎えなくてもいいのだろうか、と一向に動く様子のないロッテを見たときだった。主たちが現れた例の通路から、中年の男が姿を現した。

長身で、それなりに肉はついていそうだったが、それでいながら引き締まった身体を持っていた。頭髪はきれいに後ろに撫でつけられており、ひげが鼻の下とあごに生えていた。

——怖そう……。

それが第一印象だった。

この人がロッテのおじさんだ、そう思ったネイリンはロッテの顔を見ると、彼女もネイリンのいわんとしたことが分かったのか、小

さくうなづいた。

彼はきびきびとした足取りでこちらに近づいてきた。ネイリンは反射的に身を硬くしたが、彼はネイリンたちのことを一瞥しただけで横を通り過ぎると、勢いよく玄関をあけた。

ふっと雨の匂いが、冷たい風とともにネイリンの鼻を刺激した。玄関に姿を現したのは、均整の取れた顔立ちをしている、身なりのいい女性だった。ロッテの、どこか人工的な美しさとは対照的な、自然の花々を連想させるような雰囲気身をまとった女性だった。どうしてかは分からないが、なぜかムカツときた。

この人がルイーズさんとかいう人だろうか。瞬間、この家との関係性が見えなかった。どういう立場の人なのだろう。

玄関に入ってきた女性は、ロッテのおじさんと親しそうに挨拶を交わした。そのときになってやっと、彼女の立場が分かった。

二人が触れ合っていたその間、ネイリンとラパルクは所在なげにたたずんでいた。ロッテも自分からは口を開こうとしなかった。

ネイリンは非常に気詰まりなものを感じたが、この状況では、自分からはなかなか口を開きにくい。誰かに口火を切ってもらいたかった。

しばらくそのまま待っていると、彼女がコートを脱ぎ、それをラパルクに手渡そうとした。顔は笑みをたたえたまま、ロッテの方を向きかけている。

反射的に手を伸ばしかけたラパルクを、ロッテがやんわりと制した。

「おばさま。この方は使用人じゃなくてよ」ロッテの表情は、これまでに見た、どのときよりも純粹無垢なものだった。「ラパルクさんとおっしゃるの。旅をされている方よ」

おばさまと呼ばれた女性は、ロッテのおじさんと目を合わせてから、おかしそうに噴出した。子供だからしかたないわね、といった感じの表情で、大人特有の優位性を意識した、また意識させようとしたものだった。

おじさんの方は、今気がついたとでもいいたげな顔で、ネイリンとラパークを、頭先从足先まで露骨な視線で眺めた。

——なんて感じの悪い二人だ。

そう生理的に感じ、ネイリンは戦闘本能に火がついたのを自覚した。

「まあ、ロッテ。今日はいつにも増してかわいらしいわ。まるでお人形さんみたい」彼女は微笑んだ。悔しいことに、その表情は、今までに見たすべての人の、すべての表情よりも完璧で魅惑的だった。「わたしにも、あなたぐらいのときがあったのよ。そのころに戻りたいわ。でもね、わたしだってまだまだ若いのよ。おばさまなんていわれる年じゃないわ」

怒っているような感じではなかった。実際に若いせいだろう。余裕が感じられる。その余裕をふくんだ笑みが、また見惚れるほどにきれいだった。

「そういう意味ではなかったんです。つい、もう伯父様と結婚されているのかと錯覚してしまって。でも、まだされていないのですから、おばさまなんて呼んでは、失礼に当たりますわよね」ロッテは微笑んだまま、ラパークを手のひらで指し示した。「ラパークさんです。旅をされている方よ」ロッテは、先ほどいったことを、わざわざ繰り返した。

ルイーザの顔が、笑顔のまま凍りつく。

瞬間、時が止まったように感じた。

ルイーザは、ラパークを使用者と勘違いした。そこまではいい。しかし、仮に使用人だったとしても、客が自分からコートを渡すのはマナー違反だろう。ルイーザの身のこなしを見るかぎり、マナー違反などとは縁遠そうな人だった。しかし彼女はそれを犯した。それは、この家の住人と結婚する予定にあるらしい彼女が、もう自分はこの家の住人なのだと認識、誤認していたせいなのだろう。

わざわざ指摘するほどのことではない。あいまいなままにしておけば、ほほえましい間違いですんだのだ。だがロッテはやっぱりと、

しかしルイーザの認識を指摘した。

わざわざ指摘したことで、彼女の立場や認識は浮き彫りになる。それは、この家の経済規模と合わせて考えることで、実際はどうあれ、大人の計算を連想させるものだった。

ロツテの言葉は好意的に聞くと、もう自分はこの家の住人だというルイーザの認識を注意、指摘しただけのものだった。だが、いい方などと合わせて類推するなら、邪知することもできる結婚それ自体への不快感の表明、ともとれるかもしれない。

いや、事実、不快感の表明だったのだろう。それは、ルイーザの表情で分かった。

ロツテはきつとこれまでも、あまり好意的には彼女に接してきていなかったに違いない。その自分の思いを、ネイリンたち第三者の前で、ルイーザに恥をかかせるという形で再表明したのだ。

場の温度が下がり、白けた雰囲気ではじめた。

その理由としては、わざわざ正論をいったロツテの行動もあるが、それを引き起こしたのはルイーザの露見した認識、さらには邪知すれば邪なものすら感じさせる心積もりだ。

おじさんも子供じゃない。ルイーザのそういった心の可能性など百も承知のことなのだろう。その上での結婚のはずだ。だが、第三者からの指摘によって、違った温度でルイーザの感情を測る思考が、瞬間芽生えたかもしれない。つまらなそうな表情に、かすかな疑問の色が、浮かんでいるようにも見える。

使用人として扱われたラパルクは、なにを考えているのか、あるいは何も考えていないのか、無遠慮な目でルイーザを見ていた。

ネイリンは、ロツテの言葉の意図に気づいていない振りをしながら、彼女の意図に沿った形でルイーザを見た。

ほんのわずかな無言の時間だったが、その時間に各々の辿った思考は、ルイーザを、華麗な女性、という立場から引き下ろした。

ルイーザの顔はこわばっていた。

いい気味だった。彼女にいい感情を持っていなかったネイリンは、

一瞬でルイーザをやり込めたロッテの行動に内心喝采をあげていたが、同時に、やはり彼女もプライと同じく、味方にすれば心強いが敵に回すと厄介な相手であることを再確認していた。

「で、その旅人は、誰の許しを得て滞在しているんだ？」

口火を切ったのは、ロッテのおじさんだった。その目は、苛立ちを内包していた。ロッテに対してか、ルイーザに対してかは分からないが、その矛先はネイリンたちに向かっていているようだった。純粹にネイリンたちに苛立っていたのかもしれない。

ネイリンは、殊勝な態度で口を開いた。

「あたしたちは旅をしていたのですが、連れのものが体調をくずし……」

「そんなことは聞いていない。今すぐこの家から出ていけ。話は終わりだ」

ここの家の主に許しを得た。それを順番にはなそうとしたのに、このオヤジときたら……。

ロッテのおじさんに対する不快感がまたぞろ頭をもたげてくる。

あごが前に出てくるのを自覚した。

「伯父様。お祖父様の許可はでていますわ。それに、お連れの方は寝込んでいて、今は上の部屋でおやすみになっています。今さら出ていけなんてあんまりだわ」ロッテは、ネイリンを見上げた。「ネイリン、出ていくことなんてないわ。プライさんがよくなるまで、ずっといてくださいね」

「ロッテ、それはお前が決めることじゃない」おじさんが、抑制の利いたバリトンでいう。「お前は黙っていないさい」

「伯父様こそ、何も分かっていないのに命令しないで」ロッテが強い口調でいった。「最初はお祖父様も反対なさったわ。でも、はなした結果、滞在を許可されたの。それで正式な、この家のお客様のはずだわ。それに、」とロッテはネイリンをちらと見る。「わたくしたち、今までずっとおはなししていたの。もうネイリンもラパルクもお友達よ。伯父様が、この家のお客様としてお二人を向かい入

れるのに反対なさるなら、わたくしが友人として、お二人に滞在をお願いすることにします」ロツテはおじさんを見た。「ここは、わたくしの家でもあります。問題ないですわよね？」

ロツテの言葉に、不覚にもネイリンは、胸を打たれた。

ネイリンとラパルクを、友人として招き入れる、という言葉もうれしかったが、それ以上に、ロツテがふだん置かれている状況が頭に浮かび、切なくなったのだ。

酔っ払いの父、伝説を丸まま信じ込んで疑いもしない祖父、不遜でやさしくない伯父、お金がなかったら伯父を選んでいたか怪しいルイーザ。そんな人々の中に、一人子供としているのはつらく、心細いことなのではないだろうか。

しかもロツテはただの子供じゃない。頭も回るし、状況把握能力も大人なみだ。いや、周りにいる大人たちよりも、ある意味では上なのかもしれない。

なのに子供として扱われる。悔しいこともあるだろう。

最初ネイリンはロツテを、底を隠した恐るべき子供、といった感じで斜に見ていたが、すっかりロツテ最前になつていった。

それは、遅まきながら、彼女を友人として認めた瞬間でもあった。

「ありがとう、ロツテ」ネイリンは思わずいつていた。

いつてから気がついた。このタイミングでこういつては、もうおじさんは、認めないなんてことはいえないだろう。姪っ子に激しくいわれたおじさんから、選択の自由も奪ってしまった格好だ。

客としては――ちと気まずい。

「勝手にしろ」おじさんは、顔の前でじゃまくさそうに右手を振つた。「ただ、うろちよろはするな。目障りだ」

「伯父様！」

おじさんは、ロツテの声を無視して食堂に向かった。あわててルイーザもあとを追う。

ロツテのおかげで滞在できることにはなったが、ロツテのせいで立場がどんどん悪くなっている気もする。

「ありがとう」でも、そう小声でいった。

それは、具体的な何かを指しての礼ではなく、村を出て以来、初めてできた女友達への、ささやかな感情表現だった。

第一章 7

7

ネイリン、ラパルク、ロッテの三人は、食事をするため部屋を出た。プライは寝かせておくことにした。

通路を歩くと、すぐに曲がり角に着いた。そこにある扉。

「ここか、鏡が封印されてるって部屋は」ラパルクがいった。「なんだか、変な扉だな。でこぼこしてる」

さっきここを通ったときには気がつかなかったようだ。

扉の前で三人は、なんとなく立ち止まった。

でこぼこといってもランダムに凹凸があるわけではなく、規則的に凸がある。いや、正確にいうなら、格子状に彫刻等で彫ったような感じで凹んでいる、といった方が正しい。

「これ、向こう側もこういうふうに凹んでるの？」

「ええ。向こう側も同じですわ」

なら厚みもそれなりだ。通り抜けるのは大変そうだな、とネイリンは一瞬思ったが、薄いからといって通り抜けられるわけではないから同じか、と思い直した。

そこにいすわっていてもしょうがないので、誰からともなく歩き出した。

階段を下り、大広間に着いたところでネイリンはいった。

「ロッテ、厨房はどっち？」

「右側の扉を出て、通路左手の奥側の部屋がそうです。でも、」ロッテはネイリンを見上げていう。「ネイリン、先ほどもいいましたが、本当に手伝おうなんて考えなくていいんですよ」

「ありがと」そうしてもらえるのはありがたいが、しかし、子供の言葉を鵜呑みにして顔を出さないわけにはいかないだろう。もともと、肩身の狭い立場なのだ。隙を見て得点を稼いでおくことに越

したことはない。「あたし、けっこう料理とか好きだし、こんなに大きな家の厨房ってどんなのかなあっていう興味もあるしね……」
いいながら、しかしネイリンの目はあるものに吸い寄せられた。「
ねえ、あれって……」

玄関から見て右手側の壁に扉が二つある。右側が厨房に通じているそうだから、左のものは食堂に通じているのだと思う。

その間にあるケース。

ここに来たときは、なんとも思わなかった。だが今は違う。

——あれが鍵を封印したケースか。

「見てもいいのかな？」

ネイリンがいうと、ロッテは笑顔で答えた。

「かまいませんが、わたくし以外の人がいるところでは、あまり見ないほうがいいですわ。ネイリンさんたちは、鏡や鍵のことについては、何も知らないことになっているのですから」

そうだった。何も知らないということになっているし、そもそも、主には石絡みのことに興味を持たないという約束までしていたのだ。

——まあ見るけどね。

ネイリンは小走りで近づくと、ケースを覗き込んだ。

あの扉とは違って、遠目には一見、ふつうの茶箆笥のように見えた。だが、よくよく見ると、風変わりな特徴がいくつか見て取れた。

まず、前面はガラス張りなのだが、取っ手の付近には頑丈そうな鍵がつけられている。なんら隠す気のないそのデザインに違和感を覚える。ふつう、こういったものは、もう少し控えめに、目立たないように配置すると思う。盗む気を起こさせないための工夫だろうか。

次に目がいくのは、やはり収納されている鍵だろう。ネイリンの背丈ほどもある大きなケースなのだが、中にあるのは、その小さな鍵一つだけだった。それが、真ん中の棚の上にぽんと置かれている。空間の余白の大きさと対比によって、ただでさえ小さな鍵が相対的により小さく見える。

そしてその鍵は、二つ見えた。

鍵が二つあったわけではない。向こう側の面が、一面鏡張りだったのだ。そこに映った鍵にも目がいく。

石は鏡の中にあると言い伝えられている。その鏡が置かれている部屋は閉ざされている。その扉を開ける鍵は……もしかしたら、鏡に映ったほうの鍵ではないのだろうか。

ふと、そんなふうに思った。

「そういえばよう、鍵が入ってるケースにあの言葉が書かれてるんじゃないかったか？」

ラパルクの言葉に、ロッテはうなづいた。

「はい。ケースの横に」といって、ロッテは向かって右側面を指差した。

ネイリンとラパルクは、ケースの横に回りこんだ。側面は板製だった。ガラスはきれいだったが、その板は相当に古びていて、色も相応にくすんでいる。だが、不潔な感じはしなかった。

「ああ、これだな」

ラパルクが顔を近づけた付近にネイリンも注目した。かすれがかった感じで、あの文語体が書かれていた。

内容は、ロッテのいったものと同じだった。

「これよう、嚴重に鍵かけてあるのは分かったが、しかし実物のケースを見るとちょっといいな。ケース自体がもろそうだし、その前にガラスを割れば簡単に鍵が盗めるだろう」いつの間にか正面に戻っていたラパルクがいう。

ネイリンは、古びたケースから、威厳や真実味を感じていたのので、そういった発想がなかった。だが、いわれてみればたしかにそうだった。鍵を盗む気になれば、誰にでもできそうだった。

「盗むことはできないそうです」ロッテがいい切った。「わたくしは、いつからこの鍵やケースがあるのか分かりませんが、でもこれまでにはいろいろあったそうで、何人もの人間が、今ラパルクさんがいわれたようなことを試みたそうです。しかし、誰にも盗めなか

った。それどころか、盗もうとした人間は、ここに書かれているように、お亡くなりになったそうです」

——え、本当に死んじゃうの？

ケースにさわりかけていたネイリンは、あわてて手を引っ込めた。「なんか、呪いがかかってるってことか？」

「というふうにいわれております」 ロッテがうなづく。「だから、だれもケースに触りもしません。呪いについては、わたくしなどは半信半疑、というか、信じていない気持ちの方が多いのですが、それでもやっぱり、気持ちが悪いですからね」

彼女がそういつて眉をしかめたときだった。

馬車か？ と、ふいにラパルクが玄関の方を見ていった。

ネイリンとロッテも振り向く。扉の横にある窓には、雫が這っている。まだ雨は降っているようだった。くるときにみたが、窓の上にはひさしがついていたから、風もでてきている様だった。その雨の中、いわれてみればたしかに馬車の音がした。

「きっとルーズさんね」 ロッテがいう。

ロッテのいうルーズさんか分らないが、とにかく馬車の君がつくまでは、なんとなく動けないような雰囲気になった。三人はケースからはなれて、窓から外を見た。

しばらくして、馬車が玄関の前でとまった。

出迎えなくてもいいのだろうか、と一向に動く様子のないロッテを見たときだった。主たちが現れた例の通路から、中年の男が姿を現した。

長身で、それなりに肉はついていそうだったが、それでいながら引き締まった身体を持っていた。頭髪はきれいに後ろに撫でつけられており、ひげが鼻の下とあごに生えていた。

——怖そう……。

それが第一印象だった。

この人がロッテのおじさんだ、そう思ったネイリンはロッテの顔を見ると、彼女もネイリンのいわんとしたことが分かったのか、小

さくうなづいた。

彼はきびきびとした足取りでこちらに近づいてきた。ネイリンは反射的に身を硬くしたが、彼はネイリンたちのことを一瞥しただけで横を通り過ぎると、勢いよく玄関をあけた。

ふっと雨の匂いが、冷たい風とともにネイリンの鼻を刺激した。玄関に姿を現したのは、均整の取れた顔立ちをしている、身なりのいい女性だった。ロッテの、どこか人工的な美しさとは対照的な、自然の花々を連想させるような雰囲気身をまとった女性だった。どうしてかは分からないが、なぜかムカツときた。

この人がルイーズさんとかいう人だろうか。瞬間、この家との関係性が見えなかった。どういう立場の人なのだろう。

玄関に入ってきた女性は、ロッテのおじさんと親しそうに挨拶を交わした。そのときになってやっと、彼女の立場が分かった。

二人が触れ合っていたその間、ネイリンとラパルクは所在なげにたたずんでいた。ロッテも自分からは口を開こうとしなかった。

ネイリンは非常に気詰まりなものを感じたが、この状況では、自分からはなかなか口を開きにくい。誰かに口火を切ってもらいたかった。

しばらくそのまま待っていると、彼女がコートを脱ぎ、それをラパルクに手渡そうとした。顔は笑みをたたえたまま、ロッテの方を向きかけている。

反射的に手を伸ばしかけたラパルクを、ロッテがやんわりと制した。

「おばさま。この方は使用人じゃなくてよ」ロッテの表情は、これまでに見た、どのときよりも純粹無垢なものだった。「ラパルクさんとおっしゃるの。旅をされている方よ」

おばさまと呼ばれた女性は、ロッテのおじさんと目を合わせてから、おかしそうに噴出した。子供だからしかたないわね、といった感じの表情で、大人特有の優位性を意識した、また意識させようとしたものだった。

おじさんの方は、今気がついたとでもいいたげな顔で、ネイリンとラパークを、頭の前から足の先まで露骨な視線で眺めた。

——なんて感じの悪い二人だ。

そう生理的に感じ、ネイリンは戦闘本能に火がついたのを自覚した。

「まあ、ロッテ。今日はいつにも増してかわいらしいわ。まるでお人形さんみたい」彼女は微笑んだ。悔しいことに、その表情は、今までに見たすべての人の、すべての表情よりも完璧で魅惑的だった。「わたしにも、あなたぐらいのときがあったのよ。そのころに戻りたいわ。でもね、わたしだってまだまだ若いのよ。おばさまなんていわれる年じゃないわ」

怒っているような感じではなかった。実際に若いせいだろう。余裕が感じられる。その余裕をふくんだ笑みが、また見惚れるほどにきれいだった。

「そういう意味ではなかったんです。つい、もう伯父様と結婚されているのかと錯覚してしまって。でも、まだされていないのですから、おばさまなんて呼んでは、失礼に当たりますわよね」ロッテは微笑んだまま、ラパークを手のひらで指し示した。「ラパークさんです。旅をされている方よ」ロッテは、先ほどいったことを、わざわざ繰り返した。

ルイーザの顔が、笑顔のままで凍りつく。

瞬間、時が止まったように感じた。

ルイーザは、ラパークを使用者と勘違いした。そこまではいい。しかし、仮に使用人だったとしても、客が自分からコートを渡すのはマナー違反だろう。ルイーザの身のこなしを見るかぎり、マナー違反などとは縁遠そうな人だった。しかし彼女はそれを犯した。それは、この家の住人と結婚する予定にあるらしい彼女が、もう自分はこの家の住人なのだと認識、誤認していたせいなのだろう。

わざわざ指摘するほどのことではない。あいまいなままにしておけば、ほほえましい間違いですんだのだ。だがロッテはやっぱりと、

しかしルイーザの認識を指摘した。

わざわざ指摘したことで、彼女の立場や認識は浮き彫りになる。それは、この家の経済規模と合わせて考えることで、実際はどうあれ、大人の計算を連想させるものだった。

ロッテの言葉は好意的に聞くと、もう自分はこの家の住人だというルイーザの認識を注意、指摘しただけのものだった。だが、いい方などと合わせて類推するなら、邪知することもできる結婚それ自体への不快感の表明、ともしれるかもしれない。

いや、事実、不快感の表明だったのだろう。それは、ルイーザの表情で分かった。

ロッテはきつとこれまでも、あまり好意的には彼女に接してきていなかったに違いない。その自分の思いを、ネイリンたち第三者の前で、ルイーザに恥をかかせるという形で再表明したのだ。

場の温度が下がり、白けた雰囲気ではじめた。

その理由としては、わざわざ正論をいったロッテの行動もあるが、それを引き起こしたのはルイーザの露見した認識、さらには邪知すれば邪なものすら感じさせる心積もりだ。

おじさんも子供じゃない。ルイーザのそういった心の可能性など百も承知のことなのだろう。その上での結婚のはずだ。だが、第三者からの指摘によって、違った温度でルイーザの感情を測る思考が、瞬間芽生えたかもしれない。つまらなそうな表情に、かすかな疑問の色が、浮かんでいるようにも見える。

使用人として扱われたラパルクは、なにを考えているのか、あるいは何も考えていないのか、無遠慮な目でルイーザを見ていた。

ネイリンは、ロッテの言葉の意図に気づいていない振りをしながら、彼女の意図に沿った形でルイーザを見た。

ほんのわずかな無言の時間だったが、その時間に各々の辿った思考は、ルイーザを、華麗な女性、という立場から引き下ろした。

ルイーザの顔はこわばっていた。

いい気味だった。彼女にいい感情を持っていなかったネイリンは、

一瞬でルイーザをやり込めたロッテの行動に内心喝采をあげていたが、同時に、やはり彼女もプライと同じく、味方にすれば心強いが敵に回すと厄介な相手であることを再確認していた。

「で、その旅人は、誰の許しを得て滞在しているんだ？」

口火を切ったのは、ロッテのおじさんだった。その目は、苛立ちを内包していた。ロッテに対してか、ルイーザに対してかは分からないが、その矛先はネイリンたちに向かっていているようだった。純粹にネイリンたちに苛立っていたのかもしれない。

ネイリンは、殊勝な態度で口を開いた。

「あたしたちは旅をしていたのですが、連れのものが体調をくずし……」

「そんなことは聞いていない。今すぐこの家から出ていけ。話は終わりだ」

ここの家の主に許しを得た。それを順番にはなそうとしたのに、このオヤジときたら……。

ロッテのおじさんに対する不快感がまたぞろ頭をもたげてくる。

あごが前に出てくるのを自覚した。

「伯父様。お祖父様の許可はでていますわ。それに、お連れの方は寝込んでいて、今は上の部屋でおやすみになっています。今さら出ていけなんてあんまりだわ」ロッテは、ネイリンを見上げた。「ネイリン、出ていくことなんてないわ。プライさんがよくなるまで、ずっといてくださいね」

「ロッテ、それはお前が決めることじゃない」おじさんが、抑制の利いたバリトンでいう。「お前は黙っていないさい」

「伯父様こそ、何も分かっていないのに命令しないで」ロッテが強い口調でいった。「最初はお祖父様も反対なさったわ。でも、はなした結果、滞在を許可されたの。それで正式な、この家のお客様のはずだわ。それに、」とロッテはネイリンをちらと見る。「わたくしたち、今までずっとおはなししていたの。もうネイリンもラパルクもお友達よ。伯父様が、この家のお客様としてお二人を向かい入

れるのに反対なさるなら、わたくしが友人として、お二人に滞在をお願いすることにします」ロツテはおじさんを見た。「ここは、わたくしの家でもあります。問題ないですわよね？」

ロツテの言葉に、不覚にもネイリンは、胸を打たれた。

ネイリンとラパルクを、友人として招き入れる、という言葉もうれしかったが、それ以上に、ロツテがふだん置かれている状況が頭に浮かび、切なくなったのだ。

酔っ払いの父、伝説を丸まま信じ込んで疑いもしない祖父、不遜でやさしくない伯父、お金がなかったら伯父を選んでいたか怪しいルイーザ。そんな人々の中に、一人子供としているのはつらく、心細いことなのではないだろうか。

しかもロツテはただの子供じゃない。頭も回るし、状況把握能力も大人なみだ。いや、周りにいる大人たちよりも、ある意味では上なのかもしれない。

なのに子供として扱われる。悔しいこともあるだろう。

最初ネイリンはロツテを、底を隠した恐るべき子供、といった感じで斜に見ていたが、すっかりロツテ最前になっていた。

それは、遅まきながら、彼女を友人として認めた瞬間でもあった。

「ありがとう、ロツテ」ネイリンは思わずいつていた。

いつてから気がついた。このタイミングでこういつては、もうおじさんは、認めないなんてことはいえないだろう。姪っ子に激しくいわれたおじさんから、選択の自由も奪ってしまった格好だ。

客としては――ちと気まずい。

「勝手にしろ」おじさんは、顔の前でじゃまくさそうに右手を振った。「ただ、うろちよろはするな。目障りだ」

「伯父様！」

おじさんは、ロツテの声を無視して食堂に向かった。あわててルイーザもあとを追う。

ロツテのおかげで滞在できることにはなったが、ロツテのせいで立場がどんどん悪くなっている気がする。

「ありがとう」でも、そう小声でいった。

それは、具体的な何かを指しての礼ではなく、村を出て以来、初めてできた女友達への、ささやかな感情表現だった。

第一章 8

8

食堂には、すでにロッテのおじいさんと、ロッテのお父さん——ジーンナスがいた。食堂の真ん中に細長いテーブルがあり、向かって正面の上座におじいさん、その左にジーンナスが座っていた。ジーンナスはすでに琥珀色の液体を飲んでいた。

ロッテのおじいさんは、何もいうことなく、だまっておじいさんの右隣に座った。ルイーザは、おじいさんのところにまっすぐに向かった。

「ガードナー様、ご無沙汰しております。お元気そうでなによりですわ」ルイーザは、中腰になっておじいさんにはなしかけた。

「そんなによくもないわ」おじいさんは、仏頂面で返す。「最近、雨が降ると膝が痛む。座ったままで失礼するよ」

「いいんですの。楽になさって」ルイーザが微笑む。

二人の関係はどうなのだろう、とネイリンは思った。おじいさんは、むすっとした顔をしているが、もしかしたら、この顔がデフォルト、あるいはすべてという可能性もある。

彼女がきたとき、出迎えなかったが、それは主のいうとおり、足がわるいせいなのだろう。だから、まあ、仲がいいともわるいとも判断がつかなかった。

ルイーザは、つづいてジーンナスにもはなしかけた。彼もまた彼女を出迎えはしなかったが、ルイーザの婚約者である兄とともに出迎えるのも決まりわるいものがあるだろう。今も、当たり障りのない会話をしている、やはり仲がいいともわるいとも判断できなかった。大人の関係性は、分かりづらい。

ルイーザはおじいさんの隣に座った。ロッテはジーンナスの隣に座り、さっそくテーブルナプキンを膝の上に広げた。ここでもまた、ネイ

リンとラパルクは、所在なげにたたずむことになった。

大人ならこういうとき、主やジーナスなどにおべんちゃらの一つもいって、なんとなくのまま適当な席に座るのかもしれないが、あいにくネイリンもラパルクも、そういった芸当はできなかった。

おじさんとルイーザは、あえてネイリンたちを無視しているような雰囲気。主は、そもそもネイリンたちが目に入っていないようなそぶり。ジーナスは、困惑するネイリンたちを面白そうに眺めているだけで、助け舟を出す気配はまったくなかった。

息苦しくなった辺りで、ロッテの声が聞こえた。

「ネイリン、ここに座って」ロッテが、笑顔で隣のイスをぽんぽんと叩いた。「ラパルクはあちらね」

そうだ、ロッテがいたんだった。ほっとしたネイリンは、うん、といって彼女の隣に座った。ロッテの隣に座って、やっと心地ついた。

ふと見るとラパルクが、ものいいたげな表情でネイリンの顔を見ていた。たぶん、というか絶対、ルイーザの隣がいやなんだと思う。今彼女の隣に座るのは、さぞかし気まずいだろうな、とは思ったが、ネイリンの立場としてはどうしようもない。ネイリンはラパルクの視線に、鼻の頭に皺を寄せることで返した。とくに意味はない。ラパルクはネイリンを一睨みすると、ぎこちない動きで、ルイーザの隣に座った。落ち着かないのか、もぞもぞとお尻を動かしたかと思うと、最終的には下を向いた。

ラパルクはここにきてから、終始ぎこちない。しかしそれもしょうがないだろう。村にいるときは、乱暴者が集まる剣技館が彼にとって世界のすべてだったのだ。こんな場所では、どうしてよいかわからないのだろう。彼にしては、がんばっているほうだと思う。

ネイリンが、隣のロッテを真似して、ナプキンを膝の上に広げていると、後ろで扉の開く音がした。反射的に振り返ると、カーテがワゴンを押してくるところだった。その向こうが厨房なのだろう。

入ってきたカーテは、ネイリンと目が合うと、合図のように目を

つぶった。ネイリンも微笑みで返した。会って間もないが、この人だけは、まるで生まれたときから見守ってくれている近所のおばさんのように感じる。

食堂に入ってきたのは、カーテだけではなかった。後ろから、パンの載った大盆を手にした少年が入ってくる。誰だろう。なんとなくカーテに顔が似ている気がする。息子だろうか。

カーテとその少年は、手分けしてスープとパンを配って歩いた。

ネイリンは、どうしてよいか分からず、その間ただじっとしていた。ラパルクは、置かれた瞬間にパンを食べようとして、周囲の無言の圧力を受けた。また何かいたそうにネイリンを見たが、彼女が無視すると、肩をおろしてそっぽを向いた。

カーテと少年が食堂を出てから、おじいさんが口を開いた。

「今日はいつもと違いゲストがいるが、いつもどおり祈りの言葉を述べたいと思う」そういうと神仕様のような口調で、「神の使いである勇者に、今日も日々の糧を与えたもうことを感謝いたします」といった。

ほかのものも繰り返す。こういった言葉は、絵本の中だけのものかと思っていた。なんとなく気恥ずかしくて、ネイリンはいったふりですませた。

それぞれがパンの一切れも口に入れたところを見はからって、ジーナスが口を開いた。

「いや、今日は大勢での食事だめでたいな。四人での食事は辛気臭いっただけだからな」

めでたくはないが、まあ、少人数で食べるよりかはいいだろう。

そう思ってから、四人、という言葉が引っかった。

四人とは、ロットに彼女のお父さん・ジーナス、おじいさんにおじさんのことだろう。……ロットのお母さんはどうしたのだろう。

気にはなったが、もちろんこんなタイミングでは聞けない。

「せっかく旅人がいるんだ。酒のつまみにここまでの武勇伝でも聞きたいと思うが、どうだろう」

ジーナスは、周りを見回すようにいったが、誰も答えない。しょうがなく、ネイリンがそれに応えた。

「おはなしできるほどの武勇伝はないかもです」ネイリンは精一杯愛想よくいった。「モンスターに出会っても逃げてばかりでしたし」お愛想程度でも、ここで笑いが起きるはずだった。だが起きない。それどころか、なぜジーナスの言葉に反応したのかという雰囲気すらある。食事中に会話するのを、基本的には好まない家なのだろうか。

空気を読み損なったジーナスに巻き込まれている格好だった。だが、そのジーナスはどこ吹く風でしゃべり続ける。

「いや、モンスターから逃げるのだって、立派な武勇伝だ。おれ……私たちは、そのような体験とは縁遠いからね」

「はあ……」ネイリンは、どこまで付き合っているのか計りかねていた。

「おじょうさんも、戦ったりするのかい？」

「まさか!？」これまで黙っていたルイーザが、たまりかねたようにふきだした。「ジーナスさんたらおかしいわ。こんな……」といって、ネイリンの顔をすまなそうに見た。「ごめんなさい。まだお名前聞いていなかったわね」

ロツテとの会話でショックを受けたらしい彼女も、様子を見るにつけ、復活したらしかった。第一印象の、いいとこのご令嬢、といったオーラがいつの間にか再出している。

ただネイリンの名前は、名乗ってはいなかったが先ほどの会話の中にでてきていたはずである。あの一件はなかったことにして、もう一度立場・関係性を、再確認・再構築しようとしているのかもしれない。

「ネイリン・パークエムといいます」冷静に考えて、気まずい関係にして得になることなどない。ネイリンも友好的に構えた。「はじめまして」

「よろしく。ルイーザよ。ネイリンって呼んでいいかしら」ルイー

ザが微笑みいう。

ロッテがかすかに動く。ロッテは、友達になってからネイリンと呼んだ。そういった、ぎこちないともいえる手順を踏んだロッテからしたら、ルイーザの物言いは面白くないのかもしれない。

だがこの立場・関係性からして、呼び捨てでよいかとルイーザのほうから聞くのは、やさしさともいえた。これをきっかけに近づければ、この家での立場も、居心地のいいものにかわるかもしれない。「ええ、もちろん」ネイリンは間髪入れずに応えた。すぐ応えたのは、ロッテの動きを制したかったのもあった。

「ネイリンみたいにかわいらしいおじょうさんが、モンスターとの戦闘に加わるはずないわよね」

「えっと……」一瞬口ごもってしまった。ネイリンも腕に覚えはあったし、実際この旅では幾度となくモンスターと戦っている。どう答えたらいいいものか。

「こいつは戦いますよ」ラパルクがパンを口に入れたままいった。「この街にくるまでに、何度もモンスターと戦ったが、こいつも参加した。だいたい、そもそもは一人で旅に出ようとしてたぐらいだ。それなりの自信はあるんでしょう」パンを飲み込みいった。「実際に強い」

ルイーザが、突然はなしはじめたラパルクを見て、ちょっと怖そうな顔をした。

そのまま顔をネイリンに向ける。おびえた表情は残ったままだった。

「あ……」ルイーザの反応を見て、あわててネイリンはいった。「大げさにいってるんです。たしなむ程度に槍をやりますが、そんな、実際モンスターと戦ったりなどは……」

思いつきしてはいたのだが……。

「ネイリン、ほんととはどっちなの？」スープを飲み終えたロッテが、スプーンを置いてネイリンを見た。この話題に興味を持っているようだ。

「えっと……」迷ったが、どうせ嘘をついてもこの娘にはばれる、そう思って正直に答えた。「まあ、多少はやったかな。……やっぱ一緒に旅してるんだし、知らないふりしてるわけにもいかないしね」

「すごい！」ロツテが目を輝かせて、口の前で手を合わせた。「女の子なのにモンスターと戦えちゃうなんて、かっこいいわ。そんなお友達はじめてよ」

「そんな、大したことないわよ」

謙遜しながらも、褒められているのだろうか、と内心首をかしげた。

見ると、ルイーザは思いつきり引いてるし。

おじさんやおじいさんも、まあ引いてる。

「は！」ジーナスが、愉快そうに息を吐き出した。「こりゃいいじゃ、お嬢さんも武勇伝の塊みたいなものなんじゃないか」

「そんなことはないです」

なんとなく、この話題をつづけたくなってきた。話題を探そうかと何気なく周りを見回したときだった。目の端に、なにか動くものを捕らえた。窓の外にそれはあった。注視すると、それはイボーだった。小雨の振る中、麦藁帽子をかぶったイボーが、鍬を肩に歩いている。

彼に気を取られたのを、その場にいたみなが気づいた。

「イボーか。あいつ、あんなところでなにやってるんだ？」おじさんが、食堂に入ってから始めて口を開いた。

「花壇の石をどかすように、先ほどいつけましたの」ロツテが答える。

「勝手なまねはするな。イボーはお前の召使いじゃない」不機嫌そうにいった。

「でも、お祖父様がじゃまだといっていた石をとりのぞいてと、わたくしはいったのです」

「親父がいったのならかまわん。だが、お前がいついていいことじゃ

ない。子供が命令なんかするな。いったい何様のつもりなんだ？」突然険悪な雰囲気になり、ネイリンは胸が苦しくなった。

「かまわん」おじいさんが、落ち着いた声で二人の会話に割って入った。「イボーはこの家の使用人だ。ロッテはこの家の娘だ。指示する資格はある」

「しかし、いずれは……」そういつて、おじさんは口ごもった。

おじさんの右腕の服がわずかに動いた。ルイーザが、さりげなく引っ張ったような動き方だった。

——なんだ、今の？

おじさんの言い分もおじいさんの言い分も、どちらもうなづけるものだった。気になったのは、会話の終わり方——おじさんの、いずれは、という言葉だった。

ロッテはこの家の娘だ、といったおじいさんの言葉に対しての『しかし、いずれは』。

いずれは嫁ぐ、そういった趣旨の発言なのだろうか。

——いずれは嫁いでこの家との縁は切れる、いずれ外部のものになる人間が、この家の使用人に命令するな——。

いや、結婚したって縁は切れないだろう、とネイリンは思う。

……そういうことではないのか。

この家は特殊だ。ルールがある。

——賢いものが鍵とともに、結局は家督も継ぐ。

ロッテの父と伯父は、今、継承権利を争っている。そして、父はそれに負けそうだという。負ければ家督は継げない。家を出て行かなければいけない。そのときロッテは……やはり一緒に出て行くのだろうか。

……だが、出て行ったからといって、この家との関係性が絶たれるわけでは——いや、絶たれるのか？

ネイリンは、酒場で、この家の宝の話聞いていたことを思い出した。

石の情報は、簡単に外部の人間に知ることができないものである

にもかかわらず、そして、この家の人間は、基本的に石についての情報を流したくないと思っているにもかかわらず、石の情報は外部に流れていたのである。

それができる人間の条件は、かつて内部の人間だったこと。そして、現在内部の人間ではなくなっていることだ。

なぜ情報を流した人物は、内部の人間でなくなったのか。

継承競争に負けたゆえ、というのが、一番可能性が高いだろう。

情報を流したのが、具体的に誰かは分からない。おじいさんに負けたものかもしれないし、その先代に負けたものかもしれない。

とにかく石を守るものとして認められなかったものが、腹いせに情報を流したというのが、蓋然性に高そうだった。

つまり、石の情報が外部に流れていることが、継承競争に敗れば、この家との関係性を絶たれることを裏付けている、と考えられる。

もうジーナスの負けは決定的なのだから、ロットも『いずれ』は、外部の人間に『なる』のだ、とおじいさんはいいたかったのだ。

それなのに、万が一の可能性を考えてなのか、ロットはそんな状況なのに毎日そうとう時間勉強させられているのだ。

ロットの置かれている状況は、家の状況を知れば知るほど苦しい。なんとかしてあげたいと思ったが、通りすがりのネイリンにできることなどないだろう。いえることすらないかもしれない。

パンを手にはネイリンが固まっていたときだ。またカーテたちが入ってきた。前菜を配る。

カーテとともに前菜を配っていた少年に、おじいさんがいった。

「ルイ。ここの仕事はいい。外にでて、イボーを手伝って上げなさい」

少年はルイというらしい。

「イボー、ですか？」少年が、声変わり前の声で訊いた。

「ああ。今外で、花壇の中にあつた石を取り除いている。力仕事はしなくていい。庭の景観を損なわないところへ持っていくように、

案内してやってくれ」

「はい。かしこまりました」そうルイは答えると、機敏にワゴンを押してでていった。

ルイは見たところ、まだロツテやプライとそうかわらない年齢に見えた。この家では、そんな年端のいかない子供でも、立場によってはこき使われるらしい。

ネイリンは、なんとなく落ち着かなかった。客とはいえ、通りすがっただけの人間だ。カーテたちだけに働かせて、命令しているガードナー家のものと一緒に食事をしているのが申し訳なく感じたのだ。

先ほどロツテには反対されたが、やはり食事のあとには、後片付けぐらいは手伝おうと思った。

第一章 9

9

前菜をあらかじめ片付けたあたりから、また会話が始まった。

口火を切ったのはルイーザで、内容はネイリンたちの出身村について質問だった。

ロッテの立場に関係する会話が不自然に途切れていたが、そのことには触れずに、その話はなかったことにしよう、という彼女の意図が見えた。

そのことに、ガードナー家のものは依存がなかったらしい。ジーナスを筆頭に、この話に乗っかってきた。ネイリンも、その雰囲気に乗っかって、愛想よく村の紹介などをした。

話は村のことから物資流通の話へ。そして、この街の経済の話になっていった。村にいるところにも感じていたことだが、どうも最近では経済の動きが活発らしく、チャンスではあるが予断を許さない状況だとのことだ。

そのころになると、ジーナスは黙りがちで、しゃべっているのは、主にルイーザ、そして、彼女の質問に答える形でおじさんやおじいさんがしゃべるという感じだった。

ネイリンやラパルクには口をはさめる話題じゃなかったので、客ではあるが蚊帳の外という、または居心地のわるいものになった。

途中からネイリンは、もう料理だけに専念しよう、と決め、主に咀嚼することに口を使った。

——それにしても美味しいな。

先ほどから感じていたことではあるが、かなり料理のレベルは高かった。これらは、カーテが作っているのだろうか。

後片付けを手伝おうと思っていたが、そのどさくさで、調理を教えてもらおうかな。

街から、国の経済、ひいては政治の話になっている大人たちをよそに、ネイリンはそんなことを考えていた。

第一章 10

10

食事を終えたあとは、この家の習慣なのだろうか、お酒を飲みながらの団欒なども特になく、すぐにお開きとなった。

主は、ゆつくりとした足取りで、しかし一番早く食堂をでた。ロツテのおじさんとルイーザがそれにつづく。ロツテも勉強しなくちゃ、といって食堂をでていった。彼女は、そのまま寝てしまうからと、就寝の挨拶も残していった。またお話ししようね、という彼女の言葉に、ネイリンは素直にうなづくことができた。

ラパルクは、ジーナスにつかまってなにかいわれていた。そんなジーナスに嫌そうな顔をしながらも、ラパルクはついていった。これから何かをするのだろうか。

みんなは大広間に続くドアからでていったが、ネイリンはロツテに聞いていたもうひとつのドアから一人厨房に向かった。

ドアを開けるとすぐに厨房、といった感じではなく、一部屋分ぐらいの空間があった。そこから廊下につづいている。厨房は左手のドアから入るとあるらしい。右側にいくつかドアがあるが、そちらは使用人たちの部屋だとのことだ。

ネイリンは厨房につづくはずのドアをノックした。中から、少し緊張した声が戻る。失礼します、といってネイリンはそっとドアを開けた。

中には、カーテと中年の男がいた。男の方は、カーテの夫だろうか。しかし彼は、気難しげな雰囲気を持っていて、明るく屈託のないカーテの夫には似つかわしくない気がした。

二人とも前掛けで手を拭きながらこちらを向いていた。彼らの怪訝そうな顔に、内心萎縮しながらも、ネイリンは微笑みながらいった。

「あの、後片付けをお伝えしようかと思ひまして」

「まあまあ、おやさしいこと」カーテは表情をくずし、ぷっと吹き出した。「お気持ちだけいただいております。でもネイリンさんはお客さまなのですから、ゆっくりなさっていていいのよ」彼女は、男がいるからか、少しかたいいかたで答えた。

「はあ。そうロツテにもいわれたのですが、でもあたしたちは、そもそもは紛れ込んだだけで、正式に招待されてきているわけではな
いですし、なんかお客として扱われるのは申し訳なくて……」

それは本心であった。だがそれだけではなく、これまでこの家のことや、石のことについては、主にロツテの口からしか聞いていなかったのも、ほかの口からもそれらを聞き、情報を多面的にしたかった、というのも本音にはあった。

カーテはそこまで読み取ったとは思えないが、ただ、ネイリンが自分とはなしたがっている、とだけは感じ取ったようだった。カーテはいたずらっぽい笑みを一瞬浮かべると、

「そうですか？　じゃあ、お言葉に甘えちゃいましょうか。正直いうと、ちょっと人手が欲しかったところでもあるんです」

「そんなことはない。ここは二人いれば十分だ。お客様に働いていただくなんてのは……」

男が口を開いたが、すぐにカーテがそれをさえぎった。

「でもリール、ここをネイリンさんが手伝ってくれたら、あなたが外にでてイボーを手伝ってあげることができるわ」

「べつに、私が手伝わなくていいだろう。イボーは、ルイが手伝いにいっている」

「でも、石をどかしにいったわけでしょ。イボー一人じゃ大変かもしれないし、でもルイがいたって大して力にはなれないじゃない」

「しかし……」男は、まだなにかいいたかったようで、口を開きかけたが、カーテの押さえ込むように言葉をつないだ。

「あなたがいたいのは、ご病気のお客様のお食事をどうするのか、ということでしょ。それぐらい私にだって作れます。だから、あな

たは……」

「分かった、分かった」男は、うるさそうに手を顔の前で振った。「じゃあ、ここは任せる」男は前掛けをはずすと、それをテーブルの上に置き、ネイリンに向かった。「それではすいませんが、私は外を手伝ってきます」

カーテとはなしているときは、仏頂面で、不機嫌そうにも見えだが、ネイリンには意外なほど愛想のいい顔を見せた。少なくとも、気難しい人間ではないようだ。そう思ってから先ほどまでのカーテとのやり取りを思い出すと、お互い気を許しあっているからこそできる、ほのぼのとしたかるい喧嘩とも思える。

——やっぱりカーテの旦那さんなのかな。

そう思って、ネイリンはすこし安心した。

男が部屋から出るのを待って、カーテは口を開いた。

「あの人は、この料理人でリール。ぶつくさと文句ばかりいうし、腰は重いし、まあ、つかえないんだけど、腕だけは確かだね」カーテは、最初に合ったときのような口調に戻っていった。「美味しかったでしょ？」

「ええ、とつても」ネイリンは答える。

「でもね、元からうまかったわけじゃないのよ。だって、ここへきた当時は、ただの使用人だったんですもの。それが、先代の料理人にセンスを見込まれて、それから料理はじめたのよ」

「あ、そうなんですか」

やっぱりしゃべる人だな、と思った。それはべつにいいのだが、とりあえず、しゃべっている今、彼女の腕は止まっている。先ほど、プライの食事はこれから作ると思っていた。彼がお腹を減らしていたらかわいそうだ。できれば、早く作りはじめたかった。

「ええ。リールの父親はね、この土地の小作人だったから、ふつうにいけば農家になるところだったんでしょうけどね。めぐりめぐって今は凄腕の料理人よ」

「へえ」うなづきつつ、ネイリンはリールがしていたエプロンに手

を伸ばした。「あの、これ借りちゃってもいいかな？」このままでは、いつまでも話がつきそうな気がして、ネイリンは嫌味にならないように気をつけながらいった。

「いいわよ。って、ほんとに手伝ってくれるの？」

「ええ、なにかしてる方が気が楽ですし」エプロンをしながらネイリンはきいた。「ねえ、カーテさん。さっきの方、リールさんていうの？ その人、カーテさんの旦那さん？」

そういうと、またカーテは吹きだした。

「まさか！ 冗談やめてよ。私はこう見えても、面食いのよ。あんなのとは、頼まれたってごめんだわ」

「あ、そうだったんですか」ネイリンはエプロンの紐を縛るために手を後ろに回した。なかなかうまく縛れない。「……あたし、勝手にあの、ルイくん？ がカーテさんのお子さんと、リールさんが旦那さんなのかなって」

「ルイが子供なのは当たってる」カーテは、ネイリンの後ろに回って、エプロンの紐を縛ってくれた。「でも、旦那は死んだのよ」カーテの声だけが聞こえた。

「あ、」瞬間、頭が回らなかった。とっさに言葉をだした。「そうだったんですか……。ごめんなさい……」

「ううん、いいの。もうずっと昔の話だからね」そういつてから、カーテは一際明るい声をだした。「さ、できた。じゃ、働いてもらいましょかね」

そういい、台所の前に戻ると、私が食器を洗うから、ネイリンさんはすすいでそこにおいてね、とネイリンに指示をだした。なにをすればいいかは分かったが、なにをいっていいかは分からない。カーテは、旦那さんのことを乗り越えたようにいっているが、内心どうかは分からない。

黙っているネイリンの心境を察してか、カーテが明るい口調ではなしはじめた。内容は先ほどの続きのようだった。

「うちの旦那、男前だったのよ。ネイリンさんにも見せたかった

わ」

「はあ」

「でも身体が弱くてね、ルイが生まれてすぐに死んじゃって。死んですぐは大変だったけど、この旦那様が親子で拾ってくれてね。それから、使用人とはいえ大豪邸住まいだからね、けっこう楽しい毎日よ」

「うん」

「リールも、似たような境遇でね。さっきはいろいろいったけど、あの男も苦勞してるのよ。親御さんが借金残して亡くなられて、それから路頭に迷うような感じだったんだけど、そこをやっぱり旦那様に拾われて。旦那様、最初怖かったでしょ？」

「ええ、まあ……」今も怖い。

「でもね、氣難しそうに見えて、とてもお優しい方なのよ」

そう、なのか？

しかし、違うだろうともいえないので、ネイリンは微笑みながらうなづいた。

「ロツテ様のお生まれになったときなんて、それはもう相好をくずされて」

「へえ」あのじいさんのにやけた顔は、ちょっと想像がつかない。

「初孫ですか？」

「うん、そう。今考えると、その時期がこの家の一番幸せなときだったかもしれないわね」

「だんだん……そうじゃなくなってきたんですか？」

「ええ。跡取りがジーナス様にできて、トーナス様も焦りみたいなものを感じはじめたのかもしれない。そのころから、厳しく取り仕切るようになって。奥様が亡くなったのだって、「カーテは、突然口調を切った。」「あら、ごめんなさい。こんなこと、お客様にいうことじゃないわよね」

「いえ……」

奥様とは、文脈から判断してジーナスの妻、つまりロツテの母だ

ろう。

やはり、お母さんは亡くなっていたのか――。

ふと過去の思い出したくない出来事が頭をよぎった。

両親が巻き込まれた惨劇。

ネイリンは一度目をつぶり、小さく息を吐いた。もうずいぶん前のことになるが、いまだに冷静には振り返れない。

ネイリンは強制的に、その記憶から目を逸らした。

何かのきっかけで思い出しても、目を逸らす術は、無意識のうちにものにしていたのだ。

逸らしていた先にあった記憶は、ロッテの顔だった。

胸が締めつけられるように感じた。

ネイリンはもう、立ち直りかけている。正確にいうなら、その忌まわしい記憶のしまい方を覚え、その出来事がよみがえりそうになったときも、やり過ごす方法を覚えた、といった方がいいが。

根本的な解決にはなっていないが、両親の死に根本的な解決などありえないともいえる。

だから大事なことは、乗り越えられない壁がやってきたとき、うまくやり過ごすことなのだ。ネイリンは知った。

それを知るまでの幼少期はつらかった。

恐怖と寂しさに、圧迫されて息も苦しかった。

その時期のネイリンを支えてくれたのは、ネイリンには姉であり、お隣のウォルマー家であった。彼らの支えがあったから、なんとかネイリンは持ちこたえた。

彼らがいなかったら、早い段階で自分はだめになっていただろうと、ネイリンは確信している。

ロッテはどうなのだろう。そういった人がいるのだろうか。彼女の家族の顔が、次々浮かぶ。――もしもないなら、

「どうかした？」

カーテの声で我に返った。見ると、心配そうに顔を覗き込んでいる。その顔を見ていると、なんだか、すぐくほつとした。

——この人なのかも。

ネイリンは、ここを通り過ぎる人間だ。ロッテに同情しても、結局のところ、大したことはできない。できることがあるとしたら、ここにいる間、真摯に、友人として接することだけだ。

ネイリンは、止まっていたらしい手を動かしながらいった。

「いえ、どうもしません。あの……奥様っていうのは？」

「ああ、ジーナス様の奥様。それはきれいな方だったのよ」カーテは、当たり前障りのないことをいった。

「ええ、それはロッテ、さんを見ていても分かります」ネイリンは、とっさにロッテにさんをつけた。「でもロッテさん、かわいそう。お母さんを亡くされてたんですね」

「ええ。奥様だって、まだ小さなお嬢様を残していくのは、さぞかし無念なことだったと思うわ」息子のことを思い出しているのか、カーテはふと窓を見た。「でも、今のお嬢様を見たら、きっと奥様も安心なさるんじゃないかしら。とつても落ち着いておられるし、難しい立場なのにひねくれたりした時期もございませんし」といつてからカーテは、眉をしかめた。「こういうこといっちゃいけませんよね。どうもあたしは一言多いわ。自覚してるんだけど、ついついしゃべっちゃうのよねえ。難しい立場、というのは聞かなかったことにしてね」

ついついしゃべっちゃうカーテの性格は、話をききだしたいと思っているネイリンからすると好都合だ。愛想笑いを浮かべながら、ネイリンは頭を働かせた。

難しい立場とは——当然、石がらみの話だろう。この家では、石を継ぐものが家督を継ぐのだ。立場は、石を巡る力関係と無関係ではられない。

だが石の話は、ネイリンは知らないとかカーテは考えているはずだ。ネイリンも、知らないふりをする必要がある。ただネイリンは、玄関での気まずいやり取りに立ち会っているし、食堂でのロッテの立場をめぐるやり取りにも立ち会っている。そのことは知っている、

とっておいたほうが話を進めやすいだろう。そう思って、ネイリンはいった。

「あ、でもあたし、ロツテさんが難しい立場にいることは知ってました。さっき、ルイーザさんがきたとき、玄関でいろいろあったし、食堂でも、そのようなことで気まずい雰囲気にもなったんです……」

「そうなの。じゃあ、なんとなくは知ってるのね」といってカーテは、眉根を寄せた。

「なんとなくですが。……えっと、ロツテさんのおじ様、でいいのかな。ロツテさんに、子供が命令なんかするなって、叱ってました」
「ああ、トーナス様は、子供が命令されるのを好まないから」カーテは、そこでうれしそうな顔をした。「でも、トーナス様のいないところでは、しっかり命令して下さるんですけどね」

「なんかうれしそう。命令されるのがうれしいんですか？」

「人によるわよ。どこの馬の骨ともしれない人に偉そうにいわれちゃ、そりゃカチンときますけどね。お嬢様は、お生まれになってから知っている方なんですもの。ちゃんと、伝わるものがあるんですよ」

そんなロツテが、かわいくてしょうがない。カーテの顔は、そういていた。

「ロツテさんて、頭がいい方ですよ」

「そうね。頭がよくて、やさしい……照れ屋さんなのよ」カーテはそういって、ふふつと鼻息をもらした。

第一章 11

11

口数は半端ではなかったが、しゃべりながらもカーテの仕事ぶりはそつがなく、皿洗いもあつという間に終わり、プライの食事も、なかなかの手際で彼女は作った。

メニューは、手軽に食べれるようにとスープだったが、さまざまな食材をすったものが入っている、栄養十分のものだった。あとは薬と水差し。それを持って、ネイリンは厨房をでた。

皿洗いなどをしながら、ゆっくり二人だけでカーテとはなせた。それはよかったと思うが、しかし、あまり深い話などはできなかった。

できれば、石のことや、あの部屋のこと。それらを取り巻く人間模様なども、ロッテ以外の人間の口から聞きたかったが、そううまくもないだろう。突っ込んだことを聞きたいとは思っても、子供のロッテとはなすようにはいかない。

しかし、ロッテがまったくの一人つきりではなさそうだと分かったことは、友達として素直にうれしかった。あの人がそばにいれば、あんなのが父親でも――。

「また勝った！ 見たかい？ 今のショット。奇跡のショットだね」大広間に入ると、ビリヤード台の前で、キューを掲げて飛び跳ねているジーナスが目に入った。

――バツカじゃないの……。

ネイリンはため息をついた。

「おお、お嬢さん、今の見たかい？」

「見てません」ネイリンは、目も合わせず、その場を通り過ぎようとしたんだ。

「よかったら、お嬢さんもうだい？ べつにすることもないんだ

ろ？」

「あたし、プライにこれをもっていかないと……」

そういつて、階段前で振り返ると、疲れた顔のラパルクが目に入
った。

主はああたし、兄は婚約者というし、娘はお勉強、でジーナスは
暇しているのだろう。ラパルクはそんな彼に捕まっているらしい。

ふだんなら、そんな相手に合わせるように殊勝な男ではないのだ
が、招かれざる客という立場から、彼なりに気をつかった結果なの
だろう。ただ単に、慣れない上品な環境に圧倒されて、いつものペ
ースが乱れているだけかもしれないが。

——ちよつとかわいそうかな。

「あ、でもプライの様子が大丈夫そうだったら、少しぐらいなら……」

といいかけたネイリンの言葉にかぶせるように、ジーナスはいっ
た。

「お、やるかい？ いいねえ、よし、じゃあテリル連合とガードナ
ー親子の対決といこうじゃないか」

「え、ロッテ、さんも呼ぶんですか？」彼女は今勉強中のはずだ。
ジーナスはしばらく考えた後、いや、こっちは私一人でいいや。
ハンデだハンデ、と気の弱そうな表情でいった。

ジーナスの立場、性格を現す表情に思えた。

第一章 12

12

プライの部屋に行くと、彼は先ほど同じ体勢で静かに眠っていた。おでこに手を当てると、幾分熱が下がっている気がする。これなら、もう一回たくさん食べて薬を飲めば、かなりよくなるのではないだろうか。

ネイリンは肩を軽くゆすりながら、小さな声で呼びかけた。

「プライ、ご飯持ってきたよ。プライ」

彼は薄っすら目を開け、目をしょぼしょぼさせた。

「プライ、気分はどう？」

ネイリンを認めると、思いのほかしっかりとした表情で口を開いたが、声がでないようだった。でも、必死になにかをいおうとしているような気がした。

「なに、プライ。なにかしてほしいことあるの？」

不安そうな表情だった。ネイリンにも、こういった経験はあった。子供のころ、熱などをだしたとき、自分はもうこのまま死んでしまふんじゃないだろうか、なんて考えて不安になったものだ。プライも今、そんな状態なのだろう。普段は大人びたプライだが、こんな子供っぽいところもあるんだな。そう思って、おかしくなった。

「大丈夫よ、プライ。きっと疲れがでたのよ。お薬ももらってきたし、すぐよくなるから、安心してね」

プライは安心したのか、見ようによっては諦めたような表情にも見えたが、とにかく、目を閉じた。

「あ、だめだめ、ご飯食べないと。食欲なくても、食べないと元気でないよ。はい、起きて」

プライはなんとか身体を起こすと、食事と薬を押し込むように口に入れると、また倒れるように眠りについた。

大人びているとはいえ、子供なんだよなあ。

考えてみると、今までの行程は強行軍にすぎた。これから、プライの体力などにも気を配りながら進まないといけないな。

ネイリンは、プライの、少し汗ばんだ髪の毛を撫でた。

第一章 12 (後書き)

毎日、夜の7時に更新していきます

第一章 13

13

寝ているプライが気がかりではあったが、ずっと一緒にいなくてはいけないほどではないと思ったネイリンは、部屋を出て大広間に向かった。

——ラパルクも少し気遣ってやらないとね。
へたすりゃ、知恵熱をだしかねない。

大広間に着くと、ジーナスはかなり喜んだ。ふだん、よっぽだれにも相手にされてないのかな、そう考えて、少しかわいそうになった。

最初は、ラパルク一人にジーナスの相手をさせるのはかわいそうかと思いはじめたビリヤードだったが、やってみると面白かった。最初の1ゲームでルールを習い、2ゲーム目はラパルクと組んで、ジーナスとガチンコでやった。が、完敗。3ゲーム目も完敗。毎回、明らかに初心者ネイリンが足を引っ張っての負けだったが、ラパルクがわるいといいはり、4ゲーム目は一人でジーナスに挑戦したが、またも完敗。この時点で、ネイリンの中で、なにかが切れた。生来、だれにも負けないほどの負けず嫌いである。勝つまでは絶対やめない、そう宣言し、ビリヤードをつづけた。

ジーナスとラパルク二人でやっていたときには、さほど盛り上がってはいなかったようだ。それは、ネイリンが混ざりはじめたところのラパルクの表情で分かった。だが、ネイリンが頭に血を上らせたことを二人が面白がり、深い時間帯も手伝って、三人で妙なテンションになって、ビリヤードをやった。

楽しいながらも、プライのことが頭にあったネイリンは、途中、何度か様子を見に場を抜けたが、結局また大広間に戻って、ビリヤ

ードをつづけた。

酩酊しはじめたジーナス、彼に薦められ、初めての酒に手を伸ばしたラパルク、これまでの疲れから妙なテンションになっていったネイリン。

三人で、大広間に陣取って朝まで過ごした。

ネイリンは、二、三度うとうとし、夢うつつのまま、寝たり起きたりを繰り返した。

まどろんだ時間は心地よく、同時に、記憶がはっきりとしない。それが――怖い。

後に問題となるこの時間は、うつすら寒いものを伴う記憶となった。

第二章『鏡の中に石、あるいは鏡の部屋に意思』 1

1

ふと目覚めると、そこは大広間のソファの上だった。目の前にある暖炉の火は、半ば消えかかっており、ネイリンが起きて最初にしたことはくしゃみだった。

目をこすりながら見回すと、ラパルクがネイリンの寝ていたソファに寄りかかって寝ていた。だれがかけてくれたのだろう、彼とネイリンの身体には、毛布がかかっていた。

ネイリンは頭を抱え、ため息をついた。

ラパルクは袖のない服一枚だし、ネイリンだって、そう厚着をしていたわけではない。プライが治っても、ネイリンたちがカゼをひいたのではどうしようもない。

——なにやってんだろ……。

「お目覚めかな？」

ジーナスのひかえめな声が聞こえた。起きていたんだ。ラパルクを起こさないため小さな声でしゃべっているのかな、と思ったが、どうやら違うらしい。声のしたほうを見ると、隣のソファで、ジーナスがおでこに手を当てていた。二日酔い、というやつだろう。

「いや、昨夜はすまなかったね。なんだかつき合わせてしまつて。

お嬢さん方は、お客さんだ。本来ならゆっくりとベッドで休んでもらわなくてはならないのに」

殊勝なことをいつている。

たしかに、身体も疲れているし、今はとくにベッドを欲しているが、べつに断りきれなく遊んでいたわけではない。今までの旅で、身体もだが精神的な疲れもあった。昨夜の馬鹿騒ぎはいいリフレッシュになった。だから、後悔は……若干してるな、とネイリンはうなだれた。

「大丈夫ですか？　なんか顔色が悪いみたいですけど」ネイリンは気安い口調で聞いた。

昨夜いいことがあったとすると、ストレス発散もあるが、ジーナスと親しくなれたことだろう。ガードナー家の人間と仲良くなっていることなど、今の立場にはない。

それに、よくよく接してみると、彼は思ったほど感じのわるい人間ではなかった。兄に対するコンプレックスからくるものだと思っていた嫌味な物言いや、斜に構えた態度も、今となってはシャイな人間の照れ隠しに思えて仕方ない。ネイリンは今や、ロッテだけではなく、父親のジーナスにも好感を持つようになっていた。

「よくロッテにいわれていることだ。どうやら俺は、いつもこんな顔色をしているようだよ」といって唇を捻じ曲げる。

「きつと心配してるんですよ。でも、そういうのって、なかなか素直にいけないから」

とくにロッテは、そういうことを素直にいけない性質だろう。それは、相手のジーナスがしやすい関係を築けていない、ということもあるのだろう。

ジーナスは意外そうな顔でいった。

「君は、なんだかずいぶんロッテと仲良くなったようだな」ジーナスは髪をかきあげ、立ち上がった。そして、ネイリンを見ずにいう。「旅人ということでもないかもしれないが、よかったら、これからも仲良くしてやってくれ。あの子には、ずいぶん寂しい思いをさせているが、親がどうがんばっても、埋めてやることができないものって、あるみたいだからな」

なんだか、朝っぱらからへんな会話をしているな、とネイリンはくすぐったいような気持ちになった。妙なテンションは、まだ持続しているらしい。でも、胸がほんわかとあたたかく、わるい気分じゃなかった。それどころか、こんな一瞬のために、退屈な日常というものがある気もする。

「友だちがどうがんばっても、埋められないものってのもある気が

しますよ」

恥ずかしさを意識しながらも、ネイリンはいった。ジーナスは、ふらふらとした足取りで大広間をでようと廊下に向かっていたが、後ろ手に軽く手を振った。

第二章 2

2

ネイリンはラパルクを起こして、一緒に階上へ上がった。あてがわれた部屋に入る前に、一人でプライの部屋に入る。水飲みの水がなくなっていた。おでこに手を当てると、少し油っぽく湿ったひたいは、ずいぶん冷たかった。もう治ったかもしれない。期待を胸に、ネイリンは声をかけた。

「プライ。気分はどう？ プライ」

しかし、返事はなかった。眉をしかめ、首だけを反対側に向けた。――まだ治ってないのかな。

朝だから、眠いだけかもしれない。だが、眠り続けているものに、朝も何もないだろう。

ネイリンは立ち上がり、部屋からでた。よくよく考えると、起きたとしても特にこれといった用事はない。どうせなら、朝食を持ってきたときに、起きるまで声をかけよう。

ネイリンはプライの部屋をでて、自室に入った。身体が少し湿っぽく髪の毛もぺたんこになっていた。朝食はいつからだろう。シャワーを浴びる時間はあるだろうか。

――浴びてこよ。

何時から食事だ、といいわたされているわけでもないし、仮に遅刻したからといって怒られるようなこともないだろう。この家の人も、きれいなネイリンでいた方がうれしいはずだ。ルイーザの顔を思い出す。

――負けてらんないし。

着替えを持って、浴室に向かった。

第二章 3

3

シャワーを浴び終えたネイリンは、一人で食堂に向かった。ラパルクが、気まずそうな顔でイスに座っていた。彼のほかには、まだだれもいなかった。ネイリンは、彼を無視して厨房に向かった。

ノックをして厨房に入ると、カーテとリール、そしてカーテの息子・ロイがいた。三人とも、忙しそうに立ちまわっている。

今、何時かは分からないが、朝食前であることは確からしい。だれもいない食堂を見て、もしかして朝食を食べそこなったか、あらためてお願いするような羽目になったらいやだな、と心配していたネイリンは一安心した。

「あら、ネイリンさん。おはようございます」といって、カーテはおかしそうな顔をした。「昨夜はぐっすりとお眠りだったようですね」

昨夜はほとんど眠ってはいない。だから、朝方大広間で眠っているネイリンを見かけたのだろう。

「あ、もしかして、毛布をかけてくれたのカーテさん」

「いえ、それは息子がやりました。あたしは、噂を聞いただけ」顔をを見ると、ロイが恥ずかしそうにうつむいた。

「あなたが。ありがとう。暖かったわ」

「いえ。ほんととは起こせばよかったのかもしれないけど……」

「起こしたらしいわよ。でもネイリンさん、起こそうとしたロイを弾き飛ばしたんだって」

「うそお」ネイリンはつい大声をだした。

「うそうそ」カーテは笑いながら首を振った。「でも、いくら起こしても起きなかったそうですよ」

「おい、はなすのはいいが手を動かしてくれ」リールがむすつとし

た表情でいった。「まだまだ作らなきゃいけないものは山ほどあるんだ」

「あ、あたし手伝います」

「……じゃ、ばれないようにね。ばれちゃあたしたちが旦那様に怒られてしまいます」

テリル村で姉と二人暮らししていたときは、朝食など昨夜の残りなどが大半だったが、ここではやはり、朝から何品も作るらしい。

ネイリンは、リールの指示のもとサラダを作った。手伝っているのは、気が楽になってありがたいが、昨夜といい今朝といい、料理の勉強になるようなことはできていない。

パンにスープ、サラダにフルーツ、メインになるテリーヌができたところで、ネイリンは食堂に行くことにした。さすがに、一緒に配膳するのは好ましくない。

食堂に行くと、ラパルクのほかには、ロツテだけがいた。食堂でなにをしていたのかを、トーナスあたりに聞かれたら面倒だと思っていたので、彼らがまだきていないのはありがたかった。

「おはよう、ロツテ」といって隣に座る。彼女は今日も、お人形のような服装だった。

「おはようございます。ネイリン、もしかして食堂でお手伝いしていたのですか？」

「うん。大したことじゃないけどね。そういうことしてる方が、気が楽だから」

「そんなことされなくてもいいのに」ロツテは、笑みをもらした。

「えっと、お父さんたちはまだ？」

「ええ、朝はいつも、テーブルにパンとサラダが並んでから、お呼びに行く慣わしになっていますから」

「そうなんだ。じゃ、あたしも運ば」そういつて席を立った。

「ネイリン」眉根を寄せてロツテが服のすそをつかむ。

「いいのいいの。身体動かしてる方が楽な体質だから」

そういつてネイリンは食堂をでた。厨房に入り、パンを運ぶとい

うと、また驚かれた。

「なんだか、一週間後には、あたしたちの仲間になってそうね」

カーテの言葉を背中に、ネイリンは渡されたパンの載った盆を手
に厨房をでた。お尻で扉を開け食堂に入る。一応、二人以外だれも
いないのを確認してから、お待たせい、といって盆を少し掲げた。
ロッテが呆れたような表情を向ける。その顔を見て、今のはいくら
なんでも子供っぽかったか、と後悔した。寝不足もあって、まだテ
ンションが高い。

ネイリンは、はい、といってロッテにパンを渡した。ジーナス、
主、おじさんにルイーザ、といった順番で席にパンを並べていつて、
ラパルクの側頭部に盆をぶつけた。

「いてっ」ラパルクが頭を押さえる。「なんだよ、おまえ。おい、
おれのパンは」

「なに、あんたも食べるの？」ネイリンは、パンをラパルクに投げ
た。

彼はあわてた様子でそれを受け取った。ロッテが怪訝な顔をする。

「ネイリン、なにかあったの？」

「ううん、べつに」と応え、自分の席の前にもパンを置いた。「昨
日あんまり寝てないから、テンションが高いのかも」

「だからといって、なにもラパルクの頭にぶつけなくても……」

「ああ、それはいいの。あれじゃ、足りないくらいなんだから」
ロッテは不思議そうな顔をした。

カーテとロイがサラダと飲み物を持って入ってきた。

「そろそろ旦那様たちを起こしに行くので、ネイリンさんは、もう
座ってらしてね」

これ以上手伝われると、主たちにその様子を見られるかも、そう
思っているのだろう。ネイリンは、うん、といって席に座った。盆
はカーテに渡した。

カーテは盆を手を厨房に向かった。ロイは大広間につづく扉を開
け食堂をでていった。きつと主たちを呼びに行くのだろう。

「ネイリン、昨日あんまり寝てないって、なにしたらしたの？ もしかして、お連れの方の容態が……」ロツテが覗き込むようにいう。「ううん、プライはよくなったみたい。たぶんだけど」

「じゃあ、なにしたらしたの」

「えっと、」なんとなくいいにくい。「ロツテのお父さんとラパルクとあたしで、ビリヤードを……」

「つき合わされたのね？ まったく、お父様ったら」不機嫌そうに顔をしかめた。

「違うの、ロツテ。最初は遅くまでやるつもりなんてなかったんだけど、盛り上がっちゃって……」

「負けてばかりのお前が、一人で盛り上がってたんだろ」

ラパルクがいう。ネイリンは思いつき無視してやった。

「夜遅くまでされてたんですか？」

「うん、まあね」ネイリンは、ロツテの質問に答える。「朝方まで、休み休み……」

「んまあ」とロツテはおばさんくさい感嘆をもらした。「でもそれじゃあ、お父様は食堂にはこれないかもしれないね。遅くまで起きていたときには、そのまま遅くまでお眠りになるお方ですから」

ロツテはとげのある口調でいった。先ほどのジーナスの、娘を氣遣うような発言を思い出して、ネイリンは少し切なくなった。なにか、彼を擁護するようなことをいおうとしたところで、ラパルクがいった。

「そういえば、ルイーザさんもこないと思うぞ。昨日の夜、ジーナスさんとビリヤードをやっていると家に帰っていったから」

「そうなの？」ネイリンのいないときのことだろう。「じゃあ、早くいいなさいよ。パン置いちゃったじゃないの」

「それも、いつもの習慣なんです。でも忘れていました」

とロツテがいったところで、扉が開いた。入ってきたのは、主と、彼を支えて歩くロイだった。

食堂の中の空気が、一瞬にしてぴんと張り詰める。

主がイスに座るのを手伝ったロイが、主が落ち着いたのを見て、静かな、しかしすばやい動きで食堂をでていった。

——気まずい。

どうしてよいか分からず、なんとなく下を向いているとロッテが、ネイリンと小さな声で呼びながら袖を引っ張った。見ると、テーブル・ナプキンで作った主の顔を、膝の上においていた。その表情は、しっかり、しかめっ面になっている。

——似てる。

ぷつと吹きだして、あわてて口を押さえた。見ると、思いつ切り主と目が合ってしまった。ネイリンはあわてて、また下を向いた。横目で見ると、ロッテが涼しい顔をしている。

脇でもくすぐってやろうかと思ったが、それだとしゃれにならない反応をするだろうし、その場合は本格的に主に怒られそうな気がする。どう仕返ししてやろうか。

と、そんなことを考えているうちに、ロイが戻ってきた。そのまま主のもとに行き、なにやら耳打ちした。放っておけ、という主の小さな声が聞こえた。

「神の使いである勇者に、今日も日々の糧を与えたもうことを感謝いたします」ロイが食堂をでたのを見て、唐突に主がいった。

「お祖父様、まだお父様と伯父様がこられていませんわ」

「放っておけ」

「まだ寝ていらっしゃるんですか？」

「ジーナスはな」そう言って、パンを引きちぎった。

ジーナスは——。なら、おじさんはどうしたというのだろう。

だが主の雰囲気は、これ以上の会話をつづけさせないものだった。ネイリンはロッテと顔を見合わせ、二人で首をひねった。

第二章 4

4

四人だけの食事を終わると、主はさっさと食堂をでていった。ロツテは、午前中にやらなくてはいけない勉強があるとのこと、自室に引き上げた。昼食前には終わるから、終わったらおはなししようとのことだった。

ネイリンは食堂をで、プライの朝食と薬をもらいに厨房に向かった。厨房では、もう用意が済んでいて、すぐに渡してもらえた。

プライの部屋に行こうと大広間を通ると、ラパルクが所在なげにビリヤードの球をもてあそんでいた。勝手にさわらない方がいい、と注意しようと思ったが、放っておくことにした。あんなやつ、怒られるなら、怒られればいいのだ。

階上上がり、プライの部屋をノックする。返事はない。

部屋に入ると、先ほどと同じ体勢で、プライが寝ている。

「プライ。朝ごはん持ってきたよ」ナイトテーブルに盆を置き、ネイリンはプライを揺り動かした。

二、三度揺り動かして、やっとプライが目を覚ました。しかしまぶたもほとんど開いてはおらず、目に生氣も感じられない。

「どう、調子は？」

ネイリンがきくと、プライは力なく微笑もうと、ほほを動かした。あまりよくなってはいないようだ。ちゃんと食事もとってるし、薬も飲んでるのに――。

「だいぶ顔色がいいわ。よくなってるのね」思っていることと反対のことが口からでた。「さ、またご飯食べてお薬飲んでね。いっぱい食べて、お薬飲んで、いっぱい寝てれば元気になるから。ま、ちよつとは太るかもしれないけど」

ネイリンの顔から、自然と笑みがこぼれた。不安なのに、どうし

てこんな表情が自然とでるのだろう。

プライが弱々しくうなづき、身を起こした。また押し込むように食事をして、薬を飲み、すぐに眠った。ネイリンのいうとおり、彼は動いている。ネイリンのいうことを聞いていればよくなると信じているからなのか、身体がそういった行動を欲しているのか。頭のいいプライだが、今ばかりは意識的に、そうするのが最善だから、という理由でやっているわけではなさそうだった。

考える力など、今の彼にはないだろう。

ネイリンは、プライの手を布団に入れてやってから、床に座った。上半身を、彼の胸の横辺りにのせた。その体勢のまま、目をつぶる。プライの身体の直接上ではないが、それでも彼の鼓動がわずかに感じられて、すごくほっとした。

一瞬だけだが、ネイリンはその体勢のまま眠った。

第二章 5

5

目を覚ます。

わずかな眠りだったが、頭はいくらかすつきりしていた。だが、反対に身体的な疲れが表にでてきた感じがした。もともと疲れは溜まっていたのだ。やはり、ちゃんと睡眠をとったほうがいいのだろう。

そうは思ったが、ネイリンは借りている部屋には行かなかった。プライの部屋をでて、階下に向かう。よその家で、昼間から眠るのは、どうにも具合わるい。

大広間には、先ほどと同じように、ラパルクだけがいた。暖炉の前のソファで、首の後ろで手を組んで、ぼんやりとしていた。ネイリンは厨房に向かおうと、彼を無視して大広間を通り過ぎようとしたのだが、後ろから声をかけられた。

「よう、ネイリン。どこ行くんだ？」

無視してもよかったが、一応答えておくことにした。

「厨房よ。なにか用？」

「おまえなあ、まだ怒ってんのか？ そんな大したことじゃないだろうに」

無視して厨房に行こうと食堂に通じる扉を開けようとしたところだ。その右の扉が開き、そこからカーテとロイが姿を現した。

そういえば、厨房に行くのに、べつに食堂を通る必要はないんだ——そんなのんきなことを考えているネイリンとは反対に、彼女たちの表情は、少しだけ険しかった。

「どうしたんですか？」ネイリンがきく。

「あ、ネイリンさん。いえね、どうもしないんですが……」
どうかしたんだろうな、と思った。

「なにか手伝いましょうか？」

もともと、朝食の後片付けを手伝おうと、階下を下りてきたのである。他に仕事があるなら、それを手伝ってもいい。

「いえ、大したことはないんです。ゆっくりしてらしてね」そうカーテはいいおくと、ロイと二人で廊下につづくあの壁の穴の向こうに行った。

あの穴の向こうには、主の部屋や、ロッテたちの部屋があるはずだ。まだ行ったことはない。どんな感じなのだろうか。ロッテは、それぞれの部屋に、監視窓のようなものがついていると聞いていた。ならば、廊下に行くだけで、彼らの部屋の様子なども知れるということだ。

——後で行っちゃおうかな。

窓から手を振ったら、ロッテはどんな顔をするだろう。いや、その前に、外から中が見えるということは、向こうからもこちらが見えるのだから、ロッテの部屋が奥にあった場合は、主やおじさんなどに見つかる可能性もあるのか。

窓の下をしゃがみながらゆっくり進む自分を想像し、ネイリンはわくわくした。そういう、隠れてなにかする、というシチュエーションに、彼女は昔から弱い。

「おい、ネイリン。なにぼけっとしてんだ？」

ラパルクの声で我に返った。

「べつに。ちょっと哲学的なことを考えてたの」いいながら、ネイリンはラパルクの隣に座り、座った後でしまった、と後悔した。

——こいつとは絶交するつもりだったのに。

「はああ」無意識のうちにため息が出る。

「なんだよ、ため息なんか吐いて」

「べつに。ロッテも勉強してるし、カーテさんも忙しそうだし、暇だなあ、って思ってる」

「おれがいるだろ」

「うっとうしいだけじゃない」

「おまえなあ、」

といって、ラパルクが身体ごと、本格的にネイリンの方を向いた。ネイリンは反対側を向き、背もたれに肘をのせた。後ろから、これ見よがしのため息が聞こえる。ネイリンもため息で返した。

しばらく、そんな状態でいると、パタパタという足音が聞こえてきた。見ると、ロイが一人で大広間に入ってきた。小走りで、階段を上ろうとしている。

さっきから、いったいなにをやっているのだろう。

「ロイくん？」ネイリンは声をかける。「どうしたの？　大丈夫？」
「え、あ、はい。大丈夫です」

ロイが階段で立ち止まり、律儀に振り返る。その初々しいさまが、プライやロッテとは違って、とても子供らしい。やっぱり子供はこうじゃないとな、とネイリンは微笑ましく思った。

「でもさっきから、なんかあわただしいけど……。なにしてるの？」

「えっと……」ロイは、はなしてよいものか迷ったらしかったが、結局口を開いた。「トーナス様の姿が見えないんです」

トーナス様とは――。一瞬分からなかったが、そういえばカーテとの会話の中でもでてきた名前だった。ジーナスの兄、つまりロッテのおじさんだ。

「そうなんだ。どこかでかけたんじゃないの？」ネイリンは立ち上がって、ロイのところに向かった。距離が開いていて、なんとなくはなしにくかったのだ。

「でも、そんな話はきいてないですし……」

「子供じゃないんだ。黙ってでることもあるだろう」ラパルクも立ち上がりついてくる。

「だれにもいわずに家をでるということは、今まではなかったみたいですけど……」

子供じゃないが、自由にふらふら行動できるほど、無責任な立場でもないのだろう。

「散歩とか？」ネイリンは、思いつきいってみた。

「外は雨が降っています。トーナス様は雨が嫌いなお方だから、それはないと思うんですが」

いわれて窓に目をやると、たしかに水滴が窓をぬらしている。昨日からの雨が、しつこく降り続いているようだ。

「ラパルク。昨日ルイーザさんが帰ったといってたけど、一緒にでていった？」

「いや。あの人を見送った後は、そのまま自室に戻ったみたいだったけどな」

ふうん、とネイリンは相槌を打った。大人の姿が一人見えないぐらい、どうってことない気もするが、状況から考えると、多少自然で、気にならないこともない。家のものだと、それがたとえ使用人だとしても、感情や事情も絡むから、なおさらかもしれない。

「あ、じゃあぼく、上を見てまいりますので。ご心配ありがとうございます」

「あ、うん」といって、ネイリンは階段の下から彼を見送りかけたが、ふと思いつき、一緒についていくことにした。どうせ、なんにもすることはない。「あ、あたしも行く。プライの様子も見たいしね」ネイリンが階段を上ると、当たり前のようにラパルクもついてきた。

「あんたはいいのよ、べつにこなくても」

「おれだって、プライの様子気になるしよ」

「そのわりには、さっきまでぼさっと呆けてたじゃない」

「うるせえなあ」ラパルクは耳に指を突っ込んで、そっぽを向く。

大広間の吹き抜け部分を歩き、廊下に入る。その曲がり角には、左手にあの部屋がある。しかし、ロイはその部屋を無視して角を曲がると、右側にばかり並んだ扉の、一番手前のものを開けた。ここは物置である。ロイがすぐに扉を閉める。後ろから見ていたが、だれもいなかった。

つづいて、次の扉を開ける。浴室と洗面台などがある部屋で、先ほどまでネイリンがシャワーを浴びていた部屋である。ここは一見

ただけでは分からないので、ロイが部屋に入った。ネイリンもなんとなくついていった。だれもない。

次の部屋はプライの部屋である。この扉の前まできて、ロイはネイリンを見上げた。

「あの、ここから先の部屋も、できれば確認したいのですが……」

「ああ、うん。いいよ」

ネイリンが答えることでもないかもしれないが、べつに不都合もないし、そもそも部屋を借りてお世話になっている身だ。わざわざ確認してくれるロイは、紳士的だといえる。

ふと、この屋敷に住む大人の男たちの顔が浮かんた。彼らに、今のような気遣いができるだろうか。紳士とは、後学的に身につけたしなみのはずだ。だが、この屋敷の男たちを並べてみると、年とともに抜け落ちていくもののように錯覚してしまう。

ロイが扉を開けた。プライが眠っているのが見えた。

「クローゼットを開けてみてもいいですか？」ロイがきく。

そこにいたって、はじめてネイリンは、事態を理解しつつあることに気づいた。

よくよく考えてみると、この家を事実上動かしている人間が、物置などにいるはずがないし、二階の洗面所にいることだって、ふつうは考えにくい。そういったところまで、当たり前のように見てまわるロイを見て、もっと早くに気づいてしかるべきだった。

トーナスの姿が見えないのは、かなり不自然な状況なのだ。

とはいえ、やはり物置やクローゼットの中にも思えないのだが。

「どうぞ」ネイリンが、ロイをうながす。

ただ、どうせ探すなら、徹底的にやったほうが、限定条件がはっきりし、この後考えなくてはならないことも、明確になるだろう。

——まあ、あたしは関係ないんだけど。

ただ、暇はつぶせているなあ、なんて考えているネイリンである。

第二章 6

6

プライの部屋には、当然のことトーナスはいなかった。

続いて入ったネイリンの部屋に、トーナスがいないことを確認した後、ネイリンは二人と別れプライの部屋に戻った。三人で行動する必要もない、二人が部屋を見回っている間、プライの様子を見ておいてやろう——そう思ったのだ。

「やはり二階にはいないようです」見回り終えたロイが、部屋に入ってくるなりいった。

「そう……」

「どこに行ったんでしよう……」ロイが、心細げにいう。

「とりあえず、下に行ってみましょう。カーテさんが、見つけているかも」

「下にも、いなかったようなんですが」

二階にもいなかった。下にもいなかったら、いったいどこに行ったというのか。

だがこの時点で、ネイリンは、さほど不思議にも感じていなかった。

不自然ではあっても、大の大人だ。心配することはない。ただ、ここにきて、気になりだしたことはあった。好奇心が再燃した、といった方がよいか。

そう、自分たちには、まだ探していない場所がある。

三人は、階下に向かうため、廊下に戻った。その曲がり角。

あの鏡が封印された、あの部屋。

この部屋は、探してもいなければ、話題にも上っていない。

ネイリンは、しかしその部屋のことを指摘しなかった。この部屋は、開かないことになっている。だから、トーナスがいるはずもな

いことになっている。そして、ネイリンたちは、この部屋についても知らないことになっている。まだ、ふれるタイミングじゃない。だが、トナスがこのまま現れなければ、この部屋に自然と関われるチャンスがでてくるかも――。

「なあ、ロイクくんか？ この部屋探してないけど、」

ネイリンは、肘で思いつきりラパルクのわき腹を突いた。

「う！」ラパルクが息をのむ。

「え？」ロイがきよとした表情でラパルクを見上げ、その後心配そうな顔をした。「どうしたんですか？ 大丈夫ですか？」

「うん、平気平気」ネイリンが答える。そして考えた。この後、どのような立場をとったらいのだろう。この部屋については知らないことになっていたのに。

「この部屋にはいません。ここ、開かずの間なんです」ロイがなんてことないようにいった。

「え、あ、そうなんだ」彼のいいかたに、ネイリンは肩透かしを食ったような気分になった。

この部屋は、タブーじゃなかったのか。

ロイが、心配そうな顔でまだラパルクを見ていた。

「大丈夫大丈夫。行くよ、ほら」ネイリンは、青い顔をしながら腰を曲げているラパルクの肘に自らの肘を絡ませて、引っ張るようにして歩きだした。この部屋の前には、あまりいたくない。

大広間の吹き抜けの部分まで行くと、下からロイを呼ぶカーテの声がかこえた。ロイが小走りで階段を下りた。二人つきりになったのを気に、小声でラパルクに文句をいった。

「ちょっと、なんであの部屋のこときいたのよ。そのことは、あたしたち知らないことになってるんだよ」

「馬鹿だな。だからこそ、きかないと不自然になるだろ。なんでこの部屋は調べてないのに、この人たちはそのこと気にしないんだろうって、ふつう変に思うぞ」

いわれてみれば、たしかにそうだ。ロイの様子から、まだおかし

くは感じていなかったようだが、そのうち疑問に思うかもしれない。
この場合は、彼のいうようにきいたほうが、あの部屋のことを
知らないものの行動としては自然なのだ。

「なんか、あったかいものでも飲みたいね。紅茶とか……」

「おい、あやまれよ。じゃなきゃ、あのこと帳消しな」

「小突いてごめんなさいでした」

第二章 7

7

大広間に下りると、カーテとロイがはなしていた。

「やっぱり、下にもいなかったんですか？」ネイリンがカーテにきいた。

カーテがロイを、かるくため息をつきながらにらむ。

「お客様に、ご心配やご面倒をかけちゃいけないでしょ」

「ごめんなさい」

「あ、すいませんでした。あたしからしつこくきいたんです。ですから、ロイくんを責めないでください」ネイリンが二人にわって入る。

「ネイリンさんは、優しいわね」カーテが笑う。「厨房でお茶でも飲みましょうか。ちよつとのど渇いちゃったわ」

いって、カーテは扉に向かった。

「もういいんですか、探さなくて」ネイリンは、あとを追いながらきく。

「うん。といっても、探せるところは全部探したしねえ。やっぱりおでかけになったになったんでしょう」

そういうながら右側の扉を開ける。ネイリンは、こちらから入るのは初めてだ。といっても、食堂側から入ったときと同じように、やはりオープンスペースにでる。というか、扉自体は、角をはさんで隣り合っているのだ。大して意味のない扉な気もするが、食堂を通らなくてもこちら側にでられることに意味があるのだろう。

そのまま厨房に向かう。ラパルクは、こちら側に入るのが初めてだから、きよろきよろしている。

厨房の中では、リールが皿洗いをしていた。もう終わりにかけていて、洗ったものを拭いている段階だった。

「リール。お茶四人分ね」カーテがいつて、テーブル席に座る。

「ずいぶんと上からいつてくれるじゃないか。それより、どうなったんだ。トーナス様はいたのか？」猛烈な勢いで皿を拭いている。

「ううん。それがどこにもいないのよ。あ、ネイリンさんたちも、どうぞ、座つて。あ、そういえば、ラパルクさんはリールと会うの初めてじゃなかったですか？」

「はい」座りかけていたラパルクは、立ち上がりリールの背中に向かつていつた。「ラパルク・バナといいます。よろしく」

「ああ、よろしく。リールだ。背中越しにすいませんね。早いところ終わらせたいんだ」

「昨日の晩飯、あれうまかつたですよ」ラパルクにしては、めずらしくそんなことをいつた。本来、食べ物の味についてコメントすることなどまずない。

「ありがとう」後ろ姿だが、ちよつとうれしそつだ。

皿を拭き終わり、お茶の用意をし、お湯を火にかけてからリールもテーブル席についつた。

「おお、そんなごつい人だつたか。声のイメージとはずいぶん違つた」リールは席につくなりいつた。

「よくいわれます」ラパルクが応える。彼は、見た目とは裏腹に、声は甲高い。

「ねえねえ、そんなことより、」とカーテが口を開いつた。「トーナス様、どこにいつたんだらうね」その顔は、心なしかうれしそつだ。ううん、と一同首をひねる中、彼女はこつづつけた。

「あたし思つただけだね、ルイーザさんのどこにいつたんじゃないの？」

「そうなんですか？」ネイリンが、合いつの手を入れる。

「いや、根拠はないんだけど、でもそれ以外に考えられる場所もないし」

ないのかどうかは、トーナスのことをほとんど知らないネイリンには分らない。

「しかしなあ、そんな雰囲気でもないような気がするがなあ」とリール。それは、今がどうこう、という意味ではなく、二人の関係性において、そんな雰囲気ではない気がする、という意味のようだった。

二人は十分に大人だし、ドライな関係だろう、という認識なのだろうか。

「でもさ、急に会いたくなっちゃって、雨の中だれにもいわず家までた、なんて、なんか素敵じゃない？」

そうだろうか。ネイリンは、おじさんの意地のわるそうで、実質一辺倒、といった顔を思い出し、ぶるった。

「今まではさ、ほら、なんかルイーザ様の一方的なアプローチの末、みたいな感じがあったけど、その情熱がトーナスの気持ちを、本当の意味で動かしたのかな、って考えたら……ねえ？」

ねえ？　といわれても困る。

カーテの言葉に、だれもなにもいわなかった。ネイリンやラパルクには、コメントできるほどの立場も情報もないし、リールやロイも、そういったことについていいやすい立場にはない。ほんとは、カーテだって、雇い主の噂話などしていい立場にはないはずなのだが、そういったことを彼女は気にしている感じではなかった。

カーテのこのあけっぴろげな感じは、周囲のものをリラックスさせる効果があって、ネイリンも好感を持っているのだが、自分はどういった人になりたくないな、とも心のどこかで思っていた。

この性格が彼女特有のものならいいけど、女性が年をとったら、必ず獲得する性質だったら嫌だな、と思った。そうじゃないと信じたいが、カーテっぽい女性は、テリル村でもよく見かけはしたのだ。それも年配の女性ばかり。ネイリンは、またぶるった。

それにしても、とネイリンは思う。最初大広間で小走りのカーテを見たときは、なにか心配げだったが、今となっては心配の「し」の字もない。よくよく考えたら、心配するほどのことではないと思inaおしたのか、心配してもしようがないと思直したのか、ロマ

ンチックなことを思いついて、その妄想の虜になっているのか。

おそらく最後だろう。妄想というのは楽しいし、最悪の想像をするよりかは健康的だ。かくいうネイリンの頭も、先ほども、ある妄想に取りつかれていた。

それは、あの封印された部屋にトーマスはいるのではないか、というものだ。

カーテの妄想と同じように、大した根拠はない。ただ、その部屋だけ調べていないから、というふうに過ぎない。いや、そう想像した方が楽しいから、といった方が正確なのかもしれない。だから、できれば話もそっちの方に持っていきたいと考えている。だがそれは、なかなか難しそうだった。あの部屋について、知らないことになっているのがやはり辛い。

ラパルクのいうように、知らないからこそ、純粋な表情を装って、あの部屋についてふれる、という方法もあるにはあるが、それはやはり賭けでもあるのだ。ロイとは違って、カーテもリールも大人だ。この屋敷のタブーに関わるあの部屋について部外者が口にしたとたん、今の好意的な態度を一変させる、ということも考えられる。

ネイリンがそんなことを考えている間も、場は進んでいた。カーテは、相変わらずトーマスの、そしてこの家の住人の、ほほえましい、というレベルの噂話を。リールはお茶を入れ、カーテの話に相槌を入れ、お茶請けをだし、とかいがいしく動き回っている。気づいたら、ラパルクもリラックスした様子で、ときおり会話に口をはさんだりしている。ネイリンと同じように、彼もここが気に入ったようだった。

わるい雰囲気じゃなかった。今あの部屋について口にするのは、やはり利口じゃないな。ネイリンは、あの部屋のことを忘れ、カーテの噂話に付き合うことにした。

第二章 8

8

しばらく五人で、世間話をしていると、ベルの音がきこえた。

「あ、旦那様がお呼びだから、いかなくちゃ」とカーテが立ち上がった。

ベルをよく見ると、その上に糸がつながっている。主の部屋で、それを引っ張ればベルが鳴る、という仕掛けだろう。

場の主導権を握っていた、というかほとんど一人でしゃべっていたカーテが立ち上がったことで、なんとなくお開きにしようかという空気になった。ネイリンたちは、特にすることも無いが、彼らは、これからお昼の用意をしなくてはいけない。

ネイリンは手伝おうかとも思ったが、プライの様子も、そろそろ見に行きたかったので、いったん、厨房をでることにした。

ネイリンとラパルクは、カーテとともに大広間まで行き、そこで分かれた。

二階に上りプライの部屋に入ると、彼は先ほどと同じ体勢のまま眠っていた。

「プライ、どうなんだろうな」ラパルクが、彼の顔を覗き込みながらいう。

「どうって……。顔色はよくなってる気がするけど」

「とりあえずは、様子を見るしかないか」

「うん」ネイリンは、イスに座ってから口を開いた。「ねえ、ラパルク」

「あん？」彼も、向かいの席に座る。

「ロツテのおじさん、どこ行っただらうね」

「どこ行っただって、そりゃ、さっき、ルイーザさんのところじゃないか、って話になったろ」

「カーテさんはそう思ってるみたいだけど、べつに証拠はないじゃない？」

「証拠っておまえ。べつに、どうだっていいことだろ？ おれは、興味ないけどな」

「ほんとに？ ラパルク。ロッテのおじさん、あの部屋にいるんじゃないかな、とか思わない？」

ネイリンがそうきくと、彼はいぶかしそうな表情をした。

「思わねえよ。さっきは、それ聞かないと不自然だっていう理由でルイにきいたただけだ」

「でも……」

「でももへったくれもねえよ。あの部屋は入れない部屋なんだぞ。いるわけないだろ、そんなところに」

——いるはずないからこそ、いたら面白いと思わないもんかなあ。

「そうだけど……。でもさ、入れないっていうのは、ロッテがいつてるだけじゃない？ ほんとは、どうにかすれば入れるのかも」

「例えば？」

「例えば……」べつに、なにか案があるわけじゃない。「あの鍵の入ったケース、あれ実は、鍵がかかってないとか」

「ケースの鍵がフェイクって？ 何でフェイクにする必要がある？」

「知らないけどさ」思い付きでいっただけだ。「でもなんかなあ、腑に落ちないんだよね」

ラパルクは、肩をすくめて先をうながした。

「だってさ、あの部屋封印するなら、あのケースとか要らないじゃない。あの部屋の鍵を主が持っていればいいだけでしょ？ あの部屋の鍵の入ったケースの鍵を主が持ってるのって、二度手間っていうか、なんかわざとらしい」

「たしかにな」ラパルクは手を組む。「だがなあ、だからといって、あの部屋にトーナスさんがいるとはかぎらないだろ？ それとこれとは別問題だ」

別問題といえど別問題だが……。

その後、ネイリンとラパルクは、昨日からのことをいろいろとはなした。もっぱら、話の内容はルイーザさんのことだった。彼女のフィアンセが行方不明だから、というわけでもなく、彼女の存在は、けっこうインパクトがあったからだ。

あんな人って、なかなかいないよねえ——みたいなことを、二人でいいあった。しかし、そういった議論の末、重大な事実が発覚した。どうやらラパルクは、彼女が嫌いなタイプではないらしい。

男はみんな馬鹿なんだな、とネイリンは一人がっかりする。

第二章 9

9

しばらくプライの部屋で、ラパルクとはなしていたが、せまい部屋で二人つきりだと（いうほどせまくはないし、寝ているとはいえプライはいるのだが）、なんとなく息がつまる感じがあって、大広間に下りることにした。そろそろ、お腹がへってきたというのもある。

大広間の暖炉前のソファで、二人で待っていることにした。

しばらく二人で、昼食はなんだろうね、みたいな無意味な会話をしている、突然、声がかえった。遠くからきこえていて、なんといっているのかは分からなかった。だが、どこともなく不安にさせる声質だった。

ラパルクと二人、目を合わせた。

「なんだろう、今の？」そういつて、ネイリンは立ち上がる。

「さあ、なあ」座ったままだが、前の方に重心を移す。「行ってみるか？」

そんな感じで、悠長とも、優柔不断とも取れる反応しかできなかったのは、しばらくだらけていたせいだろう。身体が、まだのんびりしたがっている。

どうしようかと、ただ考えるだけの無為な時間は、しかしすぐに終わった。ロッテが、大広間に走りこんできたのだ。

「だれか！」そういつたあとで、彼女はネイリンたちに気がついた。

「あ、ネイリン、ラパルク。お父様が大変なの。どうしよう……」

ロッテらしくない取り乱しようだった。彼女のそんな様子を見て、ネイリンまで動揺してしまい、瞬間、口が開かなかった。

「なにがあったんだ？」口を開いたのはラパルクだった。

「あの、一緒にきてください！ わたくし……」

「分かった。おれたちだけで、事足りるのか？」

「え？ えっと……ううん、できれば、カーテたちも、」

ロツテがそこまでいったときだった。昼食の用意ができた、という知らせでもいいにきたのだろうか、ロイが食堂につづく扉から現れた。

「ああ、ロイくん、いいところに」ラパルクはそこまでいって、ロツテを見た。現状をまだ理解していない自分がいうより、ロツテにいわせたほうがいいと判断したのだろう。

「ロイ。お父様が自室で倒れているの！ カーテとリールを呼んできて！」

——倒れてる？

「倒れてるって、どうして？ 呑みすぎたの？」ネイリンはきく。

「分かりません。でも、窓を叩いても反応がないし、扉も開かないから」

そのロツテの言葉をきいて、ロイは激しくうなづくと、一目散に扉を抜け戻った。

「とにかく行ってみよう」ラパルクがいう。

お願いします——そういつて、ロツテが小走りで廊下に向かう。スカートが長すぎて、大腿では走れないみたいだった。ネイリンは、少しじれったく思った。

大広間の角にある、穴。そこに入ると、二階と同じように、すぐに曲がり角があって、左手にやはり過度なデザインの扉。ここも表面がでこぼこしている。ぼんやりと、ここが主の部屋だろうか、とネイリンは思った。角を曲がると、まっすぐに廊下がつづき、これも二階と同じように、右側ばかりに扉が並び、二階との違いとしては、その間に窓が並んでいた。

ロツテを先頭に、三人は走った。廊下の真ん中あたりまできたときだ、ロツテが急に足を止めた。中途半端に思える場所だった。

「ここが、お父様の部屋です」そういつて、少し遠巻きに扉を指差す。彼女の様子は、おびえているようだった。

ラパルクは一人前にでて、扉を越え窓から室内を見た。すぐに血相をかえ扉に戻ると、ノブを回した。回らない。ネイリンはロッテをおいて、ラパルクを追い越し、窓をのぞいた。

ジーナスが、部屋の真ん中で、横臥していた。一見して不自然な体勢で、不安感をあおる。だが、こちら側に背中を向けていて、表情は見えない。

「ジーナスさん！ 大丈夫ですか？」

ネイリンが窓を叩くと、ラパルクも横にやってきた。

「扉は開かない。鍵がかかっている。窓はどうだ？」素晴らしいながら、自分で、窓を片っ端から引いてまわる。「だめだ。ここも錠がかかっている」

「ジーナスさん！ どうした？ 大丈夫か？」ラパルクが、強めに窓を叩く。

ジーナスの反応はなかった。

「どうしよう……」ロッテは、心細げにつぶやくと、ネイリンの横にきて服のすそをつかんだ。

こういうとき、きつとプライなら、冷静に最善の策をすぐに考えつくだろう。だが、ロッテにはそれができないようだった。彼女は頭がいいように見えて、ふつうの女の子だったのだな、そう思って、ネイリンは急に胸が苦しくなった。

自分たちがなんとかしないと、そうは思ったが、ネイリンの頭もまた回らなかった。どうしよう、という言葉と、ロッテのためになにかをしなくては、そういった思いだけが胸の内で渦巻く。

「どうしました！」カーテの声がきこえた。

見ると、カーテが息を切らしながら走ってくる。ロイもその陰に隠れるように走ってきた。

「ジーナスさんが倒れてるんだ！ カーテさん、この部屋の鍵は？」ラパルクが叫ぶようにいう。

「いえ、」カーテが、言葉をつまらせた。「マスターキーはありません。それより、倒れてるって、」ネイリンの横まできた彼女は、

部屋の中を一瞥して息をのむ。

「マスターキーがない？　じゃ、」とラパルクがいったときだった。
「お祖父様……」ロッテがつぶやくようにいった。

彼女の視線を辿ると、窓を通して、小雨の降る庭に、黒のレイン・コートを着た主の姿が見えた。スコップを肩に担いでいるイボーと一緒に向いた。ラパルク、ネイリン、ロッテ、カーテ、ロイが勢ぞろいして、おそらく全員の表情が尋常ではないのだ。彼はいぶかしそうにしながら、イボーを伴いこちらへきた。そして、部屋の前まで来ると窓をのぞきこみ、普段からの険しい顔を、いつそうのものにした。

ネイリンは、目を細めた。向こうの窓の錠は開いているのではな
いか、と思ったのだ。目を細めると、遠くのもの輪郭がわずかな
がらに、はつきりとする。

錠はかかっていた。

向こうから主が、イラついた視線を向けてくる。なぜお前たちは
入らない、そういつているようだった。ネイリンは、ジェスチャー
で、開かないんです、と伝えた。

「だめだ、向こうの錠もかかっている」ラパルクは、振り返ってカー
テにいった。「もしかしたら、一刻を争うかもしれない。これから
鍵を取りに行ったら時間がかかる。主に黙って窓を割ってもいいか
？」

「それは……」カーテはいいよんだ。

彼女の一存で決められることではないだろう。とはいえ、今は緊急
事態だ。ふつうなら、彼女もうなづいていたと思う。だが、部屋
をはさんで当の主が見えているのである。そのような状況では、勝
手な判断はしづらいのだろう。

ラパルクも、そういったカーテの心境に気づいたようだ。窓ガラ
ス二枚越しに、なんとか庭の主に意思を伝えられないかと、ボディ・
ランゲージをはじめた。

だが、不思議な動きのラパルクを、主はまったく見ていなかった。隣のイボーに、なにかをいったようだ。イボーはうなづくと、手にしていたスコップを振りかぶった。

ロツテも見ていたようだ。ネイリンに抱きついてきて、胸の中で小さな身体をさらに縮ませる。ネイリンは、彼女の身体を、しっかりと抱きしめた。

ガラスの割れる小さな音がした。

イボーの割り方は豪快だった。こちら側よりも窓が小さいから仕方ないのかもしれないが、ガラスの真ん中を横切る棧にスコップを打ちつけたのだ。棧に面したガラス四枚が、一気に割れる。彼はスコップを投げ捨て、ガラスが割れてできた空間に手を差し入れると、鍵を回し開けた。

彼の一連の行動に、迷いはなかった。

イボーは、窓枠だけになった窓を開けると、窓の縁に足をかけ、室内に入った。

ラパルクはそれをみて、窓ガラスを叩いた。

「おい、こっちの鍵も開けてくれ」

だがイボーはそれを無視して、主に手を差し伸べた。主は老体に鞭打つ感じで、窓枠に足をかけた。イボーが主の手を引き、彼の身体を引っ張り上げ、抱きしめるようにして室内に引き入れた。

ラパルクは、なおもガラスを叩こうとして、やめた。

彼が入ったところで、とくになにができるわけでもない。もう主が入っているのだから、あせる必要もないのか、そう思ったのだろう。

イボーの手助けで、やっと入った主は、まっすぐにジーナスのもとへ向かうと、しゃがみこみ、彼に向けて手を差し伸べようとして、動きをとめた。

そのときの主の表情は、今までにないものだった。心配とか不安とか、思案とか動揺とか、そういった結果がでていないときにする、あいまいなものではなかったのだ。

彼のこの表情を見て不安が増した。

ジーナスの様子は怎なのだろう。

今までネイリンは、本当のところ、それほど心配はしていなかった。いや、正確にいうなら、心のどこかで、心配したが実は酔いっぶれていただけでした——そんな未来が待っているような気がしてしょうがなかったのだ。

酒びたりの生活を過ごしているらしい、ふだんのジーナスの様子も、そんな予想を自然なものにしていた。

だが、先ほどの主の様子は、そんな楽天的な予想をさせないものだった。

もしジーナスが酔いっぶれただけだったら、あの主が、こんな顔をするだろうか。

主が、恐るおそる、といった感じでジーナスの身体に手をかけた。そして、上向きにして上半身を抱きかかえる。

——なに、あれ？

最初そう思った。どうしてそう思ったのか分からない。疑問の余地なんかない。なにがあったか、すぐに知れる状況がそこにはあった。

主が抱えるジーナスの胸には、ナイフが刺さっていた。そこから血があふれていて、白いシャツを黒く染めている。なにがあったかは、一目瞭然のはずなのに、すぐには理解ができなかった。

だが少しづつ、現状が頭に染み込んでくる。そこから連想される単語が、泡のようにぷくぷくと沸いてくる。

事故——？

そんなわけではないだろう。

自殺——？

違っだろう。可能性はゼロではないが、あの刺さり方は——。

まるでだれかに、いや、間違いない。だれかに刺されたのだ。

ヒィッ——と息を飲み込むような音がきこえた。ネイリンに抱きついていたロッテだった。彼女はネイリンの服を強く握り締め、頭

を彼女の胸に押し当ててきた。

ネイリンは、彼女の後頭部に両手をやり、自分の側に押し付けた。頭の中が空になっていくのを実感していた。

そして、開いた空間を埋めるように、ネイリンの深いところから湧き上がる過去の記憶。

だめだ、今この記憶を再生させては。

ネイリンは、意志の力で、自分の思考を制御するように勤めた。

深く息を吸い、吐く。

冷静にならなくては――。

ネイリンは、部屋の中に視線を向ける。

主が、イボーに向かってなにかをいつていた。彼の言葉を受けて、イボーがこちらにきた。扉の向こう、あるいは中で、カチリ、と音がした。

第二章 10

10

待ちかねたように、ラパルクが扉を開けた。躊躇なく中に入る。ネイリンは、胸の中のロッテに意識を向ける。彼女はまだ震えていた。

ネイリンは、口元に手を当て蒼白になっているカーテに目を向け、ロッテを――といった。

カーテは、ネイリンからロッテを受け取ると、大丈夫ですよ、大丈夫。そういつて、抱きしめながら頭を撫でた。その横にいたルイが、おそろおそろ、といった感じでロッテの背中を撫でた。

ロッテは友だちだ。そうネイリンは、言葉にして確認した。許せない。彼女に恐怖を与え、悲しみを与えた人間を。そう考えた。そして、ロッテを抱きしめ、少しでも安心を与え、守ってやりたい、とは考えていない自分を認識した。

いくばくかの自己嫌悪とともに、ネイリンは、自分の本質的な人格が、オフエンシブなものであることを再認識した。

ネイリンは一度頭を振り、室内に足を踏み入れた。

部屋の中は、生臭いようなにおいがした気がした。気のせいかもしれない。

ジーナスが、部屋のほぼ真ん中で横臥している。胸から、ナイフの柄が生えている。赤黒い染みがそこを中心に広がっている。ネイリンは、ちらりとそこに目をやってから、すぐに目を逸らした。

彼の傍らには、主が力なく、といった感じで座り込んでいた。ジーナスを抱きかかえている。されるがままのジーナスの胸ポケットから、なにかがでていた。棒状の木だ。なんだろう、そう思ったときだ。ラパルクが、隣で腰を下ろし、手を伸ばしてそれを取った。

棒の先に鍵がついていた。

——この部屋の？ ……………？

「さわるな！」主の横にいたイボーが、激しい口調でいいながら、ラパルクの手を叩いた。鍵が落ちる。「ジーナスのこと、おまえ、なにも分かっているかい！」

主はなにもいわなかった。

険しい顔に見えたが、近くで見ると、茫然自失といった感じの表情にも見える。

そんな主のかわりに、ジーナスを守らなくてはいけない、そう思っ
ての、イボーの言動だったようだ。

「わるかったよ」そういつて、ラパルクは気まずそうな顔をしながら、鍵を元の場所に戻した。

見るともなしに、彼らのやり取りを見ていたネイリンだったが、なにか違和感を感じていた。胸騒ぎ、といいかえてもいい。

ざわつく。胸の内。頭の中で。

その正体を見極めようとすると、今ジーナスを取り巻く環境の条件が、頭に浮かんだ。

扉の鍵はかかっていた。こちら側の窓もまた鍵がかかっていた。向こう側の窓も同様だった。そして鍵は、部屋の中で死んでいたものが持っていた。

ならば、どうやって彼を殺したのだ？

殺した人間は、どうやってここからでていったんだ？

理屈に合わない。そもそも、殺人ではないのか。——いや、今朝のジーナスの様子から、自殺はないと思うが……。

ネイリンは、ラパルクをみた。彼は瞬間彼女と目を合わすと、目を逸らし、部屋を見回した。そして、主たちが入ってきた窓枠に近づく。

部屋に入ってきたものの、ネイリンは、なにもすることがなかった。

なにをしていいかが分からなかった。

ただ、頭だけは、混沌としながらも、一人でに猛烈な勢いで回転

していた。

第二章 11

11

ネイリンは、ひたいに手を当てた。若干、熱を帯びている気がした。頭の中で、なにかが動き回り、熱を放出しているイメージが浮かぶ。

だが、なにも結論らしきものは、頭の中に見当たらない。混乱とは、こういった状態なのか、とだけ思った。

「全員、大広間に集めなさい」深く息を一つ吐き、主がいった。

ネイリンは顔を上げた。主がイボーの肩に手をかけ、立ち上がる場所だった。

大広間に行かないと――。

ネイリンは、ぼんやりとした顔で、主たちの後について部屋をでた。部屋をでるとき、背中を叩かれた。

「しっかりしろよ」見るとラパルクが険しい顔で立っていた。「らしくねえぞ」

ラパルクに、あたしのなにが分かるというのだろう――。

反射的にそう思い、反発の気持ちがわいてきた。

だが、どう反発していいのかが分からない。彼の言葉の、どこにイラついたのかが分からないのだ。

自分の気持ちが、よく分からない。

ネイリンは、ハア、と一度ため息をついてから、自分の心の中に目を向けた。

よく分からない――というより、混沌としていて、客観的に評価して複雑だ。

感情と疑問。情報と思考。

それらが同時に噴出し、処理に追いついていない状況のようだ。順番に、一つひとつ整理していかないと。まずしなくてはいいけな

いこと。

それは――。

決まっている。ロツテのそばに行かなくては。

ネイリンはロツテを探した。彼は、イボーに抱きかかえられていた。表情がなかった。

気を失っているらしかった。

第二章 12

12

大広間につくと、まずはイボーがロッテをソファに寝かせた。主が、もう一つのソファに腰掛ける。ネイリンは、迷ってから、ロッテの寝ているソファの前にひざまずき。彼女のケアに、まずは努めようと思った。

ネイリンがロッテのそばにいるのを確認してから、リールを探してまいります——とカーテが口を開いた。

「ルイ、あなたはトーナス様を探してきなさい」

いわれたルイは、なにかいいたそうにしたが、結局口をつぐんだ。

「トーナス、いない」イボーが口を開いた。「さっき、リールにきいた」

「トーナスは、まだ帰らないのか？」主は、杖を身体の前で立てている。

「といますか、どこかにでかけたかどうか分かりません」

カーテが、泣きそうな顔でいう。彼女の顔を見て、遅まきながらネイリンも気がついた。

ジーナスの死により、トーナスの不在は、またべつの意味を持つに至っている。

彼の行方不明がなにを意味するのかは、まだ分からない。だが、ジーナスの死だけを悲しんでいられない状況になるのかもしれない。

カーテの表情は、そのようなことを予感してのものなのだろう。

「なら、探せ」主はいった。低い声だった。

「イボー、下を探す」彼は、力強い声でいった。イボーだけは、この異常事態下で、いつもとかわらなかった。「ジーナスにも、会いたい」

「イボー、ジーナス様は……」カーテがつぶやくようにいう。

「ジーナス、寒そうだった。なにかかけてやりたい」

イボーは、事態を正確に理解していないとカーテは思っていたようだが、彼は彼なりの理解と心配をしているらしかった。

カーテは、イボーの言葉をきいて、我慢ができなくなったように、言葉をつまらせながら、エプロンから取り出したハンカチを目元に当てた。

「さっさと探してこい」主は、短くいった。

彼の言葉を受けて、カーテは厨房につづく扉へ向かった。ルイは階段を上り、二階へ。イボーは、住人たちの部屋につながる廊下に向かった。

大広間には、物いわず床を見つめつづける主、ソファで眠るように気を失っているロッテ、三人からは少しはなれたところで腕を組んでいるラパルクと、そしてネイリンだけが残された。

プライは、どうしたらいいだろう。

ロッテが心配だから、今は動けない。彼は病気なのだから、そっとしておいた方がいいだろう。……本当にそうだろうか。危険はないのか。そこまで考えてぞっとした。この屋敷には今、ジーナスを殺した人間が、まだいるかもしれないのだ。ならば、一人でいるプライは危険かもしれない――。

「ラパルク」不安げな顔から、意図が伝わったらしい。彼は、思いのほか冷静なようだ。

「ああ、プライの様子を見てくるよ。ただ、心配はいらないと思う。あいつは寝ていただけだ。危険に合う筋合いにない」

その言葉をきいて、主がピクリと動いた気がした。殺された息子に対する非礼と取ったのかもしれない。だがラパルクは、そんな主を気にかけて様子もなく、落ち着いた足取りで階段を上っていった。

大広間は、三人になった。

ネイリンは、少し不安になる。

もし、主がジーナスを殺した犯人だったらどうなるのだろうか――。そんなわけはないのは分かっている。彼はジーナスの父親だ。そ

れに若いジーナスを相手にするなど、物理的にできることではない。感情面でも体力面でも、ありえないのは分かっていつつした想像だが、思考はつづいた。

仮に彼が犯人だとしても、危険はないだろう。ネイリンだって、腕に覚えがないわけではない。老人と戦って負ける気はしなかった。だが、人を殺してしまえるほどの、ある意味での覚悟を備えた人間を前にしたとき、自分はいつもとおり戦えるのだろうか――。

思考はつづく。

ジーナスを殺した人間が、老人などではなく、若い筋骨を備えた男だったら――。

そこでネイリンは、ある可能性に思い至った。

ジーナスを殺したのは、行方不明のトーナスなのではないのか。いや、先ほどから、この可能性については、頭のすみで考えていた。当然だ。ジーナスの死を確認した段階で、トーナスの行方不明は、彼の死か、もしくは、彼の犯行を連想させる。

彼は、主と同じようにジーナスの肉親だ。トーナスが犯人などと感情面では考えられない、というより考えたくはないが、肉親だからこそ憎悪、というものも、世間にはあるときく。

だから、動機面から考えては、可能性を消去できない。

そして行方の知れない現状。それは、弟を殺したからこそその逃亡の故、と考えれば、しっくりくることはくるのだ。

犯人は――トーナスなのか？

ロッテを見る。表情のない彼女は、眠っているようにも見える。

失神と眠りとは同じものなのだろうか。あどけない顔をしている彼女は、夢を見ているのだろうか。

彼女の父親を殺したのが伯父だとしたら――この娘はどうなってしまうのだろうか。

胸が、息をするだけで苦しい。

カーテが大広間に戻ってきた。真っ青な顔をしたリールが横にいてる。

「旦那様……」リールが、エプロンを両手で揉みながらいう。

主は、なにも反応しなかった。

とにかく、全員がそろそろまでは、なにもしゃべる気はなさそうだった。

ネイリンとしても、なにかいえる状況ではなかった。また、なにをしゃべっていいのかも分からない。気詰まりの中、それぞれの思考、不安が大広間を渦巻いている気がした。

二階からラパルクとルイが戻ってきた。プライはつれてはきていなかった。

「プライは、かわりなく寝ていた」ラパルクがいう。「このまま寝かせておいてやろう」

全員を大広間に集めろ、といった主ではあったが、そのラパルクの言葉に反対はしなかった。

しばらくの後、イボーが戻ってきた。

「トーナスはいない」イボーは、主の横に立った。「どこにもない」

主はうなづき、その場にいた全員を見回した。

「リールも、状況はきいているな」いわれたリールは、うなづいた。

「先ほど、ジーナスが死んでいるのが分かった……。このことは、市には報告しないことにする」

ネイリンは、首をたれてきいていたが、頭を上げた。

「このことは、内密に処理する」主は、ネイリンを見ていった。「おまえたちにも、そのつもりでいてもらいたい」

「どういうことだ？」ラパルクが、イラついた口調でいった。「息子が死んで、まずいうことがそんなことか？」

市に報告しない、という主の言葉に驚いたネイリンだが、ラパルクの言葉をきいて、この際、そんなことは後回しかもしれない、と思った。

「おまえたちと議論をする気はない」主は言下にいった。

「葬儀はどうするんだ？　それも内密にか？」

「おまえたちの知ったことではない」

「あんたの息子はただ死んだんじゃない。殺されたんだぞ。そのことについては、どう考えているんだ？」

ラパルクの追及口調に、ネイリンははらはらした。主のいいかたには、彼女としても納得のいかなないところがあるが、それにしただけでこういった口を利く根性はない。

「それも、おまえたちにいう必要はない。それに、まだ殺されたかどうかも確定は……」

「自殺したとでもいいいたいのか？ ナイフで自分で胸を刺して？ ふつうに考えてそんなことあるわけがないだろう？」ラパルクはつづける。「それに、いわせてもらおうが、おれたちは、剣にかけては素人じゃない。自分で刺したものがどうかぐらいは、見て分かる。そうだな、ネイリン？」

「え？」

そういわれても困る。ラパルクは剣技館に所属し、モンスター狩りにも参加していたから、傷口などからそういったことも分かるのかもしれないが、ネイリンは剣技館には入れてもらえなかったのだ。槍も自己流で、真剣も旅に出てからはじめて使ったぐらいで、傷口からなど分かることなどそうない。

だが、ジーナスの死体を見て、また昨日からの状況から判断して、自殺などありえないとは感じていたので、とりあえず、うんとだけ答えた。

「そうだとしても、おまえたちに心情を伝える必要はない」主はそういって、ラパルクの言葉をはねのけた。「そんなことよりも、連れのものの容態はどうなんだ？ 回復しているのなら、速やかに去ってもらいたいのだがな」

「トーナスさんがいないそうだな」ラパルクが、主の言葉を無視していった。「彼のことはどう考えているんだ？」

「……………」主は答えなかった。

「次男が殺され、長男が行方不明。こんな状況では、だれが考えた

って、結論は一つだ」

「あいつは、そんなことはしない」主が、馬鹿にしたようにいう。

「トーナスは、計算のできる人間だ。殺人などという、愚かな行動はとらない」

「なら、この状況を、あんたはどう理解してるんだ」

「決まってる。愚かな何者かが侵入し、なんらかの理由によりジーナスを殺害した。そして、屋敷内をカーテたちが回って不審者を確認しなかったんだ。ならば、その不審者は、もう屋敷内にはいないということになる」

そうだ。今屋敷内には、ジーナスを殺した人間がいたかもしれないのだ。その可能性に気づきながらも、カーテたちを、所用のためにばらばらにさせた主の冷酷さに、震えが走った。

「では、トーナスさんは？」

「だから、どこかにでかけているんだろう。いずれ戻ってくる」
大広間にいるもの全員が、二人のやり取りを固唾を飲んで見守っていた。

殺気すら含んだ、主の頑なな物言い。敬語を捨てて、ある意味で敵視しているような言葉遣いで質問攻めにするラパルク。

静かでありながら、口をはさんだら火傷しそうな雰囲気、二人の間にはあった。

彼らの、というより、ラパルクの姿勢を見て、ネイリンは目が覚める思いだった。

そうだ、今は呆けている場合などではないのだ。考え、発言し、条件の境界を明確にしなくてはいけない。

ネイリンは、急速に、普段の自分を取り戻しつつある自分を自覚した。

攻撃的で、野心的で、好奇心旺盛な人格が、深いところから立ち上がる。

「まだ、この屋敷には、探していない部屋があります」気づいたら、ネイリンはそう発言していた。「そこを開けてみる必要があると思

います」

急に発言したネイリンを、カーテやリールが、いぶかしそうな目で見ている気がした。

ただラパークは、そんなネイリンを見て、わずかに口元だけをゆがませた。

「二階の部屋をいつてるんだな。あの部屋は、封印されているんだ。誰も入れない」主は、なんら態度をかえなかった。

「それは違います。あなたは、あの部屋の鍵が入ったケースの鍵を持ってるんですね？」

いつてしまった——といまさらになって、やつと思った。

主だけが、あの部屋を開けることができる鍵の入ったケースを開ける鍵を持っている。

だが、そのことは、知らないことになっているし、知ってはいけないうことなのだ。きいたことは内緒にするという、ロツテとの間に約束もある。だが、こんな状況では、そういったこともいってられない。

だが、あの部屋をどさくさで覗いてしまおう——心の隅で、そうも考えている自分を自覚して、今日何度目かの自己嫌悪もすっかりとした。

——ほんとにあたしときたら……。

自分の野次馬根性にうんざりとしながらも、本来の自分を取りもどしつつある自分を、ネイリンは感じていた。

「あの部屋は、厳密な意味で、開かない部屋ではありません。あの部屋に、だれかが、さらにいうなら、あなたのいう何者かがいる可能性もあります。開けてみる必要があるんじゃないでしょうか？」

「ちょっと待て。その前に、どうしてお前がそんなことを知ってるんだ？」とやはり主に突っ込まれた。

「いや、それは……」正直にいうのは、やはりためらわれる。「そんなことはどうだっていいじゃないですか？ それよりも、大事なことは、」

「わたくしがお教えしたのですわ、お祖父様」

「ロッテ！」驚いて見ると、彼女は何事もなかったかのように、すました顔でソファに座っていた。「大丈夫なの？」ネイリンは、二つの意味でいった。

「ええ。ご心配をおかけしました。今は考えるべきとき。寝てなどいられませんか」

ロッテは、そう気丈にいった。だがその顔には、ださないうようにしてはいるのだろうか、悲しみが滲みでていた。

父親の死体、しかも殺されたものを見ているのだ。心情的に、大丈夫なわけではない。

「うん、そうね」しかしネイリンは、そう同意した。

ロッテが大丈夫なわけではない。だが、だからといってなにもせず、父親の死を悲しみつづけていたら、彼女は心に変調をきたしてしまふかもしれない。

今は物理的なことを考えるのが、ロッテの心にとってもいいことかもしれない。

それに彼女のいうとおり、純粹に今は考えるべきときだ、という気もする。その意味では、彼女が、「自分が教えた」といつてくれたのは、話を進める上でよかった。だが――それをいつて大丈夫なのだろうか？ 二つ目の意味で、ネイリンは心配した。

「おまえが教えただと」主が目を細める。感情が爆発する寸前、といった雰囲気があった。「ロッテ。あれは、我がガードナー家が代々守ってきたものだ。おまえだって、それが分かっているわけではないわけではあるまい」

「十分に理解していますわ」ロッテは、真正面から主を見据えた。

「そして、それが、ナンセンスなことであることも理解しています」「ナンセンスだと？」ロッテの挑発的ともいえる言葉に怒り出すかと思ったら、意外なことに主は悲しそうな顔をした。「本気でいつているのか、ロッテ？」

「ええ。鏡の中に石なんて、そんなもの、理屈で考えてあるはずが

ありませんもの。とはいえ、」とここでロツテはネイリンをみた。

「ガードナー家が秘密にしつづけたいたこと。わたくしだって、身元の怪しい人にまで、わざわざお教えしようとは思いません。友人のネイリンにだからこそ、お教えしたのです」

「友情の証に、とでもいうつもりか……」主はゆるりと首を振った。主の様子は、爆発しそうでしない。というより、感情を爆発させるだけの気力が、体内から失せているらしかった。彼なりに、やはり次男の死は、心を痛めているのだろう。

今この家の住人は、みな冷静ではない。だからこそ、自分たちががんばらねば。ネイリンは、そういった思いを新たにした。

「お祖父様、叱責ならあとでいくらでもお受けします。でも今は、ネイリンがいうとおり、そんなことを問題にしている場合ではありませんわ。今は伯父様がどこにいて、なにをしているか。それを確認することが、最重要課題だと思います」

「分かった。秘密を教えたことを棚上げにしてもよい。だがな、ロツテ。あの部屋が完璧に封印された状態でないとはいえ、その密室性は限りなく完全に近いものだ。儂には、あの部屋に、トーナスか、もしくは違う人間がいるとは思えないのだがな」

「でも、伯父様が他の場所にいないのも確かなのです」

「どこかに出かけた――」

「可能性などありませんわ」ロツテは、主の言葉をさえぎっていった。「今までもそんなことはありませんでした。それが、今日になって、だれにも知らせずどこかに行くなんてことは考えられません。それに、伯父様はお祖父様と違って、雨が大嫌いな方です。それは、お祖父様もご存知でしょう？」

「しかし、あの部屋は物理的に儂しか入れないんだ。トーナスや、第三者がいるわけなどない」

「べつにあの部屋を開けたからといって、今マイナスになることはないと思うんですが」ネイリンは口をはさんだ。「今は緊急事態です。だれもいないならいいんです。確かめましょう。それ

は、おじいさんのためでもあると思います」

主は、ネイリンをひとにらみした。彼女は、それを真正面から受け止めた。

彼は目をそらすと、下を向いた、迷っているようだった。

あの部屋に、もしトーナスがいた場合、二つのケースが考えられる。

隠れている場合と、死んでいる場合だ。

隠れていたら、それは彼の犯行を示す行為だろう。死んでいたら、それだけでも悲しい事実だが、鍵にまつわるもろもろの条件から、主の立場がわるくなる。

今迷っているのは、どう考えてのものなのだろう。

迷っているという時点で、彼は潔白なのか。

それとも――。

無言の時間は、ネイリンの思考を走らせる。

やがて、主がいった。

「あの部屋の封印を解こう。今鍵を持ってくる」そういつて、主は立ち上がり、自室になのだろう、向かって大広間をでた。

――やった！ ついにあの部屋に入れる！

と最初に思っ、て、そういうことじゃないよなあ、とネイリンはすかさず反省した。

今は、あの部屋に対する興味より、トーナスの安否が重要だ。

だが――。

あの部屋の中にある、石が隠されているという鏡。それに対する好奇心は、どうしても押さえきれなかった。

第二章 13

13

主が大広間をでてから、それまで黙っていたカーテが口を開いた。「あの――昨夜は、トーナス様や、ネイリン……様たちが、ここにおられたんではないのですか？ それとも、ずっとここにおられたわけではないんですか？」

確かに、その問題はあるのだ。もしトーナスなり、某かが、このケースを開けたのなら、ネイリンたちが、気づいていておかしくないのだ。

――あたしは寝てた時間があるけど……。

「ラパルク。あなたもずっと起きてたわけじゃないよね？」

「ああ、寝たよ」彼も、ネイリンがいわんとしたことが分かったみたいだ。「三人ともが寝ていた時間があるかどうかは分からない」

「念のためきくけど、トーナスさんは……」

「おれが知るかぎりはきてない。ほかの人も同じだ」

もし、二人が寝ていて、ジーナスだけが起きているときに、誰かがこのケースを開けにきても、気づくだろう。信じていないと公言していたとはいえ、この家の秘密につながるケースをだれかが開けようとしていて、静かにしているジーナスではないと思う。

では、三人ともが寝ていると隙を見計らって、誰かがこのケースを開けにきた？

そのケースも、考えづらい。

そもそも、このケースを開けるためには、主の持つ鍵が必要だからだ。

考えれば考えるほど、このケースが開けられた可能性は低い。

本当は、先ほどから気づいていたのだ。だが、あの部屋の中が見たいから、気づかない振りをしていたネイリンである。

ただ、あの部屋以外に、トナスがいなさそうなことも確かなのはあるが。

「ネイリン」ロッテに呼ばれて振り返ると、彼女はいつの間にか移動していて、大広間の隅にある、あのケースの前で中腰になって立っていた。「ちょっと……」

小走りで彼女に近づき、横に並ぶ。

「どうしたの？」

「これを見てください」

指差された場所を見ると、そこは鍵だった。いわゆる南京錠である。

「鍵がどうかしたの？」

「最近使われた形跡がありません。ほら、ホコリが溜まってる」
いわれてみれば、確かにそうだった。南京錠の表面だけではなく、鍵穴の中にも、ホコリは溜まっているようだった。ならば、このケースの中の鍵も使われていないし、あの部屋にも、誰も入っていないことになる。

つまり、もうあの部屋に入る必要はなくなってしまった――。

「でも、見たいですよ。あの部屋の中」ロッテが、無表情にいう。
ネイリンは、内心を読まれた気がして、ドキッとした。

「まあ、うん……」

「このまま黙っておきましょう」

「うん」

主が、ゆっくりとした足取りで、大広間に戻ってきた。

第二章 14

14

主が、ネイリンとロッテを無言で押しのけると、丁寧な手つきで鍵を開けた。ケースの中から、恭しく鍵を取りだす。

そして、黙ったまま階段に向かった。一堂もそのあとを追った。ゆっくりとした足取りだった。じれったかったので、ネイリンはせめて、という思いで頭を動かした。

ロッテの指摘で、だれもあのケースを開けていないことがわかった。ならば、トーナスはどこに行ったのか。先ほどのロッテの口ぶりからして、黙っていなくなったトーナスの行動は、異例のものらしい。

いったい、彼はどこに行ったのだろうか――。

最前からの疑念が、またぞろ頭をもたげてくる。トーナスは逃げたのではないか。それなら、異例の行動らしい、彼の不自然な消失にも納得がいく。もし逃げたのならその理由は簡単だ。

――ジーナスを殺したから。

やはり、そういうことなのだろうか。

そういうことなら――。

どうするもこうするもない。というか、今すぐに、どうこうできる話ではない。順番にやっていかないと。今すべきは、あの部屋を開けること。そして、トーナスがいらないことを確認すること。だが、論理的に考えて、彼はあの部屋にはいない。だから……。

深刻なことをいったい脇に置いておいて、まずは好奇心を満足させよう。どの道、あの部屋を開ける展開なのだ。

そんなことを考えて、お気楽な気分であったのだが――。

実際に部屋を開けたら、トーナスが中にいたのである。

そして彼は――死んでいた。

第二章 15

15

扉が開いた瞬間は、分からなかった。主の姿がじゃまで、中が見えなかったのだ。だが、中を見て動きを止めた主の背中中、中に何かがある、あるいはいるのだろう、ということは分かった。だから、押しつけるようにして見たのである。はしたない行動だったと思う。だが、我慢はできなかった。なにがあるのか、あるいはいるのか、自分の目で確かめずにはおれなかったのである。

中では、やはりジーナスのときと同様に、部屋の真ん中付近で、トーナスが倒れていた。腹ばいになって倒れている彼の後頭部からは、赤黒い液体が流れていた。

——どうして、こんなことになっているんだろう。

頭の中で、クエスチョン・マークばかりが浮かぶ。

まだこの部屋は探していなかった。だから、トーナスはどこだという前に、中を検めてみるべきだろう。最初にそういったのはネイリンだった。だが、中にトーナスがいる可能性はないことが分かった。

何しろ、この部屋は完璧な密室だった。それは、ケースの南京錠にホコリが溜まっていることで明らかだった。だから、この部屋には、トーナスばかりではなく、誰も入ることができなかったはずなのだ。

なのに——。

何か怪しいところはなかっただろうか。

ネイリンは、先ほどの出来事を思い返した。

この扉は主が開けた。最初から、鍵はかかってなかったのではないか。

いや、それはない。なぜなら、主が鍵を開ける前、ラパルクが、

当然のような顔をして、ノブを回して見せたのだ。ノブはあまり回らなかった。そして、どちらに回しても引いても、扉は開かなかった。

この部屋の鍵はかかっていた。

そして、この部屋の鍵をしまっていたケースの鍵もかかっていた。ということは――。

何らかのトリックで、この部屋の鍵を開け、そして閉めたか。

あるいは、何らかのトリックで、あのケースを開け、そして閉めたか。

どちらも無理だと思うが――。

その前に、本当にトーナスは死んでいるのだろうか。

この部屋に、抜け道の類はないのだろうか。

それを確認しなくては、考えることもできない。

ラパルクと先を争うようにして、部屋の中にネイリンは入った。気になっていた、封印された部屋の中に、ついに入った。部屋の様子にも興味はあったが、その前にまずは、トーナスが死んでいるかどうかを確認することが先だ。

とはいえ、死体に近づくのは怖い。ネイリンはラパルクを見た。彼は、ネイリンを見ることもなく、まっすぐトーナスに近づくと、脈を取った。そして振り返り、主に向かって首を振った。

それを見た主は、一瞬ふらつき、横にいたリールに支えられた。ロッテの姿は見えない。

ネイリンは、扉のところに戻って、鍵をあらためた。ジーナスの部屋のもと同じように、鍵穴が開いていた。それを確認してから、ネイリンはいった。

「ラパルク。トーナスさん、鍵は持ってる？」

鍵は、今主が持っている、ケースに今まで入っていたもののほかにはないはずであるが、あの鍵が使われていない状況から察すると、他にも鍵はあり、そしてそれを、部屋の中にいるトーナスが持っているはずなのだ。

いや、そうではないのか。持っていないのなら――。

ラパルクは、トーナスの身体を検めた。そして首を振る。鍵は持っていない。

ということは、少なくとも、彼がこの部屋の鍵を閉めたわけではない。誰か、第三者が閉めたのだ。そのことから、彼が誰かに殺されたことが確定した。まあ、事故死だとは最初から思っていないが。

とはいえ、鍵が他にもある、ということは、まだ確定したわけではない。それを誤解してはいけないし、あとで確認してみる必要があるな、と思った。

そこまで考えてから、ネイリンは、やっと部屋の中を見回した。シンプルな部屋だった。姿見ぐらいの鏡と、その向かいの壁に、左右反対の時計が飾られているだけの部屋だった。

どちらも気になるが。

やはり、こちらの方が先だろう。

ネイリンは、鏡に近づいた。

鏡は、嵌め殺しのように、壁の中に埋まっていた。もしこれが、ふつうに壁に立てかけられたりしていたら、その裏側に抜け穴のようなものがあるのではないか、と考えることもできたが、これでは無理だ。

この向こうには抜け穴はない。そして、

――つまり、石もない。

ネイリンは、鏡面にそっと手を当て、それから、鏡面を隅々まで見た。鏡面を見ているネイリンが「移って」いるだけで、石の姿はなかった。

ネイリンのほかにも、移っているものはあった。左右正しい、壁掛け時計。

ネイリンは振り返る。ロッテにきいたときから、気になっていた、左右反対の時計。

だが実際に見てみると、そのものの自体に怪しいところはなさそう

だった。

左右が反対なのが、怪しいといえば怪しいが。

左右が反対なのは、鏡に移したときに、正しく見えるようにとの理由によるが、そもそも、鏡に映さなくてはならない理由がないはずなのだ。

それともあるのか――。

「怪しいところがないな」ラパルクが、つぶやくようにいう。

確かにない。窓もないし、抜け穴もなさそうだし、扉は――。

ネイリンは、入り口に帰り、扉を調べる。扉表面は外と同じで、鍵穴も、ごくありきたりなものに見える。シンプルなだけに、トリックは仕掛けられそうになかったが、そう考えるのは早計か。

「戻ろう」主が力ない声でいった。「イボー、トーナスになにかかけてやってくれ」

彼の様子は、ジーナスを発見したときよりも憔悴しているようだった。二人目だからか。それとも、実質この家を取り仕切っていた長兄が死んだことがショックだったのか。

彼はいいおくと、そのまま大広間に向かってなのだろう、戻っていった。

部屋は閉めない気らしい。

それも、驚きといえば驚きだった。

「どうする、ラパルク？」ネイリンはいった。

「どうするもこうするもないだろう。戻るぞ」彼は不機嫌そうに答えた。

「ちょっと。なに怒ってるのよ」

「べつに。怒ってはいないさ」言葉とは裏腹な表情でいう。「ただ、なんだかイラつくんだよ。なんなんだ、この状況は？　なんで、彼は殺された？　というか、どうやって殺されたんだ？　ここは封印された部屋なんだろう？　トーナスさんはどうやって入った？　この部屋の鍵はかかってたんだ。トーナスさんを殺しやつは、どうやってこの部屋をでた？　ジーナスさんも同じだ。なんで、どうやって

殺された？ なにも分かんねえ。それがイラつく」ラパルクは、そこまで一気にいったかと思うと、ため息をついた。「わるいな。おまえにいったってしょうがないよな」

「いいよ。気持ちは分かるし。あたしもおんなじ気持ちだよ」

「うん」ラパルクはうなづいて、「ところで、お嬢さんはどうしてる？ 大丈夫か？」

いわれて、ロッテのことを思い出した。

そうだ、彼女は――。

ネイリンはあわてて部屋をでた。ロッテは、カーテとルイに付き添われて、やはりリールに付き添われて歩く主の横を歩いていた。二人とも、背中が小さく見える。

「あたしたちががんばらないとね」ネイリンは気づくといっていた。

「犯人を見つけるってことか？ おまえ忘れてないか？」

「なにを？」ネイリンはきく。

「犯人な、あの中の子かかって可能性が高いんだぞ」

背筋に冷たいものが走った。

「そういう、ことになるの？」

「まだ分からないがな。外から誰かが入ることができた条件だったかどうか、これから調べてみなくちゃいけない。こんな密室からでった犯人だ。そんな条件は不要かもしれないがな。だが、物理的な理由だけじゃなく、動機的なことも考えるなら、」

――あの中にいる可能性が高いんだろう。

ラパルクがそういつたときだった。突然背中にぶつかるものがあり、ネイリンは思わず悲鳴を上げた。

「じゃま。どいてくれ」

見るとイボーだった。毛布を手をしている。

「え、イボー、さん。どこからきたの？」

彼は答えず、部屋の中に入っていった。そして、トーナズに頭から毛布をかける。

イボーがきたのは、

「きくまでもないだろう？　イボーは、向こうの階段から上つてきたんだ」

ラパルクが、大広間に続く階段のある方向とは逆を指差した。つまり、ネイリンたちの部屋につながる扉が並ぶ廊下の先だ。

「え、向こうに階段があるの？」

「知らなかったのか？」　呆れたように彼がいう。「よくそれで平気でいられるな。おれは、最低でも、家の構造ぐらいは知っておかないと不安になるぞ」

「あんたは、肝っ玉が小さいからねえ」

「おまえは心臓に毛が生えてるからな」

といって、ラパルクは鼻を鳴らした。

第二章 16

16

大広間に向かうため、ラパルクと廊下を歩きながら、ネイリンは、自分の心に疑問を感じていた。ジーナスの死体を見たときには、あれほど動揺していた自分が、なぜトーナスの死体を見た今は、これほど落ち着いているのだろう。そう思ったのだ。

トーナスは、ジーナスほど親しくなかったし、言葉もあまり交わさなかった。それゆえのことだろうか。いや、そんなことは関係ない気がする。トーナスの死は、彼の死を意味するだけではない。一日のうちに二人が死んだ、ということの意味するのだ。

そして、その意味は、連続殺人を連想させる。

動揺は、トーナスの死を知った今こそ、最高潮に達していなければ、おかしいような気がするのだ。

ネイリンは、自分の胸のうちを探った。

平静ではない。ざわついてはいる。だがそれは、お祭りのときのような高揚感に似ている気がする。

ジーナスの死は現実だった。しかしそれにつづくトーナスの死によって、出来事は一連のものとなり、それは一種現実から遊離した、非現実の世界にネイリンを誘った、ということなのだろうか。

——いけないな。

と思った。これは現実だ。そして、ロッテの生活、人生に密着した中で起きている、凄惨な事件なのだ。当事者ではない自分たちが冷静の中にいなくてはいけませんが、それとはべつに、当事者の気持ちにもしつかり配慮しなくては。

ネイリンは、パンっと思ひ切り、両の手ではほを張った。ラパルクが、驚いた表情でネイリンを見る。べつに、といって、ネイリンは階段を駆け下りた。

第二章 17

17

また、先ほどと同じ位置関係で、大広間に落ち着いた。だが空気は、よりいっそう重たいものになっていた。

ネイリンは、口を開かずにじっとしていた。傍らには、ソファに横たわるかたちでロッテがいた。彼女は、ネイリンの手を握りたがった。ネイリンも、彼女の手を握り返していた。

「なにか、あたたかいものを持ってきてくれないか」主は、カーテにいった。

「はい。ただいま」

カーテが頭を下げ、厨房に向かう。気詰まりなものを感じていたのか、ルイとリールも一緒になってついていった。

三人が戻るまでは待機。そんな雰囲気があった。

待っていると、まずイボーがやってきて、その後しばらくしてから、カーテたちが盆を手到大広間に戻ってきた。カーテとルイが二人でカップを配ってまわる。中身は、卵のスープだった。やわらかい味付けだったが、空腹だったので一口飲むと食欲が刺激されて辛かった。だが、ボリュームがそれなりにあったので、これだけで、腹はある程度満たされそうだった。

食事時ではあるが、食事どころの事態ではない。そういうことを考慮して、リールが作ってくれたのだろう。その心遣いがあったがなかった。

みな、半分ほど飲んだところで、主が口を開いた。

「なんといったものかな」その口調は、今までで一番弱々しいものだった。「客人を、このような状況に巻き込んでしまったことを、まずは謝らせてもらおうよ」殊勝だな、そう思ったのは一瞬だった。彼はこうつぶつけていったのだ。「だが、今の段階で一番怪しいのは、

おまえたちだ。昨日なにがここであつたのか、包み隠さずきかせてもらいたい」

「どういうことだ？」けんか腰にラパルクがきく。

「あの部屋の鍵は、これしかない」といって、懷から、先ほどまでケースに入っていた鍵を取り出した。「あの部屋にトーナスがいたということは、これが使われたということだ。そして、あいつは死んでいた。つまり、これを取り出したのは、トーナスではないということだ」

「それは客観的じゃない」ラパルクがすぐにいった。「あの部屋の鍵を閉めたのは、たしかにトーナスさんじゃない。彼は鍵を持っていなかったんだから、それは確実だ。だが、その鍵をケースから取りだし、あの部屋を開けたのも彼じゃない、とするのは早計だ」一瞬、ちらとネイリンを見てから、こうつぶけた。「いや、その前に確認しておきたいんだが、あの部屋の鍵は、それ一つで間違いないのか？ そうといいきってもらえないなら、話は……」

「間違いない。鍵はこれ一つきりだ」ラパルクの言葉をさえぎって、主がいった。「で、昨夜はなにがあつたんだ？」

本格的に、検証に入っていた。ネイリンは、スープを飲んで緩みかけていた気を、意識的に引き締めた。それはロツテも同じだったようだ。ネイリンの手を握る彼女の手に、少しだけ力がこもったように感じた。

「なにもないさ。ビリヤードをやっていただけだ。だが、正確にいうなら、常に起きていたわけじゃないから、誰かがきた可能性ははずせない」

先ほどネイリンは、誰かがきたことは考えづらいと思った。人がきたら、三人のうち誰かが気づくだろうし、とくにジーナスは、気づいたら黙ってはいないはずだ。

だが、そうなると、あやしいのは、そのときここにいた三人ということになる。ジーナスはすでに死んでいるし、主の心情からすると、怪しいのは圧倒的にネイリンたちだろう。

そのような状況では、だれもこなかったはずだ、とはいわないほうが賢明だ。

そこまで考えて、ネイリンは急にあせった。そうだ。自分たちは今、けっこう危ない立場にいる。ケースの近くに、後に殺される人物といた、というだけでなく、ネイリンたちは、すでに石のことを知っていて、知っていることも知られているのだ。石を奪うために、何らかの行動をとった、という疑いをもたれても仕方がない立場にいるといえるかもしれない。

……まずい。非常にまずい。どうしたらいいのだろう。

とにかく、これ以上疑われないためには、もっと怪しい人物を探す、というか、もともとネイリンたちはなにもしていないのだ。倫理的な意味だけからではなく、自分たちの身を守るためにも、真犯人を探さなくてはいけない。

だがそれだけではいけないのかもしれない。一度でも疑われれば、これからいづらくなってしまう。だから、極力疑いの目を向けられないように、議論を先導し、誘導しなくてはいけない。

また、そういった思いは、ラパルクも持っているようだった。

真正面から主を見据えている。

「だが、仮に寝ていたとしても、誰かがきたら起きるんじゃないか？」主はいう。

「そうとはいえない。なにせ、おれもネイリンも疲れていた。眠りは深かったろう」

「つまりおまえは、トーナスが昨夜ここにきたんじゃないか、といったのか？」

「あるいは、トーナスさんを殺した人間が」

「おまえたちが、その鍵を取りだしたんだとしても、きっと同じことをいうんだろうな」主が鼻で笑う。

「ちょっと待ってくれ。あんたは、鍵を取りだした人間、イコール犯人という印象を持っているんじゃないか？」

「違うとでもいうのか？」

「いや、鍵を取りだした人間が犯人である可能性もある。だが、それぞれが別人である可能性もある」

「いや、それは考え難いだろう。ケースから鍵を盗みだした人間は、なにしろ、このガードナー家が代々守り抜いてきた宝を狙っているのだ。殺人を犯すような人物として想定できるのは、そいっただけだ」主は、そこでラパルクをにらむ。「そして、その犯人として考えられるのは、おまえら二人だ」

「なにを証拠にそんなことを」

「証拠ならいくらでもある。まず、ケースの近くにいたことが一つだ。ジーナスは死んだ。ゆえに犯人とは考えられない。それに、おまえたちも犯人ではなかった場合、第三者が、三人の目を盗んでケースから鍵を盗みだしたことになる。それは考え難い」主は息をついでつづけた。「まだある。おまえたちがいなかったこれまでには起こらなかった事件が、おまえたちがきたその日に起こったこの状況こそが、その証拠だ」

「なにが証拠だ。物的証拠は一つもないし、論理的な説明ですらない」

ラパルクは両手を広げ、ハンと息を吐いた。

二人はしばしの間、にらみ合った。

まずい展開になってきている。ラパルクは、疑いがこちらに向かないようにがんばっていたとは思うが、今一番疑わしい人物たちとして、ネイリンたちが疑われることになってしまった。

だが、二人は議論に熱中しすぎて、少し冷静さに欠けていた。俯瞰して議論をきいていたネイリンが、ここで口を開いた。

「あの、二人とも、大事なことを忘れてるんじゃないか、って気がします」一瞬間をおき、注意を喚起してからつづける。「あたしたちにも、そしてトーナスさんにも、鍵は取りだせなかったんですよ。その二組を疑うのは、違うんじゃないでしょうか？」

「……その鍵を取りだせたのは、僕だけだ。つまりおまえは、僕が怪しいといたいのか？」

「……………」ネイリンは、無言で返した。

無言であれば、イエスと受け取ってもらえると思ったからだ。

本心は、ノーだった。南京錠の鍵穴には、ホコリが溜まっていたから、物理的には、主にも取り出せなかったはずだ、と考えていたからだ。だが、それでは、だれにも取り出せなかったことになる。

主は本当に取り出せなかったのか、取りにこなかったのか、境界条件をよりはっきりとさせる必要があると考え、そのためにあえてホコリのことは黙ったのだ。

とはいえ、ロッテがホコリのことをはなしたら、それまでだが、彼女はなにもいわなかった。ロッテはロッテで、なにか腹積もりがあるのかもしれない。

「だが、儂が鍵を取りだしにここへきたら、さすがに気づくんじゃないか？」主は気をわるくしたようにいう。

足がわるいからもたつく、とでもいいのだろうか？

「そうかもしれませんが……」

「それに、わしが昨日に限って、鍵を取りにくるのはなぜだ。儂は、開ける気になれば、いつでもあの部屋を開けることができるんだぞ」主はつぶける。「それに、ケースの鍵を受け継いだ儂はそもそも、鍵を取りだすことを隠す必要がない唯一の人間だ。儂が取り出したなら、その場にいたおまえたちが見ていないのはおかしいだろう」

そうか……。

主のいわんとしたことは分かった。

ケースから鍵は取り出されている。それは、あの部屋が開けられたことから確実だ。だが、鍵を取りだした人間は、ネイリンやラルクは見えていない。ジーナスが見ていた場合、静かにしていた可能性は低いと思うから、つまり、鍵を取りだした人間は、三人が寝ている隙を見計らって鍵を取り出したことになる。

だが、主だけは、そのような行動をとる必要がないのである。

やはり、主が取りだした可能性はないのか。

「おまえたちしかないんだ。実際に盗むタイミングを持っていた

人間は」

「でも、」おまえたちしかない、といわれ、ネイリンはむっとした。「でも、あたしたちには、物理的に鍵が取りだせなかったんですよ」

「お祖父様にも、鍵は取りだせなかったですわ。ネイリン、お忘れですか？ あの南京錠の鍵穴には、ホコリが溜まっていたのですよ」いよいよロッテが口を開き始めた。

「あ、そうだった」といってネイリンは頭に手を当てた。わざとらしくなかっただろうか？

「どういことだ、ロッテ？」主がきく。

ロッテは、主がケースを開ける前に、南京錠を確認していたことをはなした。

「なぜそれを先にいわなかったんだ？」主の声に怒気がこもる。「それを先にいっていれば、あの部屋も開けずにすんだものを」

「開けなければ、伯父様を発見することもできませんでしたわ」

「それはそうだが……」

なぜ開けさせた、というわりには、封印されていたあの部屋の鍵を開けっ放しで大広間に戻ってきている。主は動揺しているらしかった。

「だが、そうであるなら、僕にも、あの部屋を物理的に開けることはできなかった、ということになるのだな」

「はい。そして、だれにも開けることはできなかった、ということになります」

そのロッテの言葉で、大広間はしんとなった。

そう、彼女がいうように、あの部屋はだれにも開けることはできなかったはずなのだ。

だがその部屋の中で、トーマスは死んでいた。扉が開いたことは確かなのだ。

明らかな矛盾。

「いったん、ケースのことは棚上げにしませんか？」ロッテがいう。

「お祖父様がいうように、ケースから鍵を取りだした人間は、怪しくはあります。ですが、ケースから鍵を取りだした方法が分からない現状では、これを棚上げにして、他の条件に目を向けることも必要でしょう。ラパルクのいうように、鍵を盗んだ犯人と……伯父様や、お父様を殺した犯人が、別人である可能性もあるのですし……。わたくしは、鍵のことよりも、そちらのことから優先して考えたいです」

みなが一斉にロッテを見る。

そうなのだ、彼女は父親と伯父を一気に亡くしたのだ。

そのことにあらためて気がいき、ネイリンはいたたまれない気持ちになった。

「ロッテ。大丈夫？ ロッテは、無理して参加しなくてもいいんだよ？」

「しないほうが、何倍も辛いですわ」

「まあ、そうかもしれないけど……」

そうはいっても、もし自分だったらできないだろうな、と思った。どちらがいいとかいう前に、身体も頭も動かなくなってしまうような気がするのだ。

頭がいい人っていうのは、同時に、心をコントロールする能力にも長けている、っていうことなのかな。ネイリンは、そっとロッテから手をはなそうとした。自分なんかは、ロッテにとって必要じゃないのかもしれない、とそう思ったのだ。だが、ロッテが手をはなそうとしなかった。それどころか、悲しそうな目でネイリンを見つめてきた。

「ごめん、ロッテ……」

そうだ、彼女は無理をして、気丈に振舞っているのだ。

そんなことは、分かっていたはずなのに――。

ネイリンは、力強く、彼女の手を握った。

「お父様と伯父様を殺した犯人は、同一人物なのでしょうね？」 ロッテは、ネイリンの手を握ったままでいった。「別人だ、と考える

のも不自然、というか、信じられない気もしますが、しかし、二人も殺した人が、ここにいらっしゃるっていうのも信じられないんです」

「つまり？」とラパルクが先をうながす。

「つまり……」ロツテは言葉をにこした。

「つまり……」ロツテほど、ずばずばいう娘が口ごもるということは。ネイリンは恐るおそる口にした。「どちらかが、どちらかを殺した可能性も……」

「まあ、なくはないと……」

「ロツテ、おまえは、自分の身内を疑っているのか？」主が、厳しい口調で問い詰める。

「だって……ここに、二人も殺した人がいるなんて、信じられないんですもの！」ロツテが叫んだ。

そうか。彼女からしたら、残ったのは自分と自分の祖父。そして毎日一緒に生活しているカーテにルイに、リールにイボー。そして残った二人も、彼女が友人と認めてくれているネイリンとラパルクだ。

「一人なら、なにかの間違いで、ほんのはずみで、ということも考えられます。でも、二人殺したとなると、それは確信犯です。人殺しです。そんな人は、ここにはいません！」

「二人殺した人間なんていない。おまえはそう考えたいがために、自分の身内を疑っているのか？」

「だって……」

「あの、そんなきつくいわなくてもいいと思いますけど——」ネイリンは口をはさんだ。

「部外者は黙っていてもらおうか」

「そうはいきません」ロツテは友人だ。祖父が守ってやれないときは、自分が守ってやらないと。

「一つ確認しておきたいんだが」ラパルクがいった。「この屋敷に、第三者が入り込んだ、という可能性はないのか？」

ラパルクの言葉には、カーテが答えた。

「考え難いかと思います。戸締りは昨夜しておりますし、今朝も扉は閉まっております。誰かが手引きしたというなら、話はべつですが……」

「それは、ルイーザさんのことをいつているんですか？」ラパルクがいった。

そうか、彼女がいたんだった。ルイーザが絡んでいる可能性は考えていなかった。

突然思い出された名前に、各人不意をつかれ、無言の時間が生まれた。

彼女が絡んでいるなら、どんなストーリーが描ける？

「ルイーザか……」主がいつて、天井を見上げた。「あいつが絡んでいるとなると、」

「あの人がお父様と手を組むことなんてありえませんか」

「ん？ てことは、トーナズさんとルイーザさんが、ジーナスさんを殺した……」とラパルク。

「はい。……あ、いえ、もしかしたらあの人が――」思いついたように、ロツテがいう。

「待て、ロツテ。ルイーザがジーナスを殺したというのか？」主の顔に、さっと赤みが差す。「リール！」

「はい！」リールが背筋を伸ばした。

「あの女を呼んでこい。今すぐにだ！」

「は、は！」リールは一語を囁んだ。

第二章 18

18

リールが、ルイーザのことを呼びにいつている間にも、検討はつづいた。

「しかし、ルイーザさんがジーナスさんを殺したとなると、その動機はなんだ？」ラパルクがいった。

「動機は……」主がいいにくそうにした。

「家督争い、ということか？ ああ、その辺の事情は、だいたいきいているから、気は使わなくていい。それから、お嬢さんを叱るのも後だ」

全部いわれてしまつて、主は固まつた。

「だが、それも不自然だろ。家督は、トーナスさんが継ぐことで、ほぼ決まつてたんだろ？ なんで今さらジーナスさんを殺す必要があるんだ？」

「……………」

主もロツテも、言葉はなかった。

「それに、ルイーザさんがジーナスさんを殺したとしても、なぜトーナスさんまで死ぬんだ？ トーナスさんも、ルイーザさんが殺したというのか？ なぜ？ 彼女は、トーナスさんが死んだら、なにも手にできなくなるんだぞ」

ルイーザさんの結婚の目的を、財産と決めてかかっているような口ぶりだった。ネイリンはそう思っていたが、ラパルクは、嫌いなタイプじゃない、みたいなことをいつていたのに。

ずっと筋肉馬鹿だと思っていたが、先ほどから論理的にはなすし、いつのまにか場を仕切っている。ネイリンは、ラパルクのことを少し見直していた。

「なにか、アクシデントがあつたのかも」ロツテがいう。

先ほどは、二人を殺したのは別人ではないか、といていたロッテだが、それは、犯人がこの中にいる誰かかもしれない、と思つてのことだった。ルイーザという、彼女も嫌っていた人間が容疑者として浮上した今となつては、彼女が二人を殺したと思いたい、というのもあるのだろう。

「あの部屋でアクシデント？」ラパルクが眉を寄せる。「なら考えられるのは……」

「もしかして、石を見つけたとか？」ネイリンは思いつきいった。

「まさか！」

「なんだと！」

ロッテと主が、同時にいった。ネイリンはひるむ。

「いや、トーナスさんとルイーザさんが石を理由に争つた、というのは考えづらいんじゃないか？」冷静な口調でラパルクはいった。

「どうして？」

「もし二人を殺したのがルイーザさんたちなら、昨夜中に鍵を盗んでおいて、そして昼になってからジーナスさんを殺して、そしてそのあとにあの部屋に二人は入つたということになるだろ？ 石がアクシデントの原因なら、あの部屋に入つた理由も石だろ？ あの部屋に昨夜中に入れたのに、なぜ翌日まで待つて入つたんだ？」

「あの、そもそも、鍵を盗まれたのは、昨夜だったのでしょか？」ロッテがいう。「お父様が……殺されてから、」

「鍵を盗んだっていうのか？ それはさらに考えづらいだろう。ジーナスさんは朝までは生きていたんだろう？ ということは、殺されてから、まだそんなに時間が経っていない。そして、その間の時間のほとんどは、おれとネイリンが大広間にいたし、いなかった時間も、誰かが通る可能性のある時間帯なんだ。そんな時間に、ケースに近づいてなにかするか？」

——しないだろうな。

ネイリンは思つた。

だが、それなら……どういうことになるんだ？

「ルイーザさんは、絡んでないんじゃないか？」

「……………」

ラパルクの言葉に、一同は黙った。ルイーザが犯人ではないという論展開は自然なものだったと思う。犯人で欲しかった人が容疑からはずれ、少しシヨックだったのだ。

だれも口を開かず落ち込む中、ラパルクだけがマイペースに話を進める。

「ただな、さっきお嬢さんがいった意見には賛成なんだ。二人も殺す殺人鬼がいるとは考え難いが、一人をアクシデントで殺してしまう、ということはありえると思う」

「……どういうこと、ラパルク？」だれも合いの手を入れないので、ネイリンが口をはさんだ。

「怪しくはあるが、まだ検討していない人物がいる。おれは、その人が一人を殺していた場合、少なくとも動機面からは謎が解けるんじゃないか、と思うんだ」

「その人って——」

「もしかして、お父様ですか？」ロツテがいう。

「ああ、ジーナスさんだ。じいさんやお嬢さんは、心理的に疑い難いのもかもしれないが、客観的に見ると、一番怪しいのは彼なんだ」

「でも、お父様は殺されているのですよ」

「それはトーナスさんも一緒じゃないか」

「でも、伯父様の場合は、ルイーザさんという、共犯者として考えられる人がいます。だから、殺したあとに殺された、ということも物理的に考えられますが、お父様の場合は……」

「ちょっと待ってください、お嬢さん。最初から検討していこう。まず、あの部屋の鍵が盗まれた時間、これは、消去法から昨日の夜中だったと思う」

昼間や朝に盗んだ、というのは考えづらい、という話がルイーザのケースのときに放した。だがなあ、ともネイリンは思う。

——だって、昨日の夜は……あ！

「そうか。昨日の夜中、鍵が盗まれた場合、三人が寝ている時間じゃないと、ジーナスさんが黙っているはずないと思ってたけど、ジーナスさんが犯人だったら、あたしとラパルク、二人が寝てた時間を見計らうだけでいい」

「そんな……」ロツテが悲しそうな顔をする。

ネイリンははっと我に返った。これ以上ロツテを悲しませるような論展開にうなづいちゃうなんて――。ラパルクの論理に一度は納得しかけたネイリンだが、ロツテの顔を見て、この結論ではいけないと思い、反論を考えた。

「でもさ、」なにも考えずにそこまでいう。そして反論を思いついた。「……ケースが開けられないのはジーナスさんも同じじゃない。ジーナスさんは、どうやってケースを開けたと考えてるの?」

「それは分からない」ラパルクは、簡単に首を振った。「そのことに關しては、どうにかして開けたんだろう、としかいえないな」

「そんなの、」

「でも、こうも考えられるんじゃないか。だれにも開けられないケースは、だれにでも開けられる、ということでもあるんじゃないかと」

「ん?」よく分からない。

「だからな、『一部の人にしか開けられない』、という条件なら一考に値するが、『だれにも開けられない。そして、しかし確実に開けられている』、というこの状況は不思議ではあるが、翻せば、『だれか特定の人物の容疑を否定する材料にはならない』、ということと同義じゃないか、ということだ」

つまり、考えても仕方ない現象だ、ということか。

違和感はあるが、しかし、うまく反論できないのも事実だ。というより、もしかしたら、ラパルクの考え方は、『考え方』としては正しいのかもしれない。

「でも……でも、」

「でも、やっぱり殺されたことが、納得いきませんわ」言葉に詰ま

ったネイリンにかわって、ロッテがつづけた。「そこまでは、仮にラパルクさんの言葉が正しいとして、では、お父様はだれに殺されたとお考えなのですか？」

「分からない」　　「またもラパルクは簡単に答えた。」

「そんな不完全な論理では、お父様犯人説には納得できませんわ」
ロッテが眉をしかめる。

「いや、そういう意味じゃないんだ」ラパルクはまたも首を振る。
そして、形容しがたい表情をした。不可解、といった顔だった。「
そういう意味じゃなく……」

「どういう意味なのですか？」

「……おれたちには、推測しがたい存在、あるいは力によるものな
んじゃないか、と……」

本格的に訳の分からないことをいいだした。

「ラパルク。ぜんぜん分からないんだけど、結局なにがしたいの
？」

「だから……」　　「そういつてラパルクは、気味の悪そうな顔でケース
を見た。「あのケース、鍵をつかって正しく開けない限り、呪い殺
されるんだろ？」

「……………」　　「一同はまたも黙った。」

この家に代々続く石を巡る云い伝え。

曰く……この家には、伝説の勇者から与えられた宝がある。

曰く……その宝——石には、『生き返り』の力がある。

曰く……その石は、鏡の中に隠されている。

曰く……その部屋に入るための鍵は封印されており、その封印を
破った人間は、死ぬ。

本当のことだった、とでもいうのか。

ロッテをふくむ三人ではなしているときは、単なる『云い伝え』
に過ぎない、と考えていたことを、現実にあることなんじゃないか、
という姿勢でぶり返してきた。

とっさのことで、頭が回らない。

——だって、そんなこと、
あるわけないって、最後に結論付けたのは、ほかならぬラパルク
ではないか。

「じゃあさ、もしそうだとするとよ、」ネイリンはいう。「その呪い
が本当だった、っていうことは、石の云い伝えだって、」

「本当なのかもしれない」ラパルクはあっさりいった。

「ちょっと待って、ちょっと待って」ネイリンは集中するため、下
を向き頭を抱えた。

とんでもない展開な気もするが、一向に値する見方でもある気が
した。

もしそういうことなら、どうなるんだろう。

まず、ジーナスの死については、謎はないことになる。彼は密室
状態の部屋で死んでいたが、その死が呪いによるものだ、というこ
とになれば、そんな部屋の条件など関係ないことになる。

だが、その死んだ場所がおかしくはないか。鍵を盗んだことで呪
い殺されたのなら、その場、つまり大広間か、もしくは、あの封印
された部屋で死んでいるのが自然だと思う。だが、封印された部屋
で死んでいたのはジーナスではなくトーナスなのである。これはど
ういうことなんだ。

ラパルクは直接いっていないし、鍵を取りだした人間、イコール
犯人ではないはずだ、といってもいたが、この場合、トーナスはジ
ーナスに殺されたのではないか、と思っているはずだ。

仮にそうだとしてみよう。だが、なぜあの場所なんだ？ あ部の
屋にトーナスが入っているのはおかしくないか。

ジーナスがトーナスを殺した、という前提で考えて、二人の間に
なにがあったと考えられるだろうか。

まずジーナスは（どのようにかして）鍵を盗んだ。そしてそのこ
とを——トーナスに嗅ぎつけられたんだろうか。そして、一緒にあ
の部屋に入ったということか？ 二人は石を見つけただろうか。…
…今となっては分からないが、呪いの話が本当なら、石の話だって

本当と考えることもできる。見つけた可能性もゼロとはいえない。……いや、人が死んでいることから見て、二人は見つけたのか。そして、その石をめぐり二人は口論、その果てに――トーナスは殺された。

トーナスを殺し、石を手にしたジーナスは、鍵をかけあの部屋を再封印し、鍵を、手にしたときとは逆の手順（？）でケースに戻し、何食わぬ顔で大広間に居座った。そして、ネイリンと朝の挨拶を交わし自室に戻ったあとで、呪い殺された――。

ラパルクのいうように、云い伝えが正しい、という前提に立って思考を進めると、確かに筋が通ってしまう。

なら、やはりこういうことだったのか。

――でも、こんな結果って……。

心配になり、横にいるロッテを見た。彼女は蒼白な顔で、唇を噛みしめていた。

――彼女にも、論破できないということか……。

ロッテほどの娘が論破できないということは、ラパルクの論理の強度を、ある意味で表しているのかもしれない。

しかし、もしラパルクの今いった論理が正しいとなると――。

ネイリンは、身震いした。

そのときだった。玄関の扉が開いた。現れたのはルイーザだった。

「お義父さま！ いったい……」

「帰れ！」

「えええ……」

第二章 19

19

主に一喝され、ルイーザは、不承不承帰っていった。

多少、かわいそうな扱いだなとは思ったが、ネイリンはなにもいわなかった。

正直、ルイーザにかまっていられる事態ではなくなってしまっている。

彼女の疑いがうすくなったというのもある。しかし、うすくさせた、新しい可能性のインパクトの大きさが、ルイーザの存在をかすめてしまった、という方が正確だろう。

なにせ、彼女にかわって容疑者として浮上したのは、主の次男であり、ロットの父親であるジーナスだったのだ。そして彼は、他でもない、実の兄を手にかけて容疑で疑われているのである。

ロットの心境に思いをはせるなら、それだけでも大変なことだが、しかしそれだけじゃない。というか、こうなっては、もはやそれすらかすんでしまうような可能性が浮上してきたのである。

つまり、再命の石をふくむ、言い伝えが本当なのかもしれない、という可能性――。

この話について、ラパルクとロットは、信じていなかった。ジーナスも信じていなかったらしかったし、トーナスもそうなのだろう、と予測された。ただ、ネイリンだけは半信半疑、といった感じだったが、それは、彼女の「面白がり」の性格が期待を込めて思っただけで、心のすみでは、「残念だが、現実の世界では、そんな面白いことはないんだろうなあ」と考えていた。

もし信じているとしたら、一般的にも、昔から伝わる話を信じた傾向にあるらしい、老人である主だけだったが、ラパルクの考えでは、それも、子供たちの勉強に対するモチベーションを上げさせ

るための演技であり、言い伝えそのものが、それを目的としたものではないか、とのことだった。

ラパルクの考えは、夢も希望もなく、つまらないものではあるが、それだけに信憑性のあるもので、なかば、面白がりのネイリンですら納得しかけていたのだが――。

それがここへきて、ひっくり返った。

それも、一番論理的に言い伝えの信憑性を否定したラパルクの論理によって、である。

それだけにネイリンの受けた衝撃は大きなものだった。

なにせ、もし石の存在が確かなどということになれば、世界観が根底からひっくり返る。

ショックを受けているのは、ネイリンだけではなかった。

つまり、使用人を含め、ここにいるものは、ラパルクの考えを受け入れたらしかった。

――次男は、家督を継ぐはずだった長兄を殺した。

――信憑性を増し、存在感を増してきた再命の石。

どちらも、すんなり受け入れられるほど小さなことではない。

使用人を含め、家人には、前者もどう受け止めていいか、戸惑ってしまう話だろう。

目に見えない、混乱した感情が、大広間を渦巻いている気がした。気がするだけだが、ここにいる人間が、物を考えるにあたって、適していない感情のなかにいることは確かだろう。ネイリンはとにかく、みんなの、そして、自分の感情の高ぶりが治まるのを待った。残っていたスープを口に運ぶ。冷たい液体が、舌を驚かす。冷えてしまったスープは、まるやかだったその味を、いくらか強いものにしていた。味が口中隅々まで一気にいきわたり、ほほの内側をくすぐった。

スープを飲み込み、他人にきこえないように、そっと息を吐いたときだった。ロツテが口を開いた。

「お祖父様に、あらためておききたいことがございます」彼女は、

まっすぐに主を見ていった。「この家に伝わる、再命の石をふくむ
言い伝えの数々。それを、お祖父様は、本心から信じておられるの
ですか？」

「きくまでもないことだ」答える主の顔には疲労がへばりついてい
た。「わしが信じていないとでも思っていたのか？」

「その言い伝え、子供たちの勉強に対するモチベーションを上げさ
せるための、家に伝わる方法なのではないのですか？」

「どういうことだ？」怪訝そうな顔をしている。

「まず子供がよろこびそうな話をし、そして勉強をすれば、その話
におまえ自身が関わることができるのだ、といえば、子供も勉強に
対して興味を持つだろう。そう思っの、言い伝えなのではないの
ですか？ 子供の心から実際ははなれている、そういった浅はかな
策略は、大人の方々がよく考えられることですわ」

「はん、バカバカしい」主は鼻息をもらす。「そんなこと、あるわ
けはないだろう」

「では少なくとも、お祖父様は、本心から信じておられるのですね
？」

「くだい。さつきから、いや、おまえが生まれたときから、何度も
そういつているだろう」

「分かりました」うなづいて、ロツテは目を瞑り下を向いた。しか
しすぐに顔を上げると、口を開いた。「この家に伝わる言い伝え、
それは本当のことなのかもしれませんわね」

みんな、口をはさまずロツテを見つめた。

「今日出会った二つの不可解な事件に、理屈を通そうとしたら、ラ
パークのいうように、言い伝えを前提にしなくてはいけなさそうで
すし」ロツテは主を見つめた。「でも、そういうことなら、考えな
くてはならないことが、また増えてきました」

「まさか——」主は息をのむ。

「そうです。再命の石があるかもしれない。そしてそれは、人が亡
くなるほどの事態が起こっているのです、すでに、人の目にふれて

いる可能性があるといえるでしょう」

先ほどネイリンも考えたことだ。

石を隠した部屋でトーナスが死んでいた。殺したのはジーナスだと考えられる。その殺害の動機として考えられるのは、場所や状況からかんがみて石だが、観念としての石ではないだろう。人死にがでているのだ。あるかどうか分からない状況におかれている「再命の石」ではなく、目の前に現れている「再命の石」の可能性が高い。「もし石が鏡からでているのなら――」

ここまでいって、ロッテがなにを考えているか、やっと分かった。ロッテはいった。

「その石を探しましょう。そして、その石で、お父様を生き返らせるのです」

第二章 20

20

ネイリンは息をのんだ。彼女だけではない。しばらくは、だれも声をだせなかった。

生き返って欲しい。あるいは死んだというのは、なにかの間違いに違いない。身内を亡くしたことがあるものなら、だれしもが一度は考えることだろう。ネイリンも両親を亡くしたばかりのころ、夜眠るときなどに、朝起きたら両親が、すべては夢だったんだよ、と笑いかけてくれるのではないか、と夢想しながらベッドの中で泣いていたものだった。

だが、生き返らせたい、とは思わなかったし、おそらく、だれも考えたことはないだろう。ありえるはずのないことなのだから、当然だ。

だが、今この場所では、その常識が通用しない。

死んだものを生き返らせたいというエゴが、検討のきっかけになってしまう。

ジーナスは石を目にしたのかもしれない、というところまでは考えたネイリンだが、その可能性が、父親を亡くした少女の前で、どういった意味を持つにいたるのか、というところまでは考えていなかった。

頭が回らない。

ロッテの心情を想像するなら、彼女の思いつきは、一縷の希望をもたらしものであるかのようにも思うが、だがそれは、同時にどこか、笑いたくなるような、滑稽で物悲しいものを感じさせる。

もう少し現実的な感想として、だめだったときの残酷さ、ということも想像するなら、諸手を挙げて賛成する気になれない。

たぶんラパルクと、そして表情を見る限り、使用人たちも同様の

思いを胸のうちに抱えているらしかった。

だがいえない。

さきほどまで、倒れるほどまでショックを受けていた少女の、夢想的で非現実的だが、しかし現実性を帯びてきてしまった可能性の目を摘むことなんて、だれにもいえない。

だが、そんなこと、本当にありえてしまうものなのか？

「ジーナスを生き返らす、か……」

主の声は、吐息のようだった。息子が死んだのだ、胸に渦巻く感情は、基本的にはロツテと共通するものだろう。だが、年老い、おそらく自分では成長と認識している内面の屈折は、ロツテのような屈託ない思考の流れ、また感情の起伏に戸惑っているに違いない。

思案下な表情を見せているが、なにも考えていない、考えることができていないのは、一目瞭然だった。

「問題、というか、確認しておきたいことがあるな」ラパルクがいった。主のターンをよこどった印象もあったが、主はなにもいかなかった。「いいにくいこともあるが……まずは、ききやすことからきいておこうか。石のことだが、」ラパルクは主を見つけた。「仮にあったとしてだ、その使い方を知っているのか？ あのケースには、そんなこと一語も書いていないように読めるが」

「使い方は……分からない」主は首を横に振った。「だいたい、あの石は、わしたちが後に使おうと思って守っているものではない。智の者がそれを受け取りにくるまで守るというのが、儂たちガードナー一族に課せられた責務だ」

「なら、石を仮に見つけたとしても、実際問題、おれたちには使えないということにならないか？」

「そのことについては、見つけてからのお話だと思います」ロツテがいう。「結局見つからないかもしれない状態で論じても、仕方がないのではないのでしょうか？」

「それはどうか」ラパルクは思案下にいう。「見つけてしまったら、その時点で冷静な議論は望めないだろう。まだ見つかっていな

い、そしてないかもしれない、平時である今こそ論じなくてはいい問題だと思う」

「冷静なんて、」ロッテは唇の端で笑った。「冷静なんて、お父様の死体を見た瞬間から、わたくしの中からなくなりました」

ロッテは笑っていた。笑うしかできない、といった表情だった。だが目が笑っていない。双眸には涙が浮かんでいた。

やはりぎりぎりだ。とネイリンは思った。

ロッテは、父親が死に、これで両親を亡くしたことになるが、そんな状況にある少女としては、異例の強さと冷静さをここまで見せてきたが、本当はぎりぎり、いや、もう臨界点は越え、心が持たない状態までできているのだ。

できれば、一刻も早く、この場からロッテを引き離し、ベッドで寝かせてやりたいが、それは単なる他人のエゴで、そうしたからといってロッテの心が休まることにはならないのだろう。結局のところ、できることなどないのだ。ただ、ふれずに、ぎりぎりでもっている心を完全に壊してしまわないように、これ以上のダメージを与えないこと。それしかない。

ラパルクもそう考えてなのか、口をつぐんだ。

「ラパルク。確認しておきたいことがいくつかあるといいましたが、他のものは、どういった問題ですか？」ロッテが小首をかしげる。

「い、いや」ラパルクは口ごもった。「いくつか、といったのはい間違いだ。他はない」

違うと思った。ラパルクは、ロッテの顔を見て、これ以上の問題提起ができなくなったのだ。そして、彼が考えなければいけないと思っていたこと。それは、ネイリンにも分かるような気がした。いや、先ほどから、頭の隅で引っかかっていたのだ。だが、今まで直視をしなかった。言葉にしなくても、目を向けたくない問題だった。ネイリンは一度頭を振り、頭の隅からその問題を引っ張り出した。見たくはない、考えたくはないが、だからといって、考えないわけにはいかない問題だろう、と感じていた。そう、自分に向け

て、見ていない振りをしていただけで、本当はもう頭のどこか、あるいは心のどこかで考えつつあったのだ。

——人を殺したジーナスを生き返らせていいのか。

今まではぼんやりとしていた命題を、あらためて言葉にしてみても、ネイリンは、その重さに胸が苦しくなった。

仮定がつづいての話である。

例えば、トーナスを殺したのはジーナスだった、密室でのジーナスの死はケースの呪いによるものだった、呪いがあるのなら石もあるだろう、人死にがでているのだから石は鏡からでてきているのだろう——。

どれも証拠から類推されることではなく、状況から論理によって導かれたことだ。

だから、まだ考えなくてもいいのではないか、とも思ってしまう。考えたくないから、そう思ってしまうのだが——。

いや、ここまで考えてしまっただけ——ジーナスが犯人で間違いないさそうだというところまで考えてしまった今となっては、もう後戻りはできないのだろう。

このことも、考えなくてはいけないのだ。

ロツテは考えることはできない。彼女は頭のいい娘だが、もはや冷静さ、客観性を期待することはできなさそうだ。いや、どんな人格にだって、彼女の状況でこの問題を冷静に考えることはできないだろう。

主もまた、期待できなさそうだった。息子二人を一日になくした老父に、客観的で倫理性を求めるのは酷だろう。それに、年輪を重ねてきた老人の心は、これまでの人生を肯定するための理屈に支配され、思考回路を濁らせている場合が一般的だ。

やはり、部外者であるネイリンとラパルクががんばらなくてはいいけない。

とはいえ、人を生き返らせるなどというのは、人類史上初のことだろう。人を殺した人間を生き返らせるのは赦されることなのか、というシチュエーションも、おそらく今までだれも考えたことがない。自分で切り開かなくてはいけないのだ。しかもその命題は、重く哲学的だ。いや、哲学として考えてはいけないのか。倫理？ それとも論理？ もしかして愛か？

正直、その問題が、どこに属するかすら分からない。

考えなくてはいいけない問題だが、すぐに答えがでるものとは思えない。

そして、考えていることすらロツテに知られてはいけない。

彼女にとっては、ジーナスは父親だ。伯父を殺した疑いが強いが、もし仮にそうだとしても、きつとやむをえない事情があったのに違いない、とロツテは考えているはずだった。

そんな彼女に、そんな人物を生き返らせることは赦されるのか、と考えていることを知られては、ぎりぎりのところに立っている彼女をさらに追い込むことになる気がした。

だから、なにもいえない。だが、考えなくてはいけない。

例えば、もし石があったとして、その石が一人だけ生き返らせるものだったら、殺された（らしい）トーナスではなく、ジーナスの方を生き返らせることには問題はないのか、ということ。

トーナスの顔を思い出す。彼にいわれたこと、彼から向けられた表情。好きな人物ではない。もう会いたくないといってもいいぐらいいだ。

だが、そんなことは関係ない。

ただ単純に、殺された人間としてみるなら、彼は被害者だ。被害者を見捨てて、加害者と考えられる方を生き返らせるのには、問題がある気がしてならない。

いや、こうも考えられるのか。とネイリンは、思考をつづける。ジーナスは、すでに死んでいる。そしてそれは、罪に対する罰として殺されたのではないか、と考えられる。つまり、贖罪はすでに

済んでいる、という見方もできるのではないか。

正確にいうなら、トーナスを殺したことに對する罰ではなく、ケースを開けたことに對する罰であるらしいのだが。

それなら、贖罪を果たしたことはないか。

そもそも罰なんて関係ないのかもしれない。

よく分らない。

だが、一連の話の流れの中から、一つだけ確定したことはある。

それは、彼らの死を、やはり市には報告できない、ということだ。主には、最初にいわれていたことだが、ネイリンはそのことを真剣には考えていなかった。それどころじゃなかったというのが一番の理由だが、ジーナスが死んだことをだれにもいうな、という主の言葉に何の拘束力もない、というのも理由にあった。今はそれどころじゃないが、後になって必要と思えば、勝手に市に言えばいいだけのこと、そう思っていたのだ。

しかし、話はそう簡単ではなくなった。

もし今、市に報告したなら、無用な冤罪を避けるためにも、ジーナス犯人説も同時に知らせなくてはならないだろう。だが、それをいうためには、石に関する情報を伝えねばならず、さらには、石が実在し、すでに鏡から出ている可能性が強いことまではなさなくてはならなくなる。

もし、死んだものを生き返らせる石などというものが実在すると知られたら――。

情報は一般に漏れ、その価値ある石を求め、あるいは既存の価値観、世界観を破壊する石の存在に翻弄され、社会が混乱することも考えられる。

考えすぎだろうか。

生き返りを考えるときに、問題視しなくてはいけないことがまだある。

後に、石を取りにくる、といわれている智者がくるまえに、石を勝手に使ってしまったていいものなのかどうか、という問題だ。

もちろん、ネイリンなどには、どうでもいい問題ともいえるかもしれないが、ガードナー家の人間に、冷静さを期待できない今、自分たちが考えなくてはならないのかもしれない。

その逸話自体を疑っていたこともあったが、主の言動から、これまでガードナー家の人間が、石を守るために生きていたことは確からしい。彼らは、生き返り、という魅惑的な石の力に魅了されないように、代々、知性のあるものを、その石を守る役目に抜擢していた。

とはいえ、中には、大事な人を失い、その石をつかってしまったと思った人間もいただろう。実際に探した人間もいたと思う。ケースを開けようとして、死んだ人間もいるという話が残っているとも聞いた。

この石の周りには、多くの死と、それにまつわる悲しみや苦悩があったはずなのだ。

だがそれらを跳ね除け、状況から考えてこれまで残っていたらしい石を、今このときにつかうことが、果たして許されることなのか。そこまで考えて、あらためてネイリンは、この石を取りにくるという智者とは、何者なのだろうと思った。

智者がくるまで石を守り通せ、という言い伝えは、おまえたちの生き返りは認めない、もっと価値あるものにその権利をあずけろ、といっているのである。

その生に、あるいは死に、他もののとは違う、特別な意味を持つ人間がとりにくるというのだろうか。

石は伝説の勇者から託されているという。ありえないように思えるそんな話も、非常識な石が本当にあるということになれば、あつてしまうのかもしれない。

伝説の勇者が特別な石を渡したかった人間。そして、勇者の意思を叶えようと、生き返りの誘惑を眼前にしながら、周囲の死を迎えつづけたガードナー家の人間。

彼らの思いに想像をはせるなら、今、石をつかってしまうのは、

なんとしても食い止めないといけないことのようにも思う。

「石を探しに行きましょう」

ロッテがいった。そして立ち上がる。その表情には、悲壮なまでの意思が見て取れる。

どうしたらいいのだろう。

ロッテは、悲しそうな顔をしている。だがその表情は、ジーナスの死に直面したときとは、違ったものになっている。

生き返りの可能性がでてきたが故の表情だ。

だが、生き返らせることができなかった場合には、もしかしたら、ジーナスの死を知ったとき以上の悲しみが、彼女を襲うのかもしれない。

壊れてしまわないだろうか。

どうしたらいいのだろう。

「石を探すのはかまわん。好きにしろ」主がいった。

かまわない、ということは、石を見つけたら、つかってもいいということだろうか。

いや、これまで生涯をかけて守ってきた宝だ。息子が死んだ今となっても、きっと本心では、つかってはいけなさと考えていると思う。

単純に、父親の死にショックを受けていた孫娘が、一縷の望みをかけようとしている可能性を、消し去ることができなかったのだろう。

もし万が一石が見つかったら、それはそのとき考えよう。

きっとそのように考えているのではないか。

ロッテの顔を見てしまったら、ロッテの心情に思いをはせたなら、そのようにしか考えられないと思う。

ロッテは、主の言葉にうなづいた。

「ただし、」と主はつづけた。「条件がある」

「条件？」ロッテはいぶかしげに聞き返す。不本意だったようだ。

「ああ。リール」主は使用人に、話の矛先を向けた。

「は」リールは硬直して待った。

「イボーと一緒に、墓穴を掘ってくれ。場所は分かるな」

「はい。承知しました」

「ロッテ。石を探すのは、リールが墓穴を掘るまでの間だ。それまでに見つけられなければ、石は諦めろ」

「お祖父様！」

「ロッテ。おまえの父は死に、石が目の前にないのは事実だ。そして、仮に今日の前にあったとしても、本来なら、ガードナー家の人間として、つかうのをとめなくてはならない立場だ。だが、」主はロッテを見つめていった。「おまえの気持ちも分かる。おまえにこれ以上辛い思いをさせたくないとも思っている。だから、墓穴を掘るまで、という条件を設け、石を探すことを認めたのだ。これ以上のことは、認められない」

「……そうですわね」ロッテは、下を向きながら唇を噛んでいた。

「どちらにせよ、時間的な制限はあるのですし。とにかく、早く見つけないことには、話になりませんわね」

どちらにせよ時間的な制限がある、というのは、石が見つからないからといって、見つかるまでジーンズをあのままほうっておくことはできない、という意味だろう。

生き返らないかぎり、墓に入らなければならない。

そして死体は、刻一刻と変化する。

「……あ、旦那様」リールが遠慮がちにいう。「あの部屋の鍵は、おかけになられていないようですが、」

「ああ、そうだったな」主はなんでもないことのようにいう。これまで、あの部屋の密室性を守り通してきた主ではあるが、一度みんなの前で開けたことで、意識に変化があったようだ。「鍵をロッテ、おまえに預けておく」主は、ゆっくりとした動きで立ち上がった。

「リール。おまえもロッテたちについていけ。そして、あの部屋の搜索がすんだら、おまえが責任を持って、鍵をケースにしまってくれ」

そうリールにいつてから、二つの鍵をロッテに手渡した。

「いいんですか、お祖父様」 ロッテが鍵を手し、戸惑ったようにいう。

「僕は疲れた。部屋で休ませてもらう。すべてが終わったら、報告に来てくれ」

彼のいうすべてとは、石の搜索。そして、墓穴を掘り終わったら、ということだろう。

ロッテとリールがうなづいた。

「埋めるときは、せっかくだ、あなたたちにも参加してもらいたい
がどうだろう」

主が、ネイリンたちのことを、初めて「おまえたち」ではなく「
あなたたち」といった。

最初ネイリンたちは、主にとっては招かれざる客だった。そして
息子たちが死に、一気に容疑者となった。そんなネイリンたちを「
あなたたち」と呼んだ心境は、謎を解いたラパルクへの感謝、ある
いは礼なのであろう。

そしてそれは、この事件に対する、事実上の終結宣言ともいえる
ものだった。

つまり主は、長男を殺したのは次男であると認め、幕を下ろした
のだ。

「はい、もちろんです」 ネイリンは答えた。

主は、背中での言葉をきくと、なにもいわずに歩き出した。

カーテがあわてて後を追ひ、彼を支えた。

第二章 21

21

「まずは、あの部屋から搜索しましょう」そういつてロッテは、階段を上り始めた。

あの部屋とは、いわずもがな、あの封印された部屋だろう。

石が鏡から出ているのなら、そして、それをめぐり兄弟の間でいさかいが起こり、そして兄が弟に殺されたのなら、石がある可能性の一番ある部屋は、弟ジーナスの部屋だろうと推測される。だが、この期に及んでは、あまりそういった蓋然性を指摘する気にはならなかった。

石を手にしたと考えられるジーナスが、すでに死んでいることから、彼が石を持っていたとしても、その場所が移動するということが考えにくい、ということもあるし、あの部屋を早く封印しなくてはいけない、ということもある。だがそういった理屈以前に、行かなくてはいけない、そう思わせる雰囲気がああ部屋にはあった。

石の搜索といえば、まずはあの部屋なのだ。

まあ、ロッテの父親であるジーナスの死体の部屋にもう一度行くのを、少しでも遅らせたい、というのもあるが。

——ロッテは、どう考えて、あの部屋から探そうといいだしたのだろう。

ネイリンは、彼女の後を追って階段を上ろうとした。その肩をラパークにつかまれた。

「ちょっと待ってくれ」ラパークがロッテの背中に声をかける。「その前に、調べたいことがある」

ロッテが階段の途中で振り返る。なんとなく、その様子が危なかしくネイリンの目には映った。

「はい、なんでしょう」

「ケースを先に調べてしまわないか？ さっきから、気になっていたんだ」

なにかいおうと口を開きかけたロッテだったが、ラパルクはそんな彼女に見向きもせず、さっさとケースの前に移動した。

ネイリンとロッテも、彼の後につづいた。

「調べるってどうするの？」ラパルクの背中に、ネイリンはきいた。「こうするんだ」そういつて、おもむろにケースをつかみ持ち上げようとした。

「ちょ、ちょっとラパルク、なにしてるの？」あわててネイリンはいった。リールやロッテも驚いたように、あ、と声をだした。「そのケース、下手に触ると呪いがかかるかもしれないんだよ」

呪いが本当にあるのかどうかは、実際に見たわけではないからいきれないが、呪いのことはロッテもいつていたし、それに先ほどのラパルクの論理で、その可能性はますます高まったのだ。触らないことに越したことはない。

「だが、ちゃんと確認してみないと」ラパルクはそういつて、あらゆる方向に力をかけている。「今じゃないとできないんだ」

「どういうことよ」

「この事件のことを考えるとき、このケースの密閉性は重要な要素だ。だが、そのわりには、あまり調べていなかったら？ 本当に鍵がないと開かないのかどうかは、調べてみる必要があると思ってたんだ」

「まあ、そうかもしれないけどさ、でも、開かないんだと思うよ。だって、もし開くなら、もっとずっと前に誰かが中の鍵を取りだして、あの部屋を開けるなりなんなりするでしょ？」

「まあな」ラパルクはうなづく。「あの部屋が、いまだ封印された部屋として認識されていることが、このケースの密閉性を裏付けているとも思うが、だが確認することは大事だろ？」

「そりゃそうかもしれないけど、」ネイリンはいつて、一步後ろに下がる。「でも呪いが本当かもしれない、っていったのは、あんた

なんだよ。よくそう思ってた触れるね」

ロッテをはじめとして、この屋敷の住人が、このケースの呪いについてどの程度信じていたのかは分からないが、再命の石のように信じられない話がごろごろ転がっている屋敷だ。もしかしたら、呪いもあるのかもな、ぐらいには思ってたのだと思う。ネイリンも、そんな認識で、進んで触ろうとは思っていなかった。そんな屋敷で不可思議な事件が二つも起こり、考えた結果、ケースのろいの可能性が高まった今となっては、頼まれても触る気にはならない。

やっぱり男は勇気があるな、とネイリンは思い、賢い女に生まれてよかったと思った。

「だが、今なら大丈夫のはずなんだ」

「なんで？」今が一番危ないように気さえする。

「鍵がない」ラパルクは、ケースを開けるため、あらゆる方法を試している。

「鍵って……」

「この中に入っていたあの部屋を開ける鍵だ。それが入っていないんだから、万が一このケースが開いちゃったとしても、鍵を盗もうとしたことにならないだろう？」

「あ、なんだ。すっかりビビッてんじゃない、あんたも」

「ビビッてるんじゃない。バカじゃないってだけだ」ラパルクはそういつてケースからはなれた。「このケース、やっぱりどうやっても開かないな」

——ジーナスさん、どうやって開けたんだろうな。

そうつぶやくようにいつて、ラパルクは階段に向かった。

ネイリンは、ロッテとかめを合わせ肩をすくめた。

第二章 22

22

一同は、黙って階段を上り、あの部屋に向かった。部屋の前まできて、またラパルクが口を開いた。

「ロツテ。確認したいことがあるんだ。その鍵は、本当に違うものなのか？ ケースを開ける鍵で、この部屋も開いたりしないだろうな」

「一応確かめてみましょう」

そういつてロツテは、ケース用のものだろう鍵から、鍵穴に入れた。しかしまわるどころか入りさえしない。

「よろしいですか？」ロツテはラパルクを見上げる。

「ああ」ラパルクは扉を見た。そしてノブに手をかける。「入ろう」鍵はかけられていない。少し前までは嚴重に封印されていた扉は、簡単に開いた。

部屋の中は、当然、先ほどとなにも変わってはいなかった。ロツテは、無言で部屋に入った。

先ほど入ったときは、トーナスの死体を見つけた、ということもあり、あまり調べられなかった。今度は主もないし、心行くまで、気になり続けていたこの部屋を調べられる。しかも今度は、かなり現実的になってきた石の存在を意識しつつの探索だ。ネイリンは、少しばかり気負って中に入った。

ラパルクも後につづく。リールとイボー、ルイは部屋の前にとどまった。

ネイリンは部屋に入ってまず、人型に膨らんだ毛布を見た。この中にトーナスがいる。生前は傲岸不遜な態度で、感じわるく思ったりもしたが、殺され、一人こんな部屋で毛布をかけられているところを見ると、目頭が熱くなってしまう。

かわいそう、という感情とも違うのだが。

ラパルクは、まっすぐに彼に向かうと、躊躇なく毛布をめくった。とっさのことで目をそらせなかった。虚空をにらみつけるような表情のトーナスの顔が現れ、彼とぼちり目が合ってしまった。

「ちょっと、ラパルク。なにしてんのよ」

「確認だ」そういつて、トーナスの頭を横に向けた。後頭部を見ている。「角のあるもので打たれているな。凶器の搜索も、いずれしなくちゃん。ところで、リールさん、いつ運ぶんですか？」ラパルクが室外に向かっていった。

「ジーナス様は、墓穴を掘り次第、お迎えに上がろうと思いますが、この部屋はジーナス様の部屋とは違い、封印しなくてはなりません。ですので、皆さんの搜索が終わり次第、トーナス様を運び出そうと思います」

「リール、イボー、入ってきて」そのときロッテがいった。見ると彼女は、あの文字盤が反対になった時計の下で、それを見上げている。「この時計を調べます。下に下ろしてください」

この部屋にあやしいところはあまりない。というか、窓すらないなにもない部屋なのだ。鏡と文字盤が反対の時計。あとは、念のため、抜け道がないかどうか壁を調べるぐらいか。それぐらいだ。だから、遅かれ早かれ時計も調べることはなるのだが、順番としては、まずは鏡を調べたかった。

「はい。イボー」リールはイボーを伴って部屋に入ってきた。呼ばれてはいないが、ルイも控えめな態度で入ってきた。「イボー、四つんばいになってくれ。私が時計を下ろす」

イボーは、なにもいわず入ってくると、やはりなにもいわず四つんばいになった。リールはその背中に、やはり無言でのった。靴は履いたままだった。

彼は一度時計を持ち上げるようにして止め具から時計をはずすと、それを腕に抱えた。

「リールさん」ルイがイボーの横で手を上にあげる。

しかしリールは、手伝おうとしているルイを無視して、時計を抱えたままイボーから下りた。

「リール、それを床において。うつぶせにね」

いわれたとおり、リールが時計を置いた。そつと、赤子を寝かせるような手つきだった。

「とりあえずこれを開けたいんだけど、工具が必要ですよわね。ルイ」
呼ばれた彼は、ハイ、といって背筋を伸ばした。

「工具を持ってきた。大急ぎでね」

「はい」やつと仕事を与えられたルイは答えるや否や、部屋から飛び出していった。

「時計になにかある、と考えているの？」ネイリンはきいた。

「この部屋になにかあることは確実です。そして、調べられるところは時計だけです」

「鏡もあるじゃない。というか、鏡の方が怪しい、というか重要だと思っただけ」

「確かに。石が入られている、といわれている鏡は無視できません。しかし、現実問題、鏡に石など入っていたわけではないですから。ならば、鏡に入っている、というのは一種の比喩と考えるのが妥当だと思っんです」

「比喩」

「はい。石が本当にあるかもしれない、という結論に導いたラパルクさんのお話をきいているときから、考えていたんです」そういつてロツテは振り返り鏡を見た。「鏡に入っている、というのは鏡に移っている、ということではないのか。そして、鏡に移っているのは石ではなく時計」ロツテは時計を見下ろし、そしてネイリンを見た。「時計に石が入っている。いえ。入っていた、と考えることはできないでしょうか」

それは考えていなかった。時計について疑問に持ったのは、なぜ文字盤が反対なのか。それだけだ。

鏡に移ったものの中に石を隠す。だがそれだけだとすぐにばれそ

うだから、その隠した物自体に、意味深な細工を凝らした。そういうことなのだろうか。

「そうかもしれないな」ラパルクがいった、「どうして気づかなかったんだろう。その可能性はあるぞ。少なくとも、鏡に封印した可能性よりはずっとある」

確かに。いわれているうちに、ネイリンもだんだんそんな気がしてきた。だが、それだと、あまりに簡単過ぎないだろうか。分からなかった立場でいうのもなんだが、もしそうだとするなら拍子抜けだ。

これが盲点というやつなのだろうか。

「石はないだろうが、この中に、石を隠すだけのスペースがあるかどうかを確認するだけでも、意義はあるな」ラパルクがいう。

「ええ。石を隠すだけのスペースを認められたら、やはり石をめぐるの殺人だと考えることができます」

そしてその場合の犯人は、ジーナスだ。

そのような結論になったら、ロッテとしては辛いだろうが、やはり石はあるのだ、という証拠が見つければ、父親の蘇りも現実的なものになる。

いたしかゆしではある。

それにしても――。

とネイリンは思う。死んだものを蘇らせる石、などというものが、時計の中に隠されている、ということが納得できない。

現実的に、「時計の中に隠された」石などに、非現実的な生き返りの力などないように思うのだ。非現実的に、「鏡の中に入っていた」石になら、そんな非現実的な力もありそうにも思うが……。

ルイが戻ってきた。彼から工具箱を受け取ると、リールが時計の裏板をはずしにかかった。価値のあるものなのかどうかは知らないが、彼の手つきはことさらに慎重だった。

裏板を止めていたねじをすべて取り終わると、リールはロッテを見た。彼女に開けさせようということらしかった。ロッテは、ちら

とネイリンを見てから、裏板を持ち上げた。時計の内部は……。

いたってふつうだった。ふつうの時計の中身などことさら注意深く見たことはないが、予想外のものはなにもなく、歯車や糸、滑車などで密集しているそこには、石を隠していたようなスペースも認められなかった。

それでもロッテは、食い入るように見ていた。動かなくなる可能性もあるから、どこにもふれなかったが、どんな手がかりも見落とすまいというように、いろんな角度から内部を覗き込んだ。

「どう、ロッテ？ なにか入ってたっぽい？」

ネイリンの問いに、ロッテは黙って首を振った。

やはりここじゃなかったようだ。

「でも隠すとしたら、ここしか考えられないんです」ロッテはつぶやく。「石とは、思いのほか、小さいものなのでしょうか？」

「ううん」ラパルクが首をひねる。「おれはなんとなくこぶし大のものを想像してたけど、べつに大きさについての言及なんかは、あのケースの文言にもなかったしな、その可能性はあるけど……」

「この中に入ってたなら、相当に小さそうですね」リールがいう。

「ええ。石がある可能性が一番高いお父様の部屋を搜索するときには、相当注意深く探さなくてはいけませんね」

「うん。この部屋も、一応床の隅々まで探しておいた方がいいかも」ネイリンもいう。

「いや、その前に」とラパルクがいった。「時計の正面を、もう一度よく確認してみよう。もしかしたら、文字盤に埋め込まれているということがあるかもしれない」

これにはなるほど、と思った。

石は鏡に入っている、といわれている。鏡に移っているというところか、とも思ったが、鏡には時計しか移っていないから違う、と今までは考えていた。だが、その鏡に移っている時計の表面に石が埋め込まれているなら、話は矛盾しない。

「それなら、鏡にも移りますわね」わずかな興奮は、ロッテにもあ

った。「……見てみましょう」

すぐにでも時計の正面を見たかったが、このまま時計を起こせば内部の部品が床に落ちてしまう。じれったくはあるが、裏板を戻さなければ。

ロツテはあわてた様子で裏板を時計の裏側に載せた。リールが手早くねじを嵌めていく。すべて閉め終えてから、リールが時計を抱きかかえるようにして起こした。ネイリンは、ラパルクやロツテと先を争って、正面に回りこんだ。

「ぱっと見は……おかしいところはないな」ラパルクがいう。

少なくとも、石をはずした後のような不自然さは、その前面になかった。

「この、中心にあるのはどうでしょう。石……のようにも見えますが」ロツテが、針の根元を板に固定している物体を指差す。

「石っぽくも見えるけど、でもそれなら、この時刻を示すこの点だって、なにかそれっぽいものが埋め込まれているよ」ネイリンはいった。「こっちの方が十二個もあって目隠しになるから、怪しいような気がするけど」

「でも、もしこのうちのどれかが石なら、どれがそうなのかわからないですわ」

確かに、目隠しすぎる。

「もしかして、十二個全部石だったりして」

「それは……」

「どうやら違うようだな」絶句したロツテをよそに、ラパルクがいった。「どっちにしろ、これのどれかが石なら、まだ石は取り出されていないってことにならないか？　だが、状況から考えて、石は取り出されている可能性が強いんだ。だから、取り出されていないってことから、これらは違うっていえると思うんだが」

「そうかな」ネイリンは、ふと思いいった。「可能性としては、見つけたけれども、取り出せなくていったん諦めた、っていうこともあるかなって思うんだけど」

「いや、ここで人が死んでるんだ。そんな中途半端な状況じゃないと思うが」

「じゃ、偽物と入れ替えたのかも」とネイリン。

「それも考え難いと思うぞ。もし仮にそうだとしてもだ……そもそもこのガラス、開くのか」いつてラパルクは、表面のガラスを指先でつついた。

「えっと、どうでしょう……」いつてロッテは、ガラスを調べた。

四隅四側面で端に爪を当てている。「開くようにはできていませんわ。内側から入れて、はめ込んでいるみたい」

「なら、もし石を入れ替えたなら、まず裏板を開け、じゃまな内部をすべて取り出す、という工程を踏まなくてはならないな」

「これも違うんでしょうか？」気落ちしたようにロッテがいう。

「たぶんな。時計の表面に石が埋め込まれるのを知っていたものが、その石の偽物を作ったうえで忍び込み、時計の内部を取り出して石を交換し、またちゃんと時計が動くように、正しく中身を戻した、と考えるのは不自然だろうな」

殺人の起きた部屋で、そんな悠長なことはしないと思う。

「でもそれなら……」ロッテは振り返り、鏡を見た。

やはり鏡の中だろうか――。

生き返りの力があるような非現実的な石の隠し場所には、鏡の中などという非現実的な場所がお似合いだと思ったネイリンだが、本当に鏡の中に入れられていた場合は、その取り出し方が見当もつかない。

どうやって入れたのか。そもそも入るものなのか。

だが現状、石が取り出されているように考えられている。その石が入っていたのが鏡なら、それを確認する術は思いもつかない。

鏡に関しては、はっきりいつてどこから手をつけていいか、どう考えたらいいか見当もつかない。

「とりあえず、」とネイリンは口を開いた。「床を探してみましよう。この時計に入るぐらいの小さなものなら、何かの拍子に落ちた

まま、ということもなくはないかも」

「ですわね」ロツテもうなづく。

そしてだれからともなく、四つんばいになって床を這い回り始めた。

六人が散らばる。ネイリンは床を見ながら、もし見つけたとして、それを黙って隠したとしても、そんな小さなものならばれないだろうなと思った。

ネイリンは石を探す振りをしながら、さりげなく他のものを観察した。

しかし、とくに怪しい動きをする人物はいなかった。みんな、一心不乱に石を探しているように見える。

しばらくの後、ロツテが床にぺたりと座り込んだ。

「ありませんわ、こんなところになど」唇をかんで、下を向いている。

「でもロツテ。いま探さないと、もうこの部屋には入れないのよ」

「もう十分に探しましたわ」ロツテは周りを見回す。「みなさんも探したのでしょうか？ それで見つからないのですから、床にはありませんわ」いつてロツテは立ち上がった。「お父様の部屋に参りましょう。もともと、石があるとしたら、そちらが一番可能性があると思っていましたの」

「まあ、おれもそうは思うけど……」ラパルクも立ち上がりながらいう。「床はもういいとして、この部屋を出るのはもう少し後にしたほうがいいと思うぞ。まず、抜け道などがないか、壁を調べる必要があるし、鏡だって、もう少し調べてみないと」

「抜け道などありませんわ。わたくしは、生まれてからずっとこの家に住んでいるから分かります。抜け道はスペース的に、ありえないのです」

「それは私もそう思います」おずおず、といった様子でリールがいった。「この部屋は真下の旦那様の部屋と間取りが同じようでございますが、広さとしても……同じように思います。少なくとも、人

一人分が入れるようなスペースが壁の向こう側にあるようにには思いません」

「まあなあ。そもそも壁に切れ目みたいなものがないし、それを隠す家具もないから、おれもそれはないとは思ってたんだが……。じやあ、抜け道はいいとして、鏡はどうする？」

「調べてもいいですが、率直にいつて時間の無駄だと思います」ロツテは首を振る。「石がもし鏡の中にあつたのだとしたら、確かめようがございませんもの」

「そりゃ確かにそうだけだよ、しかしあんたの親父さんは、そこから石を取り出した可能性が高いんだぜ。だったら、」

「どうします？」ロツテがきく。

「どうするって……」

「鏡の中の石をどうすれば取り出すことができるのか。それはもう現実的な話じゃありません。だから、現実的に、今時計を調べたようにしたところで、しょうがない話なのだと思います」

「なら、どうすれば……」

「考えるか、あるいは――」ロツテは鼻息をもらした。「考えないか」

「考えないってのはつまりあれか、ジーナスさんがどうやってケースから鍵を取り出したか考えても仕方ないって理屈と同じように、これも考えても仕方ないってことか？」

「はい。方法は見当もつきません。しかしわたくしたちは、石が取り出されていると考え、それを探そうとしています。今大事なことは、石を見つけることで、石の取り出し方ではありません」

確かに、石の取り出し方を思いついたところで、いいことは何もないのだ。しいていうなら、すっきりするぐらいで。

「しかしなあ、石の取り出し方が分かったら、やはり石は現実にある可能性が強い、ということはそれを理由に殺人が起こった可能性が強いんだな、と理解することができると思うんだが」

「石を実際に見つけてしまえば同じことです」

「まあ……」

「参りましょう。お父様の部屋に」そう言ってロツテは率先して部屋を出た。「時間がないんです」

石の搜索には、墓穴を掘り終わるまでという条件が課せられている。だが、その穴を掘るリールたちは今ここにいて、だから今時間がない、とっているのは、仮に石を見つけた後のことを心配しているのだろう。石を見つけ、そのつかい方が分かったとしても、ジーナスの腐敗が進んでしまっていては効果がない可能性もある。

そこまで、おそらくラパルクも考えたのだろう。なにもいえなくなってしまうた。

「リール、伯父様をお運びして」

「は。では」といってリールが、イボーに目配せした。

「なんだ？」

「……トーナス様の足を持て。わたしは、頭を持つ」

「分かった」イボーはトーナスの足を、毛布の上からつかみ持ち上げた。

リールと二人、トーナスの亡骸を室外に運び出した。ルイも、トーナスのお尻のあたりに手をやり、支えた。

彼らにつづき、ネイリンとラパルクが部屋を出た。ネイリンは、部屋を出た後振り返り、室内全体に目をやった。見忘れたものはないだろうか。

なにもないように思った。なにも。仕掛けようがないほど、シンブルな部屋なのだ。見るべきところもない。

結局なにも分からず、見つけれなかった。

せっかく封印が解かれたのに。

いったいこの部屋は、どういった部屋だったのだろう。

ロツテが扉を閉め、鍵をかける。

また部屋は、封印された。

第二章 23

23

まずネイリンたちは、下の大広間に向かった。用事もあるが、ここを通るのが一番近い。

大階段を下りきってから、リールが口を開いた。

「よし、トーナス様を、ひとまずここに置かせてもらおう」そしてロッテを見やる。「お嬢様。鍵をケースに」

「ええ」

ロッテはケースに向かった。リールも後を追う。

リールは主から、ケースにあの部屋の鍵をしまうようにいわれている。目の前で確認したいのだろう。

ロッテはケースを開け、鍵をもとあった場所に置いた。ケースを閉め、鍵をかける。

「これでよろしいですわね。えっと……」といってロッテは思案顔でリールを見上げる。「この鍵をどうしましょう。お祖父様は、すべてが終わってから呼びこいとおっしゃっていましたが……」

「そうですね。私はこれから、庭に出て穴を掘らなくてはなりません……」

だれが鍵を保管するかで迷っているらしい。

ひとつ走り行って、主に鍵を渡してくればいいようなものだが。

まだ用事すべてが終わっていないにも関わらず、主の部屋に行くと怒られる——そう二人は思っているのだろうか。

ネイリンなどからしたら、主はただの感じのわるいじいさんだが、この家のものからしたら、威厳ある、恐れ多い存在なのだろう、きっと。

「あの……私が持ちましょうか？」ルイが、小さな声でいった。

ロッテとリールが同時に見る。ルイは首をすくめ、小さくなった。

「あの……お嬢様とお客様たちは、これからジーンナス様のお部屋の検索がありますし、リールとイボーは、穴を掘らなくてはなりません。私は、身体をつかってできることがあります、逆にいえば、落として紛らわせることがないと思います」

「ルイ、おまえ分かっているのか。この鍵は、このお屋敷に代々伝わる、それは貴重で大切なものなのだぞ。おまえごとき半人前が、」
「お任せしますわ」 ロッテがリールの言葉をさえぎっていった。リールの口調にさらに小さくなっていたルイは、緊張したようにほほを紅潮させた。「ルイ、あなたにあずけますわ。絶対になくさないでね」

「はい！」 ルイは背筋を伸ばして答えた。

おそらく同じ年ぐらいの二人の間には、もう絶対的な上下関係ができてしまっている。

でもこれはこれで、当人同士では、心地よかったりもするのかもしれない。

ネイリンは複雑な気持ちで、そんなやりとりを見ていた。

「よろしいんですか？」 リールは、不安そうな顔で見る。なにかあったときに、主に怒られるのはきつと自分だ——そう思っているのかも知れなかった。

「ええ。鍵はルイに任せます」

「ジーンナス様は……」 リールは口ごもった。いかがなさいましょう、とてもいいかけて、その表現は適切ではない、と思い直したのかもしれない。

「しょうがありません。葬儀の用意が済むまでは、あのままでいてもらいましょう。お祖父様だって、なにもおっしゃってはいなかったですし……どうしようもございませんし」

亡くなった人物を、墓穴が掘り終わるまでそのままにしておくのもどうかと思うが、客人を一時待たせておく部屋みたいに、死体を一時保管する部屋などもないのだろうし、ロッテのいうように、まあ、しょうがないことなのかもしれない、とネイリンも思った。

「では、ネイリン、ラパルク」ロツテは二人を見た。「お父様の部屋に向かいましょう」そして使用人たちを見る。「あなたたちは、しっかり穴を掘ってね」

「はい」とネイリンは、リールたちにつられて、つい敬語で返事をしてしまった。

第二章 24

24

ネイリン、ラパルク、そしてロッテの三人は、ジーナスの部屋に向かった。

無言だった。

ネイリンの頭に、ジーナスの死体を見つけたときのことが浮かぶ。音も色もなく、光景の輪郭と動きだけが、頭の中で再生される。ジーナスの部屋も密室状態だった。外の世界と隔絶した空間で、一人死んでいたジーナス。それを見つけ、初めてパニックを見せたロッテ。息子の死に顔を見て、窓の向こうで顔を青白くした主。

部屋が近づくにつれ、気が重くなり、足取りも重くなる。

ラパルクの論理では、彼は呪いによって殺されたという。

その呪いが起こったかもしれない部屋は、意に反して一步一步近づき、そして目の前に。

扉の前でロッテは立ち止まった。

「大丈夫、ロッテ？」彼女は下を向いていた。「無理しなくていいのよ。石の搜索は、あたしただけでもできるし」

「大丈夫ですわ」ロッテは、顔を上げて笑顔を見せた。「お父様のためにできることをしたいんです」

「うん……」

ロッテは扉を開けた。そして今度はためらいを見せず、足を踏み出す。彼女につづいて、ネイリンも室内に足を踏み入れた。

こちらの室内も、当然、先ほどと違いはない——ようだった。あの部屋とは違い、ジーナスが生活していた部屋だ。物も多い。ベッド。書き物机。窓。カーテン。棚。鏡。クローゼット。そして、部屋のはば中央に毛布にくるまれ横臥しているジーナス。見るべきものはたくさんあり、違いはない、と簡単に断言していいのかは分か

らないが、少なくとも一見して違いはなかった。

「まずは、どこから調べましょう。――床から調べましょうか？」

ロッテがいう。ジーナスから目をそらして、あらぬほうを見ている。「その前に、ジーナスさんの死因を、もう少し調べてみたいと思う」ラパルクがいった。

ジーナスには、ロッテの手前あまりふれたくないと思っていたネイリンだが、やはり無視しつづけるわけにもいかないだろう。ラパルクのいうように、死因を調べることにしても大事だし。ないがしろにはできない。

「分かりました。でも、ラパルクがやってください。わたくしは……」

「ああ。もちろん、お嬢さんにも手伝ってくれ、なんていいはしないさ」ってラパルクは毛布に近づいた。

ネイリンはどうしようか瞬間迷ったが、ラパルクについていることにした。ロッテも心配だが、ラパルクが気がつかないことを自分が気づく可能性もある。

ラパルクはジーナスにかけられていた毛布をはいだ。ジーナスが現れる。顔面が蒼白だ。表情は、驚愕、といった表情だった。

あらためてジーナスの死体を見て、臆しそうになってネイリンだが、息をひとつ吐いて、気持ちを引き締めた。動揺している場合でも立場でもない。

彼の胸にはナイフが刺さっている。これが死因だろう、とは思ったが、綿密に調べたわけではない。

「本当に、ナイフを刺されて亡くなったのかなあ」弱気にならないため、ネイリンの方から口を開いた。「ナイフも刺さってるけど、他の事が直接の死因っていう可能性はないの？」

「まあ、ないだろうなあ」とはいいつつ、ラパルクはジーナスの身体を仔細に調べ始めた。「もし他のなにかが原因で死んで、その後にナイフを刺したなら、こういった血のかたはしはないはずなんだ」ラパルクは、ジーナスの服をすべて脱がすようなことはしなかつ

たが、それでもボタンをはずしたりして、あらゆるところをチェックしていた。

「とくに怪しいところはないな。ジーナスさんはナイフによって殺されている」

といって、ラパルクはロッテを見た。ロッテは後ろを向いて耳をふさいでいた。ネイリンたちの最前からの会話には、遺体となっているものの娘として聞きたくない単語にあふれていたかもしれない。デリカシーに欠いていたな、とネイリンは少し反省した。

「だが、ナイフによって殺されている、というのが、そもそも不自然という気もしないでもないが」ラパルクは、ロッテを見ながら小声でいった。

「ん？　　どういうこと？」

「だから、もしジーナスさんが呪いで殺されたなら、ナイフ、っていうのが変じやないかっていいんだ」

「へん……かな」

まあ、「呪い」のような非現実的な力なら、ナイフなどなくても心臓の動きをとめることができるかもしれない。だが、ナイフによって心臓の動きを止めてもいいような……。

いや、やっぱりラパルクのいうように不自然な気がしてきた。

「まあ、いわれてみればおかしいかも」ネイリンは考えながらはなす。「呪いのわりにはいやに現実的な殺し方だね」はなしている、と、べつにおかしくないのか、という気もしてきた。「でもな、部屋は密室だったんだから、このナイフがひとりで動いたってわけでしょ？　　そういう想像なら、呪いのイメージと矛盾しないけど」

「ああ。ジーナスさんは呪いによって殺されたのかもしれない、といったときにみんなナイフのことを疑問視しなかったのは、そういうイメージを頭の中で働かせたんだろうけど……」

「けど？」ネイリンは先をうながす。「なによ？」

「その想像を支えているのは、この部屋の密室性だ。だから、それを確認しないとな」

「まあ、そうね」

ラパルクはジーナスの胸ポケットに手を入れた。鍵を中から取り出し、ジーナスに毛布をかけなおした。それからロッテのところに行き、依然両耳を抑えている彼女の肩をぽんと叩いた。ロッテがびっくりと、小さくはねた。

「大丈夫だ。毛布もかけたし、もう調べない」そういつてラパルクは、扉の方に向かった。

ネイリンは後を追う。ロッテもついてきた。

「なんですの、ラパルク？」

「鍵を調べようと思ってな。細工を施す余地があったのかどうか、調べる必要がある」

「はあ……」ロッテはピンときていないようだった。「細工っていうのは？ この部屋は、お父様が鍵をおかけになったんですよね？」

「そうだと思ってる」ラパルクは、扉を開いた状態にして、鍵穴に鍵を入れた。回すと、それにつれて扉自体から突起がでる。これが壁にある穴にはまり、鍵がかかるという構造だ。「だがもし、この鍵に何らかの細工ができるなら、ジーナスさんを殺したのは、呪いの力などではなく、第三者の犯行、という可能性もでてくる」

「第三者の犯行って……。でもラパルクは、呪いの力でお父様は殺されたのだとおっしゃったじゃありませんか」

「ああ。おれはそう思ってるけどな。トーナスさんの件や鍵のことなど、もろもろの条件からしても、そう考えるのが自然だと思うし。だが、調べる必要はある」

「そうですわね」

そういうロッテの様子は、言葉とは裏腹に、あまり納得していない様子だった。

さっきのあの部屋の搜索のときもそうだったが、やはり石の搜索を優先したいのだろう。石の搜索は、リールが墓穴を掘り終えるまでの間、という条件もある。

だが、ラパルクの行動も軽視していいことではないだろう。彼は、

一連の不可思議な出来事が、どのようにして起こったかを説明したが、見たわけではないのだ、それが絶対の真実というわけではない。だから、その仮説を補足するために色々調べるのは必要なことだと思う。そして、たぶん今を逃すと、立場や状況を鑑みて、以後この部屋は調べにくくなる。

とはいえ、あせるロッテの気持ちも分かったので、ネイリンはいった。

「ロッテ。石を探したいのでしょうか。なにも、三人一緒になって行動する必要もないわ。あなたは石を探してて」

「はい。そういたします。ネイリンも手伝ってくださいますわよね？」

「えっと、あたしは……」ネイリンはいった。「扉とか鍵をラパルクと一緒に調べたいと思う。さっきは、あまりこの部屋、調べられなかったから……」

ロッテの気持ちも分かるが、ネイリンとロッテは立場が違う。父親を亡くした彼女のことを思いやってやらなくては、とも思うが、そんな彼女に代わって、考えたり調べなくてはならないだろう、とも考えていた。そういう仕事は、無関係で無責任な部外者が適任だし、やらなくてはならないことなのだ。

「そうですか」ロッテは、少しがっかりした様子だった。「分かりました。わたくしは、石の搜索をしています」

そういつてロッテははなれていった。

それを見て、自分の考えは間違っているのかな、と少し自信がなくなかった。

「鍵穴には、不審なところはないようだな」

ラパルクの独り言が、うまく聞き取れなかった。

「ん？」

「いや、鍵の代わりに、なにかを入れた様子はないなっていったんだ」

「そんなの見て分かるの？」

「ああ、たぶんだけどな。へんな傷跡もないし、この鍵は、けっこう形が複雑だ。鍵の代わりになにかを入れて、これを動かすってことはできないだろう」そういつてラパルクは、扉から出た突起物を指ではじいた。

「他に、なにかあるかなあ。鍵をつかわないで、外から鍵をかける方法」

「んな方法はねえよ。だから考え方としては、もし人間がこの密室を作ったのなら、鍵をかけてから、どうやって鍵を室内に戻したかって考えた方がいいだろうな」

「どっかの隙間から、鍵を中に投げ入れるって感じ？　でもだめでしょう、それも。だって、鍵はジーナスさんのポケットの中に入ってたんだよ。ちよつと、外から戻すのは無理そう」

「じゃあ、こつちじゃないのかなあ」ラパルクがあごをこすりながら窓を見た。「この部屋は窓がずいぶんあるから、そっちに細工をした可能性のほうが強いかもな」

「細工をしたならね」ネイリンは鼻息をもらす。ラパルクの物言いは、まるで細工をした第三者がいるかのような口ぶりだ。そういったものがないという前提で、ネイリンたちを納得させるストーリー作ったのは、他ならぬラパルクなのに。

「よし、とりあえず窓を調べよう」ラパルクは扉の隣の窓に寄った。そして上を見る。「この部屋、換気のための穴なんかはないのかな」「なんで？」

「いや、もしあれば、そこから糸かなんかを吊り下げて、で、この鍵に引っ掛ければ、」

「見たら分かるじゃん。そんな穴なんてないよ」

ネイリンは窓の上を見ながらいう。そこからぐるり室内の上部に目をやるが、そういった穴はなかった。

「なんだか息がつまりそうな部屋だな。これじゃあ、喚起するためには窓を開けるしかないのか。寒いときなんかは大変だな」

「そんな換気のための穴なんて常時開いていたら、それこそ寒いと

きには大変ですわ」

ロッテがいった。見ると彼女は、庭側の窓の下をはいつくばっていた。こちらを見てもいない。きいていたのか、とネイリンは思った。「ねえ、ロッテ。そこで四つん這いになるのは危ないわ」

彼女は、イボーが割った窓の下あたりにいた。ロッテのすぐそばには、割れたガラスの破片が散らばっていた。

「大丈夫ですわ。ガラスの上は通りません」そういつて彼女は立ち上がると、言葉通りガラスをよけて歩いた。そしてまた四つん這いになる。

「おれたちも探すか」ラパルクがつぶやくようにいった。「あらためて見てみたら、なんか、想像もしてなかったようなものが見つかるんじゃないか、って気がしてたけど、そんなものはなさそうだしな」ラパルクはそういつてしゃがみこんだ。「おれが考えたことも突飛だが、この部屋を外から鍵をかけたなんて考えるのは、もっと突飛かもしれない」

たしかに、真剣に、けなげに石を探しているロッテを見ると、自分たちが、なにかとんでもなく変なことを考え、変な行動をしていた気がしてくる。

ネイリンも、ロッテやラパルクに習い、しゃがみこんだ。

石を探す。

人を生き返らせるという石。

——この行動も、現実から遊離している。

ネイリンは、だんだん分からなくなってきた。

ここへきてからのことが、すべてが嘘だったら、どれだけすつきりするだろう。もしすべてが嘘だったなら、元通りの日常に戻る。ここにくる前の感覚に戻る。

逆にいえば、ここにきて、感覚はおかしくなった。というか、世界観が変わった。

どう変わったのか。

それはまだ、確定していないのだ。

今は、なにかに向け、世界観がうごめいている状態。
ネイリンは――ふと不安になった。

第二章 25

25

どれぐらい探しているのだろう。あらゆる場所を探した。床はすべて見たし、書き物机の引き出しの中や、その底の裏。クローゼットの中、布団を引き剥してベッドの中も見た。

カーテンレールの溝、棚の中や裏側、ジーナスのズボンの折り返し、壁に隠し部屋やスペースの存在も意識して、壁をさわりながら仕掛けがないか調べた。

なにもなかった。

怪しいところは、どこにも見つけれなかった。

石は――見つからない。

ネイリンはロッテを見た。彼女は無表情だった。

あせっていることだろう。リールが戻ってきたら、その時点で、石の搜索ができなくなる。少しぐらいなら引き伸ばすことはできても、あらかた調べてしまったのだ。これ以上調べるところもない。

やはり、ジーナスは――死ぬ、ということか。

今ロッテの心境はどんなものなのだろう。ネイリンは、きつく目をつむった。やっぱり、鍵なんか調べている場合じゃなかった。そんなことより、石を探す方がずっと大事だったのだ。

だが、鍵を調べず、石を探したところで見つけはしなかったのだろうか。

あと、残された時間はどれぐらいだろう。

リールが戻ってきたら、そのときが、ジーナスが本当に死ぬときだ。

心臓の動きが徐々に速まってきた。

葬儀は、どのような段取りで進むのだろう。墓穴を掘り終わって、今日すぐに埋葬するのか。主が石の搜索を、リールが墓穴を掘り終

わるまで、と決めたのは、すぐに埋葬する段取りになっているから、という気がする。

ロッテにきいてみようか――。

ネイリンは口を開きかけたが、どうしても言葉がでなかった。今いうとしたら、そんなことではない気がする。

しかし、だからといって感傷的なことをいう気にもなれない。

父の死を目の前にしたロッテを前に、ネイリンはなにもいえなかった。

「なあ、ロッテ」ラパルクが口を開いた。

自分はなにもいえない。卑怯かもしれないが、ネイリンは黙ったままで、やりとりを眺めることにした。

「他の場所を探した方がいいんじゃないか？　ここが一番怪しくはあるが、これだけ探してないんだ。石は他の場所に隠した、と考える方が自然じゃないか？」

「もう時間はありません」ロッテは無表情にうなだれていた。「わたくしも、他の場所に隠した可能性は考えていましたが、ここに賭けたんです。残された時間を、この部屋の搜索に当てようと」ロッテは自嘲気味に笑った。「負けたんですわ、賭けに。お父様って、彼女は、毛布をかけられたジーナスを見た。微笑だった。自嘲の色は消えている。「娘のわたくしがいうのもなんですわ、ああ見えて――なんていったら怒られてしまうかしら。実はすぐ頭のいい方でしたの。もし本気で隠そうと思ったら、わたくしたちには見つけられないのかもしれない」

ロッテの表情は、先ほどのものとは違うものだった。なにかが抜け落ちたかのような表情だった。

「ううん」ラパルクは腕を組んだ。なにやら考えている。「本気で隠そうと、な」

ネイリンとロッテは、その先を待った。

ややあって、ラパルクが口を開いた。

「そういえば、ジーナスさんが――犯人だったとしてだ、その心境

というものは、あまり考えていなかったな」

「……どういうこと？」ネイリンは口をはさんだ。ロッテが黙っていたからだ。

「ジーナスさんがトーナスを殺したとして、まあその場合、誤って、なのだろうが、どう思ったのか、そういったことだ」

「ジーナスさんがどう思ったのか？」

「ああ。自分のお兄さんを殺めてしまって、どう感じたのか。相当に動揺するんじゃないか？」

「それは、もちろん……」

「冷静に、隠し場所を考える、なんてことはできないよな？」

「どういうことでしょうか？」ロッテが不安そうにいう。情緒不安定気味なのか、表情がころころ変わる。

「いや、べつに、なにか考えがある、というんじゃないんだ。ただ、あまり、そういったことは今まで考えなかったな、と思ってな」泣き出しそうなロッテの顔を見てラパルクがうろたえる。「ま、石を盗み出そうと考えた段階で、隠し場所を考えておいたのかな。そして、とりあえずそこに隠した。そういうことか」

「なんだか、歯切れが悪かった。」

「たぶん、兄を殺したものにしては、しっかり隠したものだな、そういういたかったが、遠慮したのではないだろうか。」

「少し気になった。」

確かに、ジーナスの行動は、兄を殺してしまったものにしては妙———というか、冷静にすぎる。もしネイリンが———そんなこと絶対にはないが———姉のセナを誤って殺してしまったら、動揺して隠すものも隠せないのではないか。それがたとえ、隠し場所を事前に用意していてもだ。

しかしジーナスは隠して見せた。それどころか、今朝、起きぬけのネイリンと、いたって普通の世間話さえしたのだ。

「冷静にすぎる、という気もする。」

「つまり———誤って殺したのではないのかもしれない。」

トーナスを殺すことも計算のうちだったのか。

ネイリンは息を一つ吐き、さらに考えた。

そもそもジーナスが石を探した理由はなんだろう。生き返り、というとんでもなく魅力ある力がある石だ。あるのならだれでも欲しがるだろう。そう考え、彼が石を欲した本当の理由をあらためて考えはしなかったが、これは真剣に考える必要がある。

生き返りの力を自分につかおうとしたのか。それとも、売ろうと考えたのか。

それは分からないが――いや、その前に、もし石をジーナスが手に入れた場合、この家での勢力図はどうなるのだろう。

この家では、家督を継ぐものが石も継ぐらしい。いや、正確にいうのなら逆なのだ。

石を手にしたものが、家督も継ぐ。

もし、力づくで奪ったなら――。

力づくで石を奪っても、家督はジーナスのものになるのか？ たぶんならないだろう。だが、そのとき、つまり石を手中に入れたそのとき、家督を継ぐだろうと思われるいた長兄が死んでいたら――。

ガードナー家は、ジーナスのものかもしれない。

ネイリンはラパルク、ロッテ二人を見た。視線は合わなかった。

二人ともなにを考えているのだろう。……自分と同じことだろうか。

「お嬢様」

突然の声に、背筋がひやりとした。

声がして、はじめてリールが扉のところにいるのが分かった。

「用意は済みました」

彼の言葉はつまり、ジーナスへの死の宣告だった。

ネイリンは複雑な気持ちだった。

もし仮に、今考えたように、ジーナスが計算づくで兄を殺し、石を盗んだなら、同情には値しないようにも思う。だが、そうだとし

ても、友だちであるロツテの父親には変わらない。

「……」ロツテは無言だった。

「オイスガーデ神士様もこられているようです」答えないロツテに、リールがつづける。「お嬢様……」

「分かっています」ロツテは顔を上げた。「参りましょう、お祖父様のところへ」

諦めたのだろうか。感情的に諦められるようなことではないが――しかし石が見つからない以上、諦める他はないのだが。

ロツテは率先して部屋をでた。ネイリンも、ラパルクとともに彼女につづく。

廊下で、ルイが壁際に立っていた。視線はロツテを追っている。

第二章 26

26

ロツテとリールは、大広間に行く前に、主の部屋を訪れた。主の部屋も見てみたかったが、さすがにそれは無作法だと思ったので、ネイリンはそのまま大広間に向かった。これからの段取りは分からないが、そこにいて、事態から取り残されることはないだろう。

大広間に入ると、そこに見たことのない人物がいた。黒い法衣をまとい、同じ色の帽子を目深にかぶっている。帽子からはみだし、ている髪や、胸元まで伸びているひげは白い。体型はかなりふっくらとしている。ひげが長いため見えないが、おそらくあごの下には、もう一つの段があるに違いない。帽子やひげのせいで顔はほとんど見えないが、なんとなく温厚そうな印象を抱かせる人物だった。

彼は、横に若い男を従えていた。年はネイリンやラパルクよりも上。おそらく姉のセナぐらいの年だろう。こちらも同じような格好をしているが、帽子は浅くかぶっており、顔が見えた。だが表情はほとんどなかった。外界を拒絶するような雰囲気を持っている。

彼らの前にはカーテがいた。カーテはネイリンたちを認めると、彼女たちを手のひらで指し示しながら、彼らに紹介した。

「はじめまして」お客人、として紹介されたネイリンとラパルクは、それぞれ挨拶をした。

「こちらは、オイス教会のオイスガーデ神士様と、お付のバティ様でございます」

カーテは、二人を指し示しながら紹介してくれた。二人は黙って礼をする。

葬儀は、市に知らせないということだったので、身内だけの密葬という形になるのかと思ったが、さすがにそこまではしないらしい。だが、絶対に情報がそこから漏れない人間を選んだんだろうなと

思った。主の性格から考えて、というのもあるが、この二人の様子からそう思った、というのもある。

「もうしばらくで、旦那様がこられると思います。どうか、あちらのソファでお休みください」カーテがソファを示している。

「いえ……」そう答えたのはバティだった。

その後二人は身動き一つしなくなった。

口は堅そう——というより、軽くてもこの二人なら、はなし相手がないだろうなと思った。

彼らが座らなかったことでソファは空いたままだが、この二人を置いたままネイリンたちが座るわけにもいかない。結局五人で、所在なげにたたずむことになった。だが、そんな気まずい時間もわずかなものだった。主がやってきたのだ。

「オイスガーデ」主が紳士の姿を見止めいう。

「ガードナー様」オイスガーデが頭を下げる。「お話はうかがいました。どうか、お力を落とされませぬよう……」

「そんな言葉はよい」主は邪険にいう。「おまえには、やるべきことをしてもらえれば、それでいい」

「はい。それで、ご遺体は……」

「庭に、安置しております」リールが口をはさむ。「土の方も、準備はしております。他に、なにか必要なものがあれば、おっしゃっていただければ」

「いえ、他には。ただ、墓石を玄関口まで運んだのですが、それを庭まで運んでいただけたら幸いです」

「分かりました。おい、イボー」リールが目配せし、玄関口に向かう。

「なんだ？」

「……墓石を運ぶ。おまえも手伝え」

「分かった」

二人が表玄関から外に出て行く。

残されたネイリンたちは、歩き出した主を先頭に移動をはじめた。

歩きながら、今更ながらにネイリンは、埋めるの早いな、そう思った。

ネイリンの両親が亡くなったときは、なくなったその日に埋める、などということとはしなかった。ただそのときは、村の一大事でもあったから、葬儀を中心に物事を進められなかったから、というのも理由にはあったが、平時においても、亡骸と一夜を共にする時間を村では設けていた。

この町での、普段の習慣がどのようなものかは知らないが、このようにあわてて埋葬してもいいことなどないような気がする。まあ、この場合しようがないことではあるのかもしれないが。

この屋敷の中には、死人を生き返らせる石がある。ある程度の時間で見切りをつけ埋葬しなければ、遺体の腐敗と生き返りの未練の狭間で遺族が苦しむことも考えられる。

一行は、家人の部屋が並ぶ廊下を歩き、その先にある裏口から庭に出た。

「こっからも外にでれるんだね」一番後方を歩いていたネイリンは、ラパルクに小声でいった。

「ああ」ラパルクがつぶやくようにいう。「たぶん、厨房の方からも、でられるだろうな」

一行は、そのまま庭を歩いた。昨夜からの雨は上がっていたが、地面かぐちゃぐちゃとぬかるんでいる。

「これ、足跡とか残るな」ラパルクが立ち止まり、土をつま先で掘り返すようにしている。

「どういう意味？」考えてネイリンは、疑問に思う。「もしかして、外部犯行説を考えてるの？ ……なんか、あんたが一番、ジーナス犯人説を信じてない感じ」

「べつに、そういうわけじゃないさ。ただ……」

「ただなによ」

「不安なんだ」

ラパルクは顔を上げる。つられて見ると、主をはじめとして、み

んなとずいぶん距離が開いていた。これ以上開くと、いぶかしがられるだろう。二人は、小走りで後を追った。走りながらラパルクがいった。

「このままいくと、ジーナスさんは兄を殺した人間として見送られるわけだよな」

「ちよっと、今更なによ。あんたが自信持っていてくれないと、」ラパルクに目配せされて、ネイリンは口をつぐんだ。主たちに近づいている。

二人は無言で最後尾についた。

この庭は、主のデザインしたものだという。たしかに、ある美意識の下に統一されて、石や木などが配置されているように感じる。ところどころにベンチなども置いてあり、状況が状況なら、散策を楽しむのにいい庭だろう。

その庭は、大雑把にはあるが、大きな木によって囲まれている。おかげでその中にいると別世界にいるような気がする。

その外界とを隔てるための大木郡の中に、穴があった。最初は気づかなかった。枝振りの関係でたまたま向こうが透けて見えているだけかと思ったのだが、主を先頭にして一行はそちらに向かう。

近づく、穴の下は草が生えておらず、道になっていた。その入り口をくぐると、その道は幹や枝によりトンネルのようになっており、外光が遮られていた。

別世界に続く道のようなだった。

ある意味ではそうなのかもしれない。

予期していた通り、そのトンネルを抜けると、そこは墓地だった。柵で緩やかに囲まれたそこには、板石が等間隔で並んでいた。ガードナー家の、先祖たちが生きた証、あるいは亡くなったことを示して。

その柵の中に入り、しばらく歩くと、穴が二つ並んで開いていた。そしてその横に、毛布をかけられた、二つのふくらみ。

主は、そのふくらみに近づく。ロッテはその横で寄り添って歩い

ている。屋敷を出たときから、彼女は祖父にくっついてる。友だちかもしれないが、ネイリンに入り込む余地はないし、そもそも、ここにいていいのだろうか、そんなことをネイリンは思う。

雨がやみ、日差しは暖かった。上を見ると、ダイヤの形をした光が直線に並んで目に差し込んでくる。ときおり吹いてくる生暖かい風はかさかさと、どこに湿っていない葉があるのだろうか、揺らしてわずかに音を鳴らしている。

そういえば、トーイはどうしているだろう、と不意にネイリンは思った。

彼を追ってはじめて村を出て、そしてやってきたばかりの家で葬儀に参加している。いつか、世間話ではなせるときがくるだろうか。そのときトーイとネイリンはどこで話をしているのだろうか。

神士様の声がきこえる。が、かすかにしか聞こえない。それは意味のある言葉でもなくて、どこかで鳴く鳥の声や、いつから鳴っているのか分からない耳鳴りや、耳の中の血管を流れる血の音のように、さりげなく耳に入ってきていた。

ぼんやりと視線を下げる。そのことで、今まで視線を上げていたことに気がついた。

リールとイボーがジーナスを穴の中に運び下ろしているところだった。穴の上でロッテが泣いていた。カーテも泣いているようだ。ジーナスを土に下ろすとリールたちは上に上がってきて、それからどこに用意していたものか、ロッテをはじめとして、次々に花を一輪づつ投げ込みはじめた。ネイリンもカーテに花を渡されたので、それを穴の中に投げ込んだ。ジーナスの胸のあたりに落ち着いた。

ジーナスは目を閉じており、穏やかな顔をしていた。いつも酔っ払っていたらしいジーナス。

ネイリンは酔っていない彼を、はじめて見たのかもしれない。

——彼は、本当に兄を殺したのだろうか。

ラパルクではないが、不安になってくる。

——間違いは許されないんだよな。

ジーナスの死に顔を見てあらためて思う。

ネイリンは、振り返り屋敷の二階の窓を見た。

プライ。

彼は今病気で寝込んでいる。だから当てにはしていなかった。しちゃいけないと考え、そもそも頭数に入れていなかった。

だが無理やりにでも起こして、見解を聞く必要があったのではないか。

リールとイボーの手によって、穴の上に土がかけられていく。

ジーナスの身体に、土で薄っすらとかかっている。ざく。ざく。

そんな音とともに、足元。胸元。顔。彼はなにも反応しない。

少しづつ埋まっていく。

土の中に、つい先ほどまで生きて、歩いて、はなし、笑っていた人間が。

埋まっていった。

第二章 27

27

つづいてトーナスが埋められた。その段になって、はじめてルイーズがいらないことに気がついた。彼女に知らせなかったのか。それとも、知らせたが彼女がこなかったのか。分らない。

との程度、彼の死が悼まれている中での埋葬なのかも分からなかった。

結局、外様である自分は、なにも分かっていないのだ。

葬儀はつつがなく終わった。

あっさりとしたものだった。

墓地には、新しい墓碑が二つくわわり、屋敷内の住人は、二人減った。

それだけのことのよう、錯覚してしまう。

二人も死んだのに。

今になってネイリンは、現実のものとして、うまく彼らの死を認識できていない自分に気がついた。

一行は無言で屋敷に戻った。

今度は正面玄関に回った。中に入る前に、紳士たちと別れた。中に入って、大広間でネイリンたち二人は、この屋敷の住人たちと別れ、二階に上がった。

なにも打ち合わせたわけでもないが、ラパルクと二人、プライの部屋に入った。

部屋に入り扉を閉めると、知らずため息がでた。

「なんか、疲れたね」ネイリンはいう。

「まあな」ラパルクはいつて、ソファに深く腰掛けた。

ネイリンはプライの顔を真上から覗き込んだ。前に見たときとか

わらずすやすやと眠っている。

「プライはいいよね、知らなくて」

「ああ。起きたら驚くだろうな」

「ここどこだ、って？」

「ああ、そうか。ここきたことからして知らないのか」ラパルクも立ち上がり、プライの横にきた。「まだ起きそうにないか？」

「いや、まあ起こせば起きるんだろうけど……」先ほど、見解を聞きたい、と思ったことを思い出す。「完治まではどうだろう、もう少しかかるのかなあ」

「顔色はよくなっているように見えるけどな」

ラパルクが至近距離でネイリンを見る。ネイリンはなんとなく息苦しさを覚えた。

「起こしてみるか？」

「なんで？」ネイリンは彼からプライに目を移した。

「いや、意見を聞いてみたいだろ」彼は不満そうにいう。「だいたい、考えるのはこいつの仕事のはずなんだ。なんでおれが、こんなに考えなくちゃならないんだよ」

「べつに、あんたに考えろなんてだれもいってないじゃん」

「おまえなあ」ラパルクは呆れた顔で、ソファに戻った。「状況分かってんのか？」

「状況って？」

「やばかっただろうが」ラパルクがいぶかしげにいう。「おれたち、もう少して犯人にされそうだったんだぞ。っていうか、犯人って思われてもしようがないような立場だったんだぞ。だから必死こいておれたちから目を逸らせようと、ふだん使わない頭をつかったんじゃないねえか」

「たしかに、まずい立場だな、とは思ったけど……」

「いいか？ ジーナス犯人説の根拠の一つは、ケースのそばにいたってことだが、それはおれたちだって同じなんだぞ」

「まあ」

「それどころか、ジーナスさんが犯人だった場合、俺たち二人が寝た隙を狙って行動を起こさなくてはならない。そして、二人が起きないかと心配しながら、動かなくちゃならないんだ。だがおれたちが犯人だった場合、一人の隙だけを考えていればいいわけだし、何なら一人を言い訳用に大広間に残しておくこともできる」

ネイリンはよく考えてからいった。

「……そういうふうになると、あたしたちの方が、なんか怪しい感じ」

「怪しいんだよ、実際。だから、そういった雰囲気っていうか、流れになる前に、とにかく考えられることは全部いっておかなくちゃならないと思った。必死だったんだよ」ラパルクは腕組みをしながら、ちらとプライを見た。「まあ、結果としてはうまくいったというか、ジーナスさんが、おれが思っていた以上に犯人であってもおかしくないように家人に思われてたから、うまくいったというか、おれたちから目が逸れたが」

「ちょっと待ってよ。なんかそれじゃあ、ジーナスさんが犯人だと思っていないみたいな言い草じゃない。っていうか、本心はどうなの？　ラパルクさっきから、外部犯行説を調べるような行動とってるけど、それって、念のための行動なの？　それとも……」

「いや、おれはジーナスさんが犯人なんだと思ってるよ。少なくとも今は」

「今だってなによ」ネイリンは、ラパルクの向かいに腰を下ろした。「……ジーナス犯人説をいいたした当初はさ、正直にいつて、あまり信じてなかったっていうか、この考え方がだめだったら、他に犯人と考えられる人間を探そうぐらいに思ってた。そしたら、ジーナスさんのことをよく知ってる、しかも血のつながったじいさんやロツテがのってきて。ってことは、そういう殺人とか、してもおかしくない人格なのかな、って」

「って。じゃないわよ」ネイリンの胸の内に、不安と怒りが渦巻いてきた。「あんた、全然自信なさげじゃない」

「自信なんてねえよ」ラパルクははつきりいった。「なんだ、おまえ。おれの頭を信じてたのか？」

「ぜんぜん」ネイリンは首を振った。「……信じてはいなかったけどさ。でも、自信ありげだったし、筋も通ってる気がしたから、」「通っちゃったんだよ、筋が」ラパルクは、首を後ろをかいている。「でも、そのせいで、っていうか、石まであることになっちゃって」「石までって……」

「なあ、石、ほんとにあると思うか？」

「……いまさら、そんなこというわけ？」

「だってよ、死んだ人間を生き返る石なんて、ふつうに考えてあるわけじゃないじゃんか」

「はあ……」ネイリンは頭を抱えた。「あんたのせいで、ロットはお父さんが生き返るかも、って思ってたんだよ。それに一縷の望みをかけて、一生懸命探したのに」

「それをいうなら、おれの説であいつの親父が犯人てことになったんだぞ」

「威張ばらないでよ」

「威張ってねえよ」ラパルクは視線をはずして、つぶやくようにいった。「おれなりに必死だったんだよ」

「自分たちの身を守るための行動でしょ？」ネイリンはだんだん腹が立ってきた。

「最初の動機はそうでも、結局はみんなが納得する理屈になったじゃないか。っていうか、おれの理屈にみんなも、おまえも納得したじゃないか？　ってことは、真実もそういうことなんじゃないのか？」

「ううん」ネイリンは唸った。「……ちょっと、もう一回考えてみる？　さっきは、なんか異常な状態だったし、って今もそう変わってはいないけど、気持ちには落ち着いたから、さっきよりも冷静に考えられるかも」

「……そうだな。もういっぺん整理してみるか」

ラパルクもうなづき、ネイリンと彼は二人、昨夜からの出来事を振り返ってみた。

二人で交互に、お互いの記憶を補完しあうような形で話していた。なにが起こったのか、だれがなにをいったのか、そのときラパルクはどう思ったのか。ネイリンは……。

「やっぱり、筋が通ってしまいうように思うんだがな」

一通り話し終えて、ラパルクはいった。自分の論理に、もう一度納得したような顔だった。

「まあ。不自然といえば、死人を生き返らせる石はやっぱりある、ということになったり、ケースの呪いで人が亡くなったり、って不自然だらけな論理ではあるんだけどね」

「当たり前前の現実感っていうか、世界観と照らし合わせたら不自然だけど……そんな石を代々守ってること自体、不自然というか、おかしいわけだからな。そんな家で起こった事件なんだから……」

「似合ってるといえば、似合ってるわよね」

「皮肉な話だけどな」ラパルクは肩をすくめる。「人を生き返らせる石に翻弄され、その石のせいで人が死ぬ」

だが、話をそれで終えてしまっているのだろうか。なにか忘れているような気がして、ネイリンは自分の頭をかく小突いた。

「あ、そうそう。さっき、足跡のことってたじゃない。そのほかにも、外部犯行説が、本当に考えられないのか、色々調べてたけど……」

「まあ、念のためな。だが、おれが考えたストーリー以外は、やっぱり考え難いんだよなあ。だってよ、もし犯人が違う場合、まずジーナスさんをどうやって殺したか、っていう問題があるだろう？」

「部屋、密室状態だったもんね」

「ああ。あの密室を人為的に作るのはな……」
確かに無理そうだな。あらためて調べて、その思いはいつそうのものにした。

「トーナスさんのほうはどうか？　もしジーナスさん以外が犯人

だった場合」

「こっちの方が難しい。まず、どうやっておれたち三人の目を盗んでケースを開けたか」

「三人ともが寝てたとしても、ケース開けてるときに目を覚まされたら一発だしね。でも、」とネイリンはつぶけた。「二人でも大して変わらないような気もするけど」

「まあ、そうなんだよな」ラパルクはいう。「むしろ、ジーナスさんが一番条件が厳しかったともいえる」

「……え？」ケースから鍵を取り出せたのは、ジーナスさんしかない、というようなことをラパルクはいつていたように思うが。ネイリンは混乱した。

「たとえば……そうだなあ、仮にリールさんが犯人だったとしたら。その場合、鍵を盗むため、おれたち三人が寝るのを待つ必要がある。そして、盗むときは、三人の目が覚めないように作業する必要がある。これが、リールさんが犯人だった場合の手間だな」ラパルクは二本指を折る。「で、リールさんが犯人だった場合のリスクは、うまく盗めたとしても、いつおれたちが目覚めますか分からず、起きた場合、ケースから鍵がなくなっていることに気づかれるかもしれない、というものだ」

「うん」

「で、ジーナスさんが犯人だった場合は、鍵を盗むため、まずはおれたち二人が寝るのを待つことになる。で、おれたち二人に注意しながらケースを開けることになる」

「手間というか、やりやすいのは、ジーナスさんのほうだよな」

「ああ。だがリスクはジーナスさんのほうがずっと高いんだ。仮にリールさんが鍵を盗み、トーナスさんを殺していたところに、おれがたまたま目を覚ましたとしても、鍵がなくなっていることに気づく可能性は低い。そんな、鍵を注意していたわけじゃないからな。だけど、目を覚ましたときにジーナスさんがいなかったら、多少は周りのことに目がいくだろう。そのときに、ケースに目をやるかも

しれない」

「……ジーナスさんだけじゃなく、鍵までなくなっていることに気がついたら、決定的だよね」

「そう。そういった意味では、ジーナスさんよりも、ジーナスさん以外の人間が怪しんだが……ジーナスさん、密室の中で死んでただろ。あれがな」

「ああ、そうか」少し混乱していたが、やっと頭が整理された。「ジーナスさんを殺すことはだれにもできなかった、というか、殺して逃げたとは思えない状態だった。彼を殺すことができたのは、超常的な力だけ。その力を持っているのは、無理やり開けられたケース。だから、ケースを開けたのはジーナスさん」

「っていう考え方だな。リスクは高かったが、まあ、やったんだろう、ジーナスさんは」

「ケースの呪い……」ネイリンは急に不安になってきた。「あたしたちは大丈夫だよな？」

「べつに、悪いことはしてないだろう？」

「そうだけど……」あ、とつぶやきネイリンはつづける。「で、足跡はどうするのよ？ 調べるの？」

「調べるまでもないだろ。その可能性は、ないように思う」ラパルクはそう言って、頭の後ろで腕を組み、上体を反らせた。「なんだから、疲れたよ」

「それは同感」ネイリンは腹部を押さえた。「……お腹へったね」

「ああ。あんま食ってねえしな」

「プライも食べてないけど、大丈夫かなあ」

「動いてねえんだから、まあ、大丈夫だろ。菓をしばらく飲めてねえのが気になるけど」

それから二人は、腹の虫の音をききながら、食事に呼ばれるのを待った。

第二章 28

28

「それにしても、結局石はどこにあるんだろうね」ネイリンはつぶやいた。

空腹と暇をもてあまし、二人はしばらく事件以外の話をしていた。疲れから、少しこの話題を忘れたかったのだ。

だが、なかなか食事に呼ばれなかった。

口を動かすのも億劫になって、ネイリンはぼんやりしたが、すると頭に浮かぶのは事件のことばかりだった。今朝からの出来事が、ランダムに浮かぶ。

で、ふと思いついたのだ。

何の気なしに、独り言のようにでた言葉だった。

「石なあ」ラパルクが、力の抜けた声で応じる。「ジーナスさんは、本当は頭がいいから、本気で隠したら自分たちには見つけれられないみたいにロツテはいつてたけど、これだけ広い家だしな。だれだつて、隠し場所にはそう困らないだろうな」

「例えば……天井裏とか？」

「あるいは庭に埋めた」

「木の幹にたまに穴開いてるじゃん？ ああいうところに入れといても絶対見つからないよね」ネイリンはいう。「そもそも、鏡の中とか、絶対入らない場所に入れるより、そういったところに置いておいてもよかった気もするけど。簡単だし」

「石を取りにくる智者がきたとき困るんじゃないの？」

「ああ、そうか」絶対入れることのできない鏡の中から石を取り出すことで、真の智者と認められるんだった。「……鏡の中から取り出すのと、鏡以外の場所から探し出すの、どっちが難しいだろうね」
「鏡から出すのも難しいけど、今考えると場所が限定されてる分ま

しだった気もするな」

「ましっていっても、まあ、取り出し方、分かんないけどね」

「まあな」ラパルクは、ため息をついた。「石、あるとしたらジーナスさんの部屋だと思ったんだけどな」

ネイリンも、石を実際に探しはじめるまでは、ジーナスの部屋でまず間違いないと思っていた。ロッテもそう思っていたことだろう。ふつう、なにかを隠すときってのは、目の届く場所に隠すのが心理というものだ。

そこまで考えて、ネイリンは、あつ、と思った。

「そういえば、ジーナスさんの部屋にも鏡あったよね？」

「ん？ ああ。あったけど……」

「ジーナスさん、その中に隠したんじゃないの？」

「ああ……」こぶしを手のひらに打ち付けて、ラパルクがうなづく。

「そうか。ジーナスさん、石を鏡から取り出せたんなら、べつの鏡に入れることもできるって話か」

「でも、遅いんだけどね。ジーナスさん、埋められちゃったし。もう生き返らせることはできないだろうね」ネイリンは肩を落とした。「間に合うんだとしても、鏡の中に隠されてるんじゃ、お手上げだしな」ラパルクは肩をすくめる。

「どうやって、取り出したんだろ、ジーナスさん」ジーナスの顔と、封印された部屋にあった鏡を頭の中で思い浮かべる。

「鏡の中なあ。取り出せるわけはないんだけど。っていうか、そもそもそんなところに、入れられるわけないんだけどな」

「お手上げだね」ネイリンは、実際に手を上げた。

「そうだな」ラパルクが、考えながらいう。「で、どうする？ 鏡の中が隠し場所かもしれない、ってロッテに伝えるか？」

「やめときましょう。それきいたって、ロッテにもどうしようもないわけだし、動揺するだけだと思う」

「そうだな」

ラパルクがうなづいたときだ、ノックの音がした。

「はい」ネイリンが答える。

「お食事の用意ができました」ルイの声だった。「あと、プライ様のお食事とお薬をお持ちしました」

ネイリンは扉を開けた。

「ありがとう」といって、ルイからお盆を受け取った。「これを飲ませてから、下に行くんでも間に合うかな」

「はい。大丈夫かと思います」ルイはそう答えると、振り返り立ち去ろうとした。

「ねえ」ネイリンは彼を呼び止めて訊く。「ロッテの様子はどんな感じ？」

「さきほど、お部屋にうかがいましたが、やはり、憔悴しておられるようでした」そういうルイの顔も、悲しそうで憔悴もしているように見えた。

「そっか。うん。ありがとう」

「いえ」ルイは短く答え、廊下を戻っていった。

ネイリンは盆を手に戻った。ベッドの横に立ち膝になり、プライの胸辺りに手をかける。

「プライ。ご飯だよ」

プライはうつすらと目を開くと、ネイリンの手をかりて上半身を起こした。

ネイリンは、スプーンでプライにスープを食べさせる。

「ルイ君って、ロッテとはどういう関係なんだろうな」ラパルクがいった。

「お嬢様と使用人」ネイリンは言葉少なに答える。

「そっか……」

プライは食事し、薬を飲んだ。だが、依然意識ははっきりしていない様子で、何もはなさず、無言だった。

第二章 29

29

プライがまた寝たのを確認してから、二人は階下に下りた。食堂に向かう。

「なんか、入りづらいね」食堂に通じる扉の前で、ネイリンは立ち止まる。

「入りづらいぐらいいいだろ。悲しくはないだけましだ」

「そうね……」

食堂に入ると、もうみんないた。みんなといっても、主とロッテだけではあるのだが。

「ネイリン」ロッテが、昨日と同じように自分の隣のソファを叩く。ラパルクも、ネイリンの隣に座った。バランスが悪いが、ロッテの向かいに座ると主の隣になってしまう。それは主とて嫌だろう。食事まで、会話はなかった。ロッテも静かにしていて、はなしかけられない雰囲気だった。

すぐにカーテとルイが、食事を運んできてくれた。

神への祈りを捧げ、食事が始まった。

無言である。

カチャカチャと、食器のぶつかる音だけが食堂にこだました。

きくともなしに、その音を聞きながら食べていたネイリンだが、次第にある考えが頭を支配しはじめた。その考え方が嫌で、必死に目を逸らそうとしたが、なかなか視界から外れてくれない。

ネイリンは、一人悶々とした思いの中で食事をしていた。

その考え方は、今まで考えたことのないものだった。

なぜ、なにをきっかけにそんなことを考えたのか分からない。

突然、嫌な考え方と戦うことになってしまったのだ。

事実ではあるのだが――。

でもそんな考え方って――。

食べ物の味が分らない。

ロツテは――。

なにか話でもすれば、気がまぎれるのだが。

だが、会話のない気詰まりな時間の中で、その思いはなかなか消えてはくれなかった。

こんなふうには、考えたくはないのだけど。

事件が起こってからというもの、ネイリンとロツテの距離が、微妙に開いてきている。

ロツテの身に重大な事件が起こったのだから、そして、まだ出会ったばかりのもらい関係なのだから、しょうがないとも思えるが、この微妙な距離感が、変なことを考えてしまう土壌を作っているような気もした。

この距離感のままでここを出るのは嫌だな、そうネイリンは思った。

こんな、考え方を持ったままロツテと分かれるのは嫌だ。

事件はもう収束しているとネイリンは思っていた。だが、翌朝、事態は一変した。

まだ終わってはいなかったのだ。

だが、そのことを知らないネイリンはこのとき、ほんの少しではあるのだが、友人であるロツテの事を、人殺しの娘なんだよな。そんな目で見ていた。

第二章 30

30

朝、目がさめると、まず状況が把握できなかった。
目をこすりながら、周りを見回す。

ネイリンは、プライの部屋のソファの上にいた。最初は一人で寝ようと思っていたのだが、なかなか寝付けず、寂しくなって彼の部屋に掛け布団を持ってきたことを思い出す。

伸びをしてから、窓から差し込む陽の感じで、まだ早い時間だという気がした。

——なんで起きちゃったんだろ。

身体も疲れているし、頭も疲れているはずだ。もう少し寝て痛いし、寝ている必要があると思った。

神経が高ぶっているのだろうか。

そんな気もするが、違うような気もする。

ピリピリする。

気のせいかもしれないが、ネイリンの外側も高ぶっているような感覚がある。

「プライ？」ネイリンは、なんとなく不安になって、そう呼びかけた。

彼は無言だった。寝ているようだが、その顔色は、ここへきてから一番よいものだった。

ほっとした。プライの異常を、肌で感じたわけではなかったのだ。だが、だとしたら、この感覚はなんだろう。

穏やかな陽の光には似つかわしくない気配が、依然、感じられるのである。

ネイリンは部屋の扉を開け、様子をうかがった。
階下で、どたばたとした雰囲気があった。

またなにかあったのだろうか。

——まさか、ロッテが……。

ネイリンは駆け出した。廊下を曲がり、上から大広間を見下ろす。リールとルイがはなしていた。

「あの、どうかしました？」

ネイリンが訊くと、二人はいっせいに彼女の方を見た。

「ああ、ネイリンさん。おはようございます。いえ、なんでもないんです。ただちょっと、イボーの姿が見えないものですから」リールはいうと、すぐに手を振った。「あ、とはいっても、こんなことは、そう珍しいことではないんです。きっと、庭に木の実でも取りに行ったのでしょう」

彼はそういうが、その表情は、緊迫感にあふれていた。

「探してるんですか？　だったら、ラパルクを起こして、あたしたちも手伝いますけど」

「いえ、まだ早い時間です。どうか、お休みになってください」リールはそういうと、ルイと何事か打ち合わせ、正面玄関から外に出て行った。ルイもネイリンに会釈し、こちらは住人が住む部屋が並ぶ廊下のほうに消えた。

取り残されたネイリンは、少し考えてから、ラパルクを起こしに行った。

歩いている間中、嫌な予感がしてしうがなかった。

部屋の前まで行き、ノックする。

二度、三度と扉を叩いて、やっとラパルクが顔を現した。

「……なんだよ、こんな時間に」

「うん、さっきリールさんからきいたんだけどね、イボーさんがないんだって」

「なんで？」彼は豪快にあくびをした。

「分かんない。木の実でも取りに行ったんじゃないか、っていったけど、なんか不自然だったし……ちょっと気にならない？」

「そうか？」

「うん、気になるっていうか、不安。ロッテとか、大丈夫かな？」
「おれにいったってしょうがないだろ。そんな気になるなら、見てくりゃいいじゃねえか」

「だって……」

昨日の、ジーナスやトーナスの死体を思い出す。まさか、そんなことになっているわけはないと思いながらも、一人で行くのは不安だった。

「はあ」ラパルクはため息をついた。「分かったよ、ちょっと待ってろ。着替えてくるから」

しばらく部屋の前で待っていると、ラパルクが部屋から出てきた。どこのなにを着替えたのかは分からなかった。

二人で階下を下り、ロッテの部屋に向かった。そういえば、ロッテの部屋に行くのは初めてだった。今までも部屋の前を通り過ぎたことはあったが、それどころじゃなく、あまり注視していなかった。ロッテの部屋の前でくると、ネイリンはラパルクの背中を押した。「ちょっと、中、見てみて。窓から見えるでしょ？」

「ああ」いってラパルクは、窓から中をのぞく。「寝てるみたいだな」目を細める。「うん、すやすや寝てる。生意気なお嬢さんも、寝顔はかわいいもんだな」

「大丈夫？」ネイリンも、彼の横に立って中をのぞいた。

ロッテは、ベッドの中で姿勢よく眠っていた。寝顔も見えるし、掛け布団が呼吸によって上下しているのも見えた。

「ああ、よかった」ホットネイリンは息を吐く。

「心配しすぎだよ。だいたい、イボーさんの姿が見えないのと、ロッテは関係ないだろ？」

「そんなの見てみないと分かんないじゃない」

「まあ、確かに、昨日の今日だから、神経質になるのも分かるけど、もうちょっと冷静になれよ。だいたい、ロッテになにかあったら、リールさんがそういうはずだろ？」

「でもリールさんも見にきてなかったかもしれないじゃない」

「おまえ以上に気にかけてるよ、ロツテのこと。使用人なんだぞ」
「でもさ、」

「何事ですか、こんな時間から」ロツテが扉から顔をだした。目をこすっている。パジャマはピンク色のワンピースで、窓からのぞいたときには見えなかったが、やはりピンクの、ボンボンのついた帽子をかぶっていた。

ラパルクが、息を深く吸い込みながら、ロツテから顔をそらした。
「あ、ごめん。起こしちゃった」ネイリンは眉をしかめて見せる。

「いえ、かまいませんけど……」ロツテは当惑顔だ。「お腹が減ったんですか？」

「そうだとっても、べつにロツテのところにこないわよ」ネイリンは振り向き、大広間の方を指差した。「さっきね、リールさんと会ってはなしたんだけど、なんかイボーさんがいないんだって。それでね、ま、巡回にまわってたところ」

「そうだったんですか……」ロツテはあごを右手で、右手の肘を左手で押さえた。格好とつりあわない仕草だった。「どこいったんでしょう。ちょっと気になりますね」

「まあ、タイミングがタイミングだけにね……」

「ちよつと行ってみましょうか」そういうなり、ロツテはその格好のまま部屋を出てきた。

大広間に行くと、カーテが厨房につながる扉から出てくるところだった。

「あ、おはようございます」カーテが頭を下げる。

「おはよう、カーテ。イボーがいないと聞いたんだけど、見つかりましたか？」

「いえ。それが」カーテは頭を振った。何事かを思案している表情だった。「……あの、今旦那様のところにお知らせしにしようと思っていたのですが、」

「なにをですか？ イボーがいないことをですか？」

「はい。それから、イボーの荷物がないことを」

「え？」ネイリンは思わず声を上げた。

「鍵もかかっていなかったの、一応様子を見てみたんです。そうしましたら、着替えなど、身の回りのものがすべてなくて……」

「どういうこと？」ネイリンはつぶやく。

「まさか……」ロツテもつぶやいた。

「逃げたんじゃねえだろうな」

見ると、そういったラパルクの顔が真っ青だった。

第二章 31

31

一同は大広間に集まった。もちろん主もソファに鎮座している。

「もう一度、状況を説明してくれ」主はカーテを見ていった。

「あ、はい」カーテは舌をちらとだし、口を湿らせてからはなしはじめた。「朝目が覚めてから、リールと朝食の用意をしていたんです。いつもであれば、少し遅れてイボーが厨房に顔を出すのですが、今日はなかなかやってこなくて。起きてきたルイに呼ばせにいったんです」カーテはルイを見る。

「はい。でも部屋をノックしても起きてこないし、開けてみたらいないので、どこかに出かけたのかとそのときは思いました」

「時期が時期でございますから、気になりました、リールとルイに探してもらったんです。しかし、どこにも見つからないときいて。それで、部屋に入ってみたんです。で、いろいろ見てまわったら、筆筒の中も空で。イボーが集めていたガラクタもなくなっていました」

「だれにもいわず、出て行ったのか……」主がいう。「なぜ」

だれも答えなかった。

といっても、考えがなかったわけじゃない。みんな同じことを考えている。

だれもなにもいわないので、耐え切れなくなつて、ネイリンは口を開いた。

「逃げたんでしょうか？」

「なぜ」主がすぐに聞き返す。

「それは……」いいよどむ。なぜといったって、考えられるとしたら、あれしかないではないか。

「……イボーさんが犯人だった、っていうことか？」ラパルクが苦

しそうにいう。

だれもなにもいわなかった。

事態の急変に、頭がついていかなかった。

もしそういうことなら、どうなる？

寝起きということもあって、頭がまわらなかった。

「イボーが……トーナス様とジーナス様を、ということなのでごさいますか？」リールが、おずおずといった様子でいった。主ににらまれ、首をすくめる。しかし、言葉を継いだ。彼なりに、思うところがあるのだろう。「私には、とてもそうは思えません。イボーは、多少鈍いところはございますが、いたって善良な人間です。そんな、人を殺めるなんて……」

「リール！」カーテが強い声でたしなめる。

リールの発言は、イボーを擁護するためのものなのだろうが、ジーナスなら人を殺すことも考えられる、といっているようにもとれる。

「もうしわけございません。そういった意味ではないんです」叱責される前にリールはいった。

しかし、主が口にしたものは、叱責とは程遠いものだった。

「イボーのことをなにも知らないおまえは黙ってろ」
どういう意味なのだろう。

しかしそれを誰かが聞く前に、主はつぶけた。

「ロツテ。話を整理してくれ。儂の頭では、うまくまとめられん」

「はい」ロツテが無表情に答える。

イボーが犯人の可能性がでてきた。それはつまり、ジーナスの無実の可能性がでてきた、ということだ。ならば、もう少し明るい表情になってもよさそうなものだが。

犯人がイボーでも、ジーナスが生き返るわけではない。そう考えているのだろうか。

「今までは、お父様が犯人と思われていました。つまり、伯父様を殺し、石を盗んだと思われていたわけです」ロツテはラパルクを見

る。「その根拠となったのは、まず、お父様のいた部屋が密室状態で、呪いによって殺されたものと思えなかったことです。呪いによって殺されたのなら、ケースを開けたのはお父様。あの部屋に伯父様の死体があり、他に、あの部屋に関わっていたのは鍵を持っていたと思われるいたお父様だけ。つまり犯人はお父様、という理屈でした」

ロツテは、いいですね、とラパルクを見て確認した。彼は力なくうなづく。間違いでジーナスを犯 人に仕立て上げてしまったかもしれないラパルクは、元気がなかった。だが、父親の死にまつわる不名誉が払拭されるかもしれないロツテも、そう元気があるわけではない。

「さらに、兄弟の間で殺人が起こったのなら、石は現実存在していて、しかも鏡から出ている可能性が高い、という結論にもなりました」ロツテはここで、息を一つ吐いた。「しかし今朝になって、イボーが姿を消しました。客観的に評価して、彼の行動は怪しいものです。この事件に何らかの形でかかわっていると考えられるでしょう」

ロツテは周りを見まわす。だれもなにもいわない。そこまではいいのだ。問題は、どのような形で、どれぐらいこの事件に彼が関与しているかだ。

「まず、どこから考えるかですが、もし仮に、お父様を殺したのがイボーだとしたら、密室をどう作成したのか、という問題が発生します」

「あれは、人為的に作るのとは不可能だ」ラパルクがいう。

「それが、そうでもないかもしれません」ロツテがいった。「正直、わたくしにとって、そして恐らくみなさんにとっても、イボーは盲点でした。しかし、こうして怪しい行動をしている以上、先入観なしに彼の行動を見つめなおさなくてはならないでしょう。それで、先ほどから考えていたのですが、どうやら、彼になら、あの密室は作れたようなのです」

「なんだって！」ラパルクが驚いたようにいう。

ネイリンも驚いた。

「でも、あたしたち、かなり調べたんだよ。でも、そんな仕掛けを施したような跡はなかったけど……」

「物理的な仕掛けを施したわけじゃなかったんです。そんな難しいことをしなくても、鍵をすりかえれば、簡単にあの密室が作れたんです」

「すりかえて……。どういうこと？」

「あの部屋に入って、ラパルク、お父様のポケットから鍵を取り出して確認したでしょ？ あれが、あの部屋のものではなかったんです」

「まさか……」ラパルクがつぶやく。

「そうなのだと思います。でも疑いませんよね。というか、疑っている場合じゃなかったですし」

「たしかに、そこまであのときは頭が回らなかったけど、でもな、それはいくらなんでもリスクだら。あのときは思いつかなかったけど、あとでもしや、と思いつくかもしれない。そのとき確認されたら、それですぐにばれるじゃないか」

「いえ、もう一度すりかえ、戻しておけばなりません」

「え？ どういうことだ？」

「お父様の部屋から大広間に戻ったとき、イボーはお父様の部屋に戻りましたよね？」

「ああ、そういえば、寒そうだったからなにかかけてあげたいって、確かいった。あのときに……？」ネイリンはいう。

「ええ。おそらく、鍵を戻したんだと思います」

つまり、彼はどこかの鍵を持ってジーナスを殺し、その後で持っていた鍵をジーナスの胸ポケットに。そしてジーナスが持っていた鍵を持って部屋を出て、施錠した。

そういうことか。

「でも、そんなこと……」ラパルクは戸惑ったようにいう。「ジ―

ナスさんが死んでるのを発見したあのときに確認されたら……」

ネイリンは、あのときのことを思い出す。

ラパルクが、ジーナスのポケットから鍵を取り出したとき、イボ―は失礼だ、みたいなことをいって、鍵を戻させたのだ。

あのタイミング、雰囲気では、仮に怪しいとは思っても、鍵が本物か確かめることは難しかったろう。

そして、まだ気持ちの整理がっていない段階で、イボ―は率先してジーナスの部屋に行った。すべて計算づくの行動だったのだろうか。

もしそうなら――冷静で知的だ。

ネイリンは、鈍感そうに見えたイボ―の顔を思い出して、かるく震えた。

「さつきもいいましたが、そんな雰囲気ではありませんでした。そして残念なことに、あのときに思いつくどころか、わたくしたちは、今に至るまで、そのことに気がつきもしなかったのです」ロツテはいった。「リスクをどれだけ認識していたかは分かりませんが、結果からいって、イボ―は……うまくやり遂げたんです」

彼はすでに逃げている。今更なにをいっても無駄だろう。

あたしたちは、知恵比べでイボ―に負けたのだ。

力が抜け、ネイリンは腰掛けていたソファの背にもたれた。

「では、ト―ナスさんを殺したのもイボ―なのか？」ラパルクが下を向きながらいう。

「それについては……分かりません。考える取っ掛かりがないんです」

ロツテは周りを見た。

だれもなにもいおうとしなかった。

これまでは、ラパルクが議論を先導していたところがあったが、推理が外れていたことのショックが尾を引いているのか、口を開こうとしない。もう、あまり当てにはできないのかもしれない。

ロツテもそう判断したのだろう、小さく息を吐いて、話をつづけ

た。

「仮に、イボーが伯父様も殺害したとしましょう。その場合、どのような絵が描けるか」彼女は指を一本折った。「まず、石が欲しかったイボーがケースを開け鍵を盗み、あの部屋を開けた。そこで伯父様に見つかり、乱闘の末殺害」彼女は指をもう一本折った。「あるいは、石が欲しかったのは伯父様で、ケースを開け、あの部屋を開けたところでイボーに見つかり、乱闘の末殺害」折っていた指を広げる。「もしくは、今まで考えていたように、石が欲しかったのはお父様で、あの部屋を開けたところで、かどろかは分かりませんが、その場にいた伯父様ともめたかして殺害」ロッテはここでため息を吐いた。「しかし、どの説にも決め手はありません。それどころか、石を盗むため、誰かと誰かが手を組んでいた場合なども考えると、さらに可能性は広がります」

「動機は、石で間違いないのかな」ネイリンはふと思いつきいった。「それは……間違いないでしょう。なにしろ、殺害されていた場所が、あの封印された部屋なのですから」

「そうか。……てことは、石は、生き残っているイボーが持っているってこと？」

ネイリンが何気なくいった言葉に、ロッテが反応した。

「イボーが？」中腰になりかける。「そうなら、追って捕まえれば石が……？」

「トーナスを殺したのも、イボーかもしれない」主が、ぽつりといった。

今にも屋敷を飛び出しそうな様子のロッテの動きが止まった。

「お祖父様。どういう意味ですか？」

「イボーには、そうしてもおかしくない動機があるんだ……」主が苦しげにうめいた。「今まで黙っていたことがある。いうつもりもなかった。だが……このような状況では、打ち明けなくてはいいけないのかもしれない」

「……どういふことです？」

ロッテは身構えた。

無理もないだろう。散々、動揺する出来事に丸一日も振り回されてきたのだ。まだなにかあるのか、と思ったら、ロッテの立場では身構えたくなるだろう。

好奇心の固まりのようなネイリンでさえ、いささか疲れてきている。

「イボーは、イボーは……」主は一度首を振ってから、ロッテを見た。「シヨッキングなこともかもしれない。だが、どうか動揺しないでいてくれ」

「イボーがなんなんですか？」ロッテがいらだたしげにいう。

「イボーは……おまえの伯父さんなんだ」

「……え？」

大広間を静寂が支配した。

時間が止まったように感じた。

ネイリンは、見るともなしに周りを見まわした。

ラパルクもあつけにとられた顔をしているが、しかしそのシヨックは、家人や使用人のほうにより濃く見られた。

それはそうだろう。使用人だと思っていた男が、自分の伯父だと知らされたロッテ。使用人という同じ立場の人間だと思っていた男が、実は仕えるべき立場の人間だと知らされた使用人たち。

彼らの動揺が、手に取るように分かった。

「どういことです、お祖父様。イボーが、お父様のお兄様だったというのですか？」

「そうだ」

「なら、ならどうして、使用人みたいなことを。……いや、それはおかしいですわ。だって、イボーにはちゃんとお父様もお母様も……」

「本当の両親ではないのだよ。本当の両親は、儂と……おまえのお祖母さんのだ」

「なら、ならどうして……」ロッテは混乱して、泣きそうな顔にな

っている。

「僕の子として、この家に置いておくわけにはいかなかったんだ。……知ってのとおり、ガードナー家は、石を守らなくてはならない。そして、その石を守るための資格として、知性がなくてはならない。だが、あの子には……」

「それで、家を出したのか？」ラパルクが訊いた。

「ああ」主は言葉少なに答えた。

「長兄だったのか？」ラパルクが訊いた。

「そうだ」

「しかし、家督は知性によって決められるんだろ？ 次男であつても、トーナスさんに決めてもよかったんだろ？ なんで、他所に出したんだ？」

「次男が生まれる保証はなかった。実際、イボーが生まれてから、トーナスが生まれるまで、七年がかかっている。もし生まれなければ、決まりでイボーが家督を継ぐことになるんだ」

「どうして？ どうしても息子に継がせなくては、他の……たとえば、あんたと争って負けた人間に継がせるとか、いろいろ方法はあるだろ」

「彼らとは遺恨がある。そのような選択はありえない」主はため息を吐く。

「じゃ、トーナスさんが生まれなかったときは、どうしようとしていたんだ？」

「そのときは、養子を迎え入れるしかないと思っていた」

「そんなにしてまで……イボーは嫌だったのか？」

「……僕にだって葛藤がなかったわけじゃない。実際、トーナスが生まれてからというものの、後悔のしどろしどろだった。だから、育ての父が死に、母が姿を消したのを機に、この屋敷に招き入れたんだ」

「招き入れたって……使用人としてじゃないか」

「しょうがなかった。今更、この家の長兄などといっても、だれも喜ばない」

「で……知っていたのか、当のイボーは」

「知っていた、ということになるのかな……。知らないはずではあるんだが、隠しとおせる秘密はないということか」

「知って、憎んで、そして……」ラパルクは首を振った。「そういうことなのか？」彼はだれにともなくいう。

「お父様は犯人じゃなかったんですね……」

ロッテの言葉に、大広間は静まり返った。

ラパルクが、唇を噛む。

「犯人はイボーだったのですね。それなら、」ロッテは少し笑いがらいった。「少しも知性にかけてはいないじゃありませんか。イボーは……イボー伯父さんは、ここにいらっしゃるみなを、出し抜いてみせましたわ」

「そうだったんだな。……儂の見立ては外れていたってわけだ」

「外れてたで済む話じゃないだろうよ」ラパルクが下を向く。

主は、それについては答えなかった。

ひどい話だと思った。

生まれてすぐに、なのだろう、捨てられて、その後は使用人として使われる。屋敷に招いたのは後悔からだといっていたが、そのことの方が、よりイボーの心を傷つけたのではないか。

ネイリンは、たまらない気分になった。

「では、動機は怨恨、ということですか？　なら、なぜお祖父様をお殺しにならなかったの？」ロッテは、悲しそうにいう。「悪いのはお祖父様じゃないですか？　この家の決まりじゃないですか？　お父様は、なにも悪くないのに」

「それは……イボーに訊いてくれ」主は、苦しそうにいう。

イボーの心情を理解しようとして、ネイリンはやめた。とてもできない。

まず詳しい事情が分からない。たとえば、出した先の家に、主がどういった接し方をしてきたのか。それは主に聞くことができるが、正直に答えてくれる保証はない。正直に答えたとしても、そもそも

記憶が、自分に都合のいいように書き換えられている可能性があるし、むこうの家で、違った解釈がされている場合もある。

結局のところ、聞く価値があるのはイボーの話だけだが、そのイボーはもういない。

なんといつていいか分からなかった。

「動機は……怨恨でことでもいいのか？」ラパルクがいった。「なら、ケースを開けたのは、イボーじゃないのか？」

「その可能性が高い、でしょうね」ロッテが答える。

「なら、開けたのは……」

「お父様か伯父様」

「開けた動機は……石だよな？」ラパルクがロッテに同意を求める。「たぶん」

「石は、どうなったんだろうな。鏡から取り出されたのか、それとも出されていないのか」

「イボーが犯人なら、どちらともいえないでしょうね」ロッテが残念そうにいう。「今までは、お父様はケースにかけられた呪いで亡くなったのだと思っていました。呪いがあるなら石だって本当に——そう思っていました。ケースの呪いがあったわけではないらしいことが分かった今となっては、そもそも石があると考えることがすら、難しいのかもしれない」

死んだ人間を生き返らせる石なんて——そう思っていた最初のころに戻ってしまった。

やはりないのか。

「結局、不思議なことなんてない——そういうことなのかな」ネイリンはいった。

「そんなことはない。石があるという状況証拠もなくなったが、だからといって、ない、という証拠が見つかったわけでもない」この期に及んで、主はそんなことをいう。もう条件反射というか、病氣みたいなものなのだろう。

「不思議なことは、もう一つあります」ロッテが人差し指を立てた。

「ケースをどうやって開けたか。この謎だけは、イボーが犯人だとしても解けません」

「ああ、そうか」その問題があった――ほんと自分のおでこを叩いたネイリンだが、その拍子に、ふとある考えが浮かんた。「今までケースをどうやって開けたか、って考えてたけど、そのケースを開ける鍵はあるわけだよね」

「はい。お祖父様が持っていたらしいです」

「それを、どうやって盗んだか、って考えることもできるじゃないの？ 無理やり開けたら呪われる、なんていわれているケースを開けるより、現実的だと思うけど」

「……そうですわね。どうですか、お祖父様。鍵は……」

「盗めるわけではない」主はすぐに答える。「部屋を空けるときは、どんなに短時間でも鍵をかけている」

「眠っているときはどうです？」ネイリンはいった。

「眠っているときも、部屋の鍵をかけている」

「……じゃ、だめか。鍵を盗もうとしたら、今度は……おじさんの部屋の扉をどう開けたか、という問題がでてきてしまいますもんね」ネイリンはふうと息を吐く。

「いや、そんなことはないぞ」ラパルクがいう。「ケースの鍵は盗まれないように注意してても、部屋の鍵自体はそれほど嚴重には保管してなかったんじゃないか？」

「……………」主はラパルクをにらんだ。

「ケースを開けたのがだれにせよ、じいさんの隙を見て部屋の合鍵を作る。それからゆっくりと、ちよつとやそつとじゃ目が覚めないだろう目を狙って、寝ているじいさんの部屋に忍び込み、ケースの鍵を盗む」ラパルクは考え深げにいう。「……これなんじゃないか？」

「そうですわね……」ロッテがラパルクの推理を受け答えた。「そうなのかも。さすがラパルクですわ」

ロッテに褒められ、ラパルクはほっとした顔を見せた。

ロッテの父親、ジーナスを犯人に仕立て上げてしまった失態を、これでいくらか挽回できた、そう思っているのかもしれない。

主は、複雑な表情をしていた。

これまで万全の体制で守ってきたつもりのものが、実は盗まれていたらしい。そのことをどう受け止めてよいか分からない様子だった。

「いったいだれが……」主が落ち込んだ顔を見せる。ジーナスの死を発見したときよりも、トーナスの死を発見したときよりも、その表情は暗いように見えた。「分かっているんだ、この鍵を、石を守るものがどれだけ大切かを……」

ネイリンはあることを考えていた。

だれもいわないが、そもそもケース自体の鍵穴は、ホコリが詰まっていたのだ。

だから、ケースは鍵によって開けられたわけじゃないという結論になっていたが……。

そのことをいおうとして、ネイリンはやめた。

やはり、これで合っているのだ。

ホコリは、後からつけるとか、難しいかもしれないが、できないことじゃないからだ。もし、鍵によってケースを開けたのではないということになれば、ケースをどうやって開けたのかという問題になる。

だからつまり、この問題は、ケースを開ける鍵を、どのように主から盗んだのかと考えるべきだったのだ。

死んだものを生き返らせる力があるという石や、無理やり開けようとしたものを呪い殺すというケース。また、鍵のかかった密室で人が二人も死んでいたりと、不思議なことが頻発したために、話を難しく考えていた気がする。

ネイリンはほっと息を一つ吐き、肩の力を抜き、ソファにもたれた。

第二章 32

32

その後朝食を食べた。

イボーがいつ逃げたのかは分からないが、追われることは当然可能性とした考えていただろう。その上で逃げているのだ。相当に早い時間に屋敷を出ているだろう。あるいは、逃げ切る勝算のある逃亡経路を用意していたかもしれない。

主は、イボーを追えという命令は出さなかった。彼がリールにいったことは、食事の用意をするように、というものだった。

ロッテもそれに反対はしなかった。

後手に回った主たちは、今更数分を急いたところで、どうなるものでもないだろう——そう考えたらしかった。

ネイリンも、それに異論を唱える気はなかった。

状況から見て、イボーが石を持っている可能性は低そうだったし、持っていたとしてもジーナスはもう生き返らすことはできないだろう。彼を捕まえることだって、短期的に見てできるとは思えなかった、というのもある。

今はとにかく、温かいもの、それから胃袋を膨らますものが欲しかった。

朝食はパンにサラダ、スープといった簡単なものだったが、十分だった。

食事を終えてからネイリンは、スープと薬を持って、ラパルクとともにプライの部屋に向かった。

彼の部屋には、日差しが柔らかく差し込んでおり、わずかな時間でもベッドに横になったら、眠ってしまうだろうな、とネイリンは思った。

「プライ、食事よ」ネイリンはプライの胸に手を当てた。

プライがわずかに目を開ける。ネイリンがいつものように、背に手を入れ起こしてあげる。彼にスープを飲ませながら、ネイリンは訊いた。

「どう、調子は？」

プライは答えなかったが、スープの飲み方が、いつもとは違った。それは食欲を感じられるものだった。

「よくなってるみたい」

ネイリンの口元が、思わずほころぶ。これまでは、ガードナー家のごたごたで、プライのことが後回しになりつつあったが、彼のことは彼のことで、ずっと胸につかえていたのだ。

「遅えけどな。今更起きたって、出番はないぞ」

「出番でなによ。元気になってくれるのが一番でしょ？」

「そりゃそうだけどよ。ふつう、こういうときは、プライみたいなやつが活躍する局面なんじゃないのか？　それが疲労でずつとぶっ倒れたままで、起きてみたら事件が解決してました、なんてのは間の抜けた話だろ」

「まあね」ネイリンはくすつと笑った。「でも、たまにはそんなのも面白いんじゃない？　プライらしいっていえばプライらしいし」

「プライってそんなキャラなのか？」ラパルクがため息を吐く。

「そこがかわいいのよ」ネイリンは答える。「それにプライが起きてたって、事態は変わらなかったでしょ？」

「まあ、そりゃな。こういう殺人事件は、常に犯人が先手を持つからな」

プライにスープと菓を飲ませ終えたネイリンは、プライを元通り寝かせてから、ラパルクの向かいに座った。

「それにしても驚いたわよね。まさかイボーが犯人だったなんて」

「ああ。そんなことする人には見えなかったけど。って、そんなことするように見える人なんかいなかったわけだが」

ネイリンは、家人の顔ぶれを頭に思い浮かべる。最初にトーナスやルイーザの顔が浮かぶ。ネイリンは彼らに好感を持っていない。

だが、そんな彼らだって殺人までを犯すようには思えない。

「殺人なんて……ふつうはしないわよね」

「ああ。割りに合わねえもんな」

「いや、そういう損得勘定じゃなくてさ」ネイリンは眉をしかめる。
「感情というか、生理的にさ、よっぽどのことがないと、そんなことできないよね」

「そのよっぽどが、イボーにはあったわけか」

「……悔しかったのかな」

「悔しいというか……どうなんだろうな。よく分からねえよ」ラパルクは頭の後ろで腕を組む。「養子に出された家で幸福だったなら、それほど憎まないとは思うんだけど……」

「向こうの家で、不幸だったっていうこと？」ネイリンは想像する。
養子に出された家が、例えば貧乏だったら、この屋敷に住む住人を見てどう思っただろう。……よく分からないが、そんな単純なことではないような気もする。

人一人の、殺人にいたるほどの苦悩を、通りすがりの第三者が、独りよがり to 評価するのはいいことじゃない気がする。

「イボーさんて、お父さん亡くしてるんだね」とだけネイリンは言った。

「らしいな。お袋さんは家を出たとかいってたな。なんか、その辺の話聞いてたか？」

「ううん」ネイリンは首を振る。「カーテさんから、カーテさん親子とかリールさんの話は聞いてたけど」

「何でイボーを置いて、お袋さん出て行ったんだろな」

「分かんない」ネイリンはいう。「事件が解決したって、分かんないことだらけだね」

「だが、分かったこともある」ラパルクが腕を胸の前に組みなおした。「ジーナスさんの部屋の密室の作成方法と、ケースをどうやって開けたのか」

「あんたどっちもはずれてたじゃん」

「それをいうな。おれだって頑張ったんだ。反省もしてる」

「どうも軽いのよね、あんたがいうと」ネイリンが鼻息をもらす。

「でもま、まさかイボーさんが鍵をすりかえてるなんて、思いもしないもんね」

「ああ。イボー、頭いいよな」ラパルクが頭をかきながらいう。「もしかしたら、じいさんから鍵を奪ったのもイボーなんじゃないか？ あれだって、大胆だけどケースを開ける唯一の方法だ」

「いわれてみれば……」この方法は、知的さと大胆さを併せ持ったやり方だ。逃げる前のイボーに知的さは感じられなかったが、大胆なことをやってしまうようなイメージは、いい意味で、というわけじゃないが持っていた。「実際イボーさんは頭がよかったわけだし、ありえるかもね」

「褒めるみたいにいるなよ」

「うん。犯人だもんね」ネイリンも腕を組んだ。「……さっきはさ、ジーナスさんとトーナスさんがもめたわけじゃないから、石は鏡から出ていないって話をしたけど、イボーさんぐらい頭がいい人だったら、石を取り出す方法を思いついたかもしれないね」

「もし石があるならな」ラパルクは首を振った。「だが、イボーさんの心境を察すると、石なんてどうでもよかったんじゃないか？」

「でも、恨んでいる家で大切にしている宝物を奪う、っていうのは、意趣返しには考えられそうだけど」

「……分からねえことだよ。考えたって」

「そうね……」

「石をほしがる人、ということであれば、家督争いに負けた人だって考えられるんじゃないですか？」

「ああ、そうか」ネイリンはほんと左手に右手こぶしを打ちつけた。「ラパルク、やっぱり窓の外とか調べといった方がよかったんじゃない？」

「なにいつてんだよ」ラパルクは顔の前で手を振った。「もう犯人は分かっているんだぞ。いまさら、そんな外部犯行説を……」

ここでネイリンとラパルクは顔を見合わせた。

「プライ！」二人は異口同音にいった。

プライはベッドの上で上半身を起こし、照れ笑いを浮かべていた。「ネイリンさん、それからラパルクさんも、いろいろお世話になりました。どうやら、治ったみたいです」彼は頭を下げる。

「な、治ったって……」ラパルクが、つまりながらいう。「もういいのか？ ぜんぜん大丈夫なのか？」

「ええ。気分はいたって爽快です。はあ……」プライはお腹を押さえた。「なんか、齒ごたえのあるものが食べたいです」

「よかった……」ネイリンはつい涙ぐみ、ベッドの上のプライに抱きついた。「心配したんだよ」

「すみません。ご心配かけました」プライははにかむ。「疲れが溜まったのと、後は風邪ですね。深刻な病気ではないというのが自分でも分かったので、意識がはつきりしているときは、そのことをお伝えしようとしたのですが、どうもうまく声をだすことが出来なくて……」

「ううん、いいの」ネイリンはプライからはなれいった。「でもよかった」

「よかったじゃねえよ、いいだけ寝やがって」ラパルクが憎まれ口をいう。「おまえが寝てた間、大変だったんだからな」

「はい。殺人事件が起きたんですよね」プライがこともなげにいう。「え、どうして知ってるの？」ネイリンは訊いた。

「お二人のお話は聞こえていました。というか、意識もはつきりしなかったもので、夢の中の出来事のように捉えていたように思います。でも……現実の出来事だったんですね。スープを飲み終えてから、だんだん気分がよくなってきたんですが、意識がはつきりしだしてから少しの間、お二人のお話を聞かせてもらって、ああ、現実の出来事だったんだなって分かりました」

「起きたんなら、早く知らせてよ。もう」ネイリンはぶすつとする。「はい」プライは小さく笑う。

「で、どう思う、プライは？」

「ラパルクさんの推理に驚嘆しました」

「いきなり嫌味かよ」ラパルクは大げさにのけぞる。

「いえ、嫌味だなんてそんな。ラパルクさんのお考えは、納得のいくものでした」

「でもさっき、家督争いに負けた人が怪しい、みたいになってたじゃない。プライは、そう思うの？」

「いえ、思いません。ただ、そのことをお考えになっていないようだったので、いつてみただけです」

「ああ、そういえばイボーさん逃げてるんだもんね」もう犯人は誰かとか、考える段階はすぎている。

「イボーさんが逃げたのには、驚きましたね」

「もしかしたら、プライが起きないうちに逃げようと思ったのかもな」ラパルクがいった。

「買い被りです」プライが謙遜している。控えめな人間なのだ。

「でもま、とにかくよかったよ。もう少し早く起きてくれりゃイボーを捕まえられたかもしれないが、捕まえたところで、二人が生き返るわけでもないしな」

「お腹すきました」生き返りのことをとくに気にした様子もなくプライはいった。その辺のことも、夢見心地に聞いていたのだろう。

「めずらしいね、プライがそんなに食べ物のことをいうなんて」

「なんだか、ずいぶん食べていない気がします」しよげ返ったような表情でプライがいう。

「ちょっと待ってて。あたし、下にいったてなにか貰ってきてあげる。ここのお手伝いさんね、すごく優しいんだよ」

「あ、大丈夫です。自分で行ってきます。少し身体を動かしたいですし、それにここのご主人にご挨拶をしたいです」そういつてプライはベッドから出た。

「そっか。うん、わかった。じゃ、一緒に行こ」

「いえ、一人で行きます」プライは笑った。「子供じゃないんです

から、一人で挨拶ぐらい行けます」

そういう意味でいったのではなく、病み上がりで大丈夫かな、と思っていた言葉だった。そういおうかと思ったが、子供じゃない、という言葉がおかしくてついネイリンも笑ってしまった。

「めっちゃくちゃ子供じゃねえか」ラパルクがいった。

第二章 33

33

結局プライは一人で部屋を出た。まあ、ずっと寝っぱなしだったのだ、食事のほかにも、トイレにだって行きたいだろうし、一人でいるほうがいいのだろう。

プライはなかなか戻ってこなかった。食堂かどこかで、きっとたっぷりとご飯を食べているのだろう。

彼が戻ってくるまでの間、ラパルクと二人、無言の時間を過ごした。

プライが起きていなければ、まだ事件のことをなんだかんだとはなしていたかもしれないが、もう、そんなことをはなす気分ではなくなってしまった。

イボーが逃げた、という出来事よりも、プライが起きた、という出来事の方が、ネイリンたちの中の事件を終わらせた感じだった。

プライが起きた。つまりそれは、ネイリンたちがこの屋敷にいる必要がないことを意味している。

屋敷を出なくてはいけない。

気分は、もう旅人のそれに戻りつつあった。

ロッテのことを、ネイリンは思い出した。

故郷を出て、初めてできた友人の顔を。

ここをでても、今後また彼女に会うことはあるだろうか。

ネイリンの胸に、切ないものがこみ上げてきた。

ロッテは、もっと切ないだろうな。

心細いだろうな。

もう少し、ここにいたっていいのかな。

「ねえ、ラパルク……」

ネイリンが口を開いたときだった。ロッテが部屋に戻ってきた。

「ご挨拶をすませてきました。わたくしはもう出られますが、お二人は？」

「あ、出るって屋敷を？」

「はい」プライがうなづく。

ロッテのために、もう少しいてあげたい気持ちもある。しかしプライが起きた今出なければ、今後きっかけをつかみにくくなってしまいかもしれない。別れにくくもなるだろうし、そもそもネイリンにだって目的のある旅だ。

「行こうか……」ネイリンはいった。「でももし、ロッテが帰らないでっていったら、」

「そのときは、もう少しいましょう」プライがやさしくいった。

第二章 34

34

ネイリンは帰り支度をすませ、廊下に出た。外で待っていたプライと合流する。ラパークは少し遅れて部屋から出てきた。

「さ、行くか」ラパークが踏ん切りをつけるようにいった。

行こうと思ってから、まだ家人には知らせていない。知らせてから支度するのが筋だと思ったが、どうにもロッテの顔が見づらく、結局会う前に用意をしてしまった。

三人は並んで廊下を歩いた。曲がり角で、あの部屋の扉を指差した。

「プライ。これが、例の部屋。分かる？」ネイリンはプライにいった。

「はい。この部屋、窓がなくて圧迫感がありますよね」プライは肩をすくめる。「夢で見ました」

そういえば、そんな話もプライの前でしたか。

きっと彼は夢の中で、ネイリンたちと行動をともにしていたのだろう。

「ずっと夢を見てたの？」

「えっと……」プライは首をかしげる。「どうだったかな。寝てる間の記憶は、うまく説明できません」

大広間の上に出ると、下に主とロッテがいるのが見えた。同じソファに座っていた。

そのめずらしい光景に、ネイリンの足が思わず止まった。

なんとなく、主がロッテを慰めているように見えたのだ。

プライは、主に挨拶をしている。そのときに、帰る、というか旅に戻ることを知らせているのだろう。ロッテも、ネイリンたちが帰ることを知っているのかもしれない。

寂しがっているのだろうか。

やっぱり……。

「あ、ラパルク」ロツテの声がきこえた。

プライとラパルクは、立ち止まるネイリンを置いて、一足先に階段を下りていた。

ネイリンも、あわてて後を追う。

ロツテが立ち上がり近寄ってきた。

ネイリンとラパルク、ロツテにプライが、階段下で輪になった。

「行かれるんですね」ロツテがネイリンに向かっていった。「道中、お氣をつけて」

寂しそうな様子ではあるが、引きとめる気はないようだった。

「うん。……近くを通ったら、またおじやまするからね」

ネイリンがそういったとき、調理場につづく扉が開き、ルイが顔を見せた。ネイリンたちの様子を見ると、すぐに扉を閉めた。

「はい。楽しみにしております」ロツテが目だけで笑う。

「いろいろ世話になったな」ラパルクがいう。

ロツテは、ふふ、と笑った。

「こちらこそです」

彼女がそう答えたときだ、調理場につづく扉から、カーテとルイ、リールがあわてた様子で姿を現した。

「あら、お帰りになるんですか？」カーテが小走りによってくる。

「きたときも急でしたが、お帰りも急なんですわね。あ、旅に出るんだから、お帰りじゃないのか。またいらしてくださいね。って、

あたしがいつちやいけませんよね」カーテが一人笑い、それからすぐに真顔になった。「あら、あなたがお病気だった人？ んまあ、

賢そうなお顔なこと」といつてから、横にいたロツテと見比べた。

「こりゃ、未来の旦那様かもしれませんわね」

「カーテ！」リールがたしなめる。

ネイリンは、いつもどおりのカーテの口数の多さに笑った。プライは苦笑いをしながらいった。

「いろいろとお世話になりました。寝ている間は、意識がすっかりしていませんでしたが、スープをいただいたことは覚えております。ありがとうございますでした」プライは頭を下げた。「きつと、あのスープのおかげで元気が出たのだと思います」

「あら、いいのよ。でも喜んでくれてよかったわ」

「作ったのはおれだ」リールがいう。

その場にいたみんなが笑った。

笑いが生まれてネイリンはほっとしていた。故郷を出るときも、姉にすら知らせず出てきたネイリンは、涙の別れが苦手だった。

一同は、だれからともなく玄関の方に移動をはじめた。

ネイリンは、みんなから外れ、少し遅れてついてきていたルイの耳元でささやいた。

「ロッテを守ってあげてね」

彼は戸惑ったように立ち止まったが、少しだけほほを赤らめながらうなづいた。

玄関を出ると、日差しが強く、まぶしいほどだった。

振り返り、屋敷を仰ぎ見る。

やはり大きい。だが、倒れたプライをつれて、始めてこの屋敷を仰ぎ見たときよりも、小さく見え、そして、外観を見るのはきたとき以来にもかかわらず、不思議なもので目に馴染んでいた。

でも、冷たくは感じた。

どんな立派な家にだって家族がいる。

どんな屋敷の中にも、暖炉の暖かさに似た、ぬくもりがある。

だが、今この屋敷の暖炉は消えている。

今度ここにくるまでに、その火は点くだろうか。

そんなことをネイリンは思った。

「おい、プライ、行くぞ」ラパルクがいった。

その声に反応し、プライを探すと、彼はみなからはなれ、主とロッテと三人でなにやらはなしていた。最初は、お礼とかをプライがいつているのかな、と思ったが、主とロッテのほうが、かしこまっ

て頭を下げている感じだった。

「なにやってんだろ」奇異に思って声にだした。

「決まってるだろ。おれたちに、目的が一つ増えたんだよ」ラパルクがいった。「これからはトーイのほかに、イボーも探すってわけだ」

「あ！」ネイリンは思わず声をだした。

ラパルクが、ネイリンの耳元でいった。

「ジーナスさんの敵をとろうぜ」

「うん……」ネイリンはうなづいた。

でも、敵とか仕返しとかじゃない。

ロッテのためにも、終わらせるには、イボーに会う必要があるのだ。

会ってどうするかは分からないが。

プライはなにを託ったのだろう。

ネイリンは、屋敷に背中を向けた。

外の世界は、やはり広がった。

エピソード 1-1

エピソード 1

「なんか、ひさしぶりに歩いてるって感じね」ネイリンはいった。
「わたしなんか、寝てばかりいましたからね、身体にこたえます」
プライが息もきれぎれにいう。

「休みながら行こう。疲れたらいつてね、プライ。ラパルクに持たせるから」

「ええ。でもまだ大丈夫です」肩に背負った荷物を一度背負いなおしてプライがいう。

「なんでおれが持つんだよ。プライは寝て体力を温存してたんだから、逆に持ってもらいたいぐらいだよ」ラパルクがぶつぶつといつた。

「あんたが持ちなさいよ、無駄な筋肉つけてんだから。っていうか、今持ちなさい」

「おまえなあ……」

「この感じ、すっごいひさしぶりな感じがします」プライが微笑む。
「そうねえ」ネイリンもしみじみいう。「たった二日ぶりなのにね。なんか、濃い二日だったなあ」

「濃いなんてもんじゃねえよ。もう、ほんとに大変だったぞ」

本当は、大変なんてもんじゃなかった。二日で二人も死んだのだ。しかもすでに母親を亡くしている友人の父親と伯父がだ。

だが、そのことに真正面から向き合うと、もう言葉が出てこない
ので、二人はわざとかるくいった。

「お役に立てなくて、申し訳ありません」プライが頭を下げる。

「しょうがないよ、病気だっ」

ネイリンの言葉をせき止めてラパルクがいった。

「お役に立たなさすぎだよ。おまえが寝てたせいで、おれは普段使

わねえ頭使うはめになったんだぞ」彼は眉をしかめる。「まだ頭の奥が変な感じがするよ」

「はあ……」プライがしよげる。

「気にしないでいいよ。さっきもいったけど、プライが起きてても、事態はかわりようがなかったんだから」ネイリンは歩きながらいう。「そりゃイボーが逃げてくれたから、プライがいなくてもすんだけど、もし逃げてなかったら、一働きしてもらうところだったぞ」

「そうね。でも、ま、理詰めでイボーさんを追い詰めるよりは、なんか逃げてくれてよかったかも」

「なんでだよ。捕まえた方がいいに決まってるだろ」

「ううん、ま、そうかもしれないけど。でもいいじゃない、とにかく終わったんだしさ。すっきりしたよ」

「すっきりするかしないかで物事決めるな」ラパルクが横にきて、ネイリンの後頭部をはたいた。

「あ痛っ」その衝撃で、あることが頭に浮かんだ。「あ、そんなすっきりもしてないか」

「ん？」

「だって、ほら。結局石があったかどうかは分からなかったわけじゃない？　せめて、イボーさんが持っていたにせよ、ジーナスさんが隠したにせよ、あるってことが分かったんなら、まだすっきりもしたと思うけど、あるのかどうかすら分からない状態のままじゃん」

「まあ、それは最初に話を聞いたときとなにも変わってねえな」ラパルクが、足元にあった石を蹴り飛ばした。「でもそんなもんなんじゃないのか、伝説って？　っていうか、そういうほうが、きっといいんだよ。分かっちゃうよりさ」

「まあね」

「石、見たいですか？」プライがネイリンの顔を覗き込む。

「そりゃ見たかったけど……」

「じゃ、どうぞ」プライが、ネイリンの胸元に向かって、なにかを

投げた。

「わ、ちよちよ」

投げられたものを受け取ろうと手をだしたが、すっと手に収まらない。そのなにかは、ネイリンの手の上で何度か跳ねた後、やっと手の上に収まった。

ほっとしてから、醜態をさらしてしまったことに気づいた。顔が赤らむ。

腹が立った。このタイミングで石を投げられたら、あの石だと思っってしまうではないか。

「もう、いたずらはやめてよ、プライ。……でもきれいな、これ。いつ拾ったの？」

「拾ったんじゃない。それですよ、『再命の石』」

「……え？ 何の冗談？」

「冗談じゃありません。あの部屋に入って、鏡の中から取り出してきました」

ついネイリンは立ち止まった。ラパルクも同じように止まる。プライが二、三步進んだところで振り返った。

ネイリンとラパルクは顔を見合わせた。

「嘘だろ？」ラパルクが訊く。

「いえ、本当です。ご主人に挨拶に行くっていったとき、あの部屋に寄ったんです。そのとき出して、ご主人のところに持っていたら、君のものだといって、くれました」

「……えええっ！」

ネイリンとラパルクはもう一度顔を見合わせてから、異口同音に叫んだ。

エピソード1-2

「え、ちょっと待って。どういうこと？ 石はやっぱりあったの？」

「はい。生き返りの力があるなんて信じられませんが、とりあえず、生き返りの力があるとガードナー家で信じられている石はそれのようです」

「ほんとに？」 ネイリンは、あらためて石を見る。

小指の先ほどの、小さな石だった。色は黒く、形は楕円形だ。宝石のような石である。

「いや、ちょっと待てよ」 ラパルクが頭をかきむしる。「石があったって……さっき鏡の中から取り出したっていわなかったか？ それはどうやった？ そもそも、鏡の中に物を入れることなんてできるのか？」

「鏡の中に物を入れるなんて、そんなことできません」 プライは吹きます。「鏡の中っていうのは、鏡の後ろっていう意味です」

「後ろ？」 ネイリンは訊く。「ってことは、鏡がずれるとか開くとか、そういう仕掛けがあったの？」

「はい」

「嘘だあ。だって、あたし鏡面にも触ったし、そのときちょっと力入れたから、動くんだったら、そのとき気づいてたはずだよ」

「力づくで動かそうとしてもだめなんです。仕掛けがあって、それは、あの部屋を正しい方法で開けたときに作動するんです」

「え、なにに？」 いうことが分からなかった。

「つまり、あの部屋を鍵をつかわずに開けたときに、その動きに連動して、鏡が自動的にずれる仕掛けなんです」

「鍵をつかわずにあの部屋を開ける？」 ラパルクは復唱した。「そんなことできるのか？」

「はい」 プライがこともなげにいう。「仕掛けを動かすスイッチは、扉にありました」

「扉って、あのでこぼこしたやつか？」

「そうです」

「やっぱりな！」ラパルクは、一際大きな声でいった。「絶対あの扉は怪しいと思ってたんだ。やっぱりそうだったのか」

「やっぱりって二回いつてることが、やっぱりじゃない感じだよネ」ネイリンは冷たくいう。「なんか恥ずかしいからいわないで、そういうこと」

「おまえだっていいかけたくせに」

「だからよけい腹立たしいのよ。ってそんなことはどうでもいいわ。それよりプライ、どうやってスイッチを押すの」

「押すんじゃないんですけどね。ずらすんです、あのでこぼこを」「ずらす？ 動くの？」ネイリンは驚いた。そういう発想がなかった。

「はい。あのでこぼこは、一枚の板を削ったものじゃないんです。たとえば、ドアノブのついているブロックは、横に動きます」

「いや、横になって、横にも……ブロック？ あるじゃない」

「はい、それも動くんです。こっちは縦、というか前後にです」
「いつてからプライは荷物を下ろし、しゃがみこんだ。足元に落ちていたとんがった石を拾う。それで地面に図を描くようだ。」

「ドアノブのついたブロックを上から見ると、こんな形をしています」
「そういつて、『』と地面に描いた。「で、隣のブロックはこうです」といつて、『コ』の字型を描いた。「まず、隣のブロックが、部屋の外から見てこちら側に動くんです。ブロックは台形をしていますから、非常につかみづらく、分かっているにも動かしにくかったんですが、よく見ると、爪が引っかかる傷のようなものがありました」

「手前に動いてどうなるんだ」ラパルクが、プライの描いた図形にかぶさるようにしている。「あ、そうか。噛み合うのか？」

「そうです。互いの隙間にでっぱりが入り込むことによって、隣の、つまりドアノブのついたブロックが、今度は横にずれるんです」

「横にずれたら……」ネイリンは口に手を当てた。「一緒に、鍵をかけたときに出るあのでっぱりも引っ込む」

「はい。鍵はかかった状態で、扉が開くようになるんです。そして、その方法で開けると、連動して鏡が横にずれるんです」

「すごい！」ネイリンは思わずプライの肩を二度三度と叩いた。

「痛いです」

「あ、ごめん。でも、なんでそんなこと分かったの？　っていうか、いつ分かったの？」

「寝ているときに、夢の中で考えて……」

「寝ながら謎を解いたのか――」。

「やっぱ、どっかの誰かさんとはレベルが違うね」

「おれのことか？　自分のことを棚に上げて、おれのことをそういうふうにするのか？」

「べつに、ラパルクがどうこうなんて言ってないじゃない」

「いつてるじゃねえか。おまえあれだろ、おれの推理が外れたこと、ばかにしてんだろ」

「しつこいな。いつてないじゃない、そんなこと。それよりプライ」
ネイリンはラパルクを無視してプライにいった。「どうして、そのことに気づいたの？」

「それは、すぐに分かりました。やはり、でこぼことした扉、というのが怪しいですからね。それらは独立しているんじゃないか、と思っただんです」

「ふつう思わねえよ」ラパルクがいう。

「思っちゃったら、いつか石を取りにくるっていう智者になっちゃうんだから、そう簡単に思いつかないのは当たり前なのよ。プライは特別なんだから……」そこまでいつてネイリンは気づいた。「あれ、その石を鏡から取り出して、その石を今もっているっていうことは……」

「はい。わたしが、智者と認められたんです。違うとは思いますが、まあ、せっかく石をもらえるということですし、いただいてお

こうかなと」

「……………」ネイリンは絶句した。

そのことが、一番の驚きだった。

プライが、ガードナー家で、言い伝えられていた、いつかあるという智者だったのか。

それも驚きだが、彼がくることを予言していた言い伝えにも驚いた。

「プライ、屋敷を出るとき、じいさんとロツテとになにかはなしてた
だろ？ あれって、イボーのことじゃなく、そのことをはなしてた
のか？」

「はい。イボーさんがどうかしたんですか？」

「いや、イボーを探してくれて頼まれてたのかな、って思ってた
んだ」

「ああ、そんなことはいわれてませんし、いうはずがないです」

プライの断言が気になったが、今はそれどころじゃない。

「すごいじゃない、プライ、ほんとに当たっちゃうぐらいのすごい
言い伝えに出てくるような人だったなんて。やっぱり、只者じゃな
かったんだね」

「そんな、違います。わたしは、言い伝えにでてくるような人間じ
ゃないですよ。そんな器じゃないのは、自分でよく分かっています。
ただね、めぐり合わせかな、とは思ってます」

「めぐり合わせ？」

「はい。トーイさんと知り合いのわたしがここにきた、というのは、
これを渡せ、っていうことなんじゃないかなって。いや、言い伝え
というものを頭から信じているわけじゃないんですが、でも、そん
なふうに感じたんです」

「トーイに……………」

「なんであんなやつに渡すんだよ。いつとくが、あれはただの馬鹿
だぞ」

「馬鹿はあんたよ」ネイリンはラパルクの頭をはたいた。「そっか。

トイーにね。あたしは、プライこそが言い伝えに出てくる智者なんだと思うけど、でもプライが渡したいっていうなら、それもいいんじゃないかな。これで、トイーを探す理由がもう一つ増えたね」「そもそも、トイーを探さなくちゃいけない、もともとの理由がなんなんだよ」

「うるさい」もう一度はたく。

「それにしても、見事な仕掛けでしたよ。あの扉」プライが、目を細めている。「鏡が音もなく動きまし、今もしっかり動力が生きているというのも見事です。できることなら、分解して中を見たかった」

「だれが作ったんだろうね。言い伝えが昔からあったっていうことは、扉だって昔からあったわけでしょ？」

「腕のいい職人さんは、昔からいたんですね」プライは感心している。

「しかしなあ、分かってみると現実的な方法だったよな。鏡に入れる方法」ラパルクがつまらなそうにいう。

「現実的な方法じゃないと入らないじゃん」とネイリン。

「そうだけだよ。でも、鏡の中、っていう絶対入らない場所にあつたなら、生き返りっていうありえない能力を持ってもおかしくない気がするけど、こういう方法で入れたんなら、生き返りの話も怪しいもんだよな」

「ううん……」ネイリンはうなる。

「ま、今のところは、その能力については保留ですね。今論じて、答えは出ません」プライはクールにいう。

「そうだな……」ラパルクはうなづきかけて、その動きを止めた。

「あれ？ 鍵がなくても、あの部屋は開くのか？ ってことは……」ラパルクはネイリンを見た。そしていう。「じゃ、話違ってこないか？」

ネイリンは考えた。今までは、寝ている主からケースの鍵を盗んで、その鍵であの部屋を開けたのだと思っていた。だが、鍵なんか

盗まなくても、あの部屋は簡単に開くなら……。

「話は……」ネイリンは考えながらいった。「かわんくない？」

だって、もともとの案だって、それで犯人を特定できたわけじゃないんだし、扉の開け方が分かってても、じゃあ部屋を開けたのはあの
人じゃないんだ、って話にはならないし」

「そうか……」ラパルクは眉を寄せながらうなづく。「プライはどう思う？」

「わたしは……そもそも不自然だと思います」

「ん、なにがだ？」

「いつだってよかったのに、あの日にあの部屋が開けられたことです」プライは二人を見ていう。「このことは考えましたか？」

「それは……」考えていなかった。

「いや」とラパルクも首を振る。「だが、予期していなかったんじゃないか？ 部屋を開けた段階では、犯人も殺人を犯す気はなかった」

「それは、殺人のことですよ。ではなくて、石を盗む日のことです」

「石を盗む日は……そうか。開け方知ってたんなら、いつでもよかったんだよな。なんであの日だったんだろ？」ラパルクが首をひねりながらいった。「逆に、あの日じゃなくちゃだめだったってことか？」

「するどい。最近のラパルクさんは一味違いますね」

「どういう意味だよ。普段鋭くないみてえじゃねえか」

「あ、そういう意味じゃなくて……」

「からまないの。あんた、推理が外れてからひがみっぼくなってるよ」ネイリンは仲裁し、いった。「ねえプライ。今ラパルクがいった、あの日じゃなくちゃだめだった、っていうのが当たってるの？」

「はい。そして、石を盗むのがいつでもよかった以上、あの日部屋が開けられた理由は、殺人に関係したものだと考えられます」

「……え、殺人を、あの日あの場所で行う必要があったっていうの

「驚きながら、ネイリンはいった。「あの部屋を開けた目的は石じゃなくて殺人だったっていうこと？」

「そう考えるのが自然だと思います」プライはうなづきいう。「もしそうなら、まず、なぜあの日じゃなくちゃいけなかったのか？」

「ほかの日とは違う、あの日の特徴は……」背筋に冷たいものが走った。「もしかして、あたしたちがいたから？」

「では、あの場所じゃなくちゃいけなかったのは？」プライは、ネイリンの問いかけに答えずいった。

「あの場所の特徴は、石があることだよな？」ラパルクがいう。

「はい。しかし、さきほどいったように、盗む盗まないという話じゃない。しかし、さきほどいったように、盗む盗まないという話じゃない。石はどう絡むのか？」プライはいう。「話を変えます。あの部屋では、殺人が起きました。特徴は、部屋が密室状態だったことです。なぜ密室状態だったのか？」

気づけば、プライに誘導されてものを考えている。

そしてそれは、前進している気がした。

それを先導しているプライは……。

なにかに気づいているのか？

「密室にした理由は……」ラパルクが答える。「死体を隠したかった？」

「なぜ隠したかったんでしょう」

「それは……」

ネイリンは考える。隠し通せるなら、殺人そのものを隠蔽できる。だれだって、もし殺人を犯してしまったら、死体を隠そうとするだろう。

逆に、もし隠されていなかったらどうだろう。

殺人そのものの露見も大きなことだが……。

ネイリンは、思わずびっくりとした。あの日起きたことは、トーナさんの殺害だけじゃない。ジーナスさんも殺されているのだ。関係するのか？

嫌な予感がした。

頭のどこかは、すでに真相に行きついてる感じだった。その結論を、意識のどこかで恐れている。

「ジーナスさんの死と関係ある？」ネイリンはいう。

「そっか」ラパルクがいう。「トーナスさんが死んでいるのが見つかったら、ジーナスさんは警戒するかもしれない。イボーの目的は、兄弟二人を殺すことだった。だから、ジーナスさんを殺すまでは、絶対に見つからないようにと……」

「イボーさんのことは置いておきましょう。今は、先入観を捨てて、表にでてきていることをつなげましょう」プライはいう。

「あの、ちよっと待って、プライ」ネイリンはいう。「プライは、なにか分かってるの？」

「はい」彼はこともなげにいう。「はなすべきか、少し迷いましたが、今終わらせたほうがいいと判断しました。遅かれ早かれ、気づくでしょうし、」

「分かってる……？」ラパルクがプライの話をさえぎっている。「犯人は、イボーさんじゃないってことか？」

「違います。イボーさんが犯人なら、なにもあの日に殺人を犯す必要がないはずなんです」

「そりゃ、まあそうかもしれないけど……」ラパルクがいう。「しかし、ならなぜ逃げた。なぜいなくなったんだ？」あつ、とラパルクは声を上げた。「もしかしてイボーも……」

「それは後でいいです。まずは、表に出ている現象から」プライは結論を急がない。「殺人を犯したら、死体を隠したくなるのが人間心理です。しかしこの場合、直後にジーナスさんが殺されていることと合わせて類推することで、先ほどラパルクさんがいったように、ジーナスさんを殺すために、トーナスさんの死体を隠したと考えられます。つまり、トーナスさんの殺害は計画的だったんです」

「計画的……に、あの日トーナスさんを殺した」ラパルクがつぶやく。「そしてジーナスさんを。いや、まて、ジーナスさんが見つかった部屋も密室状態だったんだ。あれはどうなる？ イボーにしか、

あの密室は作れないぞ」

「本当にそうでしょうか？」プライはいう。「ジーナスさんお部屋も見てきました。おそらくラパルクさんたちがそうしたように、窓の外から」

「窓は閉まってたんだ。それは確認している」

「こちら側の窓は閉まっていましたか？」

「ああ。鍵のすりかえは思いつかなかったから、鍵は調べられなかったが、窓なんかはさすがに調べたんだ。だから断言できる。窓の錠はかかっていた」

「外に面している窓は、本当に錠がかかっていたか？」

「かかっていた」

「どうして断言できます？」

「それは、部屋の中に入ってから、確認したからな」ラパルクが、自慢げにいう。

「部屋に入る前は？ 向こうの窓の外に、ご主人とイボーさんがいたんですよ。窓を開けて中に入るようにしていましたか？」

「いや、いわねえよ。だから、錠がかかっていたんだって。それは、廊下から見えたし、それに部屋の中におれたちが入ってから、錠にふれたやつもいねえ。その辺は、抜かりなく見てたんだ」ラパルクは、おっと、といってつけたす。「もちろん、じいさんは部屋に入るために、ガラスを割ってからはさわったぞ。でもそれだけだ。錠にふれたやつは、他にいねえ」

「ネイリンさんはどうですか？ 異論はないですか？」

「うん、ない。あたしはラパルクと違って、部屋の中に入ってから詳しく調べたわけじゃないけど、こっちの窓は開かなかったし、向こうの窓の錠もかかっていた」

「向こうの窓の錠も見えますよね。わたしも確認しました。で、ご主人はそれを確認しましたか？」

「え……？」頭の中が空白になる。

「どうです？ ご主人は、窓に錠がかかっているかどうか確認しま

したか？」

「それは……」

ネイリンはあの子のことを思い出した。

主は——確認していない。

なのにどうして、窓を壊したんだ？

「もしかして……」ラパルクも思い出したようだ。口元を手で押さえる。「いや……だがそんなはずはない。じいさんが犯人のはずはないぞ」首を振ってつづける。「たぶん、じいさんはおれたちの様子から、錠が下りていることを推察したんだ」

「錠は、廊下からも確かに見えました」しかしプライは、ラパルクの言葉を見無視してつづける。「注意して見れば、なんとか見える距離でした。ですが、」プライはいう。「窓はどうでしょう？」

「窓？」ネイリンとラパルクが同時にいう。

「窓枠すべてに、ガラスははまっていましたか？」

エピソード1-3

ネイリンは、あのときのことを思い出す。

一刻も早く部屋に入りたかった。入る必要があると思った。こちら側の扉と窓は閉まっていた。だから、向こうはどうだろう、と目を細めて――。

錠を注視したのだ。

当然あるはずだと思っている窓は、注視して見てはいなかった。窓ガラスは透明だ。

錠よりも見づらい、だからより注視しなくてはいけなかったのに。ネイリンは首を振った。

「見てない。窓なんて、窓なんて、ガラスが当然はまってるものだと思ってるし……」

だが、プライの話で、不自然に思っていたことが一つ解決するのだ。

棧ごと窓ガラスを壊したイボー。

それは、一枚ガラスがはまっていなかったことを隠すために、他のガラスも割る必要があったからなのだ。

「そんな簡単なトリックだったのか？ 窓ガラスが一枚抜けてたっていう、それだけの……」ラパルクが、動揺したようにいう。「なら犯人は、イボーだけじゃない。じいさんも共犯だ……」

中腰になっていたネイリンは、思わず座り込んでしまった。

目の前の地面に描かれている扉のトリックを、ぼんやりとながめる。

犯人は……イボーだけじゃなかった。

まさか、主まで。

でも主は、被害者二人の父親なのに。

ロッテのおじいさんなのに……。

ロッテは、自分の父親を、祖父に……。

ロツテ……。

「いやだ、こんなの……」ネイリンはつぶやいた。「絶対やだ」

「しかし、これ以外に考えられないんです」プライの声が、やけに冷たくきこえる。

「だが、ロツテのいった、イボーの鍵のすりかえが否定されたわけじゃない」ラパルクがいった。「動機の面から考えて、イボーとじいさんが手を組むつてのは考え難い。イボー単独犯の方が、自然じゃないか？」

「そうですね、もしご主人のいったイボーさんの過去が本当なら、そちらの方が自然かもしれません」プライは首を振る。「ですがそれは、ご主人がいつているにすぎません」

「しかしなあ……」ラパルクは納得できない様子だ。「じゃ仮にだ、じいさんのいったイボーの過去が嘘だったなら、彼らは、屋敷の主人と使用人という立場だ。手を組むなんてありえないんじゃないかねえか？」

「手を組む必要なんてありません。ラパルクさんがおっしゃったように、二人の立場はうんと違うんです。だから、」プライは平坦な口調でいう。「命令でいいんです」

命令――？

それじゃまるで――。

それじゃあ、まるで――。

使用人を従わせた主の単独犯のようではないか。

「プライ……」

「たぶんご主人は、イボーさんに、窓の棧にスコップを打ち付けて壊せ、とだけいったんじゃないでしょうか。話に聞くイボーさんのイメージだと、それで疑ったりせず、いうとおりにしそうですけど」

「それは……じいさんが犯人だと認識した上での協力なのか？」ラパルクが訊く。

「いえ。おそらく、ご主人が犯人だとは、まったく思っていないかっただでしょう」

「でもおかしいと思うだろう？ そんな、錠をあけるなら、窓ガラス一枚割ればすむ話なんだから」

「おかしいとは思わない人なのかも」

「だが、窓ガラスが一枚ないことはどうだ？ ふつう、おかしいと思うだろう？」

「思わなかったか、黙っているのと命令されたか、主がそのことにふれなかったため気づいていても気のせいだと思い直したか、指摘しても相手にされなかったので忘れることにしたか」

「しかしそれは、確認できない事柄だよな」

「はい。単なる推測です。しかし他のことと合わせて考えると、イボーさんは共犯ではない。そして、ご主人の犯行であるということが考えられるんです」

「他のこと？」

「はい。まず、トーナスさんの殺害です。もしイボーさんも共犯なら、彼もこの事件に関わっていていいはずですが、その形跡が見えません」

「だが、じいさんが、トーナスさん殺しの犯人という証拠もないよな？」

「状況証拠ならあります。まず、あの部屋を開ける鍵が入ったケースは、手が出しにくい状況でした。そして、あの部屋が鍵なしで開くなら、その仕掛け知っている人物が犯人である可能性が高いといえます。そしてその仕掛けは、先ほどもいったように、外からは気づきにくいものなんです」

「それは、最初に動くブロックが、廊下側に動くからか」

「そうです。逆にいうなら、部屋の中からは気づきやすいんです。例えば扉を拭いたりするだけで、気づく恐れがあります」

偶然引っ張ることはなくとも、偶然押してしまうことはあるということか。

そして、偶然押してしまう可能性があるなら、唯一部屋に入れた主しかいない。

石はある、と断言していた主の姿を思い出す。彼はあることを知っていたのだ。

状況から見て、主が犯人で間違いなさそうだった。

そうは思っても、頭がついていかない。いまだイメージの中では、イボーが犯人だ。だが違うのだ。犯人は……。

「ここからは、想像の話です。あの日、なにが起こったか」プライは小さく息をひとつ吐いてからはなしはじめた。「まず、何らかの理由でトーナスさんを殺したいと思ったご主人が、トーナスさんをあの部屋に呼び出した。そして、仕掛けを動かして扉を開け、石が見えるようにしました。ふつうなら、ご主人に、体格のいいトーナスさんを殺すことはできないと思います。しかし、というか、だからこそ、あの部屋に呼び出して石を見せたんです」

「油断させるためか？」

「そうです。石を見て、動揺しているトーナスさんの隙を見て、後頭部を何かで打ちつけました」

「密室にするのは、楽な部屋だよ」ラパルクはかるく笑う。

「はい。扉を閉め、ブロックを二つ動かすだけで密室になります。

時間は、ふつうに鍵をかけるよりも短いかもしれません」

「密室には、死体がすぐに見つからないように密室にしたんだよね？　だがな、」とラパルクは疑問顔で訊く。「今から考えると、そ

の方法である部屋をあけたり閉めたりしたことが、犯人の特定につながったな。じいさんは、ケースの鍵をつかった方がよかったんじゃないか？　その方が、だれが殺したのかわかりにくい。じいさんなら、簡単にケースを開けられたわけだしな」

「しかし、ケースの前には宵っ張りがいたんです」プライが小さく笑う。「それに、いなくても、実はその方法はよくないんです。あの部屋を密室にしたのは、死体の発見を遅らせるためです。ですが、もしケースから鍵がなくなっていたら、ジーンナスさんが警戒する可能性があります」

「そっか。ケースから鍵を盗み、ジーンナスさんの死体が見つかるま

で鍵がないのを気づかれないのがベストだが、それはリスクすぎるな」ラパルクはため息をつきながら首を振る。「なんだか、プライとはなしていると、すべてが簡単なことに思えてくるよ」

「でも、どうしてトーナスを殺したの？」ネイリンは訊いた。そのことが一番不思議なのだ。

「動機はおいておきましょう」プライは、唇をひきしめる。

「じゃあ、あの日だったのはどうして？　なんであたしたちがいる日に、そういうことしたの？　あたしたちのせいなの？」ネイリンは一気にいった。頭だけではなく、感情まで混乱している感じだった。

「そのことが、一番のヒントだったんです」プライは答えた。「わたしにも、ずっと不思議に思っていることがありました。それは、どうしてわたしたちを疑わないのか？　ふつう、家族が殺された日に、どこの馬の骨とも知れない人物がいたら、絶対に疑うでしょう？」

「疑われはしたさ」ラパルクが自慢げにいった。「それを避けるために、おれは頭をつかったんだ。おれが考えて、議論を仕切ってなかったら、たぶん疑われてたぞ」

「いえ、それにしたって疑われなさすぎなんです」

プライの言葉に、自慢げに高揚していたラパルクの顔が、一気にいつものものにか変わった。

「なんだよ、おれの推理があんまり意味ないみたいじゃないか」

「あまり意味ありません」

「外れた上じゃないのかよ！」

「だって考えてみてください。ご主人たちからすると、まず家族が殺されているのを発見します。で、たまたまやってきた外部の人間がいる。ふつうは疑います。しかも、その外部の人間は、殺したのも身内だという。もう噴飯ものでしょう。まず、理屈抜きに、おまえたちこそが怪しいだろう、といって、ラパルクさんの話すら聞かないのではないでしょうか」

「まあ。理性的だってことなのかな、って思ってたけど」

「理性的ではあるんです。石を守る人間として選ばれたご主人に、頭のいいロッテさん。しかし、それにしたって、と思ったわけですよ、考え方を変えました。頭がいいからこそその反応なのかな、と」

「どういうことだ？」

「つまり、わたしたちを疑わないのには、理由がある。わたしたちがいる日にわざわざ殺人を起こしたことも合わせて考えると、わたしたちには、なにか役割があるんじゃないか、って」

「ねえ、話聞いてて思ったんだけど、あたしたちがいる日に殺人を犯した理由として一番可能性のあるのは、あたしたちに罪を押し付けるってのが考えられるよね？」ネイリンはぞっとしていった。理性的な主が犯人なら、そういうことだって考えられたのだ。「でも、実際は、逆なんだよねえ」プライがいうように、立場からは考えられないぐらい、疑われていないのだ。

「なんなんだ、おれたちの役割って？」

「日常性の回復を期待されたんです」

「え、日常性……？」プライのいったことの意味がよく分からなかった。

「はい。殺人だけなら、いつでも起こせました。今回のように、イボーさんに押し付けることも、べつに今じゃなくてもできます。でも殺人は、普段に起こしちゃだめなんです」

「普段はだめってどういうことだ？　いつでもだめだろ」ラパルクが突っ込む。

「まあ、倫理的にはそうです。わたしがいつてるのはそういうことじゃなくて」

「どういうことだよ」

「普段、日常の感覚のときに殺人が起きれば、そこから非日常の世界に突入します。犯人特定されれば、そこからはまがいなりにも日常が再開しますが、日常性は完全には回復しません。そこで、わたしたちがきた日に起こしたんです」

「あたしたちがきた日……？」ネイリンは首をひねりながらいう。

「はい。不意の客人の到来は、小さな非日常です。感覚は、心理的なものだけじゃなく、身体的なものも、少しだけかわると思います。そんなときに、殺人を起こすんです」

「どういうことだ？ 徐々に非日常の世界に引きずり込まうっていうのか？ 殺そうとしたものの以外の精神衛生を考えて？」はっ、と喋ってラパルクが笑う。「そんなわけないだろう？」

「もしかして、ロツテのことを心配して？」

「違います。期待しているのは、帰るときなんです」プライはつづける。「殺人によって発生した霧のような非日常感は、事件が解決しても、犯人が特定されても消えません。そこで、残った霧を、客人に持っていつてもらうんです」

客はくるときに小さな非日常感を持つてくる。帰るときには持つていく。ついでに、もう少し持つていつてもらおうということか？

「そんなふうに、うまくいくかな……？」ネイリンは訊いた。絶対違うとも思わないが、そう簡単なものかな、とも思う。

「やらないよりは、ましでしょう。わたしは、他に殺人事件なんて知りませんが、もし外部の人間がたまたまやってきたときに殺人が起き、犯人がその家のものだったら、そういった効果を期待してのものじゃないでしょうか。そういう意味で、こういう事件は、外部の人間がいるときにこそ、より多く起きると予想します」

「じゃあ、今のガードナー家は……」

「殺人が、それも二件も起こった家にしては、割合落ち着いているんじゃないでしょうか。もちろん完全に、いつもどおりというわけにはいかないでしょうが」

「犯人は、じいさんで間違いないのか？」ラパルクは、怒ったようにいった。

「はい」

「じゃ、じいさんは、息子二人を殺すつもりで今まで過ごしてきた、ってことか？ その動機はなんなんだ？」ラパルクはつづけざまに

いう。「それは、あの部屋の仕掛けに気づいたことと関係しているのか？」

「え、どういう意味？」ネイリンは、意味が分からず訊いた。「仕掛けに気づいたから殺すって、そんなことある？」

「分かんねえけどよ、でもあの仕掛けは、あの家では大きな意味を持つだろ？　つまり、解いた人間が、先祖から待ち望んだ人間なんだから。それを主が解いちゃったんだぞ。ここに、なにか意味は発生しないか？」

「それは、あまり関係ないと思います」プライは首を振った。「中からだってブロックを動かせば仕掛けは作動し、石が出てきますが、石を出すことそのものに意味があるというわけじゃないんです。外から仕掛けを解くことに意味があるんです、少なくともガードナー家では。だからご主人は、仕掛けを発見して動揺こそはしたでしょうが、それ以上の思いはなかったんじゃないでしょうか」

ガードナー家は、外からあの仕掛けを解く、プライのような人間を待ちつづけていたのだ。偶然石を見つけたところで、意味はないかもしれない。

「そうはいつでもなあ、生き返りの力がある石だぞ。じいさんも、つかっちゃおうとか思ったかも」ラパルクはいう。

「先祖が守り通した石です。自分が見つけたからといって、つかってしまふのは抵抗があるはずです」プライは付け足す。「あのご主人なら、特に」

ネイリンは、ガードナー家に伝わる話を、ロツテがネイリンたちにはなしたことを知ったとき、主が激しく怒ったことを思い出した。

「じゃ、石は動機とは関係ない、ということか？」

「それもまた、考え難いと思います」プライはいう。

「どういうことだよ？」ラパルクは頭をかきむしる。「今、石は関係ないといっただろ」

「石の出し方を、ご主人が偶然知ってしまったことは関係ないという意味です」プライはマイペースにはなす。「石は、代々継がれて

いきます。このままいったら、次に石を継ぐのはトーナスさんだったでしょう」

「それが嫌だった、ということか？」

「はい」

ネイリンは動揺した。

動機はそんなことなのか。

「でも、どうして？」ネイリンは訊く。「トーナスさんが嫌なら、ジーナスさんにすればいいじゃない」

「しかし、石、もしくは家督は、知性のあるものに譲る、というのが、ガードナー家の決まりです。今の状況でジーナスさんに継がせるのは、無理があるでしょう。それに、そもそも、ジーナスさんには、もっと継がせたくはなかったんです」

「だから、殺した？」意図せず、ネイリンの声は震えていた。「殺してどうなるの？ 二人とも殺しちゃったら、石はだれが守る……」

——ロツテが守るのか。

「ロツテに継がせたかったということか？」ラパルクがいう。「いや、ロツテに継がせたいんでも、べつにトーナスさんたちを殺す必要はねえだろ」

「でも、ジーナスさんに継がせるという選択肢は、現状ありえないんです」

だらしなく酔っ払っているジーナスの姿を思い出す。

「なら、いったん、トーナスさんに継がせて、その次をロツテにすればいい」

「違うんです」プライは首を振る。「ジーナスさんやトーナスさんに継がせたくないのは、継いだ時点で、彼らが石をつかってしまうことを恐れているんです」

あの部屋に入る資格を得たものは、主の例で分かるように、仕掛けを偶然に解いてしまう可能性がある。だから、解いてしまっても、つかってしまわないだけの知性が、あの家の家長には必要とされる。

トーナスもジーナスも、不十分と判断されたわけか。

「それに、トーナスさんに継がせた場合、ロツテさんには回ってきません」

「え、どうして？」ネイリンは訊く。

「家督争いに敗れたものは、この家と断絶させられるんだ」ネイリンの問いに、思い出したようにラパルクが答えた。「イボーが実は息子だとじいさんがいったとき、いつていた。それは、」

「本当です」プライが答える。「家督争いに勝てば、石も守らなくてはいけない。それはつまり、石のある家も持ち、その家を存続させるために、経済的な基盤も受け継ぐことを意味します。逆にいうなら、負けたものはすべてを奪われ、外に放り出されるんです。遺恨が残らないわけありません」

「だから、間を飛ばしてロツテに継がせようと、息子たちを殺した……」ネイリンはつぶやく。

父と伯父を殺された被害者であるロツテは、動機の面でも当事者だったのだ。

「重過ぎるよ、そんなの……」ロツテの顔を思い出して、胸が苦しくなった。

「そういう事件、だったんだな……」ラパルクは、物憂げにいう。

「石に翻弄され、石をめぐるっての殺人なんて皮肉な話だと思っていたが、」ラパルクはプライを見ていう。「皮肉なんてもんじゃないな。石を守るため、守る体制を整えるために殺人まで犯したのに、その最中に、言い伝えの智者が家にやってきているんだから」

「わたしは、そんなんじゃないやしません」プライは首を振る。

「じゃあさ、」ネイリンは謙遜するプライを無視していった。「もしプライが元気だったら、殺人はそもそも起こらなかったってわけ？」

ネイリンは考える。

もしそうなら、ジーナスたちは無駄死にだったということになる。やりきれない。

しかし、

「プライが元気じゃなかったから、あの家に行くことになったんだよね」

「なんて事件だよ」ラパルクが深く息を吐き、首を振った。「運命とは思えないな……」彼は髪をかるくかきまわしてから、プライにいった。「プライ。それはそうと、さっきの話で、一つ疑問になったことがあるんだが」

「はい。なぜ、家督争いに負けた人間を疑わなかったか、ということですね？」

「なんで分かった？」ラパルクは、口をあんぐりと開けた。「考えていることまで分かるのか？」

「いえ」プライは鼻息をもらす。「今その話が出たから、きっとそう思うだろうな、と推測したんです」

「はあ……」ラパルクは両手を挙げる。「こりゃ勝てないわ」

「勝てないのは当たり前じゃないの」ネイリンはいった。「そういえば、プライ、起きてはじめていったこともそのことだったよね」

「ええ。そのことも、この事件の理解をしやすくしたんです」プライはつづける。「わたしが気になったのは、二点。なぜわたしたちを疑わないのか、というのと、これでした」

ネイリンとラパルクは、無言で先をうながす。

「まず、先ほどもいったように、まずはわたしたちを疑うべきなんです。なぜ疑わないのか。なにか役割を期待されてるんじゃないかと考えたと同時に、こうも考えました。それは、他に疑っている人物がいるからじゃないのか。そう思い、周りを見回すと、怪しい人物としては、主に家督争いに負けた人物が浮かび上がります。ですが、主は彼、もしくは彼女の存在を指摘しません。自分の次男が犯人だといわれているのに、です」

ラパルクは気持ち、肩をなでおろす。

「しかし思い出さないとはいけません。わたしたちも怪しいかもしれないませんが、わたしたち以上にはっきりとした動機があるんですから」つばを飲み込みつづける。「いわない理由として考えられる

のは、彼、もしくは彼女が亡くなっているのを知っているか、もしくは、後でいおうとしているか」

「後で……？」ネイリンは聞き返す。なぜわざわざ後でいうのか。「その前に、前者の可能性を消して起きましよう。家督争いに負けたものが仮に亡くなっているのだとしても、後々ラパルクさんたちが、その可能性に気づく可能性があります。だから、前もって一応いっておくべきなんです。でもいかなかった。そこで、後者ではないかと思ったんです」

「後者っていうのは、後で指摘する、っていうものだよね？」

「はい。まずはジーナスさんを犯人ということにしておく。でも、後になって、いや、真犯人はあいつだ、といった方が衝撃から、納得しやすい」

そして、ジーナスを最初に疑う結果になったということは、ラパルクが議論を先導していたかに見えたが、実際は議論を誘導されていたということか。

ネイリンもラパルクも、犯人の手のひらの上で踊らされていたのだ。

今頃になって、その知性に寒気を覚えた。

「そう計算する可能性はあると思いました」プライはつづける「そしてそう計算する立場は、犯人でしかありえません」

「そうか……。そう考えて、プライはおじいさんを疑いだしたのね」「同時にいろんなことを考えていますから、どこからの考えで、その結論に気づいたかは、正直分らないんですが」

そういえば、トーナスが死んでいた部屋は密室だったが、そのトリックを解くと、犯人として主の姿が浮かんでくるんだった。

同時多方向に思考を飛ばして、それらが主に収束したイメージが頭に浮かんだ。

プライは、たぶんそのように考えているのだろう。

「でも、いかなかったよね」ネイリンはいった。彼女の思考は、シークンシャルで、自分でもじれったかった。「それはどうして？」

「それは、イボーさんのほうが、犯人としての条件を備えている、と判断したからです」

ああ、そういえばイボーのことを忘れていた。

「条件って……」ネイリンはつぶやく。

「思いついたんです。ジーナスさんの部屋に行ったイボーさんの行動は、密室を作った証拠を隠すための行動に仕立て上げることができる、ということに」

イボーは、ジーナスの密室を作るときだけじゃなく、ここでも利用されたのか。

その臨機応変さに、ネイリンは驚いた。

主は、だてに知性があると先代に認められたわけじゃないな、と思った。

「しかしそのために、不自然になってしまいました。つまり、タイミングを逃したことで、家督争いに負けたものを一度も疑うことができなかったんです」

「それは、不自然……か？」ラパルクが首をひねる。「おれは、家督争いに負けたやつのことなんか、一度も考えなかったぞ」

「ふつうは、考えるんです」

ラパルク息をふっ、と吸い込んだが、結局そのまま飲み込んだ。

「状況証拠は、たくさんあるんだね」ネイリンはいった。

できることなら、反論したかった。ロツテのためにも論破したかった。

でも、できないようだ。

「で、イボー……さんはどうなったんだ？」ラパルクも、やっと心から主犯人説に納得した様子だった。

「暇を出したんだそうです」プライは何気なくいった。「二人家人がへった。これからは家の仕事もへるだろう。だから、おまえに暇を出す。金を出すから、お母さんを探しに行ったらどうだ？ そういったんだそうです」

そういったんだそうです——？

その言い方って……。

「おい、プライ。なんだよ、それ。おまえもしかして、そのこともじいさんとはなしたのか？」ラパルクがあわてた様子でいう。

「ええ。そのことだけは確認しました。お母さんがいて、失踪したのは本当なんだそうです。イボーさんは、喜んで探しに行ったそうです」

「そうですって、それだけか？ え？ そういう話をしたっていうことは、じいさんが犯人だということを、プライが気づいているっていうことを、じいさんも知っているってことか？」

「はい。石を持っていたときに、イボーさんの所在を訊いたんですが、イボーさんの所在を訊くこと自体が、ご主人が犯人だと知っていることを意味しますからね」

「で、じいさんはなていつてたんだ？ なにか、いいわけとか、してたのか？」

「いえ、なにも。わたしも、その辺のことははなしていません」

「つまり、告発はしないということか？」

「ラパルクさんだって、市には報告しないおつもりだったんでしょ？」

「いや、そうだけだよ……」

「しなくていいよ」ネイリンはいった。「そういうのがいいのかどうか分からないけど、もしそのことをばらしたら……」ロツテの心はもたない。「いいよ」

「はあ……」ラパルクはため息をついた。「ま、いいけどよ。……それにしても、じいさん、イメージとは違ったな。人は見かけによらないな」

「うん」ネイリンもうなづく。「そんなことする人だとは思わなかった」

「いや、それもそうだけどよ、それ以上に、これだけ頭が回る人だとは思わなかった。だってよ、もしプライがいなかったら、おれは未だに、爺さんの目論見通りイボーさんが犯人だと思ってたぜ」

「確かに、すごい頭いいよね」といつてからネイリンは、ふと思った。「でも運がいい面もあったんじゃないかな？」

「どういうことだ？」

「だってプライのいうとおりならさ、おじいさんはトーナスさんとジーナスさんの死体を、あたしたちがいるうちに発見させたかったわけだよ」

「そう……なるか？」

「うん。事件を終わらせて、ちょっと残った非日常感をあたしたちに持ってもらいたかった、っていうことになるよ、ジーナスさんだけじゃなく、トーナスさんの死体も一緒に発見して、一緒に解決する必要があったじゃない？」

「ああ、そうか」

「でも、あの部屋を開けてみましょう、っていったのは、偶然じゃない？」

「だれが言いだしたんだっけ？」

「あたし」ネイリンは自分の顔を指差した。「あれ、あたしがいいだしてなかったら、どうしてたんだろ？」

「自分から、いつてたんじゃないか？」

「そうかな。でも、おじいさんが、自分からあの部屋を開けてみよう、なんていいしたら、おかしくない？　だって、これまで、ずっとあの部屋を守ってきた張本人だよ」

「でも、開けたからといって、石を取られたりするわけじゃない。トーナスさんの件も一緒に解決したかったわけだし、実際開けることになったんだから……」

「そうじゃなくて」ネイリンがラパルクの言葉をさえぎっている。

「周りには、なにがあったって、あの部屋を自分からは開けないよ。うなイメージで見られてたはずだと思うのよ。そんな人からいいだすのは無理がない？　ってこと」

「でも、開ける必要はあったわけだろ？」

「そう。もし、あたしがいいだしてなかったら……」

口が止まった。

突然動かなくなったのだ。

もし、ネイリンがいいだしていなかったら、主はどうしてたんだ？
絶対にいいだと予測していたのか？

そして、ネイリンは、実際にいいだしている。

計算の内――？

ありえない。絶対にありえない。なぜなら、

ネイリンがあ部屋を開けようといいだしたのは、あ部屋自体
に対する興味が大きかったからだ。

もちろん、トーナスがいないか確認したかったこともある。だが
――。

それ以上に、不謹慎ではあるが、どうしようもなく、あ部屋に
入ってみたかったのだ。

あ部屋のことを知っていたから。

あ家の秘密を知っていたから。

石が入っているという鏡があるのを知っていたから。

でもそれは、主は知らないはずなのに――。

ネイリンが知っていることを知らないはずなのに。

計算されつくした事件だと思っていた。

主の能力を低く評価していた、と。

違うのだ。

主が描いた画じゃないんだ。

「プライ、どうしよう……」ネイリンはプライを見た。泣きそうだ
った。「あたし、どうしよう……」

エピソード1-4

「ロツテさんも心配していました」プライはいった。「ネイリンさんにどう思われるか。彼女は、そのことだけを気にしていました」
「どう思われるかなんて、決まってるじゃない！」ネイリンは語気強くいった。「許せない。そんなの、絶対、絶対……」

なにが腹立たしいのか分からなかった。
なにが悲しいのか分からなかった。

ロツテになにがあったのか、行動に移す前になにを考えたのか、想像するのが辛い。

裏切られたことが、嘘を吐かれたことが、悲しい。腹立たしい。違う。そういう次元じゃない。

もう、ロツテは、ネイリンの中でずいぶん遠いところにいた。

本当は、悲しくも腹立たしくもないのだ。

友達ではないのだから……。

「でも、ロツテさんは、ネイリンさんのことを友達だと思っています。ネイリンさんに、やさしかったでしょ？」

「そんなの、当たり前じゃない！　そうやってやさしく接して、手懷けて、利用しようとしてたんだもん……」

「利用されたことが嫌なんですか？」

「違うよ……」ネイリンの目から涙がこぼれた。「違う。そんなんじゃない。友達じゃないんだから、べつに利用されたって、」

「ネイリンさん、よく聞いてください。ネイリンさんの見ていたロツテさんは、どんな人でしたか？」

「……………」

「ネイリンさん、その人がロツテさんです」

「違う」ネイリンは首を振る。「それ、嘘だったんでしょ。全部、嘘だったんでしょ？」

「ネイリンさんに見せていなかったロツテさんも、本当のロツテさ

んです」

ネイリンは顔を上げ、プライの顔を見た。

「どちらもロツテさんなんです。そしてロツテさんは、その自分から抜け出すことができません。どちらも抱えながら、生きていくことしかできないんです」

「知らない。知らないよ、ロツテのことなんか」

「ネイリンさんには、秘密が一つありませんか？　すべてを、わたしたちに、ロツテさんに見せていますか？　違うでしょ？　隠していることもあるでしょ？」

「そりゃ、あるわよ。あるに決まってるじゃない！」

なんでプライはこのようなことをいうのだろう。

プライの口調は、まるでロツテをかばおうとしているみたいだ。

自分の家族を殺す計画に関わっていた人なのに。

「どうして、隠すんですか？」

「そんなの、」

——どうしてだ？

秘密があるのは当たり前だ。だれしもある。でも、当たりのことだからこそ、訊かれるとその理由が分からない。

「理由はね、怖いからです」プライはいった。「嫌われるのが怖いからです」

ネイリンは目をこすってプライを見た。

「だれしも、知られたくないことはあります。だれに知られてもいいことだけをしているわけじゃないからです」プライは悲しそうな顔をしている。「だから、他人には隠す。でも、自分から隠すことはできません。人は、その他人に知られたら嫌われるかもしれない自分も含めた自分で、生きていくしかないんです」

その本当の自分を——とプライはいった。

「知られたら、そのときネイリンさんはどう思いますか？」

「どうって……」

「今回は、殺人事件です。わたしは、その謎を解いてしまいました。」

わたしが石を見つけたことを知ったとき、彼女たちは、いずれ真相を知られることを覚悟しました」プライの声が低く感じられる。「どうして、彼女たちだけが、本当の自分を隠した人に、本当の自分を評価されなくてはいけないんでしょう」

ネイリンはなにもいえなかった。

なにをいっているのか分からない。

「自分の秘密も公開しなくてはいけない、というとしているわけではないんです」プライは首を振る。「すべてを知り、正しい評価をしつつける、なんてできません。すべてを知る必要なんてないんです。知っていいところは、自分が知られていいところだけなんです」

「……………」

「迷いました。石を見つけたことを知らせるかどうか。知らせたら、遅かれ早かれ、ネイリンさんは真相にたどりつくと思いますから」プライは目を細める。「でもね、わたしも、一人で抱えきる自信がなかったんです」

——だから、みんなでいるときに、真相をお伝えしようと思ったんです。

そういつてプライは泣き出した。

エピソード 2

エピソード 2

鏡――。

それしか目に入らなかった。

ぼんやりと、ただ鏡を見ていた。

冷たい風が、ほほを撫でる。

ホコリが目に入った。そのかすかな痛みで、あたしは我に返った。鏡の前で、信じられない現象を見せた大道芸人を、あたしとともに見ていた見物人は、気づくと一人もいなくなっていた。

鏡の前に、先ほどの男だけがいた。頭髮が風に揺られ、かすかに揺れている。先ほどまで表情を隠し、怪しい雰囲気を出していたシルクハットは、今は彼の手元にあった。ひっくり返して、中に指先を入れている。

あたしは立ち上がった。帽子の中がかすかに見える。中に入っていたのは紙幣だった。彼はそれを数えている。

「あの……」
なにかをいおうと思ったのではない。気がついたら口が開いていた。

男はあたしを見ると、にっこりと微笑んだ。口ひげに違和感を覚えるほど若かった。あたしとそうは違わないように見える。表情は人懐っこいもので、喉もとにまでこみ上げて不安が、わずかにうすらいだ。

「はい」

彼は愛想のいい顔で、ほんの少し腕を前に出す。どうやら、大道芸に対する、見物料をあたしが払うと思ったようだった。

彼は、鏡の中からりんごをだしてみせた。それは、芸とするなら、いくら払ったって惜しくないほどに素晴らしいものだ。しかし払う

お金を持っていない。

「すいません。お金、持ってないんです」あたしは頭を下げた。

男はそう聞くと、すぐに興味を失ったように、紙幣を数える行為に戻った。

だが、問題はお金云々ではない。

彼がしたことは、金銭に換えることなどできない。あたしの今の立場からすると、自分の存在に関わることもある。いや、それ以上に、そもそも物理的にありえないことのはずなのだ。

それをしたというのは――。

どう考えたらいいのだ。

奇跡的な現象を前にして、あたしは気持ちの整理をつけられないでいた。

とにかく、黙っていられなかった。

あたしはまた、なにも考えずに口を開いた。

「あの……」

「なんですか？」今度はいらだたしげに、男はいった。

「えっと……」ふと疑問が浮かんだ。「ここでなにしてるんですか？」

彼は、今紙幣を数えているが、そんなことは家に帰ってからでもできることだ。

それをなぜ今ここでしているのだろう。

あんなことができる人間に、場所とかタイミングに意味を見出すなんて、そもそもナンセンスなことなのだろうか。

「あなたには関係ないでしょう？ あなただって、いつまでここにいるんです？ もう見世物は終わりましたよ」

「見世物……」

たしかにそうだ。彼は、どう見ても大道芸人だ。だが、そういったカテゴリーで語っていい人物でも芸でもなかった。

どう訊いたらいいんだ？

「あたし、行くところがないんです……」口から出たのは、そんな

言葉だった。

「行くところがないだって？ そんなの、おれには関係ないね。だいたい、あんたなんだ、その変な服。あんたもおれの同業者か？」
あたしに対する呼び方が、あなたからあんたにかわった。で、一人称がおれ。彼の情報が増えるほどに、神秘性がなくなっていく。それにつれて、自分は鏡の中から生まれたんではないのか——そう感じていたときの、現実から浮遊するような感覚が、あたしの中からもなくなっていく。その代わりに、冷静な自分が、頭の深いところから立ち上がる感覚があった。

もう少し、もう少しで本来の自分がやってくる、そんなふうに予感した。

「よく分からないんです。気がいたらここで倒れてて、」

「はん？ 記憶喪失か？」そういつて、ぽかんとした顔をする。

とりあえず、ここにも記憶喪失という言葉、概念はあるらしい。なぜか、それがすぐうれしかった。

彼とは、同じレベルで話ができるんだ——。

——ん？ その前に、

言葉が通じてる。

通り過ぎる人たちの言葉が理解できたから、たぶん通じるとは思っていたが、こんなにも自然に会話ができるなんて。それに彼は、あたしのみんなとは違う容姿に、違和を感じた様子はなかった。

とりあえずこの世界を、怖がりすぎる必要はないかもしれない。

落ち着いて、一步一步進めば、きっと解決する。

するのか？

鏡の中から生まれたかに見える、あたしの現状が、本当に改善するのか？

「名前は？」初めて彼の方から口を利いてきた。

「分かりません」あたしは首を振る。「あなたは？」

「名乗らないやつに名前を教える義理もないけどな、まあ、記憶喪失だっていうんだから、まあしょうがねえか。おれはエリリング・ツ

イター。みんなエラーって呼ぶから、それでいいよ」

「エラー？ 変な名前ね」

「ないよりましだろ」なにやらくさそうな顔をした。自分に対してなのか、あたしに対してなのかは分からないが、馬鹿にした笑いのようだった。

「ねえ。質問があるんだけど」あたしはずばりいった。「さっきのあれ、いったいなんなの？」

「見た通りさ。鏡の中からりんごを取りだした。それだけさ」彼は首をすくめる。

「ほんとなの、それ？」あたしは暗澹たる気分になる。

「なんでそんな顔するんだよ。みんな喜んでくれる芸だぜ」顔をゆがめる。今度ははつきりと自嘲じみたものだった。

「もし鏡の中にべつの世界があるなら、あたし、そこからきたのかもしれない」

「はあ？ なんだよ、それ。もしそれが本当なら、おれは商売上がつたりだ。そっちの方がずっとすげえもんな」

「エラーは、向こうに入れないの？」

「向こうって、鏡の向こうか？」眉根を寄せる。「いやあ、どうかなあ。まあ、金さえくれりゃあ、入ってやらねえこともねえが」

「やっぱり入れるの？」

あたしがそう勢い込んでいうと、彼は呆れたようにため息を吐いた。

「さすが記憶喪失だ。扱いづらいな」

「扱いづらいってどういうことよ。どういう意味、今の」

「べつに、病気を悪くいったんじゃねえよ。まじめ相手にゃジョークもおちおちいってられねえって話だ」

「冗談だったの？ どこが？」

「うるせえなあ。たく。面倒なのにつかまっちゃったもんだよ」そういつてエラーは、ジョシーはなにやってんだ、とぶつぶついった。「だれ、ジョシーって？」

「関係ないだろ？ てか、なんでそんな高圧的なんだ。なんかストレスでもあんのか？」

「ないわけないでしょ、記憶喪失なんだから」つづけてあたしはいう。「ところで、どうなのよ、あなたは鏡の中に入れるの？」

「物理的には入れるよ。だが今は入れねえ」

「どうして？」

「勘弁してくれよ。こっちは商売でやってんだ。あんたなんだ、この商売横取ろうてのか？」

「商売なんてどうでもいいわよ。あたしにとって、今さっきエラーがやった芸は、すぐく意味のあることなの」

「じゃあ、一ついつといてやるよ。あんたは、鏡の中から出てきたわけじゃない。こんなあったりまえのことをおれにいわせたのは、あんたが初めてだよ」

まあ、ふつうに考えればそうだよな。

だが、今のあたしの立場は、ふつうじゃない。異例のことでもなんでもいってもらわないと困る。

それはともかく――。

エラーとの会話で、ずいぶんいろんなことが分かった。

それを考えたいが、それとはべつに、ある重要なことがわかった。それは自分の人格だ。

気取ったところがなく、はなしやすいエラーの性格につられたところもある気がするが、それでも、人とはなしてはじめて分かる、自分の一面というもある。

まあ、自分はあまりかわいらしい性格ではないようだ。

そして――。

頭は、決して悪い人間ではないようだった。

自分は今、意識的に手に入れた情報を吟味したわけではない。だが、頭のどこかが勝手に推論を始め、そしてゴールに行き着き、答えだけを意識の表層まで持ってきてくれたのだ。

自分の頭の意外な性能と、この目の前にいる男が見せた芸に、あ

たしはつい笑ってしまった。

答えが分かってしまえば、何のことはない。

でも、トリックが分かったからといって、あたしの立場にはなんの変化もないんだよなあ。そう思って、あたしはため息を吐いた。

「なんだよ、にやにやしたり、ため息吐いたり。あんたもしかして、情緒不安定か？」

「情緒は安定してる。あなたのおかげかも」

「あ？」

「ううん、なんでもない」あたしは首を振った。彼との気軽にできた会話が、自分を落ち着かせたとは、なんとなくいいにくかった。「それより、そのトリック、分かったよ」

「え？」

「分かってみると、なるほどね、あなたのいったことの意味が理解できる」あたしはいった。「お金をもらえれば鏡には入れるけど、この鏡からあたしが出てきたわけじゃない。つまり、手しか入らない程度の大きさしか、穴、開いてないってことね」

「さてね」エラーは、しらばっくれる。

「ジョシーって、あなたの相方？」エラーが答えないので、あたしがいった。「これは、あなたひとりじゃできない芸よ。鏡をスライドさせる誰かがいないと」

鏡は、見えているだけの大きさではなかったのだ。あまりの部分はふだん壁に埋まっていて、そこに穴の部分も隠れている。鏡をスライドさせることによって、その穴が壁から出てくるのだ。鏡像は絵じゃないから、鏡を動かしても動かないので、鏡を動かしても傍目には分からない。だが、移動する穴を見られては一発でばれる。だから、エラーは紙で動く穴を隠した。

分かってみれば、幼稚なトリックだ。

「そんなの分かったって、なんの自慢にもならねえよ」エラーは、厭世的な表情を見せた。「みんな知ってた。当たり前だろ、これは場所が限定されっから、そりゃばれる。だがいいんだ、それで。」

おれは、いつかこれを越えるトリックを編み出してみせる。それを確信してるし、みんなもそれを期待してるから、こうやって付き合ってくれてるんだ」

みんな知ってたのか。そういわれてみれば、リアクションが微妙だった気もする。

「これ、あなたが考えたの？」

「いや、じいちゃんだよ」

そういった彼は、ん？　といった様子で横を見た。つられて見ると、小柄な男の子が走ってくる場所だった。あたしの後ろを通り過ぎるところで、ちらりとこちらに目をやった。彼も、ん？　といった顔をした。そして立ち止まる。

「ああ、エラーさん。営業ですか？　ん？　だれですか、そちらのご婦人は」　そういつて、懷から手帳を取り出した。

「ああ、マッシュ。ええと、なんと説明したもんかな」　そういつてエラーは、恭しくあたしに手のひらを指し示した。「こちら、記憶喪失のご婦人です」

「記憶喪失！」　マッシュと呼ばれた少年は、大きく目を見開いた。

「こりゃいだきだ。どうもはじめまして、マッシュです」　そういつて手を差し出してくる。

「こんにちは……」

あたしは、その手を握り返しながら、あらためて彼を見た。

かなり若いが、髪はぴっちりポマードかなにかで、七三に固めている。着ているものもスーツで、中にベストまで着込んでいて、口ひげを生やしているエラーに負けじと、こちらも子供らしくない。何者なのだろう。

「マッシュ。おまえなに急いでたんだ」　エラーがいった。

「ああ、そうだ、こちらは大変なんですよ。だから、早急に兄いに伝えようと思ったんだけど」

「兄って、あの探偵さんか？」

「他にいますか？」

「おまえのことだ、いたって驚かないがな。あの探偵さんに知らせるってことは、殺人事件か？」

「べつにうちの兄いは、殺人専門じゃないです」

なにやら物騒な話をしている。そして話についていけないあたしは、話の中心から、一気に蚊帳の外に追い出された。

「それに、知らせたところで、今回は首、突っ込まないでしょうね」「どういう意味だ。つまんない事件か？」

「というより、相手が悪いわけです」

「だれだよ？」

「ガードナー家」マッシュが答える。

「ガードナー？　なんか聞いたことあるな？」

「お客さんですか？」

「いや、おれの客じゃねえが……。ああ、そうだ。名簿で見たんだ。確か、かなり昔の客だったはずだな」

「そんな昔のお客さんの名前まで知ってるんですか？」

「ああ。前に、ダイレクトメール送ったからな」

「苦労してるんですね」

「うるせえよ」エラーは、数え終えたらしい紙幣を胸元にしまうと、シルクハットをかぶった。「それより、相手が悪いってどういう意味だ？　これもんか？」エラーは、ほほに指を当て、それを斜めに見つめた。

「違います。性質の悪い子供がいるんですよ」

「性質が悪いって、おまえよりもか？」

「どういう意味ですか。わたしは、日々まじめに過ごしています」

「人の噂かぎまわってるやつ、なにがまじめだよ」はん、といってエラーが息を吐き出す。

「人々の知る権利をわたしは一手に引き受けているんです」マッシュは胸を張る。

「で、性質が悪いってどう悪いんだ？　っていえねえか、それはさすがに」

「いや、大丈夫ですよ。ただ単にね、拔群に頭がいいんです」

「へえ。で、そいつが犯人っぽいのか？」

「いえ。犯人はべつの人なんだそうです」

「なんだよ、もうその事件は解決してんのか？」エラーはつまらな
そうな顔をする。

「ま、そうらしいですね」マッシュは首をすくめる。

「じゃ、首突っ込むもなにもないじゃねえか。そもそも、性質がい
い悪いも関係ねえ」

「さあ、それはどうでしょうねえ」といって、マッシュは不適に笑
った。

「なんだよ、裏があんのか？」

「さあ？ わたしには分かりません」

「なんだよ、ありそうな素振りじゃねえか。たきつけろよ、探偵さ
んを」

「いや、兄い関わらないです。たぶんだけど」

「相手が悪いからってか？」

「はい。そもそも、あの子は用心した方がいいといったのは、兄い
なんです」えっと、なんていったてかな。そういつてメモ帳を繰っ
た。「あ、そうそう。味方にしたら心強いけど、敵にしたらろくな
ことはなく、かつ味方にしづらい相手。黒星五つです」

「黒星ってのはなんだよ」

「性質の悪さの度合いです。ちなみに、悪魔みたいな人はデカ黒星
にしますけどね」

「なんか面白そうだな、見せろよ、それ」エラーが手をだす。

「やめてください」マッシュが腕を引く。

エラーがそれを追って、マッシュの身体にぶつかった。

「だめですって」笑いながらマッシュが手帳をえらから離す。

「いいじゃねえかよ」エラーも笑いながらそれを追う。

「やめてくださいって」

なんか楽しそうだけど、グダグダだ。

「馬鹿じゃないの？」

あたしが一際冷たくいい放つと、彼らは我に返ったように、急に静かになった。

「で、その子がいるから、怖がってあなたのお兄さんは尻尾を丸める、ってことなの？」しっかり話をきいていたあたしは、そうだった。

「尻尾を丸めるなんて。対等な立場でガチンコでいけば、兄いは負けませんよ。ただね、TPOが悪いです」口をすぼめてマッシュがいう。「相手の土俵でやっては、まず勝ち目なんてないでしょうから」

「その子が、犯人っていつているようにきこえるけど」あたしはいった。

「そうはいってないです。わたしが話を聞いた人も、犯人はもう分かっているんだ、っていつてましたし」

「いっつも思うけど、だれがいうんだよ、そういうこと」エラーがいう。

「ソースは極秘ですが、まあ、あの家は特殊でしてね、極端に口の軽いお婆さんがいるんですよ」

極秘といいながら、ほとんど明かしてる。

「犯人じゃないなら、頭がいい子がいるが、関係ないんじゃない？」

あたしの質問に、分かってないなあ、とでも言いたげな、生意気な顔をマッシュはして見せた。

「自分のテリトリー内での出来事なんです。自分の思うような展開に持っていくやすいでしょう？ 兄いは、そういうのに利用されるのが一番嫌いなんですよ」

利用されるってことは、お兄さん、さほど頭がよくないんじゃない？

そう思ったが、口にはしなかった。

自分が思っている以上の、とんでもなく頭がいい子なのかもしれ

ないのだし。

ざわざわする――。

その子に会ってみたいと思った。

また一つ自分のことが分かった。

あたしは、知性をけっこう重要視している。それは裏返せば、理性的でありたいという心の現われという気もした。

「ま、そんな事情ですが、一応知らせときたかったです。でも、よく考えてみれば、急ぐ必要はないんですよ」マッシュは手帳を繰って、ペンを構えた。「こっちの方が面白い」

「面白がらないでよ」

「いえいえ、力になるという意味です」

「そうはきこえないんだけど」

といいながらも、彼は力になってくれるかもしれない。とそう思っていた。彼が役に立たなくても、探偵さんが兄弟なら、心強い。

人探しは、探偵の得意分野だろう。

……だれを探してもらえばいいのだろう。親？ 友達？ いや……自分だ。自分を探しにいかない。

「あ、そうだ」そういつてマッシュは、エラーを見た。「そういえば、面白い話を聞きましたよ。エラーさんの専門分野かも……というより、ご先祖様が関わってるのかな？」

「なんだ？」エラーが訊く。

「そのガードナー家にね、鏡に映すことによって、左右が正しくなる時計があるんですって。こんな変なの作るの、エラーさんとかだけでしょ？」マッシュが笑っている。

――左右が正しくなる時計？

「そんなのべつに珍しくねえじゃねえか。左右が反転した時計なんて、理髪店に行けばいくらでもある」

――左右が反転した時計？

「いやね、面白いのはこっからで、その時計、鏡ともども隠すように封印されて……」

マッシュがはなしている。しかしその声が、途中からきこえなくなってきた。鼓動が速まる。どんどんと。どこまで速まるのか想像もつかなく怖い。手が震えた。そんな馬鹿な。でも、記憶が……。再生される。音、色、光景、あたしは……。

フラッシュバック。頭が痛い。首がすくむ。あたしは思わず、首を押さえた。息が苦しい。顔に血が……顔が熱い。血が動かない。死ぬ。死ぬ死ぬ死ぬ。

あたしは悲鳴を上げた。

記憶が一部戻った。

「あたしは……」膝が崩れ、へたり込んだ。
思い出した。

あたしが前にいた世界。

そこは、鏡に囲まれた、逆さまの世界だった。

そしてあたしはそこで、

——殺されたのだ。

エピソード 3

エピソード 3

——だれもいなさそうだけど。

トーイは、鏡にできた穴を見つめた。穴から室内が見える。中に、魔女はいるのだろうか。トーイは室内を覗き込み、こんにちは、と声をかけた。

トリックを解いたのは偶然だった。というか、特になにか考えた末の行動によるものではなかった。扉に取り付けられた丸い鏡を見て、なんとなく回したい、と思ったのだ。

トーイは木枠に手をかけ、両手を互い違いに上下させた。すると簡単に木枠は回り、中の鏡が移動したのだ。具体的には、木枠は反時計回りに回転し、それにつれて、最初右手側にあった鏡面が、上に行き、左に行きかけたところで、突然すんと落ちたのだ。詳しく断面を見てみると、最初上にあった鏡面の後ろに、その移動した鏡は収納されていた。

例えば、これが鏡以外のものであったなら、そもそも、木枠で区切られている段階で、一枚物ではないのではないか、と思うはずだった。だが鏡は、どこで区切られていようと、わずかならば段差があるうと、その表面に写す像を、どの角度から見ても違和感なく『一枚絵』として映し出すせいで、それが一枚物ではない、ということが分かりにくかった。逆にいえば、そのことを利用したトリックなのであるが、トーイはその辺のことを、解いた今になっても理解していなかった。ただ単に、

——丸い引き戸なのだな。

と思っただけである。

というか、これがトリックであることに気がついてすらいなかった。

魔女は鏡の中にいる。ということは、彼女に会いに行くためには、鏡を通らなくてはいけない。だから自分は鏡を開けた。

それだけである。

開け方を迷ったのも、回る引き戸を自分をはじめて見たせいと理解していた。

「こんにちは」トーイは、もう一度、今度は大きめな声で呼びかけた。

返答はなかった。

そもそも、人の気配がしない。空気に動きがまるで感じられないのだ。

——留守なのかな。

トーイは、おじゃまします、といって木枠に手をかけ、身を縮こませ中に入った。

中は、トーイの実家のリビングほどの大きさしかなかった。テーブルとイスが部屋の真ん中に、所在なげに置かれているだけで、他の家具はない。ホコリなどは溜まっておらず、きれいにしてあるが、生活臭のようなものは感じられなかった。

今も不在だが、不在は今だけではないような気がする。

つまり、魔女の住処はここじゃない。

トーイは首をひねった。

「鏡の中……」トーイはつぶやき、室内を見回す。

条件は、合っているような気がするのだが……。

トーイは、とりあえずイスに座った。テーブルに両肘をつき、両手であごを支えた。

これはどういうことなのだろう。

情報通らしい男からの情報では、魔女は鏡の中にいるとしか聞いていない。だから、鏡の中に入れば、すぐに彼女に会えるものだと思っていた。

だが会えない。

——でも、ここじゃないとすると、

文字通り鏡の中ということか。しかし、鏡の中に文字通り入ることなどできないだろう。

ふう、と一息ついてから、トーイは腰を上げた。

いつまでもここにいても仕方ない。ここではないのだとしても、この辺にいることは確かだと思う。付近を探索してみよう。

トーイは扉に近づき、腰をかがめた。扉にできた穴に、上半身を入れる。そこで、血が沸騰した。上からトーイに向かってなにかがきている。全身の毛が一気に立ち上がり、視界が狭まった。

――死ぬ。

とっさにそう思った。考える間もなく身体が反応していた。前転するように扉から飛び出すと、それから横に飛んだ。側宙をするように身体をひねる。遠心力によって剣が鞘から抜け出し宙に浮かぶ。着地と同時にそれを引っつかむと、それを前に構え、中腰に構えた。扉の前に、何者かがいた。

棒立ちにこちらの様子をうかがっている。

身体にフィットした黒尽くめの衣装はほぼすべてを隠している。

目だけを表出させているが、表情すら分からなかった。

――どうして？

トーイは、まだ現状を理解していなかった。モンスターに襲われるなら分かる。だが人間に襲われる経験もなければ、覚えもなかった。

男は、物言わず近づいてきた。武器の類は持っていない。だからといって、友好的な気配もまるでない。勝てない――反射的にそう思い、視界が涙でにじんだ。

初めて意識する死の世界。

それが、もう目と鼻の先にある。

戦えない。かといって、逃げきる自信もなかった。そもそも、足がすくんでいる。

トーイはパニックの中にいた。不条理な現状に、最善の策すら浮かばない。

男が懷に右手を差し入れると同時に一気に間合いをつめてきた。反射的に後ろに飛び、剣を背中に隠した。着地と同時に剣を上から振り下ろした。信じられないほどに軽い剣だからこそできる前動作を隠した動きで、この剣の特徴を知らない男には意外な行動だったと思うが、男はその動きにもついてきた。剣を紙一重でかわし左手は背後に隠す。と同時に懷から出した何物かをトリーの首元に向かって差し出す。太陽に反射しそのなにかが光る。トリーは左手でその手を軽くはじいた。そこまでは意識的にやったが、無意識のうちに剣を持った右手も動いていた。剣の重みを感じない。長剣が腕一本で斜めに持ち上がる。男の左腕が姿を現す。指先から腰の辺りに細い光が一本見えた。男はそのなにかで剣を受け止めようとしたが、トリーの一閃はなにもものも意識させずに通過した。剣先に太陽が重なる。

男の左腕が回転し、ふっ飛んだ。腰からつながる一本の光が、くにやりと歪む。腕はその切り口を男からはなした状態で地に落ちた。男の動きが止まった。

――また腕を、

切り離してしまった。トリーは、やはり道中襲われ、腕を切り離してしまったゴブリンの顔を思い出した。しかし今度はモンスターじゃない。人間の腕をだ。でも自分になにができただろう。先に襲ってきたのは相手だ。自分は身を守るために、仕方なく――。

いや、剣がトリーを動かしたのだ。

やはりこの剣は、ふつうじゃない。でも、そのなにかの力に、まとも自分は救われたのだ。片腕を失ったこの男に、負けることは考えられなかった。

「どうしますか？」トリーはそう男に訊いた。罪悪感、意識的に隠した。

男はゆっくりとした動きで、己の腕を拾った。

「どうして、襲ってきたんですか？　ボクはなにもしてないのに……」

そのとき、男の衣装に赤黒い血がこびりついているのが分かった。彼のものではない。

——だれのだ？

そう、気が一瞬揺れたそのときだ。男は一気に距離を開けると、そのまま木の群れに飛び込み姿を消した。

トーイだけがその場に取り残された。

いったいなんだったんだ——。

一人になって、冷静さを取り戻し、あらためて恐怖が蘇ってきた。いきなり襲われた恐怖。人の腕を切り離してしまったことへの恐怖。人に命を狙われたことに対する恐怖。その理由が分からないことに対する恐怖。

トーイは口を引き締め、背中から鞆を地に下ろした。その中に剣を納め、あらためて鞆を背負う。

——なにかがここで起こったんだ。ここにいる、魔女をめぐる。

トーイは崖に沿って建つ建物を眺めた。

ここにいるはずの魔女。ヒントは鏡。だが、鏡の中にはいなかった。つまり、魔女の居場所は、その論理的向こう。トーイは建物の側面に回った。崖を正面に見据える。崖、建物、トーイ。

——そこか。

トーイは建物に近づき、壁に手をついた。そして押す。びくともしない。両手を突き、さらに押した。力を込め、足を踏ん張り、建物を押した。ずず、と建物自体が動いた。トーイは歯を食いしばり全力を込め壁を押した。ずず、と建物が動いていく。まだ動く。そう思ってトーイが足を踏み出したときだ、そこになにもなかった。

——あ！

と思う間もなかった。足は地に吸い込まれる。踏ん張りようがなく、そのままトーイは壁に両手をついたままの姿勢で地に吸い込まれていった。

まず片足が地に着いた。その衝撃で、膝が折れる。足につづいて腰が地に着いた段階で、初めてトーイは反対の膝が目の前にあるこ

とを知った。

——なんでここに膝があるんだ。

そう思ったと同時に、激しい痛みが足の付け根に走った。

「痛っ！」叫びながらトーイは股間を押さえながら丸まった。

周りを見ると、縦穴の大きさは人一人がやっと通れるぐらいのものであった。そこに片足を突っ込んでしまったために、もう一方の足が取り残され、大きく足を広げ身体を折るような姿勢で穴に落ちることになってしまったようだ。

——なんでこんなことに……。

トーイは暗澹たる気分になった。痛みが尋常じゃない。もともと身体は硬い方なのだ。

——ここで死ぬのだろうか。

モンスターに襲われても負けることはなかった。いきなり凄腕の人間に襲われても負けることはなかった。なのに、こんなところで致命的な怪我を負うとは。このまま動けなければ、ここで餓死だ。

トーイは、あらためて自分はひとりっきりののだと認識した。

だれも助けてくれる人は、こんな穴の中にはいない。自分はどうだめだ。ここで一人誰にも知られずに死ぬのだ。そう思って、絶望的な気分になった——。

しばらくすると痛みがひいてきた。筋を少し伸ばしただけで、怪我ではなかったようだ。トーイは周りを見回した。上を見ると、穴の入り口までは自分の背丈の倍ほどだった。なにもなければ上がるのは大変だろうが、背中側、つまり建物とは反対の土壁にハシゴがあった。これで上り下りするのだろう。そして、目の前には横穴があった。幅はやはり人一人分と狭いが、高さはわずかに背をかめるだけで移動ができるほどのものだった。しかし光が届いていないので、先が見えなかった。

トーイは立ち上がり、その横穴を進んだ。先は見えないが、そう長いはずではないのだ。この上の建物の横幅は、そうなかった。こ

の横穴の長さも、それと同じぐらいのはずなのだ。

トーイは、この建物付近の構造を頭の中で思い浮かべた。

崖に沿って建てられているかに見える建物。だが、その全体は見えているだけのものではなく、崖の中にもまだあるのだ。そして、その建物の向こう――建物の外壁と崖（内部）の岩肌の間には隙間があり、その分だけ建物ごと崖側に動く。動いたことにより、建物の下敷きになっていた縦穴――崖の内部に隠された部屋に通じる入り口が姿を現す。

つまり扉の仕掛けと同じ構造なのだ。ずらすことにより穴が開き、入り口が現れる。

――魔女の本当の居所は、この先だ。

トーイは確信していた。

だが、真っ暗でなにも見えないので、おっかなびっくり、両手を前に出しながら、中腰になってゆっくりと進んだ。

程なく、両の指先が岩肌に当たった。ここが行き止まりだ。ということは――トーイは上を見た。見えないので、手を伸ばす。指先はなにもあたらなかった。空間がある。

トーイは手を上げたまま、指先にふれる岩肌の感触で形状を確かめた。

そこは、トーイが落ちた穴、つまり入り口と同じ構造のようだった。入り口と同じようにハシゴもあった。

トーイはそのハシゴに手をかけ、上った。

一步一步ハシゴを上り、ここまできたらもう安心、一本道だ。という安心が油断を生み、思い切り頭を天井にぶつけた。

「痛っ！」トーイは頭に手をやり、それからそのまま手を天井に当て、力を入れる。

天井は軽くなかった。だが開かなくはない。力を込めていくと、それはゆっくりと開き、できた隙間から光が漏れ出した。少しまぶしく感じ、薄目にする。

まず毛先の長い絨毯が見えた。そしてその向こうに、寝そべって

いる人の姿が見える。

「こんにちは……」そう声をかけたが、嫌な予感がした。

案の定、返答はなかった。

トーイは天井をすべて開き、室内に入った。

異様な部屋だった。まず、温度が異常に高い。見ると、室内の中央に大きな鉄釜があり、そこから湯気が出ている。覗き込みむと中身はシチューだった。

次に目に入ったのは、内壁だった。壁が本できていたのである。壁に沿って本棚が並べられ、そこに本がびっしりと収納されているので、感じた印象だった。

トーイは、それらのものを横目にしながら、倒れている人に近寄った。

老齢の女性だった。顔は少し骨ばっていて、眼窩が落ち窪んでいる。眉毛はほとんどなく、真っ白の髪の毛は、ひつつめにされている。

ふかふかした茶色のワンピースに、肩がけの黒マントを着ていた。そして、胸からは木でできた柄。そこを中心にできている赤黒い染み。

死んでいた。

死因はいうまでもなく、刃物による刺殺だった。

犯人は、先ほどの男なのだろうな、そうトーイは思った。

身体から力が抜け、トーイはその場に座り込んだ。

もう少し早くきていれば、助けることもできたのだろうか。

今はじめて会った女性だ。それまでの半生も知らない。だが、彼女のことを思うと、悲しくなって涙が出てきた。

トーイが、この建物の仕掛けに気づくまでの時間、彼女は一人で死んでいたのだ。

さびしかったらうな……。でも、

彼女は、どうして自分の住処にこのような仕掛けを施したのだろう。

孤独を好む性質なのか。

一人になりたくて、部屋を密室化させる仕掛けを施した――？
いや――この密室の謎を解けるような人としか会いたくなかった
のかもしれない。

鏡の中にいる、というヒントを許していることが、彼女の心情を
表している気がする。

試練を乗り越え、自分を尋ねてくれる人物を待っていたのではな
いか。

だが、彼女を訪ねた人物は、自分の命を狙うものだった。

彼女は、彼をどのような表情で出迎えたのだろう。

もし自分が先にここにたどりついていたらなら、どのような顔で出
迎えてくれただろう。

トイは目尻をぬぐった。

――生きているあなたに会いたかった。

そう、つぶやいた。

終わり

エピソード3（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0748o/>

アドリーム 一境界に佇む者達一

2010年11月26日19時10分発行